

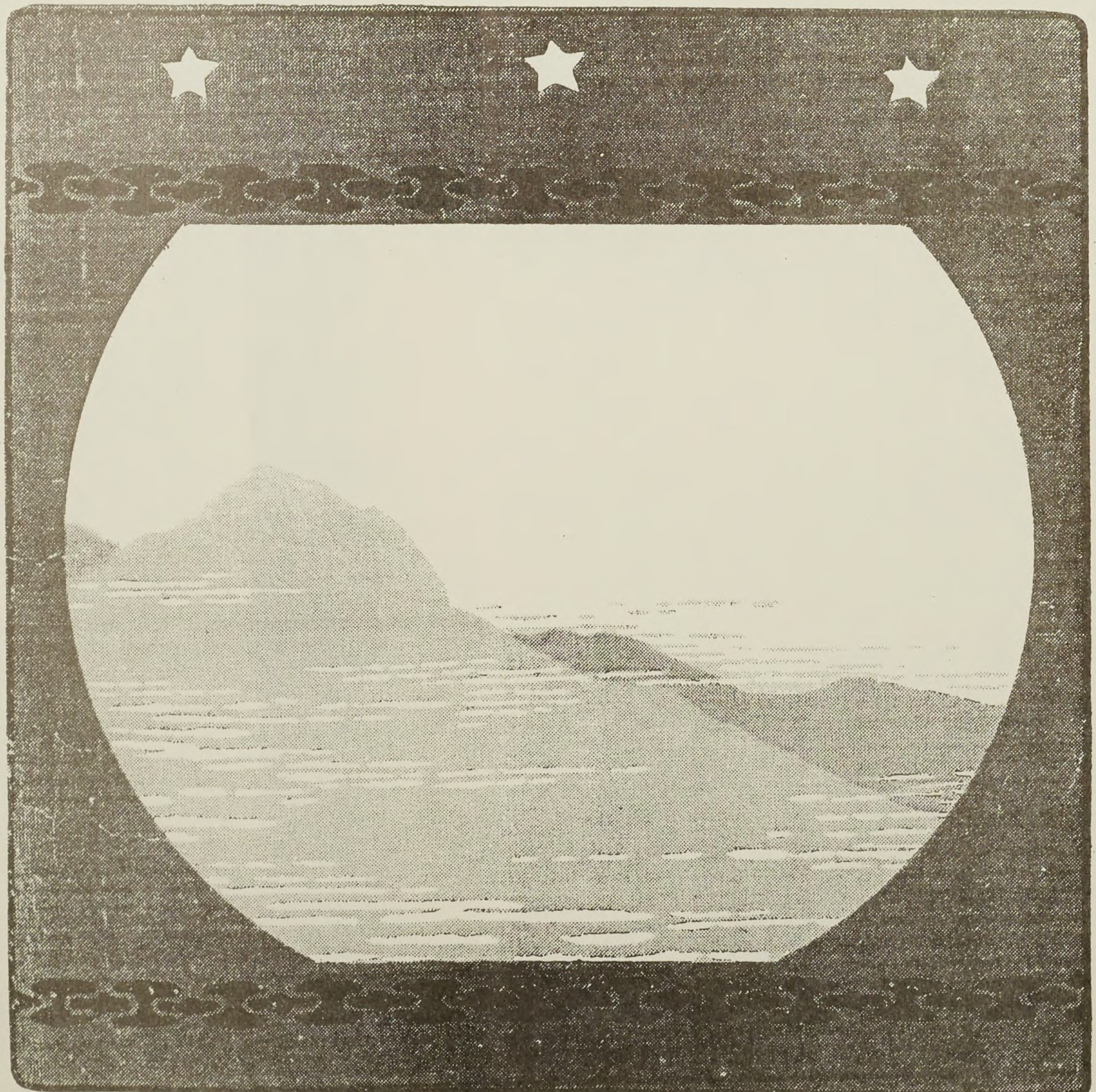
女鑑
發行
第三種郵便物認可
明治二十五年三月十二日創刊
明治二十五年三月十二日



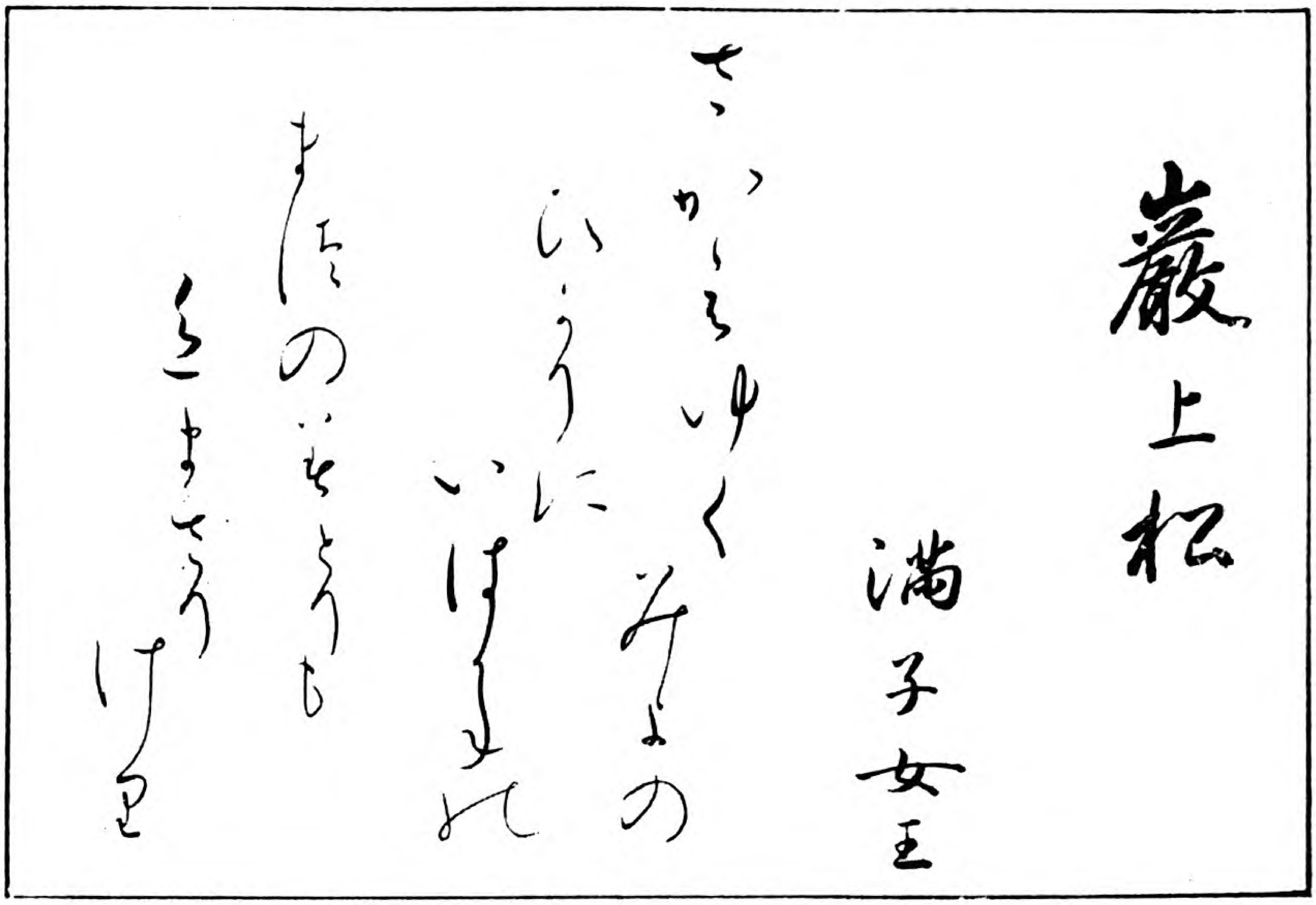
女鑑　第十五年第一號　目次

口繪

新年山



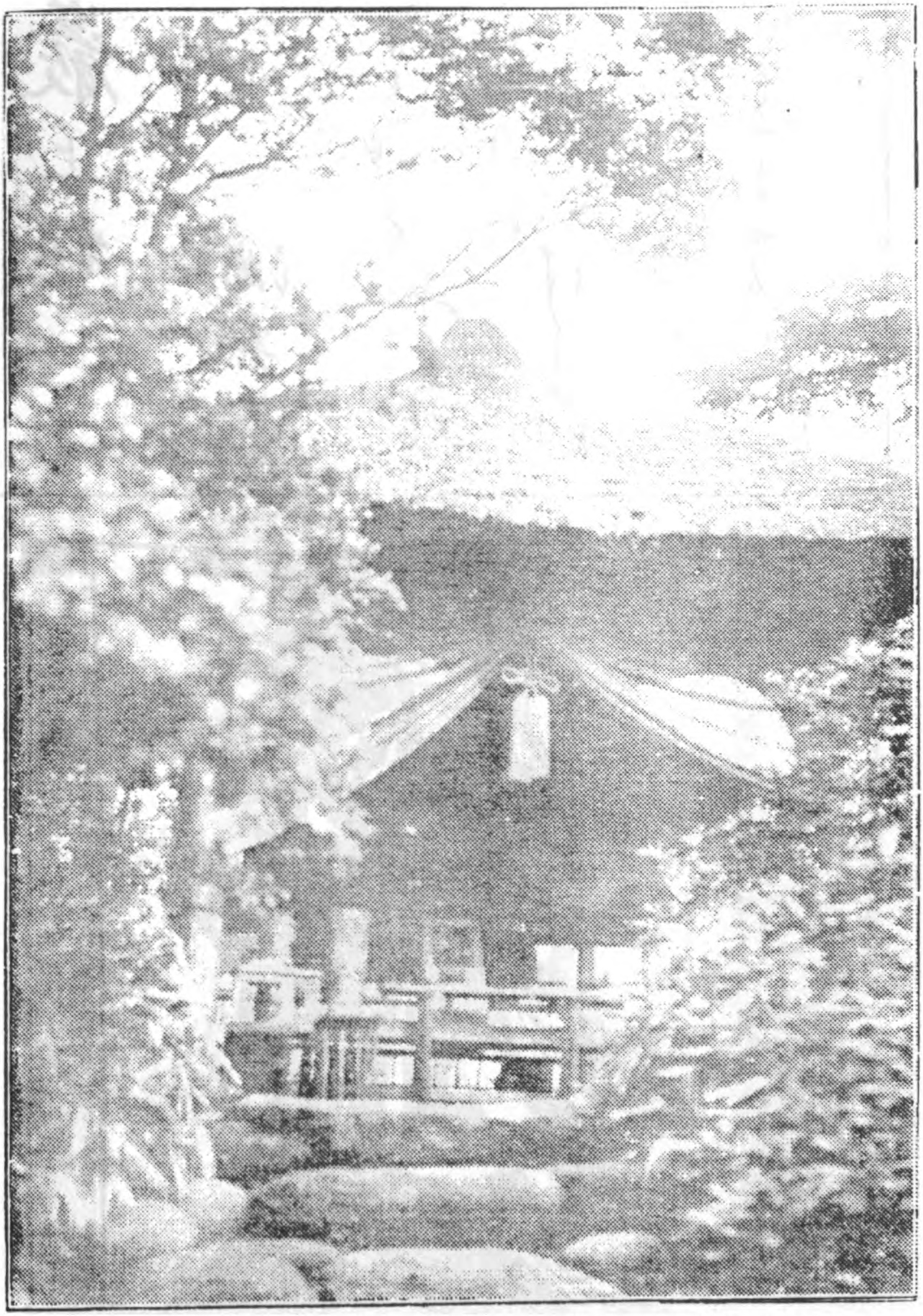
新年筆





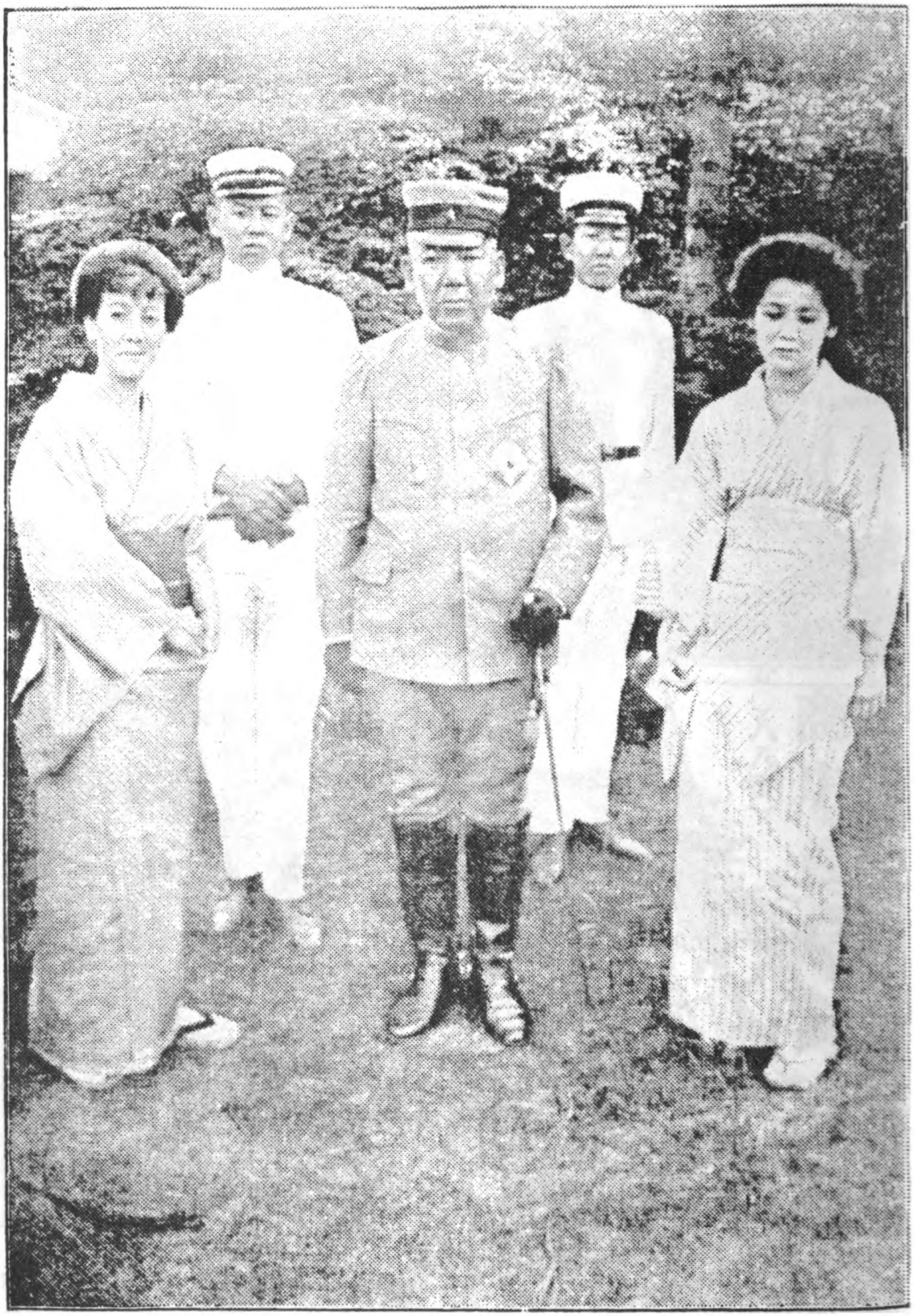
（甘露寺伯爵家に降嫁せられたることは前號彙報欄に詳かなり）

北白川宮満子女王



（本祭場は常宮周宮兩内親王殿下の御思召を以て特に設けさせ給ひたることは世のよく知るところなり場内には兩殿下の御親筆にかゝる木札の名號を限なく掲げしめありといふ戰死者の光榮思ふべきなり）

高輪御殿に於ける陸海軍人戰死者假祭場



（此は侯爵の滿洲へ出發せらるゝ前日紀念の爲め軍服のまゝ撮影されたるものなり左側なるは侯爵夫人其他は令息及び令孃なり）

滿洲軍總司令官大山侯爵家庭

東洋婦人會（雜錄欄參看）



（其一）



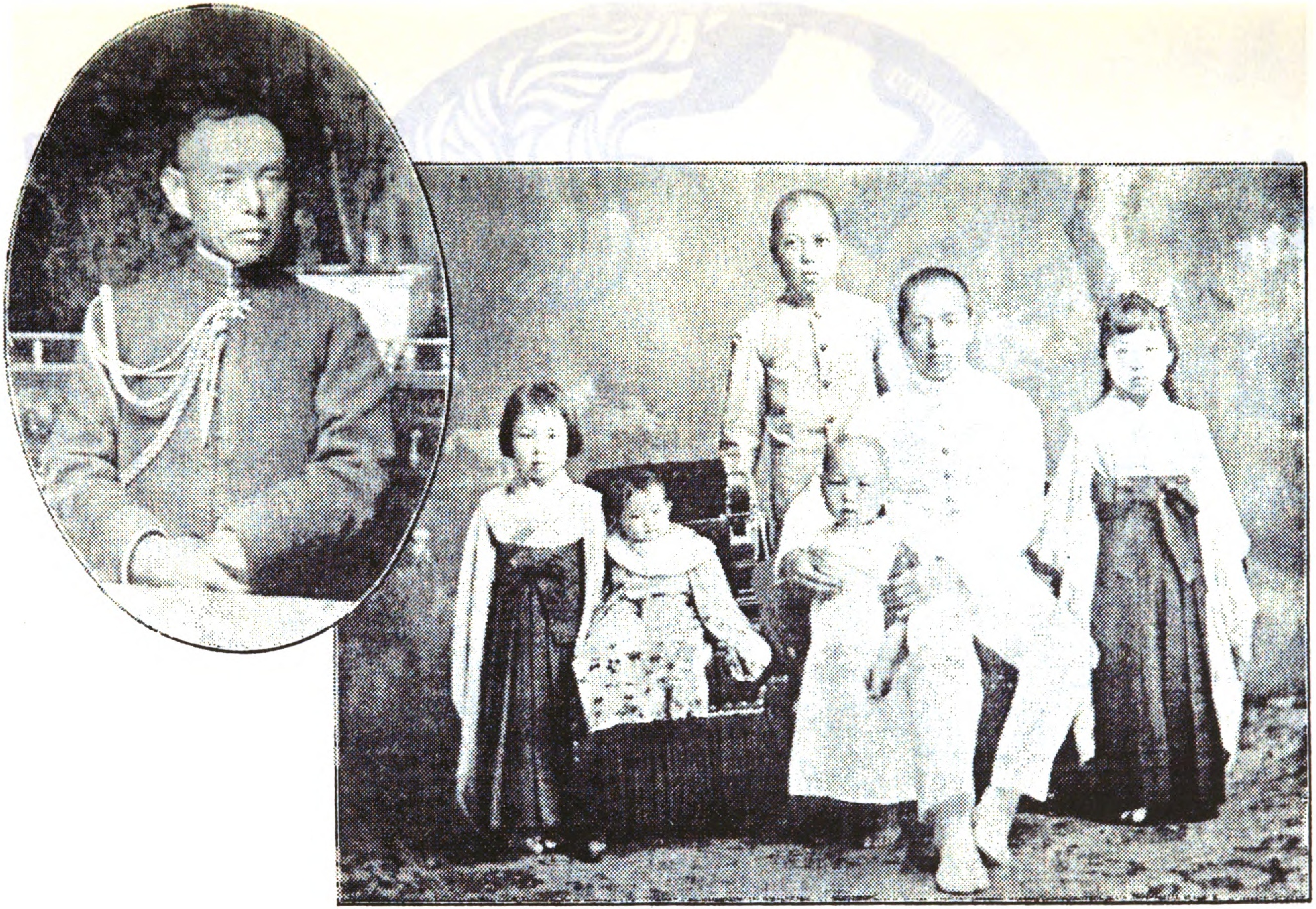
（其二）


横濱市元濱町一丁目五番地
日本一手販賣　古屋商店
（特電壹〇八八番）
最新式
ホワイト
裁縫
ミシン
器械堅牢、使用便利、外觀美麗、價格低廉



（訪問欄參觀）

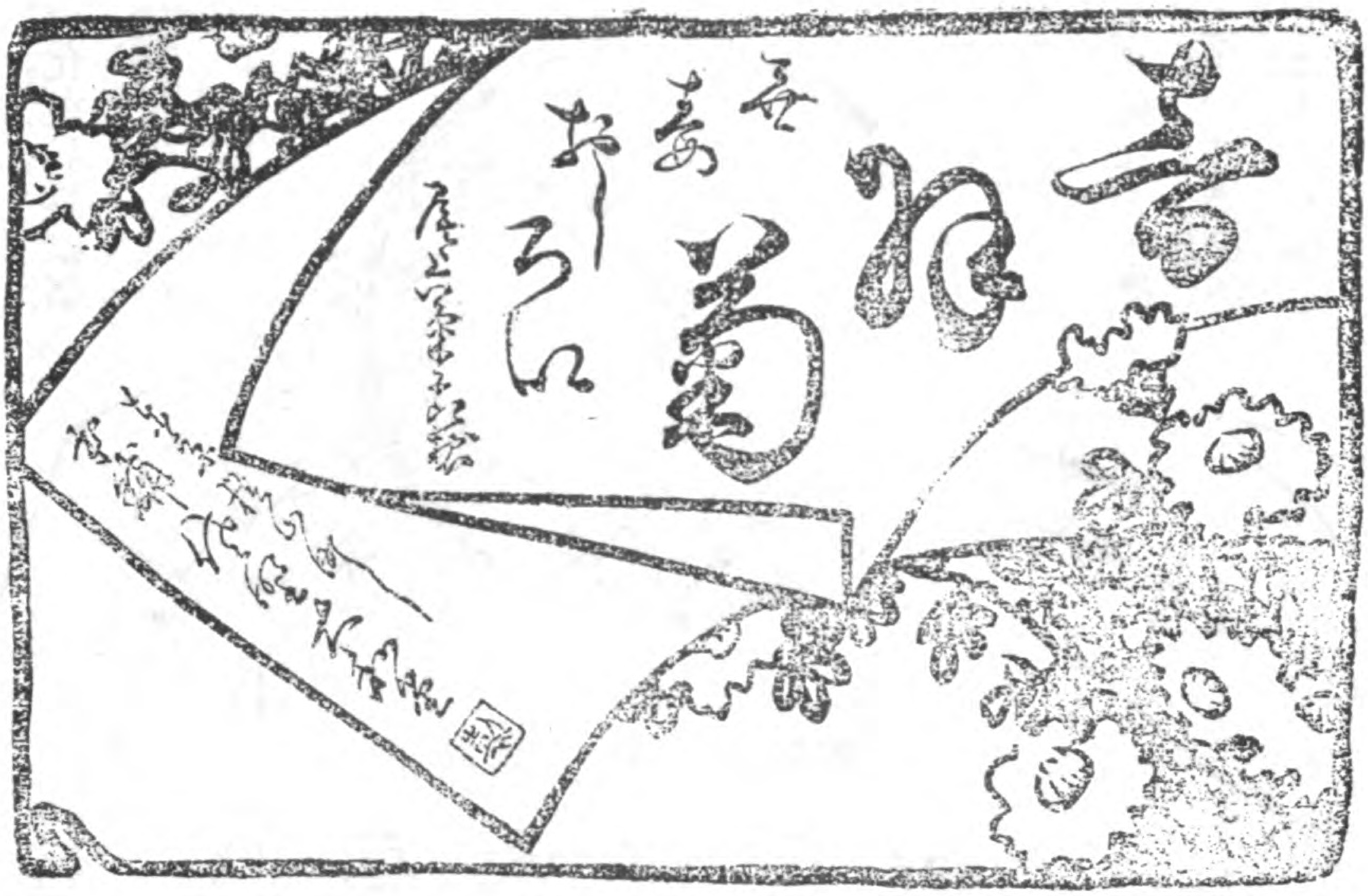
福島陸軍少將家庭



中村海軍大佐家庭

(訪問欄参観)

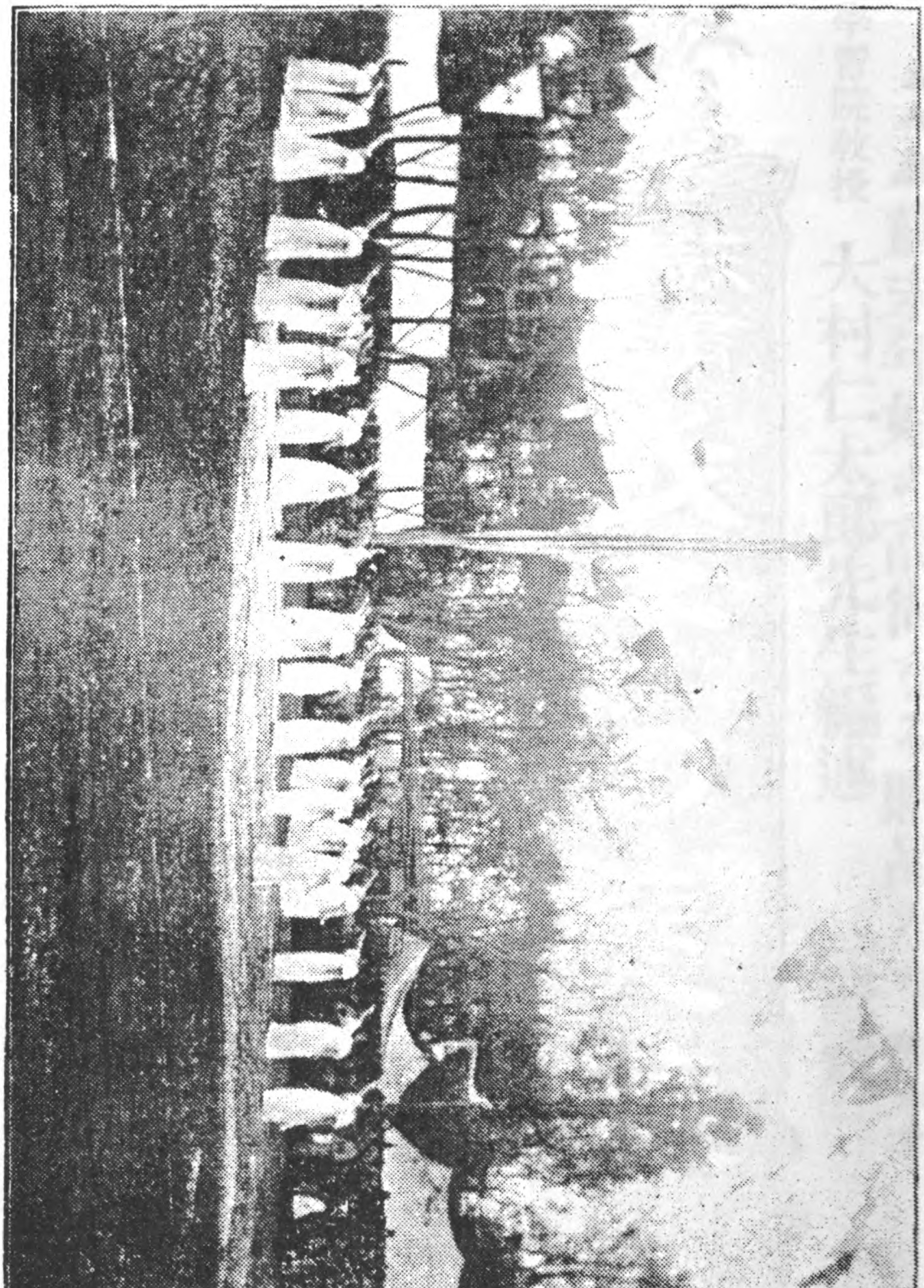

登録商標
立





定價◦金五十錢◦金廿五錢◦金十五錢◦金十二錢

日本女子大學校運動會(其二)



(レヴーエンデルサート式)

(第十四年第十二號女學世界附錄)

恭賀新年

御羽織紐　御帯とめ　時計紐

絹糸編物類　房類

☆印優等絹縫糸

全絹小町糸各種

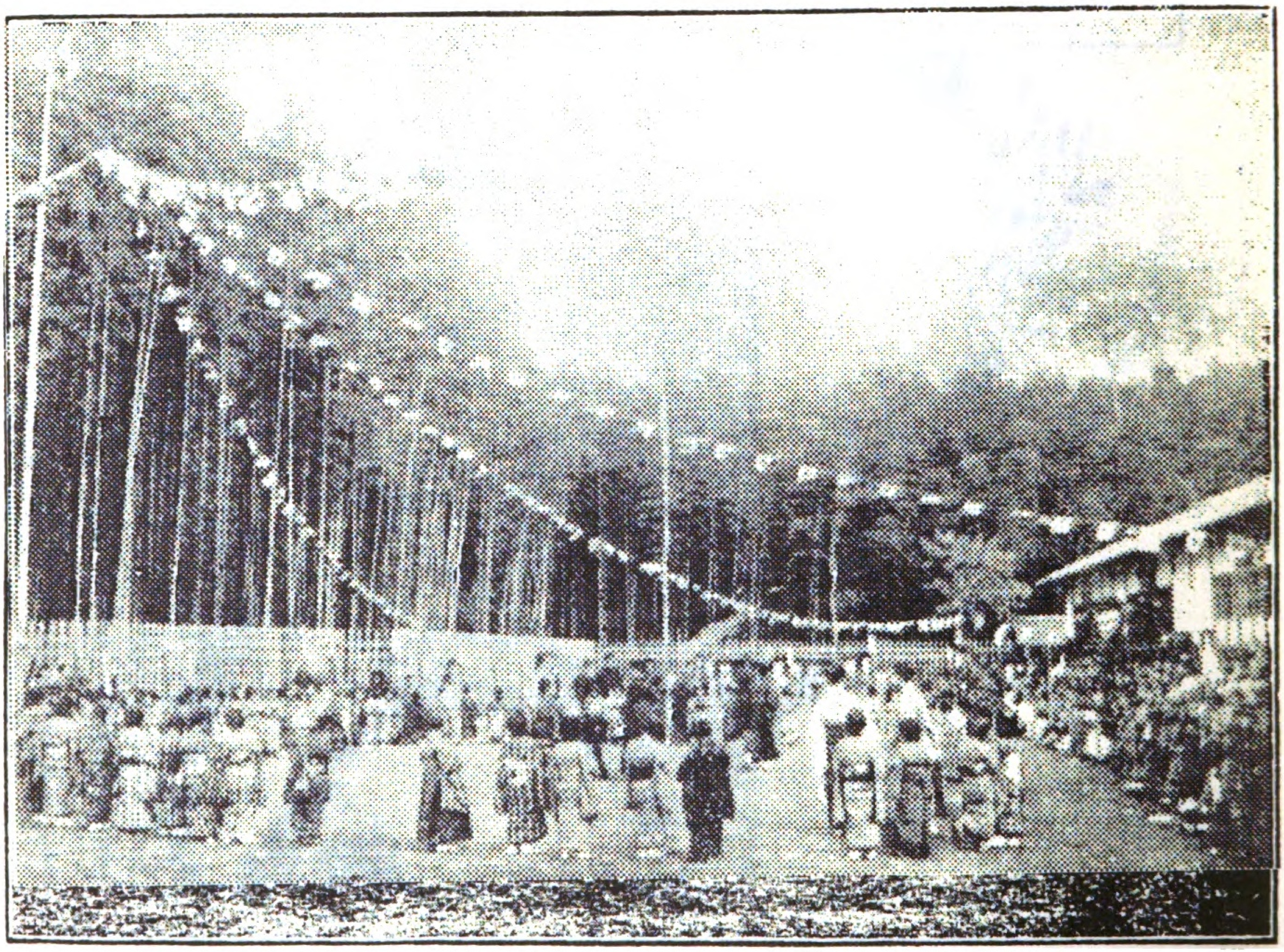
其他糸組物類大勉強販賣仕り候

日本橋區兩國米澤町
三丁目五番地

富屋商店



東京府女子師範學校第二高等女學校運動會



京都市各小學校聯合運動會

女鑑兼題投稿優等者



鈴木きく子

梯たけ子

甲戌

东岸西岸之柳迟速不同南枝北枝之梅开落已异

こゝろあれ
濱のまさごを
かぞへつゝ
きみが千世の
ありかず
にせむ

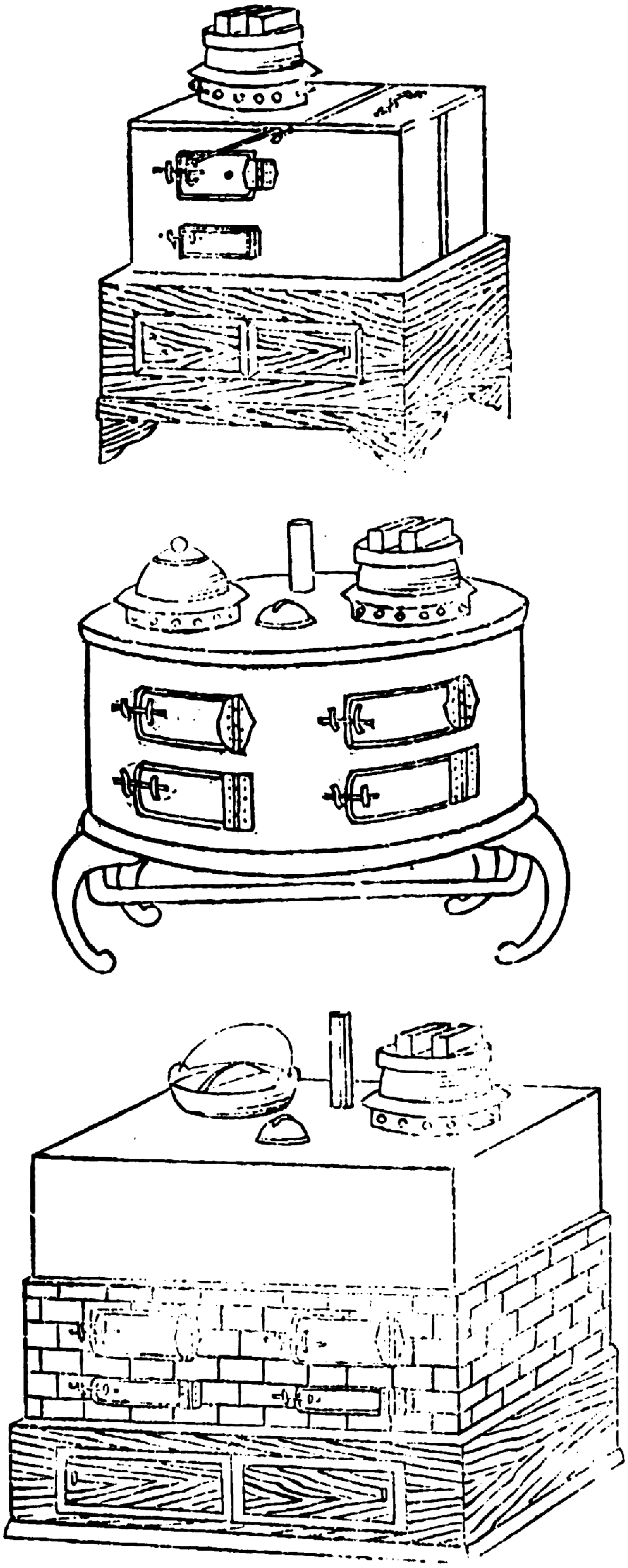
宮里三木技子書

專賣特許

世界無比國益東洋寶來竈

◉此竈の効能は従前の竈よりも煮焼の手数及び時間三分の二を省く◉此竈は弊舗多年實驗上徳用無二の品なり

◉弊舗二拾有余年間經驗と御使用實驗の御諸君とに由り他の竈の及ばざる良品なり



御注文に應じ各種調製仕候

右雛形の外各種あり

薪炭炊
コークス炊
瓦斯炊
石炭炊

東京市日本橋區小傳馬町一丁目二番地
改良竈元祖 伊藤成太郎

米國聖路易萬國大博覽會受領

名譽銀牌銅賞牌

第五回內國勸業博覽會受領

一等賞牌二等賞牌三等賞牌褒狀

白耳義萬國大博覽會出品中

東京音樂學校御用品
東京音樂學校證明書受領品

○改良風琴 同文館製 獨逸式 第壹號金拾八圓以上第拾五號金參百圓迄
獨乙最新マンボルク米國メーソン式折中 日本同文館意匠

○教授用風琴 學校唱歌 第一號金卅七圓以上特號金貳百圓迄

○洋琴 金參百圓以上金七百圓迄 舶來金壹千圓迄

○祝捷樂隊用樂器 七人組織金貳拾圓以上金五拾圓迄

○コルチット金三十九圓以上バス バリトン、テナー、アルト等新荷到着

○歐米諸樂器及附屬品一式

○ラッケット ローンテニス二重枠製 一本金壹圓以上金五圓五拾錢迄

○ラッケット 同改二重枠製 一本金壹圓參拾錢以上金六圓五拾錢迄

○箱入ロンテニス 一組金拾圓五拾錢以上金貳拾五圓迄各種

○箱入ベースボール用具 一組金拾壹圓五拾錢以上金四拾五圓迄各種

○フートボール、クロツケー、ラクライス

○鉄銃、棍棒、球竿、啞鈴木環其他運動用具體操器械一切製作

帝室技藝員美術學校教授高村光雲撰定
○獸類模型 象獅子等三十六種 金卅二圓

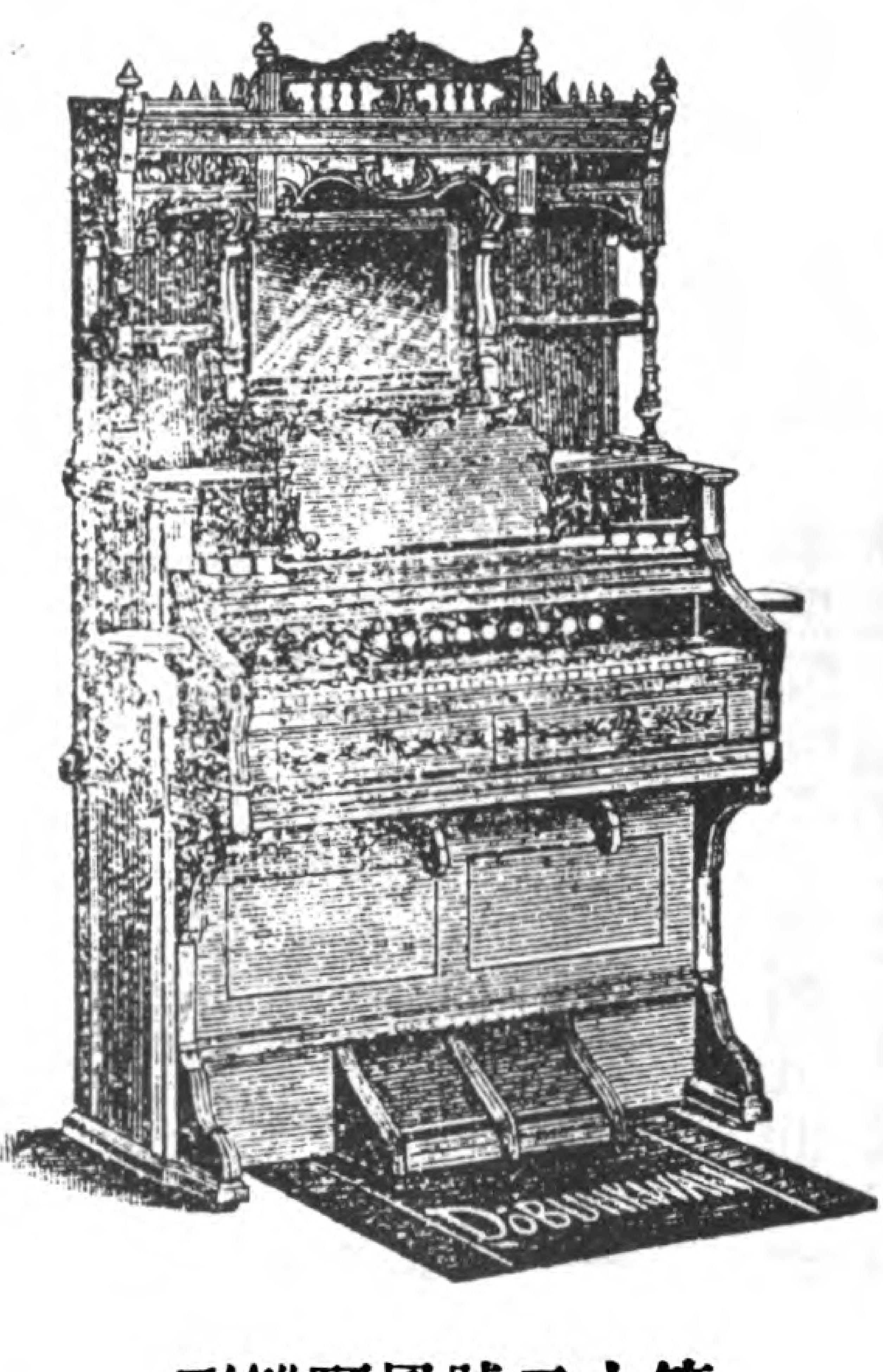
○博物植物學標本及模型品

○生理學標本及模型品

○國定讀本用標本 百八種金卅八圓

○軍船汽船模型 二尺五寸 金七圓五十錢

○理學參考富士山地形模型 五萬分ノ一 金十圓



第十二號風琴雛形

○同 眞形模型 石膏製 金十圓

○同 伊豆國大嶋地形模型 同 五萬分ノ一 金三圓半

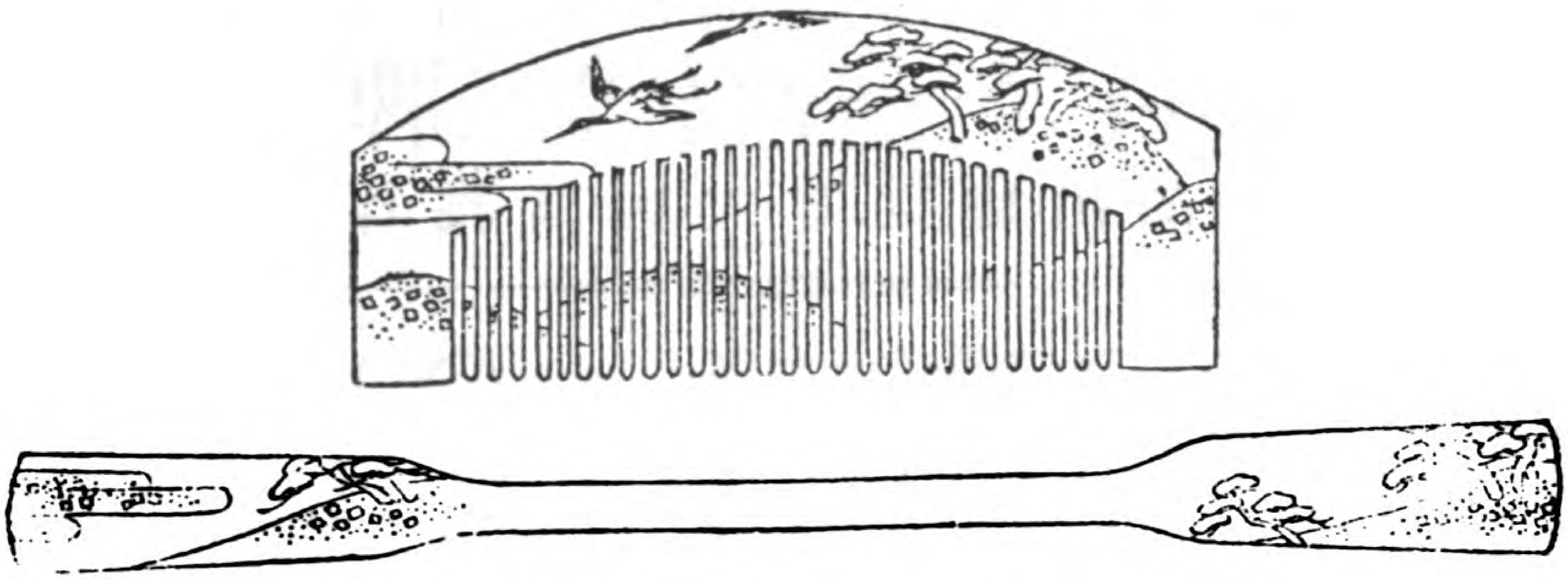
○地學史學參考用旅順地形模型 其筋ヨリ許可あり次第發賣ス

東京市神田區千代田町二番地

同文館樂器機械具店

電本二〇一三 電略（ガッキ）

御勅題模様蒔繪櫛笄



謹賀新年

全國御得意様方御機嫌克く御超歳被遊大慶至極に奉存隨て候本店儀毎々格別の御愛顧を蒙り御陰様を以て追年隆盛に趣き難有仕合に存候右に付き本年は一層擴張諸事勉勵仕り候間何卒舊に倍し御引立の程伏して奉希願候謹言

御進物用小間物切手市内分支店共通ノモノ發賣仕候

此櫛笄は御勅題新年山を象り美術大家の考案を凝せし新選の圖案を妙技なる漆工家の蒔繪せしもの或は色美しき青貝を以て青山生彫を合作せしもの初春の御召川に至極佳品數多出來取揃有之候に付何卒御光來の上御用命賜はらむことを

東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
松田幸治郎
特 電話新橋五五一番

本黒鼈甲臺 大形一組價	貳拾五圓、貳拾圓、拾五圓、拾貳圓
本黒鼈甲臺 小形一組價	拾貳圓、拾圓、八圓、六圓、四圓半
黒甲張臺 一組之價	拾圓、八圓、六圓、四圓半、三圓

女鑑

第十五年第壹號

軍國の新年

われ等今茲に、例年の如くに、目出度く新年を迎ふるの幸福を荷へり。晨起して正膳に向ひ、屠蘇の盃を把れば、春風堂を吹いて、融々たる和樂の充てるを覺え、知らず識らず、聖世の萬歳を祝して、太平を謳歌するを禁ぜざらしむ。

しかも顧みれば、朔北の荒野には、皚々として千里に渉れる滿目の白雪を踏み、身を忘れて健鬪せる將卒あり、渤海の濱には、幾塊の氷山の流峙せる間に立ちて、凛烈指を墮す許りなる寒風に面を暴し、命を棄てゝ奮戰せる將士あるなり。是等親愛なる吾が同胞は、目出たき今日に方りて、そも如何なる事を爲しつゝあるか。

貴婦人、令孃、女學生、其他一般の我が女鑑愛讀者が、新年の今日を祝するに當り、外征の途に上れるその良人、若くは嚴父、若くは子息、若くは兄弟、若くは知己朋友等の人々が、新年の家庭を離れて、風露の辛酸を嘗めつゝあるに方り、その荒涼たる野營の夢は、そも何處の山に到り、何人の身上に落つべきや。

一たび是等遠征の將士の身上を想へば、食するも旨からず、衣れども暖かならざるぞ至情なれ、さるに、われ等今や干戈の叫びの聲も耳に入らず、兵甲の影も眼に映せず、世はさながら、太平の時なるが如くに、家庭の康福を享受するを得るは、我れながら不思議とこそ思はるれ。

されど世に不思議なるもの、存せざるが如くに、此れも亦決して不思議にあらず

して、一に我が　聖上の恩賚なるを感佩せずんばあらざるなり。この頃　陛下の御近製なりとて、世に傳へらるゝものを拜讀し奉るに、

　こらはみないくさのにはに出てはてゝ
　　翁やひとり山田もるらん

と詠せ給ふ。しかも斯ばかり叡慮をかけさせ給ふ草野の翁等は、その最愛の兒孫をば、君國の爲にとて、惜氣もなく、戰塲に遣りつゝ、尙ほその留守に山田もりて、太平を謳歌するは、

　千早ふる神のこゝろにかなふらむ
　　わか國民のつくす誠は

と詠せ給ひて、わが國民の獻身的精神をば、受納ましますに由りてなり。古へに曰ふ至誠は天に通ずと、至誠の旣に天に通ずるに至りては、生命何かあらん、財産何かあらん。饒ひ家庭に兒孫を少き、兄弟を少くも、少く猶ほ在るが如し。心中豈綽々として、餘裕なからむや。餘裕あるの心を以て、軍國の新年を迎うれば、殊に例年に比して、一層の快感を覺えずんばあらざるべし。

而してまた

　四の海みなはらからとおもふ世に
　　など波風の立ちさわぐらむ

の御詠を拜し奉るときは、世界萬國の民、誰れか又た聖意の辱けなきに感泣せざらむや。想ふに敵國の者と雖も、若し之を承はらんには、爭でか恐懼して、其罪を悔悟せざるべき。況て親しく此の　大君の雨露の惠みによりて、生滋れる吾等民草に於てをや。波風いかに立ち騷ぐとも、吾等日出國に生れ、我が

大君の御世の下に民となれる光榮を祝賀せざるを得んや。何ぞ況んや、此の前古未曾有の戰爭に由りて、國威益々宣揚し、隣邦の保全、東洋の平和はいふも更なり、四海みなわが威風を仰ぎ、德澤を慕ひて、相ひ緝睦親和せんこと、恰かも旭日の東天に上りて、四方の山河草木悉く其の恩澤に浴するが如くなるべきに於てをや。

然りと雖もわれ等既に軍國の新年として、本年を迎へたる以上は、亦軍國の民として、本年を送るの覺悟あるを要するは勿論なり。軍國の民たるの道は述懷と題し給へる御製の

世の中は高きいやしきほと〳〵に
身をつくすこそつとめなりけれ

とあるによりて、至れり盡せるを思はずんばあらず。臣民みな其の職分に應じて、各々務むべき所を盡すに於ては、出で、外征の途に在るものと、留まりて內に在るものとを問はず、軍國の民として、庶幾くは愧づるところなかるべきか、されば軍國の婦人たるもの、善く家庭を守りて、傍ら恤兵救恤の擧に及び、分に應じて熱心盡力するは、其の職分を全うするものといふべきなり。

女鑑や固より眇たる一雜誌、之が記者たる予輩の如きまた何ぞ多く言ふに足るものならむや。しかも女鑑雜誌として其實を擧げ、雜誌記者として、努力し盡瘁するは、又以て職分に盡すものとするに足るべきを信ず。思ふに新聞雜誌の壽命は、百年ならざるべからず、千年ならざるべからざるに、我國數多の雜誌の如き、十年以上の歲月を存續するもの、甚だ罕なるは、其の職務に忠實なるものとはいふべからず。わが女鑑が、初刊以來方に十五年の歲月を重ぬるを得たるは、聊か祝するに足るべきを自信すると共に、向後愈々奮勵して讀者各位の厚願に酬ゐ、以て職分を全うせんことを期すと云ふ。



戰時の日本婦人

侯爵夫人 大山捨松子談

皆樣が克く盡されます

日本が開闢つてから此方、こんな大戰爭はありませんで御座いませう、又世界の上から申しましても第一とか申さるゝやうで御座います、千八百七十年の普佛戰爭は、陸軍の動員は、或は彼の方が多かつたかも知れませんが未だ此先如何なるか分りませんので御座います、それに、海軍も御座いますから、此戰爭は近年の大戰の中でも其第一に數へらるゝので御座いませう。

そして此秋に幸ひな事には、日本國民の精神の立派な事で御座います、外に戰ふ將士はいふまでもなく、内に居る婦人方までが、皆立派な精神で後方勤務に多大の貢献を爲しつゝあることで御座いますから、廿七八年の日清戰役に比べて見ますると、婦人方の愛國心、即ち國家觀念や、人道に對する思想は、大分進歩したかのやうに思はるゝので御座います。

皆樣が種々の團體で克く盡されまして、眞に擧國一致の實が擧つて居ますが、私共は赤十字社の繃帶卷の會や、愛國婦人會、出征軍人家族慰問會の會員で御座いますのでこれ等の會で目撃致しまするのに、皆樣の盡されまするとは申分が御座いませんの

です、昔ならば二十人も侍女を從へなさる御方々が、此寒いのに一人で御出になりまして、繃帶卷から慰問の勢をまで、取られますので御座います、實に軍國の婦人として立派なもので御座います。

テイミッドとか申します

斯樣に皆樣の盡され方は、申分はありませんので御座いますが、私は少く交際といふ上で遺憾でならぬことが御座います。

這度は隨分外國の方々も見へまして皆樣と御一緒になつて繃帶卷などをなすつた御方も御座います、所が皆樣の中で若い方々は、外國語も克く出來てドン〳〵御話が出來る御方であるので御座いますから自由に御話遊ばせば可いので御座いますのに、唯御遠慮許り遊ばして些とも御話遊ばしませんので御座います若い御方々は、華族女學校などを御卒業遊ばし、それから教師に就いて、會話の御稽古をなすつて居らしやるので御座いますから、十分御出來なさるので御座いますのに、御遠慮なされますので、折角の御客樣に御話申上げるのは、相變らず私共のやうなものが二三人ばかりなので御座います、西洋人も此事を殘念に思ひまして、日本婦人はテイミッドですと申して居るさうで御座います。

テイミッドといひまする言葉は、何と言ひますか、適當の譯語は存じませんで御座いますが、大膽の反對で、併し小膽といふ譯のものでは御座いませんで、御遠慮といふ方に意味の近いもので御座いましよう此テイミッドは、日本婦人の淑德といふものかも知れませんので御座へますけれども、交際社會では甚だ御遠慮が却つて圓滑を缺くので御座いますから、今少し御遠慮なく、凡てを遊ばしたらば何のやうに宜しかろうかと私共二三人は常々申すことで御座います。

日本婦人と西洋婦人

日本婦人は心を外に現さぬのが其長所で、又如何なる苦痛も克く堪えるので御座います、内には、洵に痛心して居りますけれども、外には微笑を頰に漏らして御出になります、これが日本婦人の長所で御座いましよう。

西洋婦人は、さうでは御座いません、苦痛に堪えるとは出來ませんので御座います、何か體內に痛みを感じますると、直ぐそれを面や聲に現はします。又心の苦痛は悉く面に現はしまして、少しも耐へる力がありませんので御座います。

これは、日本婦人は、所謂日本のナショナリチイの武士道の久しい良習慣からさうなつたので御座いませう。此度の戰爭で最愛の良人を喪いました新未亡人が涙をかくして氣を亂さずに元氣好く盡されまするのを見ましたる西洋婦人方は非常にそれに感動して、其氣象の强いのに驚いて居られるので御座います日本婦人は寔にテイミッドでは御座いますけれども、忍耐といふ精神は立派なもので御座います、故に今戰場で日本兵士が發輝して居りまする剛ひ精神殊に忍耐力は、日本婦人も亦同時に之を發輝しつゝあるので御座います。

西洋の人は、宗教に對する忍耐力は、仲々で御座います、日本の方々はそれは乏しいやうで御座いますが國家の爲めとか、又は名譽とか面目とかいふ方に於いては、隨分忍耐遊ばして、剛いので御座います、恐らく愛國心は日本婦人に及ぶものは御座いますまい。

いゝいゝいで
誤解されますので

併し日本婦人はテイミッドで又忍耐深いので御座いますが、それは大變可い所が多う御座いませうが、これからして、餘り謹み深いといふ風が御座いまして、それがため竟に餘りに口を御開き遊はしませんの

で、却つて西洋人に誤解されて悪感情を招くことがあるので御座います。

假令へば繃帯巻などには、西洋人も混つて居ますが、日本婦人の方が好く御出來になります、そして西洋婦人が偶然間違つた仕事を爲て居ますのを日本婦人は見て居ながら、其の眼前に『貴女それは御間違で』といふことは容易に仰やりません、如何しても仰やらないので御座います、そして其西洋人の飯へりました後で、その間違つたところを仕直すので御座います、さうしますると、西洋人の方では、翌日になつて之を知り、甚だ面白からぬ悪感情を惹起すといふことになるので御座います、一旦思ひ切つて『貴女御間違で』といへば、それで濟むことを言はない爲に先方から誤解され痛くない腹を探らるゝことになりで御座います、これ等は、もう少し淡泊にして戴きたいので御座います、畢竟これは、餘りに他人の體面を思ひ過ぎてからなつたことで御座いませうが、甚だ好くない習慣では御座いますまいか。

ですから日本婦人の會は凡てが籠城的、墻壁的で門戸開放といふ風に快濶、爽快で御座いませんで、陰氣で沈鬱で御座います。

這度の戰爭位日本婦人の盡力さるゝことは、尠う御座いましせう、日本婦人の交際社會は這度は好い經驗を得られたので御座います、又其交際の仕方は、之を近い以前に較べますると大分進歩致して居るので御座います、唯殘念なのは、餘りにテイミッドであるのと、淡泊でないのとで御座います。

外來者間の衝突

西洋から御出になる人々は、同じ種類の人ばかりでは、御座いません、系統が違ひ主義が違ひ、境遇の違つた御方もあるので御座います。

然るに人情は矢張り何處でも同じもので御座いまして、彼の人達の間にも、互に種々の悪説が立つもの

で御座います、其間に介在つて、ドチラの感情も惡く致しませんやうに、力むるのは、困難で御座います。其處で這度のやうに外來新客の多い時程、御若い物事のよく御出來遊ばす御方々が其間に介在して誤解を解き、迷ひを破りて、彼等の間をも和ぎ、又日本に對する感情の彼等の心によく映るやうに盡されて戴きたいので御座いますが、それが前に申しまする通り、テイミッドでは思ふやうにいかないのではありますまゐか。

併し日本婦人の淑徳のあることは彼等の敬服して居りまする所で、彼のマギー夫人一行の如きも、克くいひました、日本婦人は柔和で、忍耐力が强いなどと、全く柔和で忍耐力のありますることは、實に日本婦人の長所で御座いましせう。

一、一般婦人

開戰以來、何處を見ましても、擧國一致の實が擧つて居るやうで御座いますが、其中で一般の婦人は如何であるかと申しますると、皆それぞれ盡されて居らしやるのは寔に嬉しいことではありませんか。或は上流社會の如きは勿論、下等社會の如きも、愛國の觀念が强いが、其間に立つ中等社會の軍人に關係の尠ない人々は冷淡だと申さるゝ人が御座いまするが、それは何かの御考へ違ひで御座いませう、隨分軍隊に御關係ない中等社會の方の奥樣方が御盡しになつて居るので御座います、或は又キリスト敎の女學校などは、如何だと申さるゝ方が御座いまするが、這度は、彼の學校の人々は、別して御盡しになつて居るやうで御座います。

併し戰は隨分大戰で眞に御國の一大事變で御座いまして、今後何程日子のかゝるものか分りませんで御座います、それに女性は燃え易く、又冷へ易いもので御座いますから、一般婦人が皆開戰當初の御決心で御

盡しになりたいもので御座います、殊に此戰と申しまするものは、戰は花で其花を咲せまする後方勤務といふものが大層困難なもの丶やうに承つて居るので御座います、内地で一般婦人方が、御盡しになられまする ことは殆んど後方勤務の助けとなるもので御座います、軍服の裁縫、繃帶卷、日用品の供給など、皆さうでは御座いませんか、故に一針の力にも、一卷の力にも、十分に熱誠と赤心を盡して載きたいので御座います。

隱れたる愛國者

人は皆名譽を望むもので御座います、又大勢でないと公共に盡したくも盡し惡いもので御座います、然るに人知れず唯一人で盡されて居る御方が御座います、これは一般感心な事と存じます。

此間聞きまするに或る家の奥樣は、御懷妊の御身でありながら、御一人で出征軍人の家族を慰問されたとか申します、斯る御方は眞に篤志な御方で、全く隱れたる愛國者といふやうなもので御座いませう、そして、斯ういふ御方がだん／＼あるやうで御座います。

盡したいけれども團體に來る時間のないといふ御方や、又團體でなければ盡されないとお思ひなさる御方は餘り御座いますまいでせうが、斯く一人で御盡しになる御方の如きは、寔に御婦人として實のありまする仕方で、ドーか全國の婦人は、此上共御方のやうな御精神になつて載きたいので御座います。

外國から種々の手紙が參ります

日本は已に世界の強國となつて居るので御座います、そして今日の樣に列國環視の中に立つて戰つて居りまする時には、戰の終局はいふまでもなく、戰の中でも、列國の感情といふものを惡くしては、ドンナ不利益があるかも知れません、列國の感情を好くして置きますることは政府の力一ッのみに委して置くこ

とは出來ません、即ち我等國民各自が彼等國民各自に對しまする私交のやうなもの丶上にも、之を試みんければなりませんので御座います。

禍は小さい所から生ずるもので御座いまして、一寸した事が導火線となるかも知れませんので御座いますから、國民と國民との間の私交といふものは、實に大切なもので御座います。

開戰以來外國には多少の關係のある御家には澤山種々の御手紙が來ること丶存じます、殊に米國の雜誌などでは、それはもう非常の熱心で日本の戰捷を書きまして恰度自國の勝利の如くに喜んで居るので御座います、されば彼の地に交遊のありまする御方々の處には盛んに御手紙が來るものと存じますが、其の御手紙が先方が充ち滿ちた同情で書くので御座いまするから、仲々其關係は容易なものでは御座いません。

自分の事を申しましては、失禮で御座いますが、私の方にも隨分多く手紙が參りまして、困る程でおりますが、成る可く一々御返事を出して居ります、併し其中には日本に宗教を擴めたいといふのも御座いますし、又種々無理な注文のも御座いまして、挨拶に困るのもあるので御座いますけれども、返事を出しませんでは、先方にドンナ誤解をさる丶かも知れませんから、克く考へまして好いやうに返辭をして居ます、斯いふことは私交上些々たるやうで御座いますけれども、一片の紙でも日本からのものとなれば、それが即ち一般國情の材料に供せらる丶ことが御座いますから、甚だ油斷してはなりませんので御座います而して斯いふことは、家を治むる御婦人方の尤も注目す可きこと丶思ふので御座います、即ち御自分ばかりでなく、其の御子樣方が外に御關係が御座いまするならば、十分に注意して戴きたいので御座います。

赤十字の繃帶製造

話が區々で又前後して居りまするが、赤十字社の繃帶卷は隨分手數のかゝるもので御座います。

會員の數は二千名ばかりで御座います、各組に分れて居りまして交代で毎日平均二十四五名位宛出社致します、其巻方手數は、斯うで御座います、昔ならば侍女に取巻るゝ御方々が御辨當や日用品の這入つた風呂敷包を御携へなすつて御出になり、それから一室で白の看護婦服に御着換遊ばし、手足など繃帶巻に觸れまする邊は、一切消毒しまして、そして繃帶巻の室に這入りまするので御座います、そして一番下巻即ち芯を巻きまする御方は御話さへ禁じられてゐります、又其室は火鉢、ストーブは塵が立つために一切置かないので、而も板敷の上に立ちまして御働きなさるので御座いまする、然るに其御方々の中には實に恐れ多くも妃殿下が必ず御一方宛居らつしやるので御座います、何々侯爵 何々伯爵の奥様姫様方が御出になるので御座います、目下尚四萬個程引受けて御座いまして多分今年中はかゝるので御座いましよう、洵に勿體ないやうで御座います。

併し其繃帶巻は即ち兵士の傷を包みまするので他には一切させませぬ、全く赤十字婦人會の一手に出來るもので御座いまするから、此會員の責任は随分重大で負傷兵士の生命に關係のある事だと存じます。

其他戰時の家庭、風俗等種々の問題も御座いませうが、其等は教育當局者を始め、諸先生方が、雜誌や新聞に、縷々其の意見を餘蘊なく陳述されてをりまして、中には立派な御卓見もありますから、私には今別にこれぞと申す程の格別意見も御座いません、唯此日露戰爭は一面より申しますれば、日本婦人の爲め好い實際の學校と思ひますので御座います、でありますから、皆様が十分御奮發なすつて御國に盡して頂きたいので御座います。

本篇は、記者此程大山侯爵夫人を訪ゐ參らせたるとき、お忙がしき折をも厭はせられず、特に記者の爲めに談話せられたるを後に筆記したるものなれば、讀者其心して讀み給はんことを乞ふ。

女子勢力の發輝

文部省視學官　中川謙二郎氏談

一

當今の教育ある女子諸君は、今少し働いて貰いたいです、彼等はまだ此上働ける力も有て居り、又働く可きことも甚だ多いです。

今では家庭でも、社會でも教育ある女子、即ち中以上社會の女子の力といふものは甚だ弱いです、或る所では蔑視せられて居るのもありまして、教育ある女子の爲に、甚だ遺憾に感じます、又國家の上から見ましても、洵に殘念のことです。

私は克く地方に視察に行きますが、女子が十分に働いて居る所は、其處に必ず女子の力といふものが、それ丈認められて居ります、働けば働く丈、其力が現はるゝから、其力が凡てに認められ、從つて其家其社會が、改善、發達することは、申す迄もないことです。

二

地方農家の女子は隨分働かれて、時としては男子を凌ぐやうな人も見受けます、夜業も十分するし、又晝は田畑に出で、一生懸命に稼ぐです、されば其家庭でも、其社會でも、女子の力といふものは甚だ有力なもので、之が爲に其家庭や、社會が立てられて居るやうな感じが致します。

農家のみならず、東京でも下等社會の女子は、男子に劣らず働いて居るやうです、男女共稼の上に立て

られて居るです、若し教育ある女子が、此樣に働かれたならば、其結果は如何でありませうか、それこそ家庭でも、社會でも、女子の力が大に認められて、改善し進歩することが、多からうと思ひます。

勿論中以上の社會の婦人が、悉く働かぬとは申しませぬが、これを農家や下等社會の女子に比べて見ますると、實際働き得らるゝ筈なるにも係らず、却て働きが足りないといふことが出來ます。

三

官吏の妻、其他都會の教育ある女子は、甚だ働かぬやうではありませんか。

彼等は日常如何なることをせられて居ますか、多くは男子から養はれて、何事も男子の手を竢て居るやうです、戸外の仕事は勿論、家内の内職といふやうなものも、些とも爲ないのが普通です、そして浴湯とか化粧とかいふやうなものにのみ精出して、恰も一個の遊民のやうな風が出來て居ります。

書物を讀み、克く交際も爲るやうですが、其家庭のために働く、社會のために働くといふ方は、ドーモ些し欠けて居るではありますまいか。

四

元來女子は皆妻となるのが普通でもあり、又實際妻となつて居る人方が、其大部でありまするが、彼等の第一の役目は、家を治むるといふことであります、而して家を治むるのには、一家經濟の遣り方が巧みになければなりませぬ。

然るに今日の日本の家庭といふは、如何なる狀態でありまするか、實に文明開化といはれながら、竈は舊式の竈、薪を燃して、煮焼を爲て居ります、彼の竈は太古原始社會の時分に、人が石を二ツ幷べて竈として薪木を燃して居たもので、二十世紀の今日にては甚だ未開じみて居る、それならばそれが大いに經濟か

といふと、些しも經濟ではないです、之等は便利又經濟といふ上から考へて竈を改良したいです、否已に改良竈もあります、又燃料は石炭コークス又は瓦斯を用ゐたいものです、其他臺所の道具の配置、座敷、應接間、或は天窓等改良してゆきたいものが、澤山あります。

然るに今日教育ある立派な女子は如何にして其家を治めつゝありや、彼等の多くは、工風を凝らして、家事經濟の立て方に、新軌軸を出さうとするものは、殆んどないではありませんか、又ソンナ事を考ねばならぬといふ風に頭腦を使つても、居ないやうです。

五

世の中は文明開化となるほど澤山に職業が出來るです、而して成る可く分業的になるのです、されば家に於いても此事丈は家で拵へ、此事丈は他に頼むといふ風にならねばなりませぬ。

西洋ではパン屋之を日本でいへば飯屋でありまするが、それが別にチャント在つて、自分の家では飯を炊きませぬ、飯は炊かぬ代りに、此時間と費用とは、他に活用されて居るのです、日本は急にさうは行きますまいが、飯屋は飯屋、被服屋は被服屋となり、各分業に立ち別れて、其代りに、一家の家族は各自皆克く各自の職業を採つて働くといふ風になりたいです。

六

女子が活眼を以て一家の事に注意し、而して或は外に向つて職業を採り、或は外出の出來ぬものは内職をして克く働くならば、女子の勢力は旺然として崛起するでありませう。

今では何處の家でも、男子の手で何事も活動し、女子は唯其陰へ立つて生存して居るやうに感じまするのは、之を國家經濟の上よりいひまするど、それは國力發展上非常なる障害であると申さねばなりませ

ぬ。
男子が男子丈で、生活するのではなくして、其半分を女子扶助のために頒たねばならぬといふことであれば、男子の力を半分女子が割くことゝなる、况してや教育ある女子の如きは克く文明的の訓練のあるものであるのに、それが甚だしきは、一家の飾物、然らずとも、所謂奥様風といふやうにして居るのは、實に働けるもの、使へるものを使はないで、玉を徒らに納つて置くと同じやうなもので、洵に一國の上からいひますると、大變大損、實に國力發展上の障害であると思はれます。

教育ある女子は、克くいひますことですが、日本は女子の位地が卑いと、併し自分の舌は遲れても可いです、手さへ立派に女子の面目を全うして居るならば、自づと女子の位地は高まつて參ります。

德の高い人は、自己で自己が豪いとか何とか言はずとも、自然に人が尊敬するが如くに、女子が家庭に對しても、社會に對しても力があつて即ち其働が十分であつたならば、自と女子の勢力が出來て、その地位は高くならうではありませんか。

七

彼の社會風俗の如きに至つては、主に女子の働きによりて善美にして貰いたいものです。

訪問の時間、其他の作法、又彼の盆正月の贈物取遣りの惡習慣を廢止するとなどは女子の手と力で遣つて貰いたいです、其他、彼の慈善事業等女子の手を竢つべきものは他にも甚だ多いです。

一方には家庭を改良し、一方には社會を進歩せしめ、而して同時に女子は男子に劣らぬといふほどには行かぬとも女子の面目に非難なきほど職業を採りて、即ち女子自らが獨立特行して、自然向上して行くといふことになれば、實に女子は、即ち教育ある女子として申分ないもの、余は彼等が此に到るの日を指を屈

して竢ちつゝあるのであります。

八

目下の戰局に關して、敎育ある女子が大分社會的に活動せられ、恤兵品の製作等に機械を使用して働かれて居られるのは喜ぶべきことです、又此頃出來ました義勇艦の設立運動等なども洵に良いと思ひます、日露戰爭中に現はれました女子の活動は、立派の活學校で、彼等は良い經驗を積れつゝありまするが、併し此美風の中絶しないやうに繼續して貰いたいものです。

兎に角私は日本の敎育ある女子に今少し働き、其働くには自己の敎育あるを幸ひに克く考へて良く一身を處し、克く一家を治め克く社會に美風を殖ゑて以て、女子の勢力を社會に發揮し扶植して貰いたいに外ならぬのです。

戰時婦人と義勇艦

鳩山春子夫人談

日露戰爭

申すまでもないですが、這度の日露戰爭は、全く日本帝國の大事件、洵に國運の消長を賭して居るものであります。

幸ひ今日迄は連戰連勝と申す盛況を呈して居ますが、御上の御詔勅にもありまする通り、前途甚だ遼遠と思はねばなりませんのであります。然して我が軍人が皆決死的に盡されて居る事は、これを聞く度毎に

實に悲慘に討たるゝではございませんか、國民――わきて同情を以て立つ婦人は、これに滿腔の同情を捧げたいのは勿論であります、それ故に彼の日清戰爭の際に比すれば日本婦人も餘程奮發をされ、赤十字特志看護婦會は勿論、愛國婦人會に、出征軍人家族婦人慰問會に、或は恤兵部へ献納の腹卷靴下慰問袋等に又は出征軍人の送迎に、戰死軍人の會葬に、傷病兵の慰問に、隨分日本全國の婦人が盡されつゝあるは誠に悦ばしき事と存じます。

一般婦人

併し前陳の如き美擧は、日本全國各所に企て居るゝには相違なきも、これが爲に働かれつゝある婦人は常に或る有數の婦人に限り、未だ一般婦人に國家的觀念なく、國家的同情の念に乏しきは、慨しき事の限りではありませんか。

婦人の恥

已にかゝる空前絶後の秋でございますから、日本婦人も、已に衣食に足り、家事の都合の出來る限りは、何か一つ多少に係らず、軍國のために盡さねば、良心に安んせず、婦人仲間に對しても恥かしく、交際も出來ざるやうな感じを起す樣に、いたしたいと考へます、婦人が、かゝる感じを起す事は、子供の國家的思想を養成するにも極めて緊要の事と存じます。

帝國義勇艦隊

此頃帝國海事協會にては、義勇艦隊建設を企てられ總裁の宮殿下を始め、有力なる方々が、それ〳〵御奔走なされつゝありますので近頃これに女子部の設けも出來、殊に女子部委員も數多ございまして、女子部委員には次の如き勸誘書も出來ました。

勸誘書

茲に畏くも、總裁宮殿下の令旨を奉戴し、又本會の奬導せられたる主意書に依り、微力のあらん限、有志の諸夫人を勸めて、補助船舶の建造に務め以て我れらが微衷を盡さんと欲す。

抑も、四方海を環らせる我が大日本帝國の如きは、其有事と平時とを問はず、能ふべきだけ、船舶の多きを欲するは云ふ迄も無し。廿世紀の世界の機勢は、單へに海の力に頼らざる可らざることは小學兒童も能く知るところなれば、また今更に喋々するの必要無かるべし況や船舶はもと女性に象りし者にして、而かも、我が貴顯の渡航ありしは、實に神功皇后を以て嚆矢とす、因緣の歸する所、また偶然ならざるに似たり。是故に我が船舶ます／＼多きを加へて、各方面の航路、次第に擴張せられ、我れら同胞姉妹もまた、陸路によらんよりは寧ろ海路によるを便なりとするに至り、茲に始めて、海外の貿易も殖民も、完全に其目的を達するに至らん。

海國の女性は、宜しく船を以て家とするの覺悟無かる可らず、然るに我が日本女史の多數が、猶船行を悦ばずして、寧ろこれを忌避するの傾きあるは、他無し、海上を行くこと陸上を行くが如く頻繁ならずして、其習慣の航海に疎なりしが故にぞあらん。返す／＼も我船舶の數を增加して世界進步の大勢に後れざらんことを務め、以て交通貿易の發達を圖ると共に、有事の日に於いて海軍の任務を補け、兵商兩用の途を全うすべき補助船舶の建造は實に刻下の急務なるを信ず、彼の塵埃も積れば高き山となり、點滴の水も、集まれば深き淵とぞなる。

希くは、此壯擧に贊與せらるゝ同胞姉妹各位の、協心戮力、以て速かに成功を期せられんことを、切に熱望して止まざるところなりかし。

已に新聞にもありまする如く、女子部に於ては成る可く委員の數を殖しまして、日本全國隈なく、この思想を推し廣めまするのでございますから、此擧は全く婦人の擧國一致の働きとなるものでございます。そして義勇艦隊にあつめまする金額は、一千五百萬圓の目的でございますが、其内婦人の手にて、四百萬圓即ち可なりの艦一艘丈けを造りたいと皆樣熱心に望んで居られます、これが男子の方にしまするど、少し御身分のある御方は百圓以下のものを出せないといふ樣な御遠慮もあり、又一般の御方も五圓や十圓ではといふ樣な事もありませうが、其處は婦人ですと大變都合が宜しいので御座います、下は一圓五十錢二圓といふ所から、上が三十圓以上位の方針で、誰でも出金し安く厶いますから、自然この思想を普及しまして、廣く全國に募集しましたならば、四百萬圓と云ふ大金も出來るかと存じます。

これは兎に角、婦人共同の公共的美擧としては、今迄にない、最善なるものでありませう。

卅七八年に、近世史中第一の大戰が日露の間に戰はれたといふ歴史の中に、日本婦人が其の婦人の力で堂々たるものを貽すといふ事は、實に其時代婦人の一大名譽のみならず、又大に其國其社會の名譽を史上に刻む所以でもあるのでありませう。

されば這度の擧は、どれ丈け盛になりゆかれるものか、どれ丈け婦人の公共心が發達して居るものか、又世界第一の愛國心を以て、國を立てゝ居ると評判せらるゝ日本婦人の愛國心は、どれ丈けのものであるか、其御試驗といふやうな意味で、大にこの擧を盛大にいたしたいと思ふのであります。

上中下婦人の融合

それから、またこの擧のために一方では、ある義擧が出來つゝあるのであります、平生は各團體が競爭的運動をするのを免かれぬが、斯る大なる目的の企てある時は、斯かる團體が皆一致して國家的思想のために融和する利益があります、兎角各方面に偏つて例令へば貴婦人と云へば或る人方に定り、他の御方は實際貴婦人でありましても、其中に御這入りになりませず、又平生は彼の料理會、教育會、衞生會、矯風會育兒會、技藝會、讀書會、或は質問會、又は懇話會などありますけれども、それが皆偏つて居まして婦人一般の大勢の上に、一つの會がありませぬのです、私共は一つの大團體が出來て、婦人一般に通じて、或る企てをする、即ち婦人聯合會の如きものが催され、日本婦人の聯合の力により、婦人の面目を開いて行く樣にいたしたいと、常に同志の人々と共に考へて居りました。

此擧の緒につきまする以前にも、克く種々の事を聞きまして、殊には彼の人方の企てに、私共が賛成してはと云ふ樣な事や、又彼の人方は斯々の階級の人と云ふのに、御一緒になつてはといふ樣な事を聞き

まする毎に、朋友など丶共に、そんな心の狭い偏屈な話ではいかぬと申し合つて居ました、今日は擧國一致を要する秋でもあるのに、且つ婦人社會の企てヾ何事をかなしとぐるには、凡て皆様と同心協力いたしませぬければ惡ないのでありますから、此の際をよい機會に、從前の區々たる偏つた觀念を打破して、直に互に協力助勢いたすやうにいたしたいのです。

然るに這度の擧は、あらゆる方面の皆様を集まられまして其方面々々に委員が出來つ丶あるのでありますから、婦人一般の上に、はじめて大國家的、否殆んど擧國一致的婦人事業が出來るのであります、されば舊來の狹量なる觀念を一掃し、新面目を活現するでありませう。

外人の公共心

皆様の御熱心御盡力で愈々此事が、立派に成立ちまして、男子方の義勇艦と相對しまして、日本婦人の義勇艦が出來ましたならば、如何でありませう。實に婦人の一大名譽のみならず、それこそ我が國婦人の實力が大に社會に認められる時ではありませんか。

然なりまするには、實に我が國婦人方の公共心が洵によく發達し、婦人といへども、公共のために盡す義務あるを知ると共に、この義務を果すは、誠に愉快なりと申す觀念を發揮したいのであります。

彼の西洋人の概して公共心に富む事は、非常であります、彼のやうになりませんければ、公徳の美洋々たる社會即ち眞の文明開化國とは、申されんです、我が國の婦人皆様が、立派に公共に盡されて、婦人の位地大に高くなりましたら如何でありませう、其結果は直に間接にまた直接に、男子の道徳を高め早晩家庭は美しく、社會は温く、又清くなるので、即ち其國民は價値が上り、世界的信用が大に高まつて來るでありませう。

彼の西洋婦人は公共に盡す事を、忘るゝとか避くるとか、或は知らないといふことがありますと、大變それを恥とするのであります。

西洋人は概して家事經濟、又は買物等の際には極めて利害を考へ、節儉を守り、冗費を省くやうにいたしますけれども、その同じ人物が、公共慈善の爲には極めて快よく出金するのが常であります、中には慈善公共の爲の切符など送る時は、却つて禮を云はれます、又公共或は慈善の會へでも、入會する事を非常に名譽に思ひ、熱心に盡したがります、而して、これに關する會費其他の費用は、喜びて支拂ふ事は常であります、買物などをする時とは、まるで異つた人の如き觀があります。

何卒此度は、我が國の皆様、實にこの大變の時局を、よい機會に、從來の惡弊を洗蕩して、この義勇艦設立の公共事業に、燃ゆるが如くして盡されたいのです。

公共心と私經濟

或人は私に修りて公共に盡さないで、公に盡すのは不利益といふ様な考へを持つて居りますが、これが非常の間違ひで、克く達觀した人の申す事でありますが、人は自己ばかり利しよふと思ふ人程、氣の毒な方はないのであります。

人の成功は社會の信用といふものが、其主なる力であります、然るに己れのみを利する目的の人は公共といふ事が、凡てに欠如しまするから、自然身を縮めるのであります。

概して西洋人の公共に盡しまする事は非常であります。

此間私方に紐育の紳士ザリンスキーといふ人の御紹介で、ミセスホールといふ御方が參られましたが、同氏は早速赤十字社に入會し、又他の公共會にも入會いたしたい様子でありますが、愛國婦人會は、西洋

人を入會させませんから、まことに氣の毒であります、同氏は我が兵隊が、煙草に不自由をいたす事を新聞紙上にて知られ、シガレットを送りたいと、先頃話されました、又私の知つてる學校教師、又宣教師はいづれも寸間の暇も、腹巻靴下などを兵士のために、造つて居られます、私はかゝる人々を見て自分が寸時をも無益に費すのを深く恥かしく思ひ、それから常に眞似して恤兵部献納品を寸暇にも造る樣にいたしました、編物などは御話する内にもまた書見しながらも出來て誠に調法でございます、而して良心に愉快を感じます事は莫大なものであります、私共日本婦人も何卒彼の樣に公共心に富みたいものです。

△△△△△
同情又同情
△△△△△

何にせよ、實に戰鬪將士の事を思ひまする束の間も安閑として居られませんではありませぬか。義勇艦隊も婦人の手で出來るだけ造つて見よふ、又平生は常に戰地の空を眺めて――それは自己の本務に盡さるゝ事は勿論でありますが、一寸の時間も夫を活用して出征軍人の慰藉物を拵へたいものです、もう恁んな事は皆人の云ふ事でありますけれども、戰地では婦人から行きまする物品が、何よりの慰藉で、士氣これがために常に振ひ起さるゝといふのでありまするから、私共婦人は心懸けて慰藉物を贈りたいものであります。

先日も堀内中佐から伺ひますに、滿洲地方は非常の寒氣で、顔を覆ふ頭巾の如きものゝない時は鼻がおちる位で、過日も英國公使夫人などは本國より毛糸を取りよせ、目の所だけ開けたる毛糸の頭巾を編み、それを數多恤兵部に送られたと申します、即ち公使夫人其他が如何に我が同盟軍人に同情を寄せられるかを思ひ、日本婦人たるもの、よくそれを了解し、感謝すると共に、自身にも一層奮發せられん事を切望いたします。

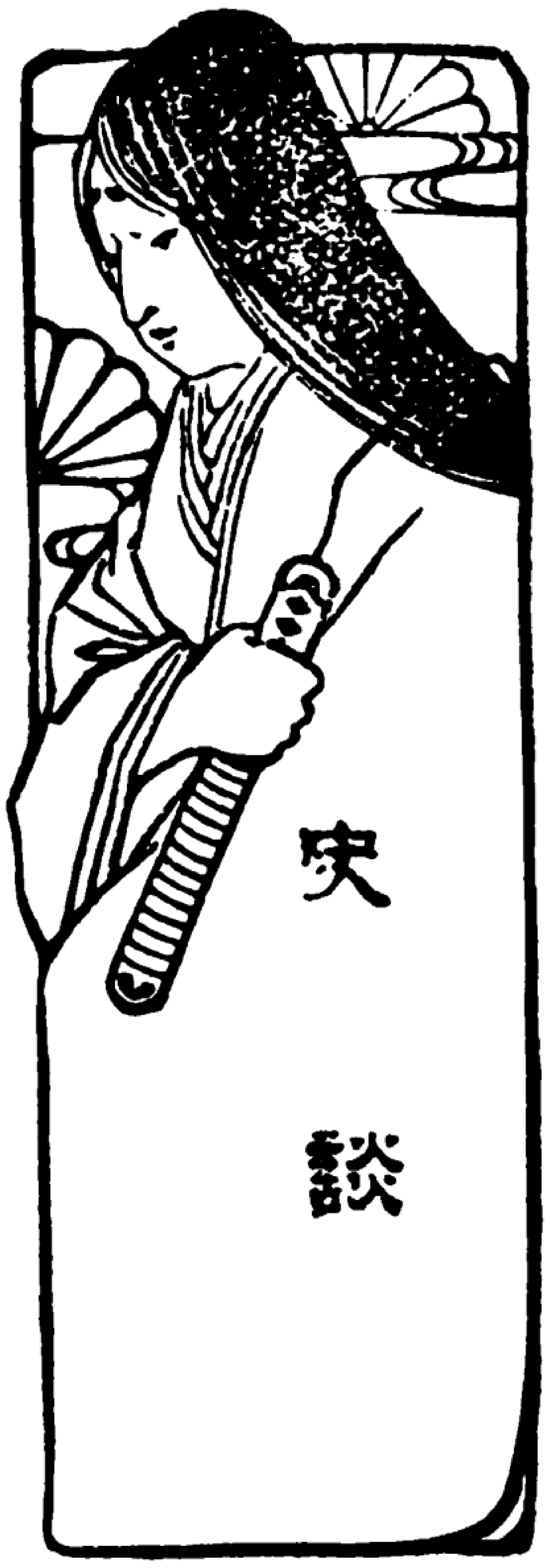
外國婦人は交際場裡で、人と談話をする時でも、靴下其他の編物を編んで居られます、日本人は人の目前で對話中、又は集會の席にて聽講中、編物するを、無禮の如く感じますが、決して左樣の事はありません、編ものをしながら聽くと却つてよく聽きとれます、而して、聽講者、對話者を奬勵しまして二樣の利益があります、殊に婦人がかく迄軍人に同情を寄する事は、出征軍人を如何ばかり奮起させませうか。一人が善をなさつて御出になれば、それを見聞する人がまた必ず其人の樣になるのであります、人と對話する時、また集會の席で、戰地發贈の靴下頭巾などを、編むならば、實に軍國公共心普及の上から見まするど、洵に美事であります。

兎に角今度の戰爭には、我が國婦人も大分盡されつゝありますが、其中でも、今度の義勇艦一件は尤とも重要なる事で、これが實に賞賛す可き大成績を舉げましたならば、我が婦人社會はいふ迄もなく、寔に帝國の一大名譽であろうと思ふのであります。

それから、今一つ御互に注意して居りたい事は、我が帝國が、如何に克く外人の目に映つるかであります、斯くの如き事變に際しては、國際干係と云ひまするものが、甚だ重要のものであります、されば西洋人に接しまする方々は、克く愼しみて、成る可く立派な御話や御働をなすつて、如何に日本人が善良な品性を有するかを示したいのであります、而して日本婦人の手で義勇艦を造るなど丶云ふことはドンナに外人の耳にひゞきませう、實に今日は日本婦人の大奮發す可き秋であります。

（をはり）





高山盈子刀自の生涯（續）

文事秘書官　工藤一記

刧説刀自が仙臺を去りしは、東京に於ける日本赤十字社の招聘に就かんとてなりき、東洋の風雲漸く急に、日清の間將に事あらんとする萌しにやありけん明治廿六七年の交には、赤十字社の事業益々擴張の機運に向ひ、看護婦活動の時節今にも到らんずるもの丶如し、抑も看護婦なるものは、仁慈の船を泛べて辛勤の棹を執り。患者の爲に痛苦の波を撥ひて、靜に之を彼岸に濟すべき高尚の德義を具ふるに非ざれば、其職分を全くすること能はず、其の仁術たる今日に於ては遙に醫業の上にあり、然るに、當時の看護婦社會には、何れの病院ともいはず弊風行はれ富める患者はさすがに厚遇を受くれども、貧きは概ね薄待せらる丶を免れず、夫の逆旅の客の纏頭の有無多少に因りて、待遇に冷熱あると其の趣きを同じうす、されば之に從事する者も大方は順境を經來りし女子にあらず、由來窮苦に陷りて世波に搖盪せられ、女ながらも此れに依りて自ら救はんとする類にして、其の氣健ならざるにあらざれども、志は甚だ高からず、いはゞ「摺れッ枯らし」の者ども多かりか丶る族は、之を外面より統御するだに容易の事にあらず、まして內心より開導して高尚なる方へ向は

しめ、以て看護婦の眞面目に復歸せしめんとするあざなるをや。
日本赤十字社病院にては、今や、看護婦事業を革新せんと欲して、先づ、看護婦の取締、及び其の養成の任に當るべき人を得んとするに、之を男子より取らんか、素より便ならざる所多し、之を女性に求めんか、偶々其の才ありと見ゆる者も、其の質優柔に過ぎざれば偏急に失するを如何にせん、且つ看護の事たる、扶持抑搔、膿を搾り垢を擦り、便器をさへ執る程にて、人の厭苦するわざを現在に取り扱ふものなれば、月にあこがれ花を弄び、納言の才學を羨み、式部の文藻を希ふが如き、女史者流に向ひて之を望むべきにあらず、必ずや、德操才幹兼ね備はれる眞の女丈夫にあらざれば、其の撰に當るに足らざるなり、さてこそ院長橋本醫伯は、刀自を其の唯一の候補者として推薦せしなれ。
然るに、此の折りしも、刀自は、仙臺師範學校に於て着々教育の效果を收め、縣知事を始め上下皆之を欣仰して舍ます、殊に數多の女弟子等は、右より左より生の子の如くに慕ひ纏はり、其の官職も教諭兼舍監なれば、淑女の執るべき事として辱かしからず且相當の俸給をさへ受け居たりければ、いはゞ得意の境に在りしなり、翻りて赤十字社の方を打見やるに、看護婦としいへば、其の名號に於て已に世の賤視する所なるのみならず、其の實質に至りても、駁雜にして、迚も學校生徒の純良なるに比すべくもあらず、(實際は必ずしも然らざりしにせよ、當時世俗の見る所は此の如くなりき)さるを、よし其の領袖にもあれ、身を其群に投ぜざるを得ざる次第なればもし刀自をして、身の名利、事の難易より打算せしめんには、一も二もなく之を拒絶すべかりしならんに、此の時刀自は其の家に對する義務をば殆ど爲し終へつ、復た顧慮すべき程の事もなかりければ、(長男惠太郎氏を始め三人の男の子既に成立して、家門日々に繁昌し、曾て艱苦の間に當りて、兒子の教育家道の支持、親戚の救護抔の爲に負ひたりし私債の

如きも「由來半錢たりとも之が爲に兒子を煩はすべからず」とて、惠太郎氏の已に富有なるにも拘らず必ず己が俸給より蓄積して、漸次之を償ひ居たりしが、今は全く之を消却し了るに至れり、「今は祿仕の要なし、さらば力を公益に專にせばや」と思はれしにや、兼ねて看護婦の職の眞面目をば知りつ、其の弊風の實際に存ずるを歎くものから、茲に一大慈悲心一大勇猛力を振り起し、遂に一身を献げて赤十字社の所望に應ずることゝはせられぬ、是れ併しながら、橋本醫伯の知己の恩に答へんとするもの、亦其の一動機たらずんばあらず、蓋し刀自の醫伯に於ける、曾て其の神術に賴りて活命の幸を得しのみならず、之を托するに長子惠太郎氏を以てして、醫業を學ばしめ、遂に其の提誨に由りて成立を見るに至りしかば、平生之を德とすること尤も深かりしに由りてなり。

此くて刀自の赤十字社病院に在ること殆ど十年に及びしが、其の間、常に、看護婦の取締及び其の養成の任に當り、當局者と己れとの理想に向ひて、着々其の步を進めたりしかば、大方は當初革新の目的を達することを得たりき、されば、赤十字社の看護婦の、一際氣高くして、患者に親切なるはいふまでもなく、一般の看護婦社會の風習も自然と之に化せられて改良するに至りしは、概して之を刀自の力に歸せざるを得ず。

其の人を導く法は、例の至誠勤勉、自づから身を以て模範とするにて、其の徒の心服せるさまは仙臺師範學校に於けるものを以て、之を推知することを得べし、刀自の病革まりしとき、余は其の家人の報知に由りて、赤十字社病院に馳けつけたりしが、ほの暗き病室の内には、兼ねてより刀自の薰陶を受けたる看護婦等が透間もなく詰めかけ、ひし〳〵と病床を取り圍みて永訣を惜めるにも、さすがは其の職なれば氣を屛めて息せざるものに、似たりけるに、靜寂の内より幽かながら涙を呑みこむ聲の頻りに聞こえて、人をして悽慘の情に堪へざらしめたり、其の狀

一種の涅槃書とやいふべからん、亦以て刀自が眞心の人の肺肝に入ること深かりしを見るべし。

廿七年に日清の戰役起りし時は、刀自が赤十字社に從事することゝなりてより、まだ間もなき程の事なりしに、忽ち許多の看護婦等と共に廣島の病院に出張せしめられ、傷病兵救護の事を督したりき、是れ實に我が邦にて婦人の一隊が軍役に加はる始めなりしに、終に克く其の重任を全くして歸られけるこそ刀自が手腕の世の常ならざるをば見るべけれ、初め石黑軍醫總監は、其の例しなき新擧なるが上に、看護婦等の操行さへたのみ難ければとて、氣遣はしさの餘り、刀自を招きて問難せらるゝことありしに、刀自は、必ず其の事を仕遂げて決して辱を貽すが如き失體なかるべきよしを誓ひしが、其の面色を察するに、若し此の言にして違ふことあらば、生きて再びま見ゆまじとの意氣込み見えて、人をして悚然たらしむるものありしかば、總監も心始めて落付かれたりとぞ、果たして、看護の本務はいふに及ばず部下の統率、特志看護婦の取扱ひなど、人の知らざる困難の事も種々ありけんを、五分の透き間もあらばこそ、綽然聲色を動かさずして之をやり拔きしには、人々歎稱せざるものなかりきとなん。

三十三年の北清事變の時にも、亦同じように廣島に出張せしめられき、併し、此の度は既に前例もありて、看護の事業も一體に整頓したれば、必ずしも刀自を勞するに及ばじとて、初めの程は、東京に留め置かれたりけるに、彼方の出張員には、陸軍の看護部との間に行違ひの起りしとか、內輪にもつれ出で來ぬとか、何やらん治まり難ねて見えたるにぞ、其の時按察の爲めに往き合はせられし佐野赤十字社長の、急に、刀自を電報にて呼び寄せられしに由れりとなり、刀自の彼處に到るや、何か魔術にても施されけん、沸湯に水を注したる如く靜まりて、其の後は、內外の事ども何れも圓滑に運びたりとぞ、刀自の人に信賴せらるゝこと概ね此の如し、且つ、此の時は、外國の傷病兵をも同し病院に收容したりし

を、いとも親切に介抱したりしかば、彼等の刀自を徳とせしこと大方ならざりき、そは佛國政府より勳章を贈り越したると、刀自の遠逝を聞きて、同國公使館より惠太郎氏に致されし左の弔辭とを以て、之を知るべし、

拜啓、陳れば北清事變に際し、佛國傷病兵の廣島病院に收容せられ候や、御北堂高山盈子刀自には日本赤十字社看護婦監督の任に當らせられ、懇篤誠實を以て事を處せられ候、其の功績實に顯著にして、我傷病兵の刀自を徳とする事甚だ大に有之候、即ち當公使パルマンは本國政府に奏薦するに、オフヒシエー、ド、レンストウエルクション、ピブリック勳章を以てし、聊か感謝の意を表するの光榮を得たりしに、惜い哉、今や刀自逝去の悲音に接し、何れも悼惜の情に堪へず候、公使の命に依り、聊か茲に弔辭を呈し候、謹言

明治卅六年一月廿六日　在東京　佛國公使館

高山惠太郎殿

廿七八年の戰役の時なりしか、卅三年の事變の際なりしかは、聞き洩らしたるが、敵兵なる支那人をも廣島の病院に收容したりしに、其の不潔なることいはんかたなきに、幾分か賤惡の意も加はりけん、衆看護婦は鼻を掩うて誰れも近づくことを好まざりしを、刀自が仁慈の心には此れ彼れの隔てもなく、よく劬はりて、手づから其の垢を剝しやりなどしけるに、其の歡ぶこと限りなく、衆婦も遂に之に化せられて、始終親切に取扱ひたりといふ。

右の外、刀自の赤十字社に於ける生活は、其の年月の較や長かりしだけ、種々の事蹟もあるよしなるが余は多く之を知らず、茲に一事を擧げて夫の料理に關する說話に續がんとす、元來、赤十字社病院なる患者の飲膳は、夫の有名なる八百善の受負ひなりしが、高價なる割合には粗惡なりとて、兎角苦情の絶えざりしにぞ、會計方の人々も困じ果てたりけるを、刀自は、例の伎倆あれば、院內自炊の策を建て、自から之が監督の任に當らんといひ出でしに、遂に其

の事に決せしかば、刀自は、此れより本職の傍らに病院の庖厨を管理して、日々幾百人分の賄ひを仕出すことゝはなりぬ、此くて冗費を節約し、品質を精撰し、割烹宜しきを得て、滋味従前のものに倍蓰したりけるにぞ、患者の満足いふばかりなく、病院にては年々莫大の剰餘ありきといふ、或る時、健康の勝れざりしが爲、逗子なりしか大磯なりしか、刀自は相州の海邊に暫く轉地療養に出掛けしことありしに、未だ數十日を出でざるに、忽ち二三百圓の不足を生じ、其の還りし後は、同じ程に二三百圓の有餘を得たりとなん、刀自が料理を學びしは、只だ一家饗應の費用を節約せんとするに過ぎざりしに、今は之を活用して此の如き大益を生ずるに至れり、是れ夫の絖を洴澼ふ時の不龜手之藥の製法をば、僅に百金に買ひ得て、冬の水戰に用ひ遂に捷を得て封土を得たりといふ寓言に等し、小事にても用ひように因りては、大なる功を奏するものなり。

刀自の赤十字社其の他に於ける功績の要は、刀自の身逝りし頃、諸新聞に傳へられたる陸軍大臣奏聞の主意書に備はれり、今謹んで之を左に掲ぐ、

日本赤十字社看護婦及び同生徒監督と爲り、報國恤兵の趣旨を體認して、看護婦の操行を督勵し、多年一身を軍人救護に委ね、且教育上にも亦觀るべきの實蹟少しとせず、他の女子の模範となるべきものなり、云々。

余の知れる刀自の事蹟は大凡右に陳べたる通りなるが、尚ほ其の家庭に於ける有様を擧げて此の説話を終へんとす、刀自は此の如く萬事に行き渡りたる人なれば、人によりては「之に事ふる下の人こそ堪へがたからめ、其の娘たらん人の心遣ひぞ察しやらるる」など思ふめれど、事實は全く之と反對せり、刀自は恕の心至りて強き人なれば、決して難きを人に責むることをせず、人に應じてそれ〲親切に導くなり、惠太郎氏の先妻某氏は、故ありて離縁となれりしが、後、刀自の死を聞くに及びて、哀悼の涙を禁ずること能はざりきとぞ、刀自の某氏に對して

如何にやさしかりしかを思ふべし、其の今の媳に於けるも亦此の如し。

又、才幹の優れたる婦人は、動もすれば、其の夫に傲るようなることあるものなれども、刀自の宣直ぬしに敬事することは終身變ることなかりき、毎年一月五日は、宣直ぬしの誕生日とて、毎も盛饌を設けて親戚故舊の人を招待するを例とす、一昨年には余も亦之に與かりしが、此の時は、刀自の令名已に世に高く、一家も之が爲に光彩を放てる程にて、内外の尊敬他に異なり、復た昔日の家婦にあらず、且長男は刀圭界に於ける一方の雄鎭にして其の屋も亦潤へるに、次男池田虎男氏は法學士にして某銀行の重職に在り、三男高野熊男氏亦醫士にして藥劑士を兼ね、何れも良配ありて能く其の家事を幹し、並に子女を設けて中には殆ど人と成れるもありければ、家門の幸福人も羨むばかりにて、刀自に取りても得意の折りなるべく、又偶ま家に歸れることにしあれば今日こそは刀自も宣直ぬしにおし並びて、兒孫の配膳を受くるならめと思ひの外、さるけしきはいさゝか見えで、惠太郎氏は當主なればや、相當の座に就かしめたれど、己れは敢て其の席に列せんともせず媳達と共に杯盤の間に周旋し或は庖厨に往來などして、只管來賓を持て成すのみなり、時に宣直ぬしの指呼せらるゝことあれば、唯々として惟だ其の意に違はんことを懼るゝが如く、一に順徳に安んじて専ら柔道に遵へり、實に主婦の良型、妻女の好鑑といひつべし、宣直ぬし及び家人の幸福如何ばかりならん、余は案上膳羞の味よりも家門雍睦の氣に飽きたりしが、今に至るまで其の美を忘るゝこと能はず。

三十六年の一月、刀自の赤十字社病院にて溘亡せらるゝや、其の柩を出だすに破格を以て表門よりし、全院の醫師、有司、看護婦等悉く門内に整列して之を送り、以て惜別の誠を表せり、蓋し之を死せりとするに忍びざるなり、已にして柩の家に歸るや、看護婦十數人づゝ、晝夜を分たず交はる〳〵之に侍し竟に葬りの日に至れり、仙臺より女弟子總代の來り

しは前にいへるが如し、其の葬りを送るや、數百人の看護婦齊しく紺色の衣裳を着て、柩の前後左右に扈從し、位牌を奉する者、勳章を擁する者、亦皆看護婦之に當り、整々粛々として途上を練り行く樣、其の莊嚴なることいはんかたなし、此の外、親戚故舊交游は更なり、刀自の高風を追慕して、葬りに會する者無慮貳千餘人に及べり、刀自の如く人爵の高からざる、婦人の身にして、此程に盛なるは蓋し罕に觀る所なり、やがて谷中の祭場に於て葬りの式を擧ぐるや、社員八十餘萬人を代表せりといふ日本赤十字社副社長花房男爵、特志看護婦人會長鍋島侯爵夫人等の吊辭、仙臺女弟子總代某氏の哀辭等あり、某氏の如きは歔欷嗚咽聲涙共に下り、滿場の人をして仰ぐとを得ざらしめたり、余も亦柩を撫して一篇の哀辭を陳べき、今之を左に擧げて、以て此の說話を收結せんとす、蓋し上來の說話は、多くは此の哀辭の意を說明せしに過ぎざればなり。

嗚呼高山の刀自逝り給ひぬ、哀しき哉、悼ましき哉、己れ君に知られしより二十有餘年、益を受くる事多かりければ、有りし昔を偲ぶことも亦一しほなり、御心性の慧く雄々しく、衆藝をさへ兼ね給ひしは更にも言はず、親に事へて孝に、姑に事へて順に、夫に刑くに温恭にして、子を敎ふるに義方あり、而かも身に奉ずるには儉薄にして、人の急を周ふには唯給らざらん事を恐れ給ひき、故雍和の氣家門より溢れて、親戚故舊、餘澤を被らざるは稀なり、四德七誡の事一として缺げたる處も在せねば古の任姒の道にもをさ〳〵遠からじとこそ覺ゆれ、今此等の事の樣を一つ〳〵に述べたらんには、一朝一夕にして果つべくもあらず、されば唯々公に關はりし事の節々をのみ擧げんとす明治十四年より二十七年までは、學習院、華族女學校、宮城縣の師範學校にて女子の敎育に從事し給ひき、中にも師範學校に在はせし時は、女子部の舍監をも兼ね給ひて、思ひの隨に導くべき便りを得給ひしかば、六年が間に著く薫陶の効を見

はし給ひぬ、此くて任を辭して仙臺を起ち給ひし時、驛壇に立ち並びたる幾十人の小女子等が、今鳴り亘る發車の笛に心亂れて、思はずも車窓にぞ群がり附きたる、一瞬の機、幸ひに大事に至らずして、運轉を止めたりしが、其儘に乘り移りて動かざるも多かりければ、遂に白石の驛まで伴ひ一宿して其の情を慰め給ひきとなん、唯教へ子等の然あるのみならで、其が父母さへ、今尙景慕ひまゐらせて已まずとぞ言ふなる、明治二十七年より已來には日本赤十字社の看護婦の監督を囑まれ給ひ、それが生徒の養成をさへ引受け給ひしが、赤十字社の看護婦の今の美風を造り成し給ひしこと、誰しの人か其の功績を稱へざらん、此たび、君が臨終の際に幾重となく取圍みたりける看護婦等が、忍びに泣ける態を見るに、其の感化の深きこそ推し測らるれ、又二十七八年の戰役には救護の看護婦の監督にとて廣島に遣はされ給ひ、醫師達を助けつゝ、手負へる兵どもを介抱り慰撫め給ひぬ、此は我邦にて婦人の戰陣に與かる始めにてありしに克く大任を爲完せて歸り給ひぬ、三十三年の事變にも同じ方にぞ赴き給ひける、こたびは君ならでもとて初めは留め置かれ給ひしに、やがて種々の紛糾いで來て、そを取り捌かん人のあらねばとて、俄に後より遣はされ給ひしなりとぞ、さて惱める兵士等が御國人ともいはず、外國人ともいはず、只管君を慕ひて小兒の母親に向ふが如くなりしはさる物にて、凡そ其の事に關ひし有司等が偏に君を賴みたりしことこそいみじけれ、此の外病院の膳宰を督して、許多の費用を年々に省かせ給へるが如きは、論はんも中々愚にこそ、抑も君が事を執り給ふは、至誠を以て體となし、勤勉を以て用となし、物を審にして力を量り、然る後に之に臨みて遂げざれば息み給はず、人を率ゐるに行と事とを示すのみにて、口舌の力を藉り給はず、功の立つに及べば、自らは曾て與かり給はざりし人の如し、是れに因りて、人を感動せし

むること最も深く、爲す所として成らざるはなし。君の如きは、獨り女流の摸範たるのみならず、廣く人物の標準といはんも亦溢美にはあらじかし、宜なる哉、朝廷より例し稀なる勳等を授けられ、又特なる大御旨もて位階をさへ賜はり、外國よりも勳章を贈り、赤十字社にては特別社員に列して尚有功章を進らせぬ、嗚呼、此くも芽出度かりし大刀自よ、今は何處にか之き給ひし、茲に生みの子達が葬の儀行はせ給へる靈柩の御前に額衝きて哀辭聞こえ上ぐる者は、君が弟として事へまゐらする工藤の一記なり。

墓は小石川龍泉寺に在り、表に曰く「從七位勳六等高山盈子之墓」と、子爵立花君の題する所なり、かくて惠太郎氏は追慕の念止み難く、そを慰めんよすがにもとて、曾て己が手づから撮影したりし刀自の寫眞を原圖にして、畫工某に囑みて畫像を畫かしめさて刀自が生前に敬事したりし立花子爵に就きて、題辭を請ひしに、子爵はやがて左の如くものされたり。

高山孺人盈子畫像贊

導レ徒以レ德　敎レ子以レ莊　孔門遺範　孟母餘芳　師道維亨　家聲維揚　吮二人之癰一　褰二人之創一　扁倉方術　菩薩心腸　病者忘レ病　傷者忘レ傷　天子嘉賞　表レ勳有レ章　位敍二七品一　名署二旂常一　偉哉　若人　在二巾幗行一

明治三十六年三月　源種恭題

畫像の立花家に入るや、子爵は薰沐して之を內寢の上壇に掲げ、太夫人、夫人、世子以下を會して、生きたる人を饗するが如く、清酌庶羞の祭りを執り行はれ、何くれと刀自が生前の事どもを語り出で丶、其の德操を偲ばれしといふ、此く刀自が死後に至るまで、人の敬愛を受くるには、必らず其の故なくんばあらじ、易に云はく、

嗚鶴在レ陰其子和レ之。我有二好爵一我與レ爾靡レ之

と、顧ふに至誠感應の理に外ならざるべし。

（本記事は工藤氏の談話せられたるを、聞くがまゝに記者の筆記したるものなれば、文字上の責は勿論記者に在りと知らるべし）

剛勇なる女子

田中花涙

其一

女は繊弱い、優しいものであるけれど、中には又巴御前の樣に、男まさりの女も少くない。今こゝにお話する、女丈夫、クリスチヤン、ダビスは我巴御前と一對の、男の及ばぬ剛勇な女子である。

ダビスはアイルランドの人、實に千六百六十七年を以て、ダブリン府に呱々の聲を擧げたのである。彼女は幼い中から、力量衆に優れてゐたのみならず其骨格の逞しさは、男子全然であつた。如恁天性が具備はつてゐる處へ、家が左程豐でなかつたので、彼女は日々勞働に從事してゐた。抑もこの勞働こそ、恰も珠玉に磨をかけるかのやう、益益彼女の力量を昂進させたのであつた。

芳紀十六七、花の蕾が、將に綻ばんずる頃には、誰とても、女は又一しほ身用意に意を注ぐのは普通

だけれど、ダビスは那樣事には意を止めず、戴星踏月、倦まず撓まず、神聖なる勞働に一身を委ねてゐた、其が爲め、屢々男子を手玉にかけて、投げ外す位の力量を有するやうになつたのであらう。

ダビスの父は老たる兵士で折からの軍に從うて、最愛の妻と子を殘して戰陣に殺風景なる月日を送つて居た。其留守の間に、ダビスは、從軍の父にも劣らぬ勇名を轟した、いと面白い物語がある。

一日、ダビスの母はレスソツプの教堂へ參詣つて居つた。時に、近邊の異教徒群がり來り、蠻力を振つて、宗教家にもあるまじき迫害を加へやうとした如何に其騷亂の甚だしかりしよ。聖像の前に跪きつゝ靜に禮拜して、後生を祈れる堂中の善男善女は、聲を限りに救を需めた。が、天主教徒は却つて其を樂しげに、鬨聲もて迎へ、堂を圍み、柵を壞ち、果ては、堂門前にしたゝか木材を堆積ねて、堂門を閉塞がんと企てたのだある。

拆から家に在りて、庖厨の業に從事して居たダス

スは教會の危急なる！母の身の不安なる！を聞き、傍への鐵齒を取るや否や、母の危急を救はんため、韋駄天走りに、教堂の前迄競けて來た。併し其門前は、雲霞の如き異教徒の爲め一寸の空地も無い程に遮られてゐた。が、親を思ふ心の切なる、ダビスは少許も恐れず、人垣を築ける中をかきわけ、堂門を入らうとする。

するとある一人の、發頭人らしい異教徒は、眼を怒らし、聲を高めて阻碍したが、かゝる時、女乍らも腕力人に優れたダビスなれば、何の猶豫もあらばこそ。嬌聲を荒らゝげ、鐵齒を振上げて、

「此奴めッ。」と力の限り相手の脛を撃すえた。

粗暴といへば粗暴な振舞ながら、親を思ふ孝心の高まつてゐる時は、何ぞ、前後を考ふ餘裕があらう力量衆に絶するダビスの行爲は通常の事である。

「アッ！」と相手が、夜叉の如きダビスの劔幕に一驚を喫し、脛をかゝへて、更に手出の勇氣が出なかつたので、薄茫然として、ダビスの爲すが儘に任して居る。四邊に群がる衆くの人も亦さうであつた。

那樣事には目も呉れず、ダビスは平然として、戸口に横ふ木材を、恰も木葉を拂ふやうに取除いて、飛鳥の如く屋内に躍入つたので、異教信徒連は、唯目をパチクリさせ、其大膽な行爲を瞻めてゐるばかり。

「母樣！早くお歸宅なさいまし、御飯の用意が先刻から出來てゐますのよ。」

とダビスは其母を伴ひて、又も仇なす異教徒の間を、何の畏怖るゝ所もなく、悠々として、家路に向うた

其　二

此事があつてより、凡そ一二年の後である。ダビスの叔母にあたる人で、旅店を開業てゐた人が、かりそめの風邪が基因で、終に黄泉に旅立つべき儚なき運命に誘はれた。其斷末間の苦しき吸呼で、叔母は、遺産の悉皆をダビスに譲るとの遺言をした。そこでダビスは勞働者より一躍して、旅店の主婦になつたのである。軈てダビスは叔母の喪を濟して、リ

チャード、ウエルシなる人と結婚したが、此ウエルシは叔母が此世にゐる時から、旅店の支配人を務めてゐた人なので。

夫婦の頭に宿る平和は、益々家業を振はしめたのであつたけれど、玆に突如としてダビス一家は大なる悲嘆の襲來を受けた。

夫婦は元來子福者で、已に玉の如き三兒を擧げたのだが、其二兒を失うたとは。恰も掌中の珠玉を失うたる心地、兎に角快々として、樂みの中にも曇れる面影が浮んでゐるやう。有繫快活のダビスも沈鬱性と成つた。

その矢前、一朶の黒雲は、あはれ、又更にダビスを包んだので、ダビスの胸は亂麻のやう、己が體軀を、我身か、否人の身か、とそれ位の事までも計り知る事の出來ぬ程、悲嘆に掻暮れた。と云ふ譯は、夫！最愛のウエルシが家出した事なのだ。

一日ウエルシは、舊き學友にて、今し新兵の募に應じ今宵を以てその陣營地に出發するてふ、人に逢うた。

いざ舊交を温めばや、さらば別盃を酌まむ。とて酒を貪つたのが、抑の誤。

醉ひし友は、更に船中にて、一酌を催さん事を勸めた、久さしく逢はぬ親しき友、逢うたと云ふも唯一時、今宵を以て更に遠き地に又も袂を分たねばならぬ爲め、ウエルシも名殘惜しさに、友の乞を快諾した。

船中の酒宴は復一しほ、興にのりじ二人は、舷を搏つ波の音を歌の曲とも聞つゝ、盃の數を重ぬる程に、醉の廻るまゝに、前後不覺の大鼾聲。時にウエルシは、船にある身を打忘れてすや〳〵寢入つたのである。すわ大事！

酒氣が醒めて、朦朧たる目を開けた頃は船足早く順風に送られて、その船は陣營地の港に横はつてゐた時なので。

儘よ！とウエルシは呼べど答へぬ己が輕擧に、悔むも及ばぬ事と絶念め、妻に合す顏もないと、無謀

にも、一片の音信もせで、其儘、身を兵籍に委ねたのであつた。

とは知らぬダビスは、寝耳に水の夫の家出。其何地に居るかを聞正すよりも、寧ろ家出の理由に付き胸を傷めたのである、後夫は軍人となつたと聞いたので、ダビスは假令甚麽難儀に逢はうとも、心に盟つて探さうめぐり逢はうと決心した。其處で長男を母に托し、生れて間もなき第四子——夫が家出の後生れたるなり——を乳母に托し、なつかしの夫を尋ぬる旅路に就いた。事柄が變つてゐれど、互に思ふ心の内は、世にも名高き我刈萱物語と同一である。蹶然として、愛兒と家郷とに分れし、ダビスは如何なる方法を執つたか。

前代未曾有。ダビスは美はきし綠の髮を斷ち、夫の衣服を身につけて、夫と同じく兵役についたのである。即ち玆に剛膽なる一人の女兵が出來たのだが誰一人ダビスを女と知る者は無かつた。其時彼女はクリストー、フアル、ウエルシと名のつてゐた。

後程なく和蘭の大軍に從ひ、ランデンの戰に名譽の負傷を爲た。其負傷當時の情況をダビスは追想して、

「何分初陣の事でしたので、大砲小銃の妙なる音樂が、未だ妾の耳に馴れてゐません所爲であつたのでせう。眞個に驚きました事。戰なんぞ何ともないと見くびつてゐたのが、大の誤。その餘りに激しかつたので、妾眞個に驚きました。」と何ぞ言句の豪放なる。

其三

負傷したとは云へ、それは淺傷であつたので、幾何もなく、ダビスは軍に從うて佛兵と戰ふの名譽ある身と成つた。處が旻天は此女丈夫の武運を守らなかつたのか、彼女はこゝに儚なき俘虜の身となつた時にダビスの從兄たる佛軍の大尉カベノー氏は、一々俘虜を訊問したのだが、餘りに變れるダビスの相貌に、この一團の俘虜中、而も女子たるダビスがゐるとは知らなかつた。

獄を照す月影に、葎に集く虫の音に、座ろ我身の悲運に泣き。膚を刺す秋の氣に、思はず悼痛の胸を撫り。夢を破る軍馬の嘶に識らず踴躍して起ち。こゝに八日、彼は佛軍に禁錮されてゐたのであつたけれど、其翌九日目の朝。嬉しや、俘虜交換の擧ありしため、ダビスは又も原隊に服する事となつた。ダビスは武運の強い女子と云はねばならぬ。

斯く遠征の軍中に事なく月日を送つてゐたが、こゝに又實に不思議な事が起つて來た。

ダビスの隊はある淋しき邑に屯してゐたのであつた。

身を鎧へる軍士なれど、有繋に女丈けに、其勇ましい内にも、何處にか捨て難き情趣が宿つてゐるのであらう。村閭の少女はいたくダビスの風貌に戀焦れた。中にもある一人の少女は生命を捧げんと迄決心したので。

女に女が戀するとの話は、間々聞く奇談だけれど而も此談程奇妙な事は無からう。

とは知らぬ一人の軍曹は、其少女がダビスを戀する程に、深く〱其少女を愛してゐたのだが、他に戀人のある其少女は、喜んで軍曹の好意を迎へなかつたのであつた。

火中に油を投ぜしやう、如係時に如係無情なき行爲は、ます〱軍曹の想を募らすのみ……。

終に軍曹は餘りな少女の無情を憎み、汚辱を以て少女に報うた。其を聞たダビス女。ア、少女の爲め戀せらるゝにつけ、一厨夫を想ふ情火に胸を焦されいたく迷惑に感じてゐたダビスは、如何なる行動を以て軍曹に當つたであらう。沈默か？否とよ。

任俠なる事男子に優れる膽斗の如きダビスは、軍曹の卑屈な行動に、一度は、我が敵とするにも、恥る程女々しい男だと思つたが、却說氣の毒なは汚辱を加へられた村の少女、其を知つて沈默つてゐては又も軍曹に、卑怯極まる橫暴な行爲を增さしめて、世に害毒を流すばかりだと、遂に軍曹に向つて決鬪を申込んだ。

元より覺悟の軍曹は、却つて戀の敵を除く機會を打喜び、直ちに快諾を與へたので、こゝに男と女との類なき血鬪が初つた。互の武器は一挺の拳銃。ダビス勝つか、軍曹捷つか。女の捷利か、男の勝利か轟然たる響、堂と仆るゝ音。ダビスは終に勝を占めた。而も其捷利は餘り鮮かな勝利であつたので、軍曹の命はこれ風前の燈火、明日とも分かぬ重傷にダビスは罪に問はれて獄に下された。とはいへ、少女が父の哀願に因つて間もなく赦されたのである。

其四

ダビスは又も兵役に從うた。其は二度目の戰爭で世にも名高きニメケンの役に携はつたのである。

其シエルレンベルク攻擊の折柄、龍騎隊に伍するダビスは傳令の命をうけて居たので、硝煙地を這ひ彈丸雨と飛ぶ、戰線内を縱橫無碍に馬を飛し、迅速に活潑に、傳令の任に就いて居つた。其時又も彼女け臀部に一丸を被つたのだ。

傷はいと淺かつた。とはいへ丸が體中に止つてゐるため、終に病院に入らねばならぬ仕儀となつた。入院との事に何故か、有繋氣丈のダビスも愕然とした。其は傷が深く又重いと思つたからなのか。否治療をうける際今迄隱して來た己が女子であるのを看破される爲めに。

併し甘く立廻つたのか、ダビスは幸に身の缺點を看破されなかつた。のみならず負傷が癒えたが、未だ戰線に加はれないので、俘虜護衛の任に就いてゐた砌、實に思はぬ喜びに逢うた。其は夫のウエルシに邂逅つた事なので。

其互に名のり合つた時、如何にダビスは嬉しく思つたらうか、人々は砲丸の飛くるごとに、思はず戰慄し、身を忘れて首を垂れるけれど、斯る刹那にもダビスは遂ぞ夫の事を忘れた事は無い。雨の如き彈丸に知らず〳〵心を奪はるゝ先には、

「這麽な激戰だが、夫の身は無事であるやう。」と天帝を念ずるのが例で、夫を思ふの情は彌が上にも募るばかり。

貞婦の精に感動してウエルシは、涙を垂らして、打悦んだ。とはいへど陣中の悲しさ、妻よ夫よと既往の困苦を語るよすがも無く夫婦は兄弟と稱してたゞ戰の結了する日を待ちつゝ、共に軍に從うて各地に轉戰してゐた。

或時ダビス等の一隊は、天地を震撼せしめんずる閧を擧げ阿修羅の如く殺到せる佛兵を、散々に打破つた事があつた。折しもダビスは一騎當千の勢にて逃げ行く佛兵目蒐けて追撃を加へたのであつたけれど、不幸にも彼女は三度負傷した。あゝダビスは佛兵の臼砲によつて、頭部に大負傷をしたのである。如斯大負傷なれば、陣中の露と消え行くこそ當然の理である。併し命中所が好かつたのか、氣丈の所爲か、幸に彼女は一命を取止めた。が、全く正氣を失ふた。

苦悶十有週日、熱の爲め、色の燻ずんだ唇を嚙占め「進め！進め！」と、彼女はかく叫ぶのが例であつた。

或は夜半床を蹶つて立つた事もあらう。又はウエルシ、ウエルシと、束の間も忘れぬ、戀しの夫の名を呼んだ事もあらう。兎に角熱に浮さるゝ彼女は、己が身の婦女子である事を隱蔽す事が出來なかつたのであつた。何たる恨事ぞ、軈て正氣に復せる際、彼女は血涙を流して大に悔んだとか。

其五

聞え易きは如斯奇談。

世人は等しく、其貞節と剛勇とを賞揚し、ダビスに見え、語り、而して衣服其他の物品を贈るのを名譽とし、集ひ來たれる男女、門前に市を成す位。

餘りの騷擾に、隊長ジョンベー氏は勇敢にして且清廉なるダビスは、敢て一物の寄贈をも要せざる旨を四方に廣告した。さり乍ら、參謀長プレシトン氏は、絹製の美服を贈り、幾多の將士亦、多大の物品を贈與した。で、婦女一切の品は、この譽ある寄贈に因つて整うたのであつた。

事茲に至つて、ダビスは兵役を免せられ、

「今後、軍士たりし殺伐を廢し、能く夫に事へて婦德を全うすべし。」と戰勝將軍の媒酌により、夫ウエルシと再度の婚を結んだのである。

で、ダビスは夫と共に軍中に止り、陰に陽に夫を扶けて、勳功を樹てしめた。

後、夫ウエルシは決死隊に編入されたので、隊長はダビスの身を危ぶみ、共に戰線に入るを許さなかつたけれど、懇願數次、ダビスは自若として共に奮闘の列に加はり、或は水、又は火酒等を携へ、一隊の志氣を興奮せしめる事に力を竭した。

余は、大に祝すべき、戰勝の新年に際し、如恁剛勇なる女子の事蹟を物語るのを、又なき榮譽と心得て、此に此の記事を草したのである。（完）

◎福引（其二）

(1) 小松の重盛　洋刀。（内府）
(2) 金壹萬　也　萬兩。（植物）
(3) 仁義禮智信　五德。（臺所道具）

○家庭小話（小兒の衣服に就て）

▲醫學博士瀨川昌耆氏曰く、冬季二三歲の小兒に對し、古來の習慣として、餘り衣服を着せ過ぎる嫌ひがある、下にフランネルの襦袢、其上へ綿入の三四枚も着せると云ふやうな風だ。

▲而して尙ほ腹掛を掛けさせたり、股引を穿かせたりして居る、是は却つて感冒をひかせかる原因で……若し氣候の變に會して、一枚でも脫がせる時などは忽ち身體に激變を來すが必然である、それ故先づフランネルの襦袢に、薄綿入二枚と袖無位が適當である。

▲又運動の出來るものならば、股引も穿かせず、腹掛も掛けさせずとも宜い、外へ出づるには言ふまでもなく天氣の暖かなる日で……朝早くと夕刻だけは出さぬやう注意すべし。

▲生後百日位經過せし小兒は之と反して外へ出さぬが宜し、日本の家屋の搆造は空氣の流通に差支なく、發育上に於て患を釀す虞がない、デ可成温にして置くが宜い。

講義

東關紀行講義（二）

文學士　境野文華

ゆきくれぬれば、むさ寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなる床の秋風ふくるまゝに身にしみて、都にいつしかひきかへたるこゝちす。枕にちかき鐘のこゑ曉の空におとづれて、かの遺愛寺のほとりの草の庵の寢ざめも、かくやありけんと哀れなり。ゆく末遠き旅の空、思ひつつけられて、いと〳〵物かなし。

都いでゝいくかもあらぬこよひだに
かたしきわびぬ床のあき風

遺愛寺の云々白氏文集の故事によりたもの。「遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峰雪揭レ簾看」云々の詩は樂天が遺愛寺の片ほとりに草庵を結んで住んだ頃、出來たものである。

（通解）　道中に日は暮れて此の夜はむさ寺（近江國蒲生郡武佐村にあり）と云ふ山寺近く一泊することゝした。むさくるしき旅宿のことで、粗末に出來て居る床の透間からは憚らず秋風が吹き入れて來る、それが段々夜が更くるにつけて寒く冷く感じられ、都の住居とは打ち變りた詫しさしみじ

みと適切に感じられた、寒さを詫びながらも、夜は何時の間にか明け方となりて、むさ寺の鐘の聲は枕元ちかく、旅寝の夢を破らんとて明け行く空に鳴り傳はりて來た。その鐘のひゞきを聞いて自分は、昔彼の白樂天が遺愛寺の鐘を草庵の枕に近くきいたと詩に詠んだ其の曉の寝覺の風情は丁度今自分が感じて居るこれであらうかと痛切に感じた。其につけても、これから尚遥々と遠く往かねばならぬ道中はどうであらうと思ひ出されて悲しさが胸一杯になりて來た。
此の秋風の寒さ詫しさ、旅宿の床のむさくるしさ京都を出發して未だ幾日とも立たぬ今夜であるが衣の片袖うちしきて安らかに眠ることも出來ない迄に寂しい。

此宿を出でゝ、かさはらの野原うちとほる程に老その森といふ杉村あり。下草ふかき朝露のしもにかはらん行末もはかなくうつる月日なればとほからず覺ゆ。

かはらじな我がもとゆひにおく霜も
名にしおいその森の下草

もとゆひに置く霜云々もとゆひは頭髪を結ぶに用ふるもの故、もとゆひに霜の置くとは頭髪の白くなるに譬へたもの。

（通解）此の武佐の宿を出立し、かさはらと云ふ野原を通りた。其處には老曾の森といふ杉の群れ立ちて居る森があつて其の森の下には草が深く生ひ茂り、それに朝のことであつたので白露が置き添ばりて居る。これから段々寒くなるにつけて霜が置くやうになるのも過ぎやすき月日のこと、はや眼前にさしせまりて居る。
年を取るにつけて自分の頭髪の白くなるのと此處の老曾と名のつく森の下草が霜に逢ひ枯れるのも丁度同じ運命で只眼前に逼りて居る。

音に聞きし醒が井を見ればかげくらき木の下の岩根より流れ出づる清水、あま

りすゞしきまですみわたりてまことに身にしむばかりなり。餘熱いまだつきざる程なればゆきゝの旅人立よりてすゞみあへり。

（通解）昔から名高い醒が井の水に立寄りて見れば岩根の下から混々と湧き出で居つて、其の上には影暗き迄も樹木が生ひ茂りて居る。すみきりた水のすゞしい有様、あまりのことに身に沁み入るばかりである。殘りの暑熱尙全く去りきれぬ頃の事で此處を往來する旅人は木蔭に立ち寄り、涼しい空氣を吸ひ道中の疲勞を忘れて居る。

班婕妤が團雪の扇、秋風にかくれてしばらくわすられぬれば、末とはき道なれども立ち去らんことはものうくて更にいそがれず、彼の西行が「道のべに淸水流るゝ柳かげ、しばしとてこそ立ちとまりけれ」とよめるもかやうの所にや。

道のべのこかげの淸水むすぶとて
　しばしすゞまぬ旅人ぞなき

班婕妤が團雪の扇云々　班婕妤は漢孝成帝の寵姫後帝の寵衰へ、怨歌行を作りて帝を恨む心を述べた。其の詩は文選第六巻に出て居る。其の中に自分の身を團雪の扇に譬へ秋風と共に棄てられ顧みられぬと云ふことを云つて居る。此處に此故事を引たのは醒が井の水も暑氣の間は人にとやかく珍重がれてもやがて人に顧みられぬであらうと云ふ無心の水に對する同情を表はしたものである。

西行が道のべに云々山家集の中の歌。また新古今集にも出て居る。西行は僧侶である。佛敎では凡て物に執着するを戒めとして居る。此の歌の心も何事にも執着を去れた自分であるが、この淸水流るゝ柳の陰はなほも見棄てがたくほんの一寸の間と云つて立寄りたと云ふので丁度此の醒が井の水

に對して此の歌の趣を思ひ出し引用したもの。

（通解）譬へば彼の班婕妤が團雪の扇のやうなもので秋風吹立つと共に人に忘れ果てらるべき此の醒が井の水である。それがあまりに氣の毒でならなかつたから、行末遠き道中のこと、さうぐづぐづして居られる所では無かつたけれど尙立去りかねて急には出發することが出來なかつた。彼の西行法師が「道のほとりを流れゆく清水其上に綠の浪を立てゝ垂れかゝりて居る柳、其の木蔭のすゞしさは何とも云へぬほどで思はずしばらくと云つて其處に立寄りた」と云ふ歌を詠んで居られるのも察するに此の樣な景に對してのことであらうか、どうか、

道のほとりの木蔭のすゞしさに、此處を通る旅人は誰も殘らず立寄りて淸水を手に掬ひ涼風に汗を入れ、生き返へりて再び發足するとである。誠に有難いことの木蔭！此の淸水！、

柏原といふ所を立ちて、美濃國關山にもかゝりぬ。谷川霧のそこに音づれて、山風松のこずゑにしくれわたり、日かげも見えぬ木の下道、あはれに心細し。

柏原の驛を立ち出で、美濃國關山（不破關所がある所から關山と云はれて居る）にかゝりた。今迄は近江國であつたが今は美濃國となつたのである。下を流れ行く處の谷川の響は秋霧に奥底から聞こえて居る。上を吹き行く山風の音は四邊の松の梢を見舞うて颯々たる（しぐれ）韻を立てゝ居る。道は日の目も見えぬ程生ひ茂りて居る森の下を通りて居て下を歩いて居ると何とも云へぬほど心細い氣持になつて來る。

越えはてぬれば不破の關屋なり、茅屋の板びさし、年へにけりと見ゆるにも後京極攝政殿の「あれにし後はたゞ秋の風」とよませ給へる歌、思ひ出でられて、此の上は風情もめぐらしかたければ、いや

しき言の葉をのこさんもなか〳〵におぼえて、こゝをばむなしく打ちすぎぬ。

後京極攝政。藤原良經のこと、其の歌は新古今集雜の部に出て居る「人すまぬ不破の關屋の板びさし、あれにし後は唯秋の風」と云ふ即ち是れである。

（通解）關山を越え了りた所は即ち不破の關所になりて居る。關所の番所（關屋）の茅ぶきの屋根からさし出て居る所の板のひさしの年を經て古るびて居るのを見るにつけても彼の後京極攝政のよまれた歌「不破の關所のあれ果てた跡には只つれもなき秋風が其のさびしき景色に吹き通ふて居ると云ふ歌を思ひ出すことであるが、後京極攝政の此の歌は實に立派なものでよくさびしい此處の樣を云ひ表して居り此の上にはとても此處の風情（ありさま、樣子）を言葉に云ひめぐらしてうつし出すことも叶ふことでない。なまじひ下らぬ賤しい言葉を云ひ出し後世に殘すも反つてつまらぬと思つて（なか〳〵におぼえて）歌もよまずに、素通りに通つてしまつた。

くひ瀨川といふ所にとまりて、夜ふくるほどかはばたに立ちて見れば、秋のも中の晴天、きよき川瀨にうつろひて、照る月なみもかずみゆるばかりすみわたれり。

くひ瀨川（株瀨川）美濃不破郡を流るゝ川。

照る月なみも云々　拾遺集秋の部源順の歌に水の面にてる月波をかぞふれば、今宵ぞ秋のも中なりける。

（通解）不破の關屋を通り越し、くひ瀨川と云ふ川のほとりに足をとゞめた。夜も更けた頃川岸に立ち出で眺めた。空は全く晴れきりて居る、丁度今夜は八月十五夜仲秋の夜である。空を行く月影は淸く澄みわたり川瀨の水に落ちて碎けて、照りかがやく月の浪指して數へることも出來さうであつて、誠に何とも譬へやうのないほど立派な仲

秋である。
二千里の外の故人の心、遠く思ひやられて、旅の思ひいとゞをさへがたく覺ゆれば月の影に筆をそめつゝ「花洛を出でゝ三日株瀬川に宿して一宵、幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ、かつ〳〵遠情を一千里の雲におくる」などある家の障子にかきつくるついでに、

しらざりき秋のなかばのこよひしも
かゝる旅ねの月を見んとは

二千里の外の故人の心云々　白氏文集の詩に三五夜中新月色、二千里外故人心、と云ふ句がある。これは白樂天が唐の京に居て、都の外にゐる同僚の元愼と云ふ人の事を思ひやりて詠んだもので、詩の意味は、今假もなくさし出た此の十五夜の新たなる月をながめて居るが二千里も都を離れた遠方にゐる我がお友達(故人)の元愼はどう云ふ心持で此の月を見て居るであらうか、定めし自分と同じ思で同じ此の月を二千里の外に眺めて居ることであらう」と云ふのであつて、我邦では昔から能く引用される詩の句で、源氏、枕草紙に一二ケ所引用されて居たと覺えて居る。

(通解)　彼の二千里の外の故人の心はどうであつたらうかと、思ひ出さるゝにつけても、今旅の身の感慨頻りに動き抑へんとして抑ゆることが出來ぬ。思あまりさし入る月の光の下に筆を取りて、「花の都を出發して茲に三日の後、株瀬川のほとりに一夜をやどりたゞ〳〵此の中秋十五夜の月を見て胸の奥底深く動くうた心、遠く千里の外雲のかなたに思を馳せ」と云ふやうな意味のことを、宿をしたある家のからかみに書き付け、其の筆のついでにはまた下の歌を書きつけた。
今宵仲秋の此の月を都の外に、このやうな處に來てなかめわかし此處に一夜の旅寝をしやうならば兼て思ひ懸けぬ意外のことである。

萱津の東宿の前を過ぐれば、そこらの人集りて、さともひゞくばかりにのゝしりあへり。今日は市の日になんあたりたるとぞいふなる。ゆきゝのたくひ、手ごと手ごとになしからぬ家つとゞも、彼の「見てのみや人にかたらん」とよめる花のかたみにはやうかはりておぼゆ。

花ならぬ色香もしらぬいち人の
いたづらならでかへる家づと

みてのみや云々。古今集春の部、素性法師の歌に「見てのみや人にかたらん梅の花、手毎に折りて家苞にせん」とあるのを此處に引用して來たもの。

（通解）萱津の驛の東の宿を過ぎる時、其の邊に多くの人群がり集て、里を擧げてなりひゞくばかりの喧騷をやりて居る。何事だと問ふたら、今日は此の驛の市の日に當りて居るからとの答へであつた、左右前後に往來して居る人達はてんでに家へ土產のつもりであらう、重さうなものを提げて居る、それを見ても彼の昔の人が、只見たまゝで素手には家に歸れない」と詠んだ歌を思ひ出すが、然しあれは梅の花のかたみ（みやげ）であつてこれはそれとは異つて居る。花ならばやさしいものだがこれはさうではない。

花の色香を愛することは知らぬ町の人達が花ではない所の家苞を持つて歸りて居る。素手いたづらの人は一人も見つからぬ。

尾張の國熱田の宮に至りぬ。神垣のあたり近ければやがてまゐりて拜み奉るに木立年ふりたる森の木の間より夕日のかげたえ〳〵さし入りて朱の玉垣色さそへたるに木綿して風にみたれたるさがら物にふれて神さびたる中にもねぐらあらそうさきむらのかずしらず木末にきゐるさま雪のつもれる樣に見えて

遠く白きものからくれゆくまゝにしづまりゆく聲も心すごくきこゆ。

（通解） はや尾張の國になりた。熱田神宮のほとりについた。そこから神社の玉垣のあたりまでは近い處であつたので直ぐと參詣することにした、幾百年と年月を經た森の木立の間から今沈みかけた夕陽がちら〳〵と光を洩らし居て、それが朱塗の玉垣にあたり、玉垣はそれがために一層立派に色を添へて居る。其の上には木綿しでの幣帛がひらひらと垂れかゝつて風に吹き亂されて居る、此の宮の物凡てが神々しくおごそかに見える中にも今寢所を求めて飛び廻りて居るさきむら（全身白き烏）と云ふ鳥がどれほどと云ふ數も分らぬほど澤山森の梢に來てとまりて居る、其樣丁度雪が降りつむで居るやうに遠い處に白く見える。見て居る間に段々日が暮れて來るにつれ、今まで喋がしく鳴き立てゝ居つたのも靜まりかへりて行くので物悽いやうに成るのであつた。

或る人の曰く「此宮は素盞嗚尊なり。初めて出雲の國に宮作りありけり。八雲立つと云へる大和言葉もこれよりぞはじまりける。其後景行天皇の御代に、このみぎりにあとを垂れ給へり」といへり。又いはく「此宮の本體は草薙と申し奉る神劍なり。景行の御子、日本武尊と申す夷を平げて歸り給ふ時、尊は白鳥となりて去り給ひ、劍は熱田にとまり給ふともいへり。

八雲立つ云々　素盞嗚尊の出雲に宮作し玉ふた時詠み玉ふた歌「八雲立つ出雲八重垣つまごめに八重垣つくる其の八重垣を」

（通解） 一行中の或人が云うやうには「此の熱田宮は素盞嗚尊を祀りた所である。其の素盞嗚尊は始めに出雲の國に宮を造られた。其の宮作りの時彼の大和歌、和歌の濫觴と云はるゝ「八雲立つ」

云々の歌は詠れたのであるが、其の後景行天皇の御代になりて、出雲の宮の神體をうつして此の熱田に鎮座あることになつたのである。又云ふやうには「此の熱田宮の御本體は草薙と云ふ尊き神劍である。景行天皇の御子に當らせられる、日本武尊と稱し奉りた方が、東の夷を平定して都の方へ凱旋の途中病を得て薨去し給ひ、神靈白鳥となりて飛び去り、後に佩かせ給ふた草薙の神劔のみ止りて此の熱田に祀られるやうなつたのである。」この樣なことを一行の或る人は話した。

一條院の御時、大江匡衡といふ博士ありけり。長保の末にあたりて、當國の守にて下りけるに大般若を書きて此宮に供養をとげける願文に「吾願すでにみちぬ任限またみちたり、故郷にかへらんとする期いまだいくばくならず」とかきたるこそあはれに心細く聞ゆれ。

おもひ出もなくてぞ人のかへらまし
　のりのかたみをたむけおかずば

（通解）昔、一條天皇の御世に當りて、大江匡衡と云ふ博士があつた。長保(年號)の末頃、此の尾張の國守となりて下國せられたことがあつた。其の頃大般若經(一部六百卷)を書き寫して此の宮に上り、供養の法事を行ひ濟した、其時熱田の宮へ奉られた願文の中に「自分の平生の宿願ははや成就したのである、自分の國守の年期任限もまた滿ち了りたのである。今此の地を辭して故郷に還るべき時機は幾何もなく逼りて居る」と云ふやうな文句を書きつらねてある。心の中が思ひやりて見れば如何にも心細く哀れである。のりの形見の大般若經を遺こして置かなかつたものなら後の思ひ出なぐさめとなるものもなく空しく京都へ歸られたことであらう、さてもよき功德を作られたものである。

此宮を立ちいでゝ濱路におもむくほど

ありあけの月影ふけて、ともなし千鳥ときどきおとづれわたり、旅の空のうれへすゞろ催してあはれかたしふかし。

ふるさとは日をへて遠くなるみがた
いそぐしほひのみちぞくるしき

（通解）此の熱田の宮を辭して、海岸に出た頃は有明月の影も餘程更けて居て、浪のかなたに友もない千鳥の聲が鳴いて居るのが時々潮の音に交りて聞こえて來る、それ等につけても今旅路の空にさすらふ愁ひ、あはれさ、頻りに動き來りて、それにつけこれにつけ哀れな感情が胸一杯になりて來た。
自分の故郷は段々と遠くなるし、この鳴海潟の汐干の海濱を急いで居ると心細うなりて來て何となく歩みくるしくさへなりて來るのである。

やがて夜の中に、二村山にかゝりて山中などをこえすぐる程に、ひんがしやうやうしらみて、海のおもて遙かにあらはれわたり、波も雲も一つにて山路につゞきたるやうに見ゆ。

玉くしげ二村山のほの〴〵と
あけゆく末は浪路なりけり

（通解）まだ夜が明けぬ中に三河國二村山に來懸りた。山を越えて行くと其の間に段々東方が白んで來て、海の面も遙か彼方に見らるゝやうに成りて來た。見渡せば立つ波も、海の面に垂れて居る雲も一つのやうに成りて、それが山の方へつゞいて居るやうに見ゆるのである。
玉くしげ（ふた、蓋の枕詞）二村山が次第に明け（ふたを開けるに云ひかく）て行く其の曉の光りに眺めて見れば、末は浪になつて居る、茫とした景色が何とも云へぬ。

ゆき〳〵て三河の八橋のあたりを見れば、在原業平、杜若の歌よみたりけるに

見る人かれひの上に涙おとしける所よと思ひ出でられて其あたりを見れどもかの草とおぼしきものはなくていねのみぞおほく見ゆる。

花ゆゑにおちし涙のかたみとや
　稲葉の露をのこしをくらん

八橋のわたりを見れば云々　八橋は三河國碧海郡になりて居る、八橋の故事は伊勢物語に出で、即ち「三河國八橋といふ所に至りぬ。(中略)その澤の邊の木蔭におり居て餉をくひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て或人の曰くかきつばたといふ五文字を句の上にすゑて旅の心をよめといひければ詠める(歌略)とわりければ皆人かれひの上になみだ落してほとびにけりとあるを指して云つたもの。

(通解)　遂に三河國八橋近くになつた。此のわたりの様を見るにつけても昔在原業平朝臣が東下りの時に此の八橋の處に來て、かきつばたの歌をよまれた時、その歌に感じて、ついてゐた人達も丁度たべて居たかれひ(餉、ほしひ、昔の旅行には之を持參して食料としてゐた)の上に涙をおとしたと云ふ其の昔の跡は此處であると思ひ起さるゝにつけ、今其所ぞと思ひ當らるゝ所を見てもの昔のかきつばたらしいものは無くて、只其の代りに其處等一帶に稲穂が至る所に見出され、物換り星移りた様はいかにも物思ひの種にとなる。昔はかきつばたの花を見てそれがために涙を流して歌を詠んだ人もあつたが、其昔の跡は今、何處であらうか、分らないが、もしくはあたりの稲葉の上にしげき露は昔の涙の形見として殘りて居るのではなからうか。

源義經が此の國の守にて下りける時、とまりける女のもとにつかはしける歌に、もろともにゆかぬ三河の八橋を、こひしとのみや思ひわたらん、とよめるこそ思

ひ出でられて哀れなれ

もろともに云々　此の歌は源義經の歌としては解しがたい、新後拾遺集別の部には義經の母から義經の方へ贈りた歌として出て居るがさうすれば解せられる、これは此の紀行の作者が引き誤りたのか、或は後世の傳寫の誤りであらう、それで玆處には女とあるを母とし、もとにとあるをもとよりとし直して解釋して見やう。

（通解）　昔源義經が此の三河の國守となりて下向した時、京都に殘りてゐた母の許から「一緒につれられて行くことは出來なかつたが、此處にゐても其處の八橋を渡りて居る人の身の上を思ひやり、こひしたふてゐるので心は尙渡りてゐるやうなものである」と云ふ歌を贈つてやつたと云ふことであるが、その昔の事が、今此處を通るにつけても思ひ出されて、哀れに感じられる。

矢矧といふ所を立ちて宮路山こえすぐるほどに赤坂といふ宿あり。こゝにありける女ゆゑに大江の定基が家をいでけるも哀れにおもひいでられて過ぎかたし。人の發心する道、其緣一にあらねどもあかぬ別れををしみまよひの心をしるしとし、眞の道におもむきけん、ありがたく覺ゆ。

わかれ路にしげりもはてゞ葛の葉の
いかでかあらぬかたへかへりし

大江定基、圓融天皇時代の人、玆に引かれた故事は古今著聞集、海道記等に見えて居る。

（通解）　矢矧の里を出發して宮路山を越えた所に赤坂と云ふ名の宿驛がある。昔此の宿に住んで居た遊女の關係から、時の三河國守大江定基は遂に官を抛ちて出家したと云ふ事を思ひ出さるゝにつけても通り過がたい氣がした。一體人愈〻發心をして信仰の門に入る道順として其の由緣動機となるものは決して一筋ではないが、其の中に此の定基

の例の如く、飽き足らぬ男女の間の別離を惜むあまりに無常を感じ、自ら迷ひ込でどうすることもならぬなやみから身を救ひ出したいばかりに、一切を棄て、眞の信仰の道に進み入つた其の志は實に有難く尊いものと云はなければならぬ。

昔の別路に立ちて居る葛の葉はいつまでも生ひ茂りてゐるべき筈であるのに、世の榮華には背をむけて（葛の葉は風がふけば能くひるがへりて裏を見するものであるからこう云つたもの）思ひがけなく出家入道した（わらぬかたにかへる）其の心が慕はしい。

漢文講義

（近世叢語）

阿井笛村

安藤朴翁妻山田氏、稟性敏悟、甚能二和歌一、諳二記古歌一、可二三千首一、出二入禁掖一、屢侍二歌宴一、後水尾天皇、明正天皇、呼以二今式部一、寵遇大渥、其死也、長子爲實、編二緝遺歌一、以爲二一集一、中院大納言通茂、題レ之曰二今式部家集一、

本文の山田氏と云ふは、名を龜と申して、丹羽の桑田郡千年郷の產で、父は山田道夢居士と申す、連歌の名人でありまして、安藤朴翁と云ふ人の、妻と成つた人であります。稟性敏悟、甚能二和歌一、諳二記古歌一、可二三千首一、＝龜女は稟性が敏悟く、一を聞て十を悟ると云ふ樣にありまして、記憶の善いことゝ云ふたら、古歌を諳で記えて居ることが、三千首可りもあつた位でありました、出二入禁掖一、屢侍二御宴一、＝禁掖にお出入を許されまして、屢々御歌の御宴にも侍ましたが、後水尾天皇でも明正天皇でも、今式部々々々と御呼び遊ばされて、寵遇大渥＝御寵遇が一通りならず、渥くありました、寛文の八年に龜女は年三十九才で、死くなり

ましたが、其の長子の爲實と云ふ人が、編二緝遺歌一、以爲二一集一＝遺したる歌を編み緝めて、一の家集といたしました、それを中院大納言通茂卿が御覽じて、今式部家集と題せられました、誠に名譽なる事であります。

井上通、好讀レ書善二詩歌一嘗與二盤珪和尙一論二辨儒佛一作二和歌一述二其志一曰、追年仁由矩美遲那禮波古蘇、與於宇美農、阿麻農農里太留、府年毋太農滿免、言二人有一レ當レ行之道一不三必假二佛力一也、其氣象秀拔、識者稱レ之

此の井上通と云ふ婦人は、讃岐の丸龜の士人の女でありまして、生れながらにして、夙慧しき心を具へて居ました故、常に好んで、和歌や詩を作りました年十八才のとき、侯の、太夫人に御奉公して、其のお供をして、江戸に如きましたが、其時東海紀行と云ふ書を著しました、それから江戸の屋敷に、九年の間逗留して、後に丸龜に歸りましたが、其時に又歸家日記と云ふ書を作りました、其の位な才女ですから、後に三田何某に嫁いて、二人の男子を生みましたが、孰れも學者で其頃知名き先生でありました、さて本文の釋義は好讀レ書善二和歌一＝此の通女は書を讀むことが、好きでありまして、又和歌を詠むことが、善でありました、嘗與二盤珪和尙一論二辨儒佛一＝嘗き盤珪和尙と云ふ名僧と出會まして、儒者の道と佛の道とに付いて、色々と論辨しました末に、作二和歌一述二其志一曰＝一首の歌を詠んで、其の志を述べました、其の歌は本文に萬葉假名で書てある通り、常に行く道なればこそ世をうみの、海人の乘りたる、船も賴まめ」と、申すのでありまして、言二人有一レ當レ行之道一不三必假二佛力一也＝其の歌の心は人たるものが當りまへに行くべき道あるに於ては、かならずしも、佛の力を假るには及ばぬと、言ふのでありま す、其氣象秀拔識者稱レ之＝歌の詞で以て此の婦人

の氣象の秀れて拔けて居ることが知らるゝ故に、世の識者が之を稱めたゝへました。

加茂眞淵遠江人、少壯鞠濱松驛逆旅梅屋氏、以其女爲妻、晨夕潛心書籍、不治家事、爲義父所憎、其妻謂眞淵曰、妾觀子之才、豈爲逆旅主人者乎、妾幸產一男、撫字成立、足以嗣家也、請子決修身之策、揚名天下、眞淵因出奔京師、從荷田春滿學、爾後妻堅守節、治家事數十年、眞淵亦竟以國學聞、

加茂眞淵と云ふ人は、有名な國學者で、遠江の國の產れであります、少壯鞠濱松驛逆旅梅屋氏＝少壯の時に、濱松の驛の、梅屋と呼ばるゝ逆旅の家に鞠はれて、其の養子と爲りまして、家の女を以て妻として居ました、晨夕潛心書籍不治家事爲義父所憎＝ところが先生には、晨から夕まで、心を書籍に潛めて、家の商賣向の事抔には、治ひませぬ故に、義父から憎まれる樣になりました、そこで其妻なる人が內々眞淵に向て、妾がつくづく子の才を觀まするに、妾觀子之才、豈爲逆旅主人者乎、妾幸產一男撫字成立、足以嗣家也、請子決終身之策揚名天下＝妾がつくづく子の才を觀まするに、豈も逆旅の主人風情に爲る人ではありませぬ、然るに幸なる事には、妾も一人の男子を產みました故に、これを撫で字てて成立すれば、家を嗣がせられますから、請か子には別に終身の策を決めて、名を天下に揚げて下さいと曰ひました、因で眞淵は、出奔京師從荷田春滿學＝京師に出奔して往て、有名なる荷田春滿と申す、國學の先生に從して、學問を習ひました、爾後妻堅守節、治家事數十年、眞淵亦竟以國學聞＝爾後妻なる人は堅く操を守りて、夫に代りて家事を治むることが、數十年の久しきに及びましたが、眞淵も竟に國學を以て世に聞える樣になりました。

新年賀狀

慶應義塾大學講師
宮森麻太郎

NEW YEAR'S LETTERS.

By. A. Miyamori.

CONGRATULATING A FRIEND ON THE NEW YEAR.

Meiji Gakuin, Tokyo,
January 1st, 1904.

My dear Mr. Miyamori,

I wish you a very Happy New Year and hope you will enjoy good health through all the coming year.

Yours very sincerely,
M. N. Wyckoff.

新年を賀する文

謹て新年を賀し併せて君の萬福を祈る

明治三十八年一月一日

明治學院にて　ワイコフ拜

宮森様

ANSWER TO THE ABOVE.

55 Sangenya cho Azabu,
January 2, 1904.

Dear Mr. Wyckoff,

Thank you for your early note. I wish you also a Happy New Year, and hope you and all your family are very well.

Very truly yours,
A. Miyamori.

同上返事

新年早々賀狀を辱ふし奉謝候小生よりも謹て新年を賀し御滿堂之御多祥を奉祈候

一月二日　宮森麻太郎拜

ワイコフ様

DITTO.

Dear Mr. Miyamori.

Allow me to reciprocate your cordial New Year greeting.

I hope that the New Year finds you very well.

Very truly yours,
B. Chappell.

Aoyama Gakuin,
Jan. 5,1904.

同上

謹て君の新年の賀詞に答へ併せて君の御健康を祈る

青山學院
チャペル拜

宮森様

CONGRATULATING FRIENDS ON CHRISTMAS AND NEW YEAR.

Azabu ku, Tokyo,
Dec. 24,1904.

Dear Mr. & Mrs. Binford,

I wish you a Merry Christmas and a Happy New Year. I have not heard of you for a long time, but I hope you are very well and have achieved a great deal of success in your work. My wife unites with me in kind remembrances. Hoping you will write to me now and then,

Yours very faithfully,
A. Miyamori.

基督降誕節及新年を賀する文

拜啓

謹て基督降誕節及新年之御祝詞申上候爾來久敷御消息を承らざれども定めて御健勝にて御事業上多大の御成功を遂げられ候事と御察申上候荊妻よりも宜敷と申出候尙時々御文通被下度願上候

宮森麻太郎拜

ビンフオルド御兩所様

ANSWER TO THE ABOVE.

Mito, Dec. 25,1904.

Dear Mr. & Mrs. Miyamori,

Thank you for the pleasant letter. Please accept Christmas and New Year greetings. May you be blessed in the coming year.

We expect to go to Tokyo on the 31st inst and hope we may see you for we shall be there about two weeks.

Your sincere friends,
Gurney & Elizabeth Binford.

同上返事

拜復御祝詞拜誦奉謝候我等よりも謹て基督降誕祭及新年之御祝儀申上候尚明年中御祝福あらせられん事を祈上候我等事來る三十一日には上京致二週間許滯京の心組に候ゆへ其節は拜眉の榮を得度と樂居候

ビンフォルド夫妻

宮森御兩所様

NEW YEAR'S CONGRATULATORY CARDS.

With Best Wishes
for
A Happy New Year.
M. N. Wyckoff.
Jan. 1. 1904

Wishing you a Happy
New Year.
William Gemmil
Jan. 1,'04

I wish you a
Happy New Year.
A. Miyamori.
Jan. 1,'04.

Wishing you a Happy New
Year, and a joyous prosperous
year throughout.
We are sincerely your friends
M. P. & G. Bowles.
30 Koun Machi, Mita, Shiba, Tokyo.

新年祝賀の端書

謹賀新年
一月一日
何某拜



福島陸軍少將夫人を訪ふ

一記者

我が滿洲軍總指揮官元帥陸軍大將大山巖氏に從ひ、兒玉總參謀長、井口參謀等と共に、同じく參謀の大任を負うて、今や既に、征途に就いて居られまする、彼の

▲西比利亞單騎旅行家

として、英名世界に響き渡れる陸軍少將福島安正氏の牛込區矢來町三番地なる留守邸をおとづれましたのは、過ぐる十二月の三日のことで、丁度、前號に御紹介申した中村少將夫人をお訪ねいたしまして少將が旅順に於ける戰傷をお見舞申しました歸途で彼是午後の四時頃でございました。

嚴めしき檜門の正門は、ぴつたりと鎖されてありますので、左手の潛戸を押し開き、チリ、ン〳〵の鈴の音と共に突と門内に入り、稍勾配になつてゐる所を、五六歩進んで、玄關に向ひますると、踏石の上には、突掛沓が一足整然並べてありますので、必定來客と推し、又同時にお邪魔かとも考へましたけれど、思ひ切つて取次の電鈴を押しました。すると間もなく、三十恰好の召使の下婢が出て來られましたので、乃ち刺を通じて、まづ、一ト通り要件だけを述べ、夫人に面會を乞ひました。

記者は玄關に立つてゐました、其瞬間に、記者は一種の悲むべき愁ふべき異樣な感に打たれました。記者は一體、記者は此夏青葉の頃に、此方をお訪ね致しまして、令息三郎氏が仙臺の高等學校から休暇で歸て居らるゝのに、面會いたしました同氏は記者の知己でまだ其時は無論遼陽の戰爭前で、則ち令兄次郎氏(陸軍少尉、後中尉に陞る)の戰死前でございました。戰死＝、それがたとへ軍人の義務を全うせられたので、名譽なことゝは云ふものゝ、是れが記者に取りまして……。

不圖、仰いで、門内の櫻樹を見上ぐれば、過ぎし日の青葉の梢は既に散つて居り、又、その下なる山茶花の葩が一つ二つ地に落ちて居りました。

『どうかお上んなすつて』。の召使の下婢の聲に驚いて振り顧き、導かるゝまゝ、玄關に上りまするとて其所には赤地に黑模樣のある毛氈を敷き詰めてありました、記者は、即ちその次の間より、左手の座敷へ通らうとしまするとと、折柄來客は辭して歸らるゝので、其客と入り違へに

▲八疊の座敷

へ通りました。床の間には、掛物の代りに則ち遼陽の役に名譽の戰死を遂げられました令息次郎氏の寫眞を安置してありまして、聊かの香花、阿伽等手向けてあります。又、その左の横に、鹿角の刀掛に中尉の遺物の劍を飾つてありました。又、仰げば、楣間には、少將が西比利亞旅行から歸へられた時、亞細亞協會とかより贈られた漢文の扁額、その他、陸軍々人の寫眞額を掲げてあります。又顧り返へれば、戰死中尉の金鵄勳章を胸間に煌めかした肖像額もありました。

やがて、

▲夫人貞子殿

は、來客を玄關に送られて、座敷に來られましたので、まづ、初對面の禮を述べ、且つ、更に來意をも告げました。

夫人は、年比四十二三と覺しき、中脊の、肉付豐

な、頭髪を洋風に束ねた、目鼻立の美しい、お顔の輪廓の整ひたる、氣品賤しからぬ方で、お扮裝は、日暮れで、よくは分りませんかつたが、いかにも質素な風でございました。

記者は、此前お伺ひ致しました時は、夫人は御不在で、令息三郎氏に面會いたしましたことを、先づ述べますると、夫人は徐に口を開かれまして『ハイ、左樣でございました。彼の時は、私、丁度留守でございまして、失禮を致しました。三郎とは豫てお知己で被入るさうで、……それは〳〵、……ハイ、有難うございます。次男も到頭、遼陽の役に戰死しまして、まあ、

▲軍人の義務

を果たしましたが、……何でございますね、此頃は非常に戰死なさる方が多うございまして、お互樣にお悔みばかり云つてゐるやうな次第でございます。しかし、もう、こればかりは致し方がございません、病氣にもならず、負傷もせず、無事に凱旋するやうならば、それほど結構な事はございませんけれど、さうはなか〳〵參りませぬ、先達も、次男の從卒からの手紙を見ますると、次男の居りました中隊（近衛第三聯隊の某中隊）なんかは、初め九連城の戰爭から遼陽の戰爭までに、戰死した者と、夫れから病氣の者と、負傷の者とを除けますると、最初から無事の者は、たつた六人でございますさうで、中隊長、小隊長などは、殘らず戰死か負傷でございますさうです。能く〳〵運の強い、命冥加な人でなければ、其六人の中へは入れませぬ、……』と、夫人は言はれましたが、軍人の妻となつて居られ、且又軍人の母となつて居られまする少將夫人の、豫てのお覺悟の健氣なるは勿論かと存じますが、たとへ、國家の爲めとは云へ、其所には又忍ぶべからざるものがあるでございませう。

▲將軍の閱歷

『廻るや廻る日と共に、地球を廻る英雄の、譽は比馬拉耶、亞爾泰の、峰より高く聞えけり、沙漠の砂

に煙立て、蒙古の雪を踏み散らし、日數を經ること五百日、道を行くこと三千里、……身には綴の着服も、心に錦を着て歸る、廻りて歸へる福島の、萬歲唱へて祝すべし、萬歲唱へて祝すべし。』

と、是れ、吾人が忘れんと欲しても忘れ能はざる今より一ト昔――十年前に、盛に謠れた童謠でありました。從來君の名聲に就いて特に聞くことはなかつたが、此西比利亞單騎旅行の事あるや、內外幾百萬の人皆眼を擧げ聲を放ちて贊稱措かず、終に歷史上沒すべからざる榮譽を得られ、誠に日本男兒の眞價を世界に發表せられました。君は舊信州松本の藩士初め司法省に出勤せられ文官でありましたが、後ち明治八年の頃參謀局に轉せられ、同十二年直に中尉に任せられ、二十年獨逸公使館付きとなり、廿五年二月十一日の紀元節を期して、伯林を騎馬にて出發せられ、露國を中斷し、烏拉爾山を越えて西比利亞に入り、東西四千里、或は無人の境に宿泊し、或は猛獸の區に投じ、あらゆる危險と、あらゆる艱難とに打ち勝つて、終に橫斷探檢の擧を全うせられ、二十六年六月歸朝されました。その馬上少佐より中佐に昇られ、歸朝後は參謀本部に出仕せられ、後又出て、淸韓露の諸國に往來し、東亞の軍事に就いて大に得らるゝ所がありました。日淸戰爭の時は、即ち第一軍の參謀となつて出征せられ、陣中大佐に陞られました。後ち又、官命で、印度、波斯、土耳古等を巡視され、大に貢献する所がありました。北淸事件の時は混成枝隊司令官として淸國に渡り事平いで歸朝せられました。それから、また參謀本部附となられ西部都督部の參謀長にもなられ、今度は又滿洲軍に從うて出征せられました。が、その胸中幾多の經綸に富める將軍は、彼の兒玉將軍等と共に深略善斷、必勝神の如く、今や大に世界の耳目を驚かしつゝあります。

さて、つぎに、

▲少將の嗜好

に就いて伺ひましたとこ　夫人は微笑み給ひて

「ナニ、是れと申して別に嗜好はございません。ハイ、乘馬でございますか、これも好きには違ひませんが……ハイ、樹木ですか、これも嫌ひでもございません。たゞ宅に居りまする時も、默つて書齋に入つて讀書か何か致して居りまするだけで、……ハイ、漢詩でございますか、これも自分が心に何か不圖浮かんで、興に乘じまするると、何か作つたり致すこともござりまする……』と。

▲將軍の雅懷

將軍人となり、温厚篤實、實に智勇兼備の名將でまた夙に和歌を好み、詩を作られ、その風流雅懷掬すべきものがございます。今度の出征前に當りても其身は參謀の劇職を奉ぜられ、晨入夜歸の多忙なるにも拘らず、餘裕綽々として、即ち筆を走せて、

▲征露の歌

を物せられました。その歌に曰く、

世界に名高き日本國　旭に輝く日の御旗
皇統連綿大君の　臣子は今や五千萬
仁義を以て建てし國　忠勇勝りし國の民
之に反する敵國の　其の有樣は皆な知らん
虛僞を常として　他國の領地を掠取り
名なき家を燒き拂ひ　罪なき人を擊ち殺し
逃るゝ婦女子を辱め　乳に泣く小兒刺殺し
兇惡暴戾醜人の　共に赦さぬスラヴ人
國は廣きも荒野原　人は多くも烏合勢
一億半餘の人口も　六十有餘の異人種ぞ
直隸平野の戰に　進み兼ねたる卑怯者
歷史に名を得し哥薩克も　今は昔の夢なるぞ
旭に解くる雪氷　消えてぞ失せし魯西亞兵
いざ起て奮へ我男兒　駒さへ勇む春立てり
仁義の師に敵は無し　愉快極まる此の戰
旅順哈爾賓踏み破り　烏拉爾の山の絕頂に
旭の御旗を翻へし　スラヴの舊都モスコーの
森の畔に追ひ籠めて　我が大君の御威德を
普く宇內に宣揚し　世界の平和を樂まん

これに由て見ましても、將軍の抱負、將軍の意氣も

共に遺憾なく發揮されて居ります。
さて、つぎに、

▲其の家庭

に就いて、お訪ね申しましたところ、夫人は徐なる調子で『ハイ、子供は戰死しました次男を入れて都合六人でございましたが、今では五人となりました。長男の正一(三〇)は、歩兵大尉でございますが、これも第三軍の副官で、旅順の方へ參つて居ります其次は次郎で、是れは二十五歳でございました。三男の三郎(二三)は、御存じの通り仙臺の高等學校に往つて居りますし、四男の四郎(一八)、これは中央幼年學校へ入つて居ります、五男の五郎(一〇)は御茶の水の高等師範の附屬小學へ通つて居ります。一番末が女兒で、操と申して七歳でございます。ハイ、學校ですか、これも、五郎と一緒に附屬の方へ參つて居ります。……ハイ、良人ですか、これは五十二歳で私は四十九でございます。……』と、云はれましたが、記者は、次に

▲夫人の嗜好

や、家政のことに就いて承らうと致しましたが謙遜にして淑徳高き夫人は、莞爾と笑はれて『私なんかは、別にそんな大したことはございませぬ、ただ、毎日子供の世話と臺所の指揮官をやつて居るだけで、オホ……ハイ、私ですか、私は東京の生れでございます。……ハイ、父でございますか、これは一橋家の臣で高野貞潔と申しました、……ハイ、兄弟は四人でございましたが、現今は三人となりました。……』と云はれて、俄に何を思はれたのか『私は私の父の事を申し上げると直ぐ思ひ出しますが、私の父は私の七歳の時物故されました。それが、いまだに存命で居るやうなことで……と申しまするのは、私に就いて、何とか云ふ新聞が、途方もない嘘を書きまして、……私は或る下宿屋の娘で、福島が軍曹の時、其所に下宿し居つて、たゞして、私は兩親の意見を聞かぬおばずれ者であつた爲め、家を追ひ出され、そして、福島と一緒になつたとか何とか

書いてありまして、そして、それが、斯樣に出世したので、兩親は、今は悔んで、此頃臺所口からへこへこ叩頭して出入りしてゐるなど〻面白さうに書きましたが、七歲の時死んだ父が居らうようもなく、福島が又軍曹であつたこともなく、文官から直ぐに中尉になつたのですから、……イヤ、ハヤ、飛んだ奇談でございました。隨分ゆすりなどの惡新聞があつて、いろ〳〵な眞擬を致すこともあるさうですが

私も良人も一體そんな事は無頓着で、何んとでも云つてゐるが宜い、といふやうなことで、ちつとも搆ひませんかつたが、其新聞を土臺として、それから、方々に折々此事を出したことがありました。」と云はれましたが、記者は、直にそれは、或る不德な卑屈な何某かの裏面攻擊をしたのか、さなくば、ゆすり的の不德を働く新聞の仕打とも推しました。又その信ずべからざる新聞の記事を轉載し、信僞をソチ除けにして面白がる輩の愈々愚劣なことを思ひまして苦々しく感じました。

▲同家の美德

夫人の座つて居られまする傍に、新聞が二三枚とそして、「恤兵部寄附……」と記した帳簿がありましたので、記者はこれに就いて承りまするに、夫人は、築地本願寺にある令女敎會（會長前公爵夫人毛利安子）や、眞宗婦人敎會（會長大谷朴子）などの發起にかゝる、恤兵部へ献納する靴下（一足二十五錢の毛のもの）を集る事に盡力して居らるゝ由で、來る五日（十二月）の午後二時からも、同邸から程遠からぬ矢來倶樂部で「戰爭實談恤兵演說會」といふのが開かるゝので、（辯士は第一軍近衞師團司令部附として從軍された本派本願寺の布敎使松浦貞應師）その刷物の印刷から配方まで千枚を引き受けられ、其刷物を、令息四郎五郎兩氏と、及び書生との三人で、矢來近傍へ袴を着けさせて配付せられたといふことでございまするが、斯樣に一家協力して、恤兵事業に從はるゝことは、まことに軍人の家庭の摸範として、否、軍國の家庭の摸範とすべきことで

ございます。

中村海軍大佐夫人を訪ふ

一　記　者

第三艦隊司令長官 海軍中將 片岡七郎氏の帷幄にありて謀策を輔け、軍艦嚴島に乘り組める參謀長海軍大佐中村靜嘉氏の留守宅をおとづれましたのは、過ぐる十一月の二十日で、松島艦長川島大佐の留守宅よりの歸途でございました。

芝區三田綱町の川島邸門を出まして右へ左へ眞直即ち麻布と芝との間を流るゝ小川の三の橋といふを打ち渡り、左へ折れて四の橋の方へ人力車を走せさせ、やがて四五町にして右手に何寺といふのでございませうか、老松の綠深きが先づ目に映ずる一つの古刹がありますが、それと隣り合つて黑塀で取り圍んだ一つの邸宅がありました、これぞ川島夫人に聞きしに紛れなき、

▲中村大佐の留守宅

で、麻布本村町なのでございました。眞黑な門柱に眞白な瀬戸札が掲げてございましたが、其札には中村靜嘉といと鮮に讀まれました。人力車をずつと門内へ挽き込ませ七八間の所で下車し左手の玄關へおとなへば、年頃十七八の召使の下婢が出で來ましたので、乃ち例の通り刺を通じ、是非とも夫人に面會を乞ひました。が、軈て「さア、どうか、おあんなすつて……」とのことで案内せらるまゝ、玄關より直ぐ右手の方の

▲八疊の座敷

へ打ち通りました。

床には何人の揮毫でありませうか、いと趣味ふかき書の掛物が掛けてあつて、その前には黄菊と白菊とを綺麗な九谷の花瓶に挿けてある、向の隅には室内安全暖爐が据えてある、天井からは電氣燈がぶら下つてゐる、疊は雲繝縁で、座敷の周圍は東から北に折れ、そこは手廣き疊廊下のやうになつてゐまして、まるで、寺院のやうでございます。

例の召使が、まづ座蒲團を薦め、それから、瀨戸の火鉢、茶、菓子と順次に運び終つたかと思ふと、間もなく奧の方からすッ〳〵と足音輕う出で來られましたのは、即ち

▲大佐夫人若子殿

で、年の頃は三十二三と覺しき、中背の、肉付豐な、丸顏の、至つて氣輕さうな婦人で、頭髮を洋風に束ね、黑ッぽい銘仙の袷に、同じ物の羽織をすらりと着流され、極めて質素な扮裝でございました、

さて、まづ

▲戰爭の話

が初まりますると、夫人は少し笑ひながら、はき〳〵した語調で『ハイ、今度の戰爭は、實に陸軍も海軍も大變な勝利で結構なことでござりまする、が、さて、これからの寒氣では、軍人諸氏、なか〳〵お大抵ではございますまい、たとひ、防寒衣の用意がどれ程出來てゐましても、何分零下十何度の寒氣でございますから、さぞ、一しほお骨が折れることでございませう。……ハイ、旅順の方もなんでございますね、もう、餘程切迫してゐるやうですけれど、非常な防備でございますさうで、なか〳〵陷ちないやうでございますね、……』と、云はれまして、ちよと、柳眉を顰められて『……それで、旅順は何れ近い內に陷ちるでございませうか、まア、大變な人死でございませう、お國の方（鄕里金澤のこと）の、七聯隊（第九師團）なんかも、全滅のやうでございますね、しかし、どれ程の損害はありませうとも、是非其の內に陷して了ふことでございませうが、まわ、大變なことですね、なんでも、旅順なんかは、此夏の中に取れるやうに、やれ、祝捷だの、提灯だのと騷いでゐましたけれど、今まで、取れないのですから、その苦心のほども知れますね、……』と、述べられましたが、これ恐く、輕佻なる國民が旅順の戰況の如何を顧みないで、一時火急に祝捷準備に汲々したことの諷刺を圓滑に言はれたのでございませう。夫人は、尙ほ語を續けられまして、『ハイ、バ

ルチック艦隊も愈々來るさうですが、來ますれば、又烈しい、面白い戰爭がありませうと思ひます。まあ、その時こそは、良人などが命掛けで、うんと思ふ存分に戰らなければなりませぬ、良人が、時々、戰地から、バルチックの來ることを、軍人諸氏が喜んで待つてゐるなど丶、云つて寄越しましたが、どうも、海軍々人の勢はなか〳〵大變なものださうです。……しかし、まあ、正直なところを申しますれば、戰爭も早く濟んで了ふ方が宜しうございますね早く平和になる方が宜しうございますね、……戰死なすつた御方の中でも、殊に下級の方などの中には新聞にも時々見受けまするが、隨分可哀相なのがございますね、いくら遺族救護會だの、婦人會だのがございましても、とても〳〵、大事の人を失つたことの補ひにはなりませんですから、お氣の毒なものでございます……。』と、夫人は戰死遺族の胸中を推して、かくも、温き同情の言葉を注がれました。

さて、つぎに、

▲大佐の略歴

に就いて、承りましたのに、大佐は加州金澤の藩士で、彼の松島艦長川島大佐の叔父に當られ、今年四十五で、海軍兵學校の出身でございます。日清戰爭の時は、大尉で軍艦吉野に乘り第一遊擊艦隊の參謀でありました。そして、旅順占領の後は、即ち同地へ上陸して長く駐つて居られましたが、やがて遼東半島還付となりましたので、空しく恨を呑んで最も終に佐世保の方へ歸つて來られましたさうですで、二十九年の三月には少佐に進められ、坪井航三氏（中將）の下に付いて居られました。次に北清事件の時は、中佐で、軍令部第三局長を勤められて居られました。尋いで三十二年に大佐に進み、同時に明石艦長に補せられました。三十四年六月海軍の方から東宮武官を置かれましたが、大佐は即ち其最初の人でございました。其役を丁度二年半位勤めて居られましたが、今度の戰役で、即ち第三艦隊の參謀長となつて軍艦嚴島に乘り込まれましたのでござい

ます。

次に、記者は、大佐の

▲今度の出征

に就いて、承はり、且つ、日清戰爭の時にでもあつた何か面白いお話か、逸話でも伺ひたいと申しました所、夫人は完爾と微笑まれまして『良人なんかには、別に面白い事も、逸話と云ふほどのこともございません、……が、あの日清戰役の時でございました。只今もお話しいたしました通り、旅順が占領となりまするると、良人は直ぐ上陸し、大分久しく其所に駐在して居ましたが、その時、自分では旅順は既う日本の永久の領地と信じて居ましたから、時々單身で散歩に出掛け、此所彼處と檢て歩いて自分の居宅する地を選んで、内々に新領地移住の事を企て樂んで居ましたが、思ひ懸けなく、遼東半島還附といふことを聞いて、非常に吃驚しましたと同時に、彼の三國干渉のことを非常に殘念に思ひ、それこそ怨恨、骨髓に徹する慨があつて、彼の地を去る時、そゞろに涙を浮べて、北の方西比利亞の天を睨み付けて『この畜生覺えてゐろ』と緘口を叩いて、空しく恨を呑んで歸つて來ましたさうです。で、今度愈愈戰爭が始まりさうになりました時、どうかして出征したいと云つて居ましたが、幸に嚴島に乘ることになりましたから『今度こそは、例の報仇を爲てやらなければならぬ』と喜び勇んで出て參りました。』と。

▲大佐の平生

大佐の人となりは、快活明敏、嚴格といふより寧ろ温和な方でありますけれど、その部下の能く心服し、能く整頓してゐることは驚くべきもので、曾て彼の名艦長を以て目されてゐる八代大佐(淺間艦長)でさへも、大佐が明石艦長の時『海軍中最も優れた艦は中村大佐の明石艦で、此艦は實に日本軍艦の理想の模範である。』と褒められた位の評判の宜い方であります。平生、嗜好とする所のものは、音樂で、諸曲も至つて熱心で、また上手でござい

ます。その出征の時、行李の準備せられてゐる際にも最後に、大佐は、夫人に打ち向ひ、呵々と笑はれて『また、大事なものを忘れた。』と、云はれましたので、夫人は、其何物なるかを考へまして、『何です?。』と、問へば、大佐は、机の下から『これだ〳〵』と、云つて數冊の謡本を出されましたといふことでございます。實に斯る危急の際にありて、此の雅事あるは、即ちこれ英雄の胸中閑日月ありとの例證ではございませんか。

又、平生在宅の際でも、散歩、運動、遊伎が嗜きで、令息共々打ち戯れられて、此上ない娯樂としてゐらるゝさうでございます。又、夫人は云はれまするやうには『良人は何でも遊ぶことが好きで、嫌ひと云ふことはございません。』と。

前記の如く大佐は川島大佐（令次郎氏）の叔父に當つてゐる方でございますが、その面貌と云ひその聲色と云ひ、酷似してゐられますから川島大佐が中村家へ來まして、玄關口で「オイ〳〵」と家人を呼ばるゝと、中村夫人は我が良人の歸つて來られたのと思つて出迎はれると、それが川島大佐であることもあるさうです、また、中村大佐が川島家へ來て玄關口で「オイ〳〵」と家人を呼びますると、川島夫人は我が良人と思つて出迎ひに出られると、それが中村大佐である、と云ふ工合で、隨分笑の種となることもあるさうで御座います。

▲其の家族

大佐と夫人若子（三六）との間に、長男忍（一九）次男半田（一五）三男久嘉（一三）長女關子（一八）次女英子（一六）三女勝子（一）と、三男三女都合六人ありまして、長男忍氏は現今海軍兵學校に在學、次男半田氏は麻布中學へ、長女關子は麻布小學校へ通つて居られます。

夫人は、令息令嬢の名と年齢とを話されまして、尙ほ語を續け『家の小供の中には變な名が付いて居りまするが、これは地名を付けたのもございましてこれは、良人の勤向の紀念となつてゐるのでございます。次男の半田は、往年尾張の半田で海軍大演習

のあつ時生れましたなでの、半田と付けたのでございます。關子は馬關に居ました時生れ、英子は良人が淺間の回航委員として英國へ參つてゐました時生れましたから、其紀念の爲こんな名を付けて置いたのでございます。又一番小さい勝子と申しますのは、これは今年の元日に生れましたのですが、今年は戰爭があつて、そして大勝利だと云ふので、豫め勝字を以て名としたのでございます。隨分海軍の方で、こんな風にして、いたづらに名前をくつけて置く方もございますさうで……オホ……。」

▲令孃關子

關子孃は、丸顏の、目のぱつちりとした、口元のきりツと締つた、如何にも愛らしい令孃で、また、如何にも怜悧で、しかも、慈悲深い、實に感心な方でございます。玆に同孃に就きまして、仄に聞き取つたことがございますから、紹介いたして置きませう。

今年の秋、麻布小學校に運動會があるといふ日のことでございました、關子孃は、平日よりも何は一層朝早く起きて、それ〴〵用意し、やがて、お辨當の入つた、美しい信玄袋を左手にぶら下げて、赤い緒の草履穿き、何にやら、うれしさうに、口吟みながら、學校の方へと急ぎました。

すると、或る大家の門の前に、それは〳〵見るからみすぼらしい、身に襤褸を纏ふた、母子の乞食が居りまして其四十ばかりの母親は、素足になつてる五つか六つの少女の手を引いて、無論やりに引き擦り引張つて行くのでございます。此憐むべき少女は片手で、ほろ〳〵と落つる涙を押へ、聲さへ立て、泣いて行くのでございます。

で、同情の深い關子孃は思はず、足を止めて、ちよつと眉を寄せて、その何の爲めに親の叱るのか、その何の爲めに子の泣くのかを伺ひました。

母親は聲いと荒げに、

『いくら、泣いたつて、仕樣がないぞ、何にもお錢があるではなし、歸つて父樣に買つて貰ひな。…』

と、云つて、ぐつと腕も抜けよとばかり手を引き付けまするとわつと尚ほ一層少女は聲高に泣いて跟々として、砂地の上を小走に歩んで行くのでございます。

闘子孃は、此有様を見て、さて思ふよう、大方此少女は、何か、菓子でも欲しいと云つて、泣くのであらう、叱られたのであらう、あゝ、お腹が減つて居るのではないか、可哀さうに。と斯くも、少さき胸に兎や角と思を砕きまして、今は闘子孃、默過し兼て、つか〳〵と此二人の前へ進んで出まして、愛らしい金鈴でも鳴すやうな聲して、

『この子は、何うしたの?』

と、母親に尋ねますると、母親は莞爾と笑つて、

『ハイ、此子は何か買つて呉れと申しますので…。』

と、云ひました。

闘子孃は、自分が心の中で思つた通りでありますので、さ程不思議にも思はず、

『あゝ、左樣?、ぢや、私がお菓子を少し分けて上げよう?泣かないやうにおしなさいな。』

と、云ひつゝ、右手の信玄袋の中にあつたビスケット、モルトン、リキル、ポン〳〵なんど種々と紅、白、青、黄の美しいお菓子を眞白な半紙に包み、そしてこれを此貧婦に與へて遣りました。

母親の喜びは一方ならず。

『お孃さん、まことに、どうも有難たうございますこんなお奇麗なお菓子は私共、生れて初めて頂きます。さぞ、まあ、おいしい、結構なものでございませう、有難たうございます。』

と、紙包を頭より高く捧げて、精神凝めて、厚く禮を叙べました。そして、この少女にも向ひまして、

『これ、角や、お前にこれを下さると、さあ、さあ、お辭儀をおしな。』

と、云ひましたので、

今まで裂けるやうに啼いてゐた少女も、急に泣き歇んで、今はにこ〳〵とさへしながら、口の内で言ふやうに、

「ありがたう。」
と、小さく云つて、母親から、その多く恵の包まれてゐる紙包を双の手に大事さうに受取りました。
すると、母親は何と思ひましてか、言葉叮嚀に、
「お孃さん、失禮でございますが、貴孃のお住居は何所でございますか。」
と、尋ねました、
關子孃は、態々挨拶などに來られても困まると思ひまして、
「あゝ、私の所かへ、まあ、そんな事いゝわ。」
と、愛らしい林檎のやうな頬に笑靨を見せました。
けれども、母親の貧人は、達つてと尋ねましたので、到頭、その所を告げ、そして、學校の方へ急いで行きました。

・　・　・　・　・

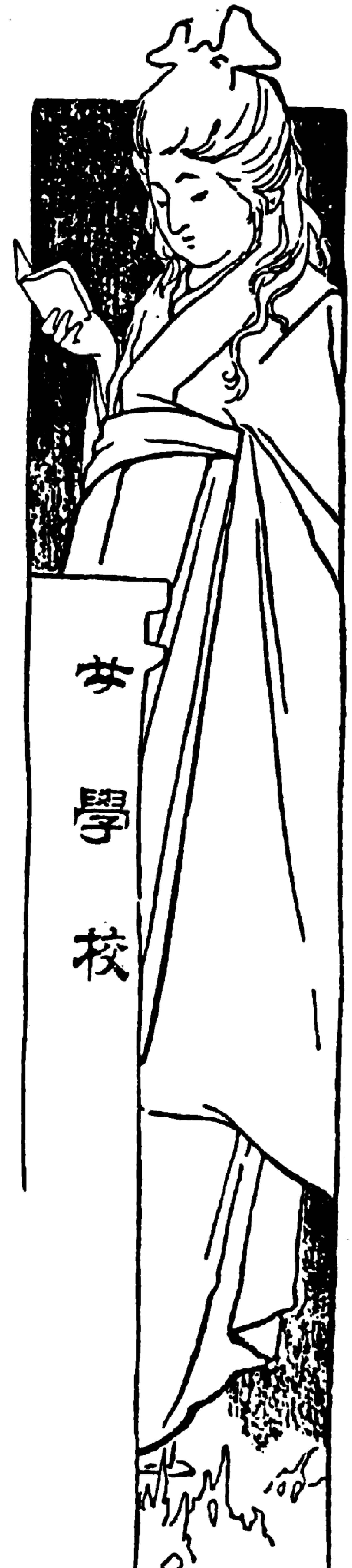
運動會が終へて、關子孃が歸宅せらるゝと、先刻の母子二人の貧人が挨拶に來て行つたとのことでございます。

○福引（其二）

(4) 先代の貯蓄　胃散。（遺産）
(5) 春の夜の月　おぼろ。（食品）
6) 當世才子　澤庵石。（押が強い）
(7) 下等動物　なまこ。（小間物）
(8) 曾我時宗　呉羅。（五郎）
(9) 伊勢見物　寒暖計。（音頭をみる）
(10) 奈良の都　篩。（古い）
(11) 功名　てがら。（小間物）
(12) 水銀　帖齒。（鵞鳥）
(13) 千島　二本の箸。（日本の端）
(14) 耶蘇　西洋紙。（西洋の紙）
(15) 謙遜　剃刀。（髭する－卑下する）
(16) 鷲なかせたこともある　梅干。
(17) 明けて口惜しき玉手箱　洋襟。（空）
(18) 右と左に別れちやゐれど末にや結ばる緣の糸　羽織の紐
(19) 國會議員の涙　甲斐産葡萄酒。（解散）

麻布家事專修女學校の恤兵技藝會

一瀬初子



技藝會と云へば素より生徒姉妹の心を、こめさせ玉へる、成作品を陳列し、來賓の縱覽に供するばかりでなく、またこれが購求にも應ずるのでありまして、否むしろ應ずると云はんより願ふのであります殊に恤兵技藝會は、それを目的として、即ち、それによりて得たる、金員のすべてを、我が恤兵部に献納せんとの

軍國女學生の赤誠によつて成り立つものであります。麻布裁縫專修女學校の如きも、またこの尊き赤誠を基として、十一月十九日、その會の催しあり、殊には本田庸一氏の御話もあるとの事で、天氣はよし、開會の一時には間に合はずとも、せめて、其面影なりとも拜見いたしたらばと思ふより早く心をさだめて、さて初めてまゐりました御門の前、先づ

小じんまりとして掃除のゆきとゞいて居るのに、何とは知らず愉快な感じがいたしました、昇校口の少し手前に下駄箱が二つありまして、下足の數より見る時は百人あまり

の來賓かと點頭づかれました、接待役の御方々だと思ひます、二三人そこに立つて御出でになりまして紳士の外套をまで御世話なさるのは、まことに深切らしく見えましたが、次に入場劵を差出すと、こちらに頂きます、と仰せられた方の口調は

い、い、い、い、いさゝか不自然で切つてつけた樣で、淑女としては、も少し、自然な優しさが欲しいと思はれました、これは些細な事の樣でも非常に學校の品格にもかゝはりますし、も少し耳障りにならない樣に願ひたいものです、素よりこれは我の耳の間違ひかも知れませんから……と申して、思つたまゝを申上げぬのは何だか本意無ふ存じます、何卒間違ならば御免を願ます、

い、い、い、い、それから髭の黒い方のお話が　丁度今はじまつた處で、あれが本田庸一さんと仰しやる方だろふかと、御高名のみは平素耳にしてゝも、まだお顔を識らぬ私の事ですから、直、然思ひまして、一語も聞きもらしてはならぬと思つて、熱心に耳をかたむけました、けれども　おいにく、後の方に座りましたものですから、後方のさゝやきや、往來の方々の足音、さては、新に來賓の衣ずれ、彼や此れやで

い、い、い、惜しい事をしました、あまり、くわしく聞き聽へる事が出來ませんでした、が其熱心な御態度と丁重な御辯舌は、さすがは、それありと知らるゝ第一流の御方だと敬服いたす外はありません、併し後に承はりますと辯士は本田氏ではなくて（本田氏は差支があつて）藏原惟廓氏であつたのでした、さて御話の大要は我が日本婦人は、其の貞淑なる點に於て、其勇敢なる點に於て

い、い、い、い、決して歐米婦人に劣りはしない、否それよりも、我國婦人の貞淑なるは、世界各國人の認めて以て美となし高となすところであります、これ實に世界に冠たるものと云つてよろしい、愛の點より云つても、强ひ點より云つて

も、各國婦人と少しも變つた所はない凡そ婦人としての性情は、殘ず具備してるのであります。而かも社會に一つの勢力なく、殆んど

文明の婦人として

認められないのは、何が故でありませうか、彼も婦人である、これも婦人である、等しき愛と勇氣と德とを具へ、且また貞淑なるに於ては、世界に冠たりとまで云はるゝ日本婦人ではございませんか、然るに、彼は堂々たる文明の婦人として社會に大なる

勢力を有して居る

是れは即ち、文明の婦人として、未だ世界に認められない、と云ふのは何のためでありませうか――歷史を繙いて御覽なさい、才媛烈女の風姿はその時代々々の花として、紙面を飾つて居ます、細川忠興の夫人の如き、源賴朝の室の如き、若くは橘姫の如き、或は又神功皇后の如き、これ皆我が國婦人が、烈國の女子に對して、敢て遜色なきを證して餘りありです、實に歷史は斯くの如く證して居ます……然しながら、……成程、我が國婦人は斯くの如く

個人としては

敢て人後に立たざる、勇氣あり、才ありて、且つ貞淑なるものでありますけれども、世界文明國の婦人として、只一つ足りない所がございます、これ即ち文明の婦人として世界に認められない、原因でありまして……一言に申しますならば

團體的精神に

乏しい事であります、これが實に、古來我が國婦人の大なる缺點でありました、婦人は只室内にあつて一家を整理するの外、何事をもなさず、社會萬般の事業は一つとして、婦人に依つて成された事はありません、婦女子が相集つて、一つの事をなすなどは殆んど夢にも無かつたのであります、

然るに外國の婦人

は如何です、(これより、彼等が社會の公共事業に盡せる實例を擧げ)斯くの如く團體に依て成さるゝ事は、社會に非常なる勢力のあるもので、歐洲の文明國

は婦人によりて大に開明に赴くと同時に、彼等婦人は、世界文明國の婦人として、大なる勢力を握つて居るのであります、

諸君、我が國にも亦斯くの如き婦人の團體的精神を要するのです、日露の戰は開かれ、今や我が忠勇なる數萬の軍士は、風寒き異郷の野に、家を捨て、親を忘れ、妻を殘し子を措いて、實に其生命をも惜しまず犧牲獻身、唯君國を思ふ赤誠を頭に、祖國の爲めに

血を流して

居るではありませんか、斯くの如き時にあたり、戰塲の夜景慘たる中に立つて、はるかに東天を仰ぐ將士の胸に……若し、我が祖國には我等のために、若しくは我が遺族のために、滿腔の同情を以て、日もなほ足らず、つくしてくれる

雄々しき婦人の團體

がある事を思ふたならば、彼等は、如何に勇氣を得、慰めを得、全軍の

士氣は如何ばかり振ふ

でありませうか、私は今日恤兵の目的を以て開かれたる、この技藝會のために、充分の同情を有ち、また大に贊成いたすものであります、云々』先づ以上の如き主旨を以て御話になりましたが、身體に異狀を來して居ますので思ふ樣に話しも出來ませんからとの御挨拶で、拍手の中に御退きになりました、私はあまり聞くのに

熱心すぎて

氣をつけなかつたのですが、この時はつと思つて、あたりを見廻しますと、右手の方と後の方とに、生徒方の成作品の數々が陳列してありました、順序として、先づ會塲の事より、勿論書をかく樣にくわしく、うつし出す事は出來ませんから只一寸、私の

眼に映じた

だけの、大略を記して見ませう、昇校口を入つて『御婦人の方は左の方へ』と案内されましたその會塲と申しますのは、八十八疊ばかりの疊敷の廣間で、

臨會の人々は一同洋服和服を問はず、袴と帶の別なく、皆座つてお話を聞くのであります、右手の上座に賛助員席と貼札がしてありまして、二三人重立つた方が演壇の（演壇と云つて殊更に壇があるのではありません）テーブルの方に向つて座をしめて居らつしやいます、そのテーブルの後方には、一面に白い幕が張つてありまして、活け花がいくつも、キチンと、同じ間を隔てゝ置いてありました、來賓には素より御婦人の方が多くて、左の窓ぎはには立つたり寄りかゝつたりして居らせらるゝ方も、隨分御見受け申しました、窓はガラス窓であります、オ、然でした忘れて居ました、これは私が會場へ入つて第一番に氣についた事で、必ず忘れてはならぬと思つて居ましたが、藏原さんの御話でつひ忘れて居ましたと申しますのは、最初私が入つて來て、左へと案内されまして、そこに座を占めようとして、膝を折りかけた時忽ちひかゝるものが眼につきました、はて何だらうと、よく見ると、針が落ちて居たのであります、實に危くもう一瞬の事で私は其上に座る筈でしたが、幸にして、助かりました、それから皆樣の風采とまた服裝の事でありますが、これは別段申上ぐるまでもなく只あまり、はで／＼しい所がなくて、如何にも家事女學校の生徒らしかつた所は、まことに、いゝ事だと思ひました、ですけれども、皆樣の御擧動は、其の服裝のおとなしきに似ず、活潑で、賣手の人、接待係の御方、また、其他の妹姉とも、概して當世式で淑女としては、いさゝか物足らぬ思ひもせぬではありません、併し、これは一般女學生通有のものでありまして、殊には個人／＼の性質によるものでありますから、

それを以て學校の如何を判斷する事は酷でありますと申して、一人の行爲は時に一校のそれにも關するものであります……が、私が物事を御たづねいたしかたに一人、まことに、優しく話して下さつた

床し氣の人

がありました、その君を以て一校の生徒を代表するものとしますれば、麻布のこの學校は外部の立派な通、實に淑女の學校として、ほこるに足るものと存じます、さて、それから成作品の事でありますが、

正直に申せば

意外に、品數が少なかつた樣でした、尤も數の多少を以て、兎や角申すのではありませんが、

袋物はいづくも同じ

で、シンゲツ袋より楊枝さしに至るまで、さま〴〵なる細工物が巧に出來て居ました、尤も私の參つたのは、少し遲かつたのですから、分りませんが、御細工はなか〳〵巧妙くて、これとて非難すべき所はありません、併し色の撰擇がいづれもあまり上品でなかつたかと思ひます、伺ひますれば

羽織の紐が一番

よく賣れました由で、あとに僅二つ殘つて居ましたそして今度は、編物でありますが、ハイカラ式の肩掛などは、なか〳〵面白く拜見いたしました、銀貨入れの數々もいゝけれども技折のあまりクドイのは如何だろふかと思ひました、どうせ編物は外國から傳はつた、ハイカラ式の物ですから、ついでに

少しハイカラ流

にしてもいゝでせう、第一色からして、あまりヤボなのは捨てゝ、も少し氣取つたら如何でせう、次には、洋品店であります、小供の膝掛け、洋服などミシンでなされた御手際はさすがは專修の學校と思はれました、それに、色や模樣の上品でハイカラな事洋品店に於て、はじめて其面目を新たにした樣な風でございます、カラやら、チクタイやら、レイス糸など澤山ありましたが、あの糸は賣れましたでせうか、私は、ひそかに氣ヅかつて居ました、普通の店

で、六錢以下に賣るものに、八錢との正札が付いてたと思ひます、而かも他のものより數が澤山ありました、私の考では、あんなレイス糸なんか時價の定つたものを殊更に目に立つ程高く賣るよりも、それを以て、さまぐ\なる意匠を以て編物などをなし、手間賃を高くした方が、如何にもおとなしかろふと思ふのであります、生徒の手間を要せず、只買入れたものに、殊更なる高き定價を付して賣らんとするよりもむしろ淡白に會集の寄附を募つたがいゝではありますまいか、こんな事は餘談になりますから、先づこれで止すとして要するに、技藝に巧妙なるは、云ふに及ばず、軍國婦人の赤誠は、そこにも、こゝにも縫ひ目の一針毎にあふれて居ました、餘興の琵琶の音、また報國の音に響いて、拍手はあだかも萬歲の聲の如く、面白き中を、私は少し要事がありまして、不本意ながらも閉會に先立ちてお暇間いたしました。

婚禮式の實習

内田茂文

禮式作法の如きは土芥と倶に捨て顧みざるが多き現今の婦人界に、珍らしくも斯道を傳へ、斯技を修めて日本固有の美風を奬勵せんとするは、我が女學界の爲めに頗る喜ぶべき事ならずや。

神田區今川小路二丁目に「日本婦人正風會なるものあり、諸禮式諸作法を始め、包み結び物、茶の湯、挿花、料理等を教授し、努めて簡單速成を旨とせり會長として兼て是が教鞭を採れるは中島義弌氏にして、同氏は元來松岡流正統の禮法家なるも、而も同流に偏せず、小笠原、足利、伊勢など各派の流義を折衷し、諸流の長所神髓を採りて教授しつゝあり

此程同會の學生にして同禮法速成科を卒業したるもの十二名ありき、是が卒業證書授與式の當日、婚禮式の實習を擧行したり、予は當日同席に臨みて親しく禮式實習を觀るを得たれば、聊か是が次第を記して、比較的諸禮法の行はるゝ事の多き新年の劈頭に際し、取敢す讀者に紹介せん。

▲座敷の模様

床の中央には白木の三寶に紙立して鏡餅を一と重ね置き、其上に作りたる松を立つ、此三寶の左右には神酒の瓶子を衝重に紙立して置き、瓶子の口は蝶花形に口包み爲しあり、尚其の左右に雉子と鯛とを備へ置くべき事なるも、當日は是を略したり。

因に曰ふ、床には一幅の掛物をも用ふる事なし、俗間には往々「松竹梅」若しくは「鶴龜」「日の出」など目出度ものを撰みて掛くる事なるも、其は大なる誤りにて正式には何物も掛ざるなり、聞く所に依れば、元來婚禮の盃なるものは伊裝那諾、伊裝那美の二柱の神の前にて執行するものにて、結婚の男女兩人は即ち神の神酒を頂く意味なれば、扨こそ一對の瓶子を備へ置くなれ、又中央の白木の三寶は即ち蓬萊臺にて、是には種々なる盛物あれば、鏡餅は其略式にて是を餅蓬萊とも謂ふにぞ。



斯くて靜肅に取繕はれたる席へ、(待女郎は) 嫁を伴ひて出で來るを介添(即ち局役とも云ふ)の者が、嫁を受取りて席の右側に座せしむ、次に聟は出で來りて、席の左側に座す、其跡に待女郎來りて聟の側の下座に座す、勿論嫁の側には介添下座に座し居れり。

▲初對面と雙方の挨拶

軈て嫁は少しく上座の方に進み、初對面の挨拶わり玆に於て本酌人は熨斗を据へたる三寶を持つて出で、少しく中座し聟と嫁との席の中央に三寶を置き疊の中座せし處へ下つて禮を爲す、此時一同辭儀わり、此際雙方の口上わり、聟の方なる待女郎は先づ口を開き

「今晩の盃はお目出度う御座ります」

嫁の方なる介添は、是に對して

「如何にもお目出度う御座ります」

と答へぬ。

▲膳部の献立と其次第

夫より本酌と、加へ酌人とは、本膳を持ち、出で來りて本酌は聟の前に、加へ酌は嫁の前に据ゆ、而して此膳部の品類を擧ぐれば、左の方には梅寶子盛、右の方には田作り盛、中央には雜煮碗を置き、是に箸を添へたり、次に持ち出で來るは二の膳と覺しき物にて是には鯛の鰭の吸物らしきを据えぬ、是を聟と嫁との各々側に出す、次には白木の三寶に土器を据えたるを持出づ、是をシタミ土器と云とぞ、次に白木の三寶に三ッ組の盃を持ち出だす、是より本酌は男蝶の付きたる銚子を持ち、加へ酌は女蝶の付きたる提を持ち、本酌は聟の前に盃と銚子とを持ちて出で、加へ酌は次の間に控へ居れり、

▲三々九献の式

是より九献の式は開始さるゝなり、聟の前に行きたる、本酌は、先づ上の盃にて聟に二献注ぎ、起ちて加へ酌に差し加へしめて一献、是より其上盃にて嫁の方に行き二献、加へて一献、直ちに中の盃にて嫁に二献、加へて一献、夫より其中盃にて聟に二献、加へて一献、直ちに下の盃にて聟に二献、加へて一献、夫より其下の盃にて嫁に二献、加へて一献此結び酌にて九献の式は終りたり。

是にて大結びを爲して、本酌、加へ酌の兩人は其座を起ちぬ。

▲膳部の取下げと挨拶

是よりシタミ土器を下げ、次に所謂二の膳を下げ、次に本膳を下ぐ、玆に於て介添は挨拶して曰く、

「今晩のお盃は御双方御首尾よくお整ひに成りお目出度う御座ります」

と、之に對して待女郎は

「如何にもお目出度う御座ります」

と答へ、斯の如くにして結婚の式は全く終りを告げたり。

因に曰ふ、九献の式前に嫁の持參物の目錄を聟の面前に持ち出づる事、終りに向ふ合小袖を嫁の前に持出る事、其他帽子被ぎ等の事は會長中島氏の說明にて其實式を略したり。

尚前記式場の備へ品以外に、結納物とも見るべき左の品々を備へ付けたり、

相生熨斗鮑包み　金銀包み　末廣包み
反物包み　眞綿包み

右は何れも紅白の紙にて折包み裝飾あり。

當日式場に連りし役々は總て是れ同會の卒業生若くは生徒にて其姓名は左の如し、

聟役……………中島いく子（十三）
嫁役……………小笠原はる子（十才）
本酌役…………芳村さま子（卒業生）
加酌役…………實藤つる子（同上）
介添役…………奥田ぬい子（同上）
待女郎役………加瀬たつ子（同上）

以上の卒業生は何れも當日卒業證書を授與されたるものにて、卒業後早々斯大禮の實習を演じたるが、其起居動作の優美にして、其着服の事々しき、禮服を用ゐざるも、何となくシトやかにて奥床しく、其平常着に異ならぬこそ、却つて實習的に添ふ心地せられて、一段の品格を見上げ得たり。

福引（其三）

(20) 玉垂の音　　飴。（雨）
(21) 鳥取縣　　帶。（伯耆）
(22) わが戀は汐干に見えぬ沖の石の　　雜巾。（人こそ知られ乾く間もなし）

米國の耶蘇降誕日と新年

米國文學博士　山下彌七郎氏述

米國に於けるクリスマスは實に十二月廿五日であつて、卽ち耶蘇降誕日で御座ります、先づ米國第一の祝日で、少中老年の區別なく、互に舊交を暖め、新誼を結ばんとて、品物を遣り取りする至極愉快なる日である、殊に小供は最上の樂しき時であつて、其快樂の材料に付ての方法が、處と場所に依て異つて居りますから、先づ一通り夫等の御話を致しましよう。



△小學校に於けるクリスマス

小學校は休みが丁度十二月の廿一日より、始まりて、新年の三日に終るのである、先づ廿四日は小學校生徒のクリスマスであつて、學校の敎師は固より、生徒の父母兄弟姉妹を集めて祝ひの式を致します、式場は誠に能く裝飾が出來て、大廣間の講堂の正面には「クリスマス」樹の大きな枝があつて、其れに「サンタクロース」と云ふ老翁が杖を持て居る繪の切り取りが、其樹の枝に下つて居る、其外に小さな菓子袋も下つて居て、小供に愛嬌が振りまかれてあります、式が始ると、生徒中から兼ねて用意がありて、

「ヴハイオリン」は誰、ソーロー（獨唱）は誰、或は何年級の唱歌、又は何年級の舞踏、或は何嬢の「レシテーション」（話の復習）或は何某の演説と云ふ樣な工合になつて居りますが、此間此若き小さな仲間が父母に向つて席を作り、椅子を運び、御機嫌を取つて、夫こそ滿腔の熱心と愛嬌を蒔く所は中々賢こく見えて實に末頼母敷く思はれます、而して其の所作が大人らしき態度で、一寸も小供らしくわりません殊に小供等の「ピアノ」「ヴハイオリン」獨唱など、來たら、眞に感心する程のものであります此の式が大概午後三時より始まり四時半頃仕舞ひまして、直に前のクリスマス樹に下つて居る菓子飴の類を生徒に配當し、生徒は之を座に居合す父母等に分配して歸宅致します、歸る時に、生徒は皆教師へ、メリー、クリスマス、ハッピー、ニユウイヤー（樂しき耶蘇の降誕を祝し併せて新年の吉日を喜ぶ）と云つて分れますが、實に其有樣の殊勝なことは、言語に盡し難い程の快感を覺えます。

△中學校に於ける「クリスマス」

矢張り小學校と同じく、秋季休業が、大概廿一日より新年三日迄であるが、中學校は寧ろ小供らしくなく、所謂大人らしき「クリスマス」である、夫れは廿日の朝、學校職員生徒が、一同大講堂に集まりて、校長の「クリスマス」に對する挨拶があり、次で生徒は又校 長職 員に向つて、メリー、クリスマス、ハッピー、ニユーイヤーの祝辭を述べて分れますが、凡てが隨分立派なものであります。

△大學校に於ける「クリスマス」

冬季休業は殆んど前と同樣ですが、又一寸異なつた點がある、先づ廿日に教師等は教場に於ての講義が濟みし時、其等の生徒に向つてのみに祝辭を述べるのである、併し此廿日の朝午前十時より十一時頃迄大講義堂で「クリスマス」に付ての唱歌、及び他の音樂がある、之れには、隨分名高き音樂者が集まる、中々盛なもので、尤も學校内の倶樂部、學舍、社交部等が、大會を開きて役員を改撰し、一緒に晝飯を喰

ると云ふ様な工合で、式は又此等の會に或る名士を招いて、一場の演說を乞ふなど種々の設けがありますが、之等は能く日本の新年宴會、若しくは忘年會等に似て居ると思ひます。

△敎會に於けるクリスマス

以上各學校の「クリスマス」を述べましたが、次に敎會の「クリスマス」は尤も面白い、何故なれば、敎會は之等に就ての大本であるからである、第一其の順序を申さば敎會に於ては、殆んど一月前よりクリスマスに付ての種々の役員を撰んで準備して居ります、例へば寄附金の募集の役員、小供の練習者、小供の保護者、贈物、及び裝飾品の撰擇係客の接待係或は音樂者の組立て係り、餘興係等の類であつて、夫々役員は隨分忙かわしく厶います、御承知の通り、敎會は大概日曜の集りとなつて居りますから、此のクリスマスも亦日曜でなければならぬのが、通例になつて居ります、尤も其日の撰び方は、大概廿五日前後に於て最も其日に近き日曜を撰ぶ事になつております、併し又敎會に依ると、廿五日の晩に致す様になつて居ますが、之れは先づ少ないのである、敎會に於ては此クリスマスの祝日を名づけて、小供の日（チルドレンスデイ）と云ひはやして居りますが、之は畢竟小供だましが主もであるからでありませう。

先づ敎會に於ての式場は「プラットフオーム」即ち演壇には例の「クリスマス」樹の大きな枝があつて、其れに丁度小學校に於ての時の樣なものが下つて居る併し小學校のものよりは最も大きく、又澤山の飾物進物類がある、殊に樹の中には處々に、電氣燈が燦爛と點されて居り、蠟燭の火が烟を吐いて居る處は實に言はれぬ程見事であります、大概の小供は四歲頃から十二三歲迄が前の方に揃ひの白裝束で並んで居り、其後に敎會の日曜學校の生徒が並び、其後が御客であります、其晩の順序は小供の「クリスマス」に就ての演說、談話、獨吟、及び滑稽等である、式は大概七時から、九時頃までの間に行れ、其間にクリスマス樹にある贈物を皆「サンタクロース」と申す

神老が天より持ち來りて、小供に與へると云ひはやして居り、又小供は夫れを信じて居りますから、皆喜んで無上の有難さを感じて配當を受けます、且つ其配當は擬の「サンタクローズ」が出て來て、小供に與へるのであるが、多くの小供は實際それを眞の「サンタクローズ」だと考へて居りますから、一層面白く愉快であります。

△クリスマス、イーヴ

降誕日の前夜即ち廿四日の晩ですが、大概の内では皆親類を集めて贈物の遣り取を致しますが其方法を述べますれば、或る一家の子供達が親に秘密にして「クリスマス」樹を買ひ込み、或る室に据え置き、毎日學校より歸りて後、其樹に裝飾をなし、殆んど一週間計りの間に、立派に造り上げ、其樹には小供等より父母、兄弟、姉妹に與ふる景物が掛けてあります、大概其の品物は靴下の内に入れて、下つて居る又家族相互の間のみならず、親類縁者までも呼び集めるのであります、又父母兄弟より親類へ與ふる品品は、兼てより小供等の手に預けてありますから、皆其樹に下つて居ります、其の親類の打集ひが、大概夜の七時頃である皆其の裝飾や準備の行屆きて居るのに驚くのであります、又其裝飾の立派な計りでなく、澤山色々の景物が諸々方々から集まつて居ります、景物の集め方も、亦矢張り「クリスマス」樹の買ひ方と同じく、極秘密にして、丁度其時に皆父母兄弟、親戚の連中を驚かせる樣な仕向けにしてあるから、實に一種、興味ある「サプライズ・パーチー」即ち滑稽會が出來る、此「クリスマス」の時丈皆家族親戚朋友等の間に景物の取り遣りがありて、此外決して平日にはないのであります、之等は一寸趣味ある事柄であつて、又實に良き習慣であると考へます。

△クリスマス當日

此日は別に左程と申す迄のこともなく、つまり小供が朝早く起きて、玄關の邊迄到來して居る友達よりの景物を拾ひ集めるとか、又は自分の床の中を能くさがして見るとか、何とかで隨分騷いで居ります外

別に珍しき事はございませんが、晝飯には充分の御馳走があり、又親類若くは友達などの客があります御馳走は、彼七面鳥の丸煮である、此七面鳥の御馳走は、余程大したものと思はれて居りますが、又實際其丈の價値があります、何故かと申すと、一人前の分が凡そ壹圓位の割に當り、其他凡ての膳前を計算しますと餘程の高に上るからで御座ります、尤も夕飯は至極質素なもので、日本などで謂ふ茶漬とか又殘りもので、すまして居ると云ふ風で御座ります而して又此の夕飯には、至て家族が少ない、夫れは皆他所に招待されて行くからであります、又此所に一寸記臆して置くべきは或る内では御馳走を夕飯にする事もあるのです。

△贈物及び其の種類撰擇方

前に申しました通り、贈り物の遣り取りは、大概家族、親類中は其前夜即ち「クリスマス、イーヴ」に致しますが、友達間又は其外に遣り取りすべき連中は、大概「クリスマス」の朝、早くから十一時頃迄である、併し又廿四日の夕方より持ち運ぶ連中もあるが、此等の場合には、其贈物が被贈人の手には入らずに、其人の父母兄弟若くは、姉妹の手に入りて、實際は「クリスマス」當日御本人の手に入るのでありますから、贈物の遣り取りの時日は確に廿五日の午前五時半頃から、十一時迄と致して見れば、間違ひないと思ひます。

△贈物の種類

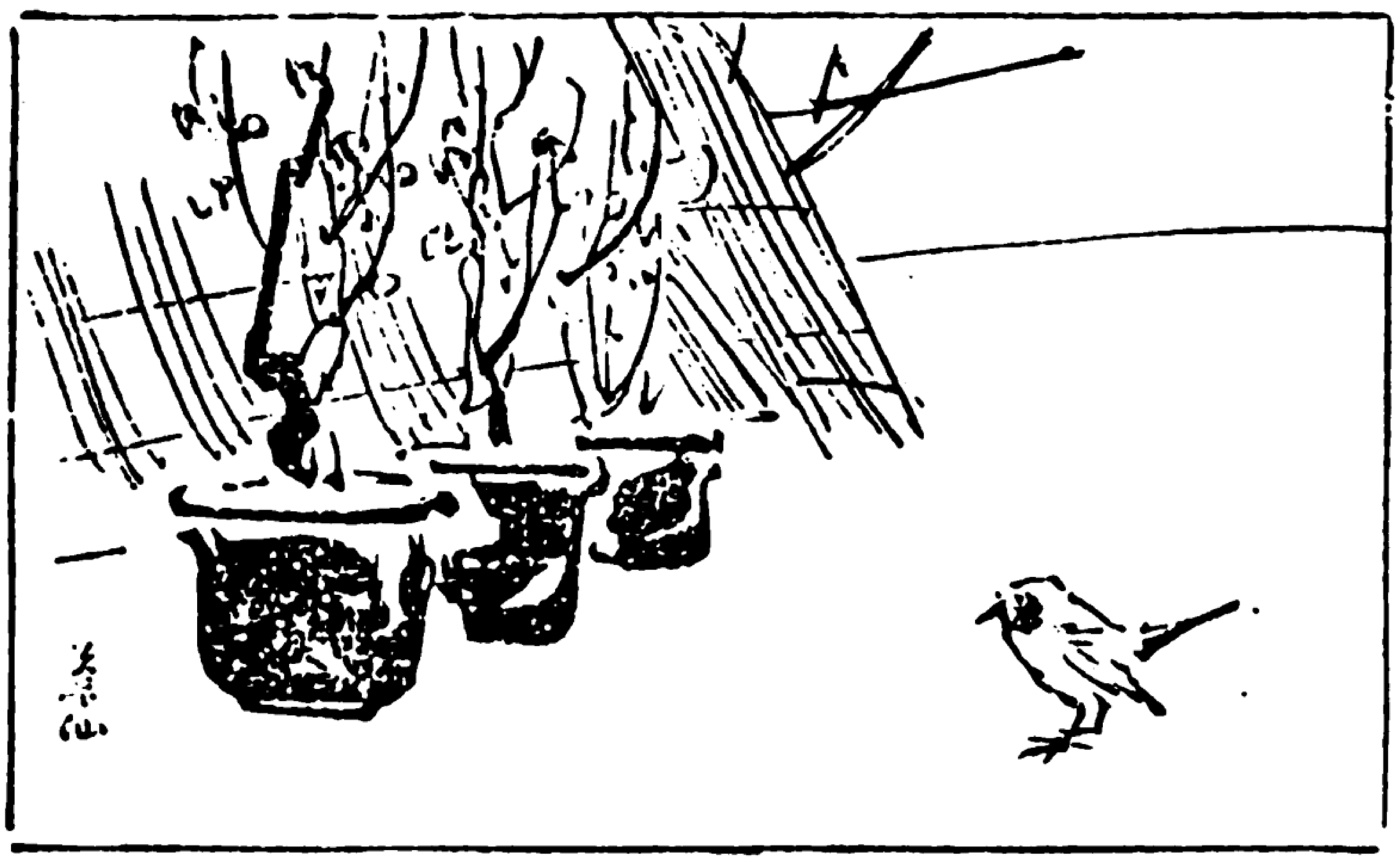
此場合に於ては、父母は其子供の兼て、嗜好と、又將來永く保存して一種の記念となる樣なものを撰びて與ふるのであります、第一女の子へは善き所で「ピアノ」とか馬車であるとか、或は服だとか、靴とか指環とか、或は時計とか云ふものである、併し男の子になると、乘馬とか、書籍とか、運動機械とか、或は鐵砲とか、何とか云ふもので、又或る内にては金子を以てすることもあるが、これは至て少ないのであります。

又小供の方は兼て心掛けて、親から金を貰はずに自

分で金を造り、其れを以て親への進物を買ふのを非常な名誉とし、又斯くなす様に習慣がついて居りますから、種々の方面から、其金を働き出すことに注意致します、親の爲めに使をなし、又は鼠取りをして、一疋五銭位に親に賣りつけるとか土鼠、廿日鼠等ならば一疋廿銭位であつていろ〳〵の方法に依り大概五。弗。位(十円)の金を造りだし、それを以て贈物を買ひ求めます素より其品物の種類は、父親には杖とか、小刀とか、母親には、皿とか、手拭とか、机掛とか云ふものである、又兄弟姉妹に向ても、其通りで、よく注意して、種類を撰擇致します。

△夫婦間の贈物

夫婦間の贈物は、尤も興味が深う厶います、此贈物は皆家内で必要な品でありまして、決して御當人の嗜好を撰ばない、例へば兼て書齋に於て「シエーキスピア」の作が欲しひとか、食堂に立派な皿が入用だとか、馬車にての膝掛が入用であると云ふことを記憶して居つて、夫は妻の方面の家具、例へば皿とか机掛杯を贈り、妻は又夫の方の家具、即ち「シエーキスピアー」の作を贈るとか云ふ様な風で、皆共に家の共產物になるので御座ります。



△許嫁間の贈物

此贈物になりますと殆んど夫婦同様のものである、併し概して指環、懐中時計、首飾、或は衣服の類等である、之れは相方から至極趣考を凝して撰擇を致します、然し此方は、寧ろ其人一人で撰ぶよりも、一家擧て其人の爲に吟味する、又た場合によりては全く本人同志の相談によりて、成り立つことも往々あります

素より其品物は未年の家計上に都合よき物であらなければならぬとしてあります。

△友達同志の贈物

御承知の通り友達の多くは、職務が異り、某は何社へ、又何某は何役所と云ふ樣に分れて居りますからして、織物會社の人は織物とか、馬車製造所の友人は馬車をと云ふ樣に、皆各職務に應じて、贈物を交換致します、併し學友時代の者は、只其形のみであつて、假令へば女學生同志は肩掛、手袋とか、男生は書籍若しくは筆紙の類であります、年の尤も弱い連中は先方の嗜好する菓子類を贈ると云ふやうな例に成つて居ります。

△教師と生徒間の贈物

學校の教師と生徒間は、素より物の取り遣りはありませんが、家庭雇入れの語學、音樂等の先生になると自然何かと云ふ面倒があります、又教師の方に於ても、其通である、これは世間の義理といふものでありませう、其進物は教師の方にては可成其學ぶ課目に就き、其の生徒に必要なるものを送り、又生徒の方にては、大概母親の指圖に依て見定めをして贈るのであります。

△役所及び會社に於ける贈物

諸會社等に於ては、兼ねて其社の利益の配當を以て「クリスマス」の進物とし、又織物會社は反物一反づゝを與ふるとか、新聞社にては、一年分の新聞を無料にて社員に贈るとかにて、皆各事業に應じてするのであります、之等は素より會社からと云ふ樣になりますが、社員は又別に社員同志にて、相當の取遣りを致します、是等は皆銘々の嗜好に應じます。

△新年

米國に於ては、新年と申すものは、誠に淋しいもので、全で或る人は其日が氣につかない位ひのものである、一寸珍しいのは、家族又は親類が打寄て、元日の晝飯を食するとか、又は親戚い振舞にあづかるとか、或は旅行をするとか云ふ位の事で、實に無趣味なものである、新年お目出度うなどの挨拶は迅く

に「クリスマス」の御祝ひに一緒に云つて仕舞ひますから、新年になつても別に新らしく再び言ふことは致しませぬが、併し家族同志は、元日の朝早く起き、新年御目出度を互に云ひかわします、新年につきては、先づ此位ひの事で、外に別段書くことも御座りませぬ。

婦人と流行

リギヨル博士談

俗諺に「流行を作る者は馬鹿者で、流行を逐ふ者は利巧者である」と云ふが、是れ實に穿ち得た言である。

歐洲では當時の流行の何であるかを知るのは、多くの婦人の學問になつて居つて、之を極端まで逐ふのは、殆ど一種の義務のやうに思はれて居ります、是も亦流行の然らしむる所で仕方がないのです。流行後れと云はるゝのは、一世一代の不名譽で忍びきれぬさうです、新形の帽子や衣裳などを着ぬよりは、數週間も飲食せぬ方が宜いと云ふ程流行に熱心な人もあります、是を稱して流行氣違とでも申しませうか。

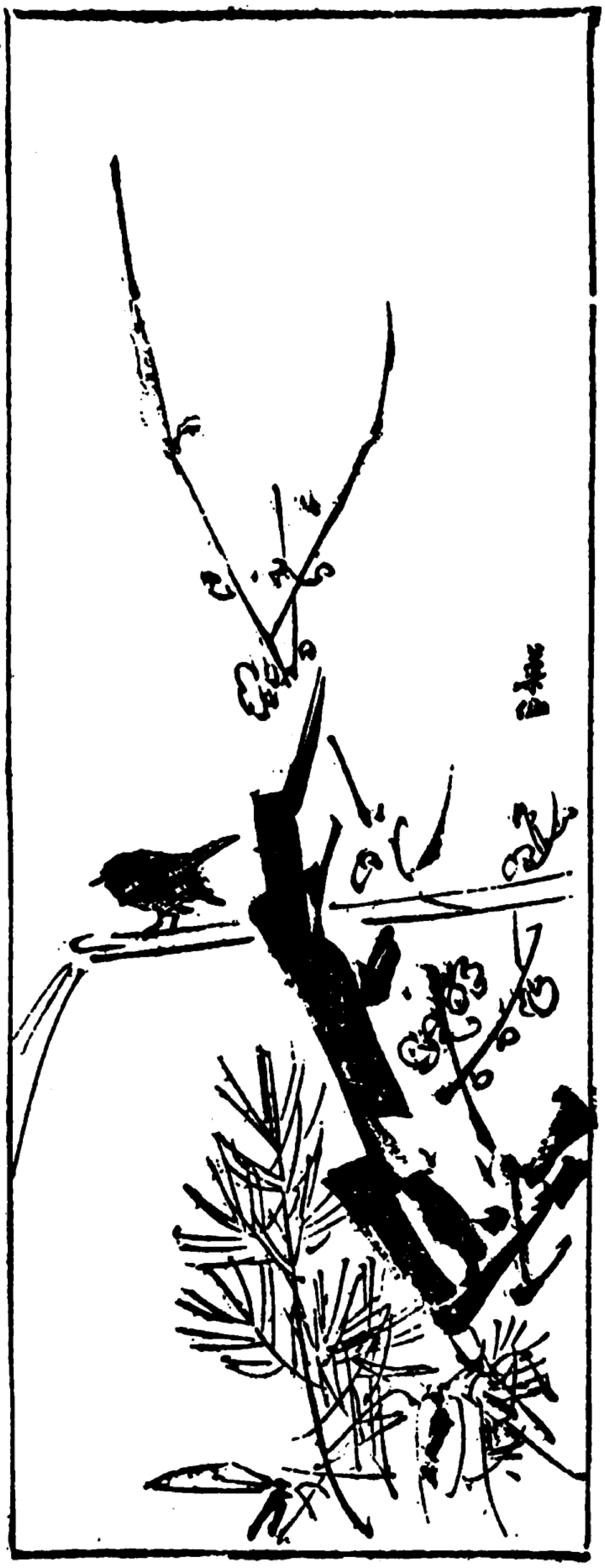
歐米婦人に就て一番可笑く且奇怪千萬なのは、其服裝の如何にも常理を逸れて居る事であります、日本人から見たなら尚一層可笑う御座りませうが、我々西洋人から見ても、矢張可笑い、而し此等女性は美術的觀念の全く無い者とも思はれませんが、但だ其の美術的觀念までが、流行に司配される仕末て、嗜好までが丸で一變したのである。

倩ら考ふるに馬鹿には種々の原因があります、少しく馬鹿哲學の研究をするのも面白いです。

昔は民族の貴族政が天下を治めて居りましたときは、同社會の婦人は常理に逸れた流行の道に依らなくても、立派に目立つことが出來ました、自ら名告りさへすれば、それで澤山であつたのでありますから、概して言へば、質朴であつたのであります、處

が今日では平等主義が盛んに行はるゝやうになりまして、迚も昔の如く質朴にしては人目に立たない、目出たうとするには、どうしても異様な風をして奇妙の體裁をしなければならぬ必要が起つて來たのである。是れが今日の婦人の馬鹿々々しい服装をなす一原因であると思ふ。

のみならず今日では一種の婦人社會がある、是れが時世の寵兒となつて居る、今之れを明々地に名告らなくとも、讀者は早其如何なる婦人を指すかを推知するに難からずでありませう、此社會の婦人は昔の皇后よりも尚一層重要なる位置を



現社會に占めて居る、處で倩々此の社會の婦人の心事言動如何を窺ふに、彼等は己を目立たしめる點に於ては有らゆる方法手段を盡して、手を換へ品を替へつゝあるのである、蓋し彼等は斯くして以て新を逐ひ奇を求めつゝある現時社會に於て、流行を作つた者は吾等である、吾等が其の流行を作つた者であるといふて、それを威張つて居るのであります。

貞淑なる婦人社會にも、時勢に後れぬため、又前記婦人社會の輕蔑を買はぬために、是非斯る流行を逐ふて行かなければならぬと思ふ者が澤山あるので

あります、此種の婦人は此の流行のなげかはしく、馬鹿らしい現象であるを知りつゝ、止むを得ず此の潮流に引かされて居るのであります。
是に於て乎『流行の奴隷』と云ふものが起つて來るので、繊弱なる女人社會は殆ど之に司配されて、其の羈軛を脱することが出來なくなつて居るのである單に奴隷のみならば宜しいけれど、其禍害の及ぶ所を考ふれば、實に寒心しなければならぬ譯である、何せなれば自由を奪ふと同時に、財産をも風俗をも道義をも亡ぼして了ふのであります、此の方面より觀て婦人と流行と云ふ問題は決して美術的の問題ではなく、世の學者、士君子、就中憂世愛國の士の大に注目すべき問題であると存じます。（おはり）

傳染病豫防の心得

醫學士　山根　正次君談

全體衛生といふものは、吾人の生命財産を保護する所の方法である。この衛生に對しては個人の衛生と公衆衛生との區別があるが、傳染病の流行する際に於ては、個人の衛生と公衆衛生と兩方に注意しなければならぬ。平常でもさうであるが、殊更此際には十分に兩方が行屆かないと目的を達する事が出來ないのである。夫れで吾々は何か一番幸福であるかと云と先づ息災延命といふ事が一番幸福なる事と思はれる。然るに吾々は活きて居る所の身體であるから時には病氣と云ふものに罹ることを免れない。而して病氣の中で一番怖いのは、傳染する所の病氣である。傳染病ほど怖いものは世の中に無いのであるがその傳染病には二通りの種類がある。
夫れは即ち急性の傳染病と、慢性の傳染病である。慢性の傳染病といふものは、徐々に國を滅ぼす所の病氣であつて、彼の肺結核を始め、天刑病と稱する癩病の如き、又一般に花柳病と呼べる梅毒、淋病、下疳の如きは即ちこの種類に屬するのである。夫れから急性傳染病は何かと云ふと、即ち法律に規定し

てある所の八種の傳染病である。虎列剌、腸窒扶斯、發疹窒扶斯、赤痢、實扶的里亞、痘瘡、猩紅熱、黒死病この八種が今日我が法律に示してある急性の傳染病である。其他黄熱、インフルエンザ、回歸熱杯といふものも急性の傳染病に屬するものであるけれど、日本の法律には之はまだ加へられて居ない。併し急性の傳染病には違ひないのである。

この急性の傳染病と云ふものは實に怖るべきものである。何故かと云ふと、急性の傳染病が、吾人の生命を奪ふことの急激なる、他に之れに及ぶものは無いからである。世の中には海嘯が怖い、地震が怖いと云ふやうな比較話があつて、地震杯が一度に澤山の生靈を殺すやうに考へて居るけれど、地震でも、海嘯でも、戰爭でも、慘害の度はこの傳染病には及ばないのである。人類の生命を奪ふ上に於て急性の傳染病ほど酷だしいものはあるまい。即ち戰爭で死んだ人の數と傳染病で死んだ數とは何れが多いかと云ふことを調査して見ると、人命を奪ふ上に於ては傳染病が遙に勝つて居るのである。その數は後で話すが、兎にも角にも傳染病は、吾人の生命を奪ふ最も怖るべき敵である。

次に傳染病は、財産の上に如何なる影響を與ふるものかと云ふに、是れまた傳染病ほど財産を奪ひ去るものは無いのである。今一軒の家に傳染病患者が生ずると、早速醫者に掛らなければならぬ。從つて車代が要る。診察料が要る。藥價が要る。其の上に看護を要する。住家は大抵交通遮斷を蒙むる。其家に居るものは仕事に從事することが出來ない。斯かる次第なれば一家に取りて非常なる損害を蒙むるのである。又一軒に傳染病が發生した爲めに、市町村は市町村として經費を要する外に、國家は又國家としての義務を盡さんが爲め檢疫官を任命したり、其他種々なる設備を施さねばならぬ事になる。また一國の經濟の上に及ぼす影響は如何かと云ふと、國に傳染病が起ればその結果外國貿易が減退して來るのである。此に一の實例を擧げて見やう、山梨縣に曾

て赤痢病が流行して一年に萬以上の患者を出し、巨摩郡抔と云ふ處に於ては病勢殊に甚だしかつた。その郡は何の産地であるかと云ふに、彼の有名なる甲斐絹を澤山織出す所である。然るに恰度養蠶の時節に際して傳染病が流行し始めた。元來甲斐絹なるものは絲を取つて織るものであるが、傳染病流行の爲め蠶を飼ふことも出來ず、桑を取ることも出來ず、百姓をすることも出來ないので、肝腎な甲斐絹を織出すことが出來なかつたのである。之が爲め外國へ輸出する所の甲斐絹が非常に缺乏を告げて、その結果、山梨縣の被つた損害高と云ふものは三百萬圓以上に上つたのである。夫れから又斯う云ふ事がある先づ日本に傳染病が流行すると、亞米利加でも、英吉利でも、其他の諸國でも日本の品物を請取ることを嫌ふのである。例之ば茶の産地たる某縣に赤痢病が流行すると、其の茶は彼方から戻される。有名なる日本のハンカチーフも、痘瘡が流行すると外國人が買はない。一旦亞米利加とか英吉利とか云ふ大得意先きで、日本の物品を嫌つて買はない事になると貿易上に非常なる打擊を與ふるは必然である。先年黑死病流行の際には果して如何云ふ狀態であつたか神戸の港には、外國の貿易船が殆ど來なかつたのである。其の間に受けた稅關の損失と云ふものは實に三百萬圓に下らぬと云ふ事であつた。加之ならず桑港へ持つて行つた荷物は復び日本へ送り返されて來た。日本人は桑港邊に澤山行つて居るが、此等の人々が用ゐる醬油だの、米だの、種々なものは、日本から多量運ぶのである。然るに其の食物を陸揚げすることが出來ないので、日本人は彼方で高價な物を買つて食はねばならぬと云ふ不幸を見た。事情此の如くなれば、傳染病が貿易の上に與ふる損害も中々莫大なるものである。又一度び工場抔に惡疫が發生すると、其の工場は先づ交通遮斷を受ける。交通を遮斷さるれば職工を働かしむる事が出來なくなる故に、工場主と云ふものは非常に損害を蒙り、同時に職工等も大に困難を感ずるのである。傳染病豫防

法と云ふもの丶發布されて以來、日本全國にて豫防消毒の爲めに用ゐる石炭酸の量を見よ、一ヶ年百萬圓以下に下らぬのである。實に多量の石炭酸を毎年外國より買入れて居る。之に依て見ても傳染病が尠なからざる財貨を奪去ると言ふ事は一目瞭然であらうと思ふ。又ペストとか虎列拉病とかゞ東京に發生したと云ふ事が新聞に出ると、其の結果は如何であるかと云ふに、市民が被る所の損害は隨分廣大なるもので、先づ宿屋にお客が尠なくなる。又田舍から東京へ出て來て病院抔に這入る人も澤山あるが、東京へ行つて入院治療する中に他の傳染病に罹つてはならぬと云ふ結果、上京入院する患者が大に減ずると云ふ有様である。患者の爲めにも甚だ不都合な次第であるが、之が爲めに被る市民の損害は中々莫大なるもので、獨り旅店下宿屋等のみに限らず、商工業の上にも非常なる禍害を及ぼすのである。

次に傳染病は敎育の上にも甚だしき患害を與ふるものである。若し傳染病が發生して猖獗を極めると、兒童を學校へ遣つて勉强させる事が出ないやうになる。又兒童を學校へ遣る所の家に惡疫が生ずると、其家は交通遮斷を受けて子供が學校へ通ふことが出來ない。先年本郷の或小學校の小使が虎列拉病に罹つた。之が爲め學校は五日間の休業を爲し、且つ交通遮斷をしなければならぬと云ふ事になつて其間閉校したのである。英國は立派な國で、學問も能く發達して、又衛生の事も却々整頓して居る。日本は幸ひ其國と同盟を結ぶことが出來たが、翻つて一方を顧みれば、傳染病が屢次流行して、敎育上に、商工業上に、種々な妨害を與ふると云ふ状態では、實に彼國に對して面目なき次第である。抑も今日は敎育の事業は駸々として進めて行かねばならぬ時代であるのに、傳染病と云ふ障碍物の爲めに其の進歩を妨げらるゝ様では、如何にも遺憾な譯けである。

次に又傳染病が國威を害することは非常なものである。傳染病の流行する國はどうも文明の國とは言はれぬのである。傳染病は野蠻病と稱へられて居る程

のもので、傳染病の流行すると否とに依つて其國の文明の程度が測知られると云ふことである。然るに日本は隨分衛生の事は行つて居るけれども、殘念ながらまだ一般の個人衛生が能く行屆いて居らぬ爲めに、時々怖るべき傳染病が這入つて來て跋扈するのである。是等は必竟一般國民に衛生上の智識が缺げて居る結果であると認めねばならぬ。國に依ては、私の國には傳染病が無いが貴國には流行して居るから、貴國より來る船舶に對しては檢査をせねばならぬと云ふので、無理に海港檢疫を受けるやうな事も珍らしくない。先年山城丸が日本の移住民を乘せて布哇へ連れて行つたことがある。恰度其際に日本で疱瘡が流行つて居つた。夫れで布哇政府は同船を傳染病者を載せて來たものと認めて、檢疫を行ふ爲に其船を港外に繋がしめ、引續いて紛議を生ずるに至り、その結果はどうであつたか。日本の國威を損じたといふ事で、忽ち浪速艦が行くやら何やら種々の騷動を惹起した。然るに布哇は間もなく亞米利加に合併せられたといふ譯で、日本は結局無駄骨を折たのである。さう云ふ工合に、一國に傳染病が流行すると、啻に國威を損ずるのみならず、非常な損害を受けたり、紛議を招いだりするのである。

獨逸國に「ミユーンヘン」と稱へて、彼の有名なる衛生學者ペッテンコーフエル氏の出た處がある。其の「ミユーンヘン」の周圍の下水の良く掃除されてあるのは、一般人民の衛生思想が非常に發達して居る結果で、此處には腸窒扶斯といふ病が發生したことが無いと云ふ程である。大學敎授すらも其病菌を見たことがないので、講義の時分には書籍丈けに就て話をして居る。例之ば腸窒扶斯の症狀は熱が高くなるとか、舌がどうなるとか、頭痛がするとか、盲腸部が痛むとか云ふことを口頭で敎へて居る。さういふ時分に、大學生の中に日本人が這入つて居ると、其敎授等は、冷かし半分に、本症に就て講義をすることはするが、當地にはかゝる病人は無いから、斯ういふ傳染病は寧ろ東洋の方へ行つて研究したら宜か

らう杯と云ふさうである。衞生行政の行届いて居る獨逸と日本とを比較して見ると、日本には黑死病もござれ、赤痢もござれ、疱瘡もござれ、虎列剌もござれ、何でも御座れであるから、醫學研究上には便利であるのだ。是等の事は戲談に過ぎないやうであるけれども、併し衞生思想の發達せざるため惡疫の流行を來し、其の結果國民が種々なる侮辱及び損害を受くることは實に殘念な次第である。(未完)

山根學士の高話中には婦人諸子のために有益なる事項多く此に完結せんことを期したるも紙面の都合に依り過半を次回に譲りたるは記者の特に遺憾とする所なり讀者幸に次號の出づるを待て(一記者)

女子の體格

井口あくり子談

體格の大小は、遺傳に由るもので、親の體格が小さければ、子の體格も小さい、又た之と反對に親の體格が大きければ、隨つて子の體格も大きいのは、自然の規則であります、それ故日本人は、惣じて體軀が矮小であるから、出來る小供も矢張り矮小であるが、米國などの人は、體軀が大きいから、生れる小供もまた大きいのであります、其上に

▲衣食住及び衞生上の關係

が甚だ體育上に影響するのであります、衣類に就いて言へば、西洋服を着慣れたものが、急に日本服を着ると、何だかブク〳〵して、體に締りがなくて自づと不精になる樣な感じがするのみならず、用のない袂や、巾の廣い帶の爲に、肩が下り、胸が迫つて呼吸をするにも、充分に空氣が肺に入らなくて中の掃除が出來ない樣で、ツマリ肺を害ふことになります、近頃女學生が、袴を着けて居るのは、何れの方面から見ても好い事であるが、袴の紐を呼吸の出來ない程强く締めるのは腸に好くないから、成るべく緩くして貰ひたいものです。

▲米國の小供の服

は甚だ簡單なもので、締る處などは殆んどなく、極めて寛かであるから、體軀の發育に至極適當して居

ります、其上衣類は甚だ粗末で、十二三歳位の少女などは、外出する時にも、僅か一枚の着換がある位で、其他は多く木綿ものであるから、幾回洗濯しても差支へなく、日つ自由勝手に運動が出來で、體育に尤も便利であります、然るに

▲食物には餘程注意致しまして、此點は上等社會も、中等社會も粗同一であります、隨つて費用の如きも、衣類に要するよりは、食物の方に費す方が、遙に多いのであります、又た小供が至つて健啖であつて、十歳位の小供でも、日本の普通の婦人よりは、餘程多食致しますが、運動が十分で、消化が好いから、胃病などは更にありません然るに

▲日本は丸で反對



で、食物よりは衣類の方を重んずる、衣類は甚だ贅澤であるが、食物は極めて粗末であると思ひます、尤も食物の粗末なのは、經濟上の關係もありませうが、衣類の方は大層贅澤であつて、幾襲もヽつて居るといふ有樣でありますから、其の幾襲もあるのを、米國人のやうに、一枚か二枚の外出用位に節減して、それを食物の方に廻はして、滋養になる體の爲になるものを喫べるといふ風にしたなら、體育發達上少からぬ利益があると存じます、元來日本の少女さん達は

▲大食すると下品になる

抔と申しまして、强て小食をし、また小食せしむるやうな傾きのあるのは、尤も宜しくないことであります、故に今日の女子はだうか御遠慮なく、出來る丈け大食し消化さして、健全なる國民を作りたいものと存じま

す、それから

▲家屋

の事でありますが、西洋の家屋で、尤も心持の善いのは下水や排泄物が、丁度水道のやうな機關で、奇麗に取除かれて、一寸の間も停らないことであります、ソコで赤痢といふやうな、排泄物から傳染する病氣は、殆んど無いといふて宜しい位であります。誠に羨しいことではありませんか、日本今日の狀態では急に家屋を改良することは出來ませんが、成る丈け清潔を主として、衞生に氣をつけて戴きたいものであります、衣食住は急に改良して、同一にすることは出來ないにしても、

▲運動

は同じやうに行はれる筈であります、然るに小學校時代までは無邪氣に運動もいたしますが、高等女學校以上になると、何だかきまりが惡いとでもいふやうな風で、誠に不活潑であつて、見る者も氣の毒に感じます、米國の女子は、男子と同じやうに、兵式體操をさへ、愉快らしく喜んでやつて居ます、それも若いもの許りではなくて奥さんも、お婆さんも小供の中に混つて、一緒に運動をして居ますので、見る者も自然と面白さに引付けられて、運動したくなる位であります、此の如く熱心に運動するから、氣象も極めて盛んで、耄れるなどといふことは更に無いやうです、ソコで

▲白髮になつても

熱心に學問を研究することが出來るのです、しかるに日本では十二三位までは活潑に運動するが、モー高等小學の二三年位になると、次第に運動を嫌ふやうになつて、十四五歲になると、親達の方から干涉して、運動をさせないといふ風があるやうです、尤もこれは少女さん達の方が惡いので、運動場も、お座敷も同じやうに、暴れ廻るから、動ともするとお轉婆といふものになるのであります、運動と亂暴とは固より違ふて居ますから、お轉婆にならない樣に學校と家庭と運動場とを、それ〴〵區別して、適宜

に運動して貰いたいものであります。（そはり）

女學生の新年

紫雲女史

これは、私の親しきお友達の新山春子孃のことを寫したものでございます。春子孃は明けて十八歳の春を迎へられ、某高等女學校の四年生で、校中でも令聞殊に高きお方でございます。春子孃の家庭は御兩親と令兄一人と令妹一人と都合五人から形造られて居りなするが、今年は令兄勇氏征露の軍に從はれて居られますから、去年とは違ひ、今春は一家四人で屠蘇を祝ふと云ふ次第なのでございます。家族は外に下婢二人を召使はれて居りまするが、春子孃は、まづ、中流以上の淑女と申すべきお方でございます。

▲歳暮の夜

今年も今日を限りの大晦日、初春を迎ふる準備流石に忙しく、彼事も爲了ふせ、此事も成遂げ、兎して角してと、一家實に目の舞ふ位な大混雜でありましたが、やう〳〵其所をも切り抜け泳ぎ付けて『まづ〳〵、これでは、何時お正月が來ても安心だ』と云ふやうに、一家の用意萬端整ひましたので、八疊の茶の間の、電氣燈の光彩かな下に、家族殘らずぐるりと圓座を作して、年越の福茶喫み、福餅食うて、やがて、我も〳〵と相互に、まお宜いお年齡をお重ねなさいまし』などと言ひ代はして、除夜の鐘の音聞いてから、一家は擧つて枕に就き、軈て平和なる夢の人となつたのでございます。

が、春子孃は、何うしたものか、目が冴えに冴えて睡られないので、去年のこと、來年のこと、兄のこと、學校のこと等と埒もなき感想に耽つて居りました間に、何時ともなく、早やこれも平和な夢の人となつたのでございます。

▲起床

初鷄の聲に去年の夢を破つて、春子孃は、褥から拔け出で、先づ寢卷を平常着に着換へ、それから其室の雨戸を徐に押明けますると、早や此時は既う臺所の方にも、それ〴〵準備の物音がして居りました。

で、春子孃は、丁寧に、御自分の褥を疊み、一つ一つ蒲團、夜具、毛布、枕と順次に戸棚へ納め、それから其室の戸障子をすらりと明け放し、暫くの間初春の新しき空氣を迎へるのでございます。平日ならば、これから直ぐに、手拭かぶり、襷や取つて、ばた〳〵塵拂き、さつ〳〵と箒使ふて、思ふ儘奇麗にお掃除なさるのでございますけれど、今日は元日で、而も三ケ日の第一日でありますから、箒持つ要はないので、直ぐ水屋の方へ行き、歯磨き口漱ぎ、顔洗ふのでございます。

▲初日の出

御念入りの洗顔も濟みまして、春子孃はお部屋へ歸へられ、明け放してあつた戸障子を締めやうとして縁側の方へ來られますると、東の空は淡然とオレンジ色に染めなされ、やがては、木立の間から、のつと四斗樽ばかりの大日輪、金色の光美しく放つて差昇り、曉風おもむろに吹きて、まことや瑞氣靉き渡る初春の景色、春子孃は我を忘れて、茫然として打眺めて居りますると、父君正清氏も寢室の障子すらりと明けて、此初日を拜せられ、拍手いさぎよく打ち鳴らして、暫し合掌祈念を凝らされたのでございます。

▲お化粧

初日の出を拜みましてから、春子孃は、三疊のお化粧の間へ行かれ、戸棚から鏡臺、疊紙、一切の道具取り出し、其おつとりした丸顔を鏡に映して、匂ひも床しき桃割を片手に手鏡翳しては、鬢のほつれや、髱のゆるみや、前髪のくづれなどに一つ〳〵櫛目入るれば漆の黒髪一しほ艶々と水滴るばかりでございます。それから、平常は餘り用ひませんが、伊勢吉か何所かの壽美禮白粉を淡く顔から頸へかけて

塗り付け、最後に、暮に銀座の方から買つて來た白薔薇の簪を挿すので、これで全く頸以上のお扮は目出度出來上つたのでございます。

▲お扮裝

お化粧の次はお扮裝でありますが、春子孃は、豫て母君より吩付られてある通りな扮裝に爲るのでございます、即ち、先づ最初に新調の足袋を穿き、次に腹卷、腰卷を取り代へ、それから、綿ネルの肌襦袢、薄紫縮緬の襟の掛つた長襦袢を順次に着、その上へ八丈縞の下着と、わらつぼき銘仙の綿入とを着、それから鶯色の博多の帶、紅ぼい背負上、繻珍の帶留を締め、最後に巴の三つ紋置いた藤色の紋羽二重の長き羽織をすらりと着流すのでございます

▲屠蘇の祝

十疊の座敷の床の間には岸岱の雙鶴の對幅を懸けその前には、鏡餅を飾り、その横には、寒紅梅の鉢植を置いてあります。違棚には、令息勇氏の寫眞を飾り、その前には小さき盆に鰹節二本を載せたのが置いてあります。

やがて、召使の下婢は春子孃の母君の吩付に從うて、家内一同の膳部を整へて、お座敷へ順々に運びます。春子孃も亦、是を手傳うて、手づから令兄勇氏の蔭膳を拵へて据えるのでございます。

で、膳部は床の間を正面にして兩側に、即ち緣側の方には父君と母君と並ばれ、その間に桐胴の火側一個他の側は即ち春子孃と令妹靜子の君とで、矢張り、其間には桐胴の火鉢を置いてあります。そして眞中には紫檀の大盆に、瀬戸の重箱(これには、數の子、豆に照鯷、密柑に蒲鉾、大根、胡蘿蔔、昆布の三杯酢等入つてゐる)蓋物(海鼠、この綿等入つてゐる)其他杯洗、盃臺、割箸等の載つてゐるのを出してあります。

まづ、第一に家内相互に「お目出たうございます!!」と祝ひ代し、それから主人公の父君が銀盃木皿等の重ねてある杯臺を引き寄せ、其上なるを取られますると、母君綾子は慰斗付いたる銚子で屠蘇酒

を注がれまする。其盃を順次に廻して、お互に屠蘇を祝ふのでございます。が、春子嬢は御自分が祝ふ前に、まづ令兄の寫眞に盃を据えられ、屠蘇を献め、それから御自分が祝はれますのでございます。

父君は普通の御酒を飲み初められて、さも〳〵愉快げに打ち語られて居られまするが、春子嬢も靜子嬢も元より何時迄も酒召さるゝのではありませんので、まづ、何よりお樂みのお雜煮餅を祝はれるのでございます、そして、これも濟んで了つて、また、福茶を飲まれまするので。



▲初刷と追羽子

お雜煮餅に滿腹になられました春子嬢は、玄關の方に行かれますると、丁度其時、新聞の初摺が二三種來ましたので妹樣と共に其繪附錄を較べて、右や左と批評したり、いゝ、ぽんち繪に笑ふたりして居りますると、

やがて、妹君の靜子嬢は思ひ出したやうに

『姉さん、羽子突きませう！』

と、小首を傾げて云ひますると、

春子孃も、いゝいゝ、にっこりと笑ひながら、
「お〻突きませう。」
と、一も二も無く賛成しましたので、靜子孃の喜悦一方ならず、
「さあ、行きませう！」
と、我れ先にと玄關の方へ走せて行き、二つ三つの羽子と羽子板二本とを持つて、春子孃を待つて居られます。

やがて、此親しき姉妹の二人は、門内の廣場で、羽子板振り上げ、突きつ、追ひつ、輕袖舞ひ、紅裙翩り、恰も春の花野に雙つの蝴蝶が繚亂として打ち戯むれるかのやう、喜ぶ聲、笑ふ聲、春は此所にも湧き出で〻、何處に戰爭のあるとも知れず、さてもさても有難い、長閑な聖代ではございませんか。軒の雀の囀る聲は千代八千代、隣家からもヴハイオリンの音、その樂譜は、君が代。

▲年始狀

追羽子に夢中になりて居られました靜子孃は元よりのこと、春子孃も學校で、庭球の競爭でもしたほど疲れて、まづ〳〵一休しやうと思つて居ます所へ父君呼れましたので、春子孃は早速お屋敷へ行かれまするると、父君は悠然と大火鉢を控へて大胡座、新聞披げて、黑文字口に啣へて居られます、そして其室へ入り來る春子孃を見られまして、
『オイ、春や、いま是れ丈來たが、皆、出さない所ばかりだ、後刻に出して置いてお呉れ！』
と、座右にあつた七八枚の年始の葉書を差し出されました。
『ハイ、早速出して置きませう』
と、春子孃は細やかな双の手を出して、是を受取られ、葉書を檢めまして、
『オヤ、まあ、さ樣でございますね、此方から出した所は一つもございませぬね。』
「お、例年さ樣なんだよ。」
と、云つて、朱を濺いだやうなお顏を上げて、莞爾と笑はれました。

そこで、春子孃は父君の机の上にあつた葉書を七八枚取りて、御自分の書齋に行き、墨色美しく、丁寧に認め・父君の検閲を受け、自ら、程近い郵便函へ持つて行かれるのでございます。

▲初刷の雜誌

それから間も無く、春子孃は母君の命令により靜子孃と御一緒に、程遠からぬ通りの繪草紙屋に、行かれました、これは何所かへお年玉にする爲に壽でろく、お伽草紙などを求めに行かれたのでございます。そして其歸途に二人は平日行く所の進文堂といふ雜誌店の店先へ立ち寄られ、初刷の色美しき表紙が山の如く堆高く積んであるのを、彼を見、此を見して靜子孃は遂に少女鑑といふ雜誌一册、春子孃は何時も通り女鑑一册と外に女生日記一册とを購ひ求めて歸られました。

▲晝食

晝食になりましても、春子孃は、今朝のお雜煮の過ぎたと見えて、母君に向ひまして、

「母樣、私、お腹が一ぱいですから、お晝飯は頂きません。」

と、云ひますると、母君は

「あ、さう、ぢや、食べなくとも宜いがね、、、ちよつとお膳に向うて、眞擬をして置きなさい。」

と、笑ひながら云ひますると、春子孃も亦打ち笑はれて、

「母樣、ほんとに、澤山なんですよ。眞擬どころぢやござりませんよ。」

『だつて、お前食べなくても宜いのよ。三度の御飯と云ふものは、日本の風で、これはちやんと定つて居るものだから、たとへ、食べなくともお膳に向ひさへすりや宜いのよ。此定つた事を定つたやうに仕ないと、萬事が物が不秩序なる……別けて此の元日と云ふ日から其樣な定りのないことを爲ると、今年一年中定りの無いことになるから、まあ、飯時は時してお膳に向ふが善いよ。食べなくとも宜いから……。』

と、母樣はいと穩かに、懇に說き聞かされましたので、春子孃も「成程」と自ら首肯かれまして、

『ハイ、分りました。』

と、快く答へて輕く晝飯を濟ましました。靜子孃も是れに見倣つて。

▲訪問＝御年始

晝食を終へましてから、春子孃は母君の許可を得て、最も親しきお友達の梅田薫子孃を訪ねました。親しき間の事とて薫子孃は甚く打ち喜んで、此賀客を迎へ、早速御自分の書齋へ請じまして、

『春子さん、新年お目出たうございます。』

『ハイ、お目出たうございます。』

と、相互に、疊へぴつたり兩手を突いて、まめやかな御挨拶。

春子孃は、まづ徐に口を開かれて、

『まあ、薫さん、宜いお正月でございますね、お天氣は宜うございますし、暖ではございますし……。』

と、云ひますと、

薫子孃は是を受けて、

『ハイ、珍らしいほど宜いお天氣で、實に結構でございます。』

と、細そりした面を上げて、にこやかに微笑まれました。

薫子孃とは矢張り同年輩で、目鼻立の美しく、氣品の賤しからぬ婦人で、頭髮は束髮に水仙の簪、扮裝は矢張り紋羽二重の紫の羽織を召されて居られます。

そこへ、召使が、お屠蘇と御馳走などを運んで來ましたので、春子孃は

『薫さん、もう、何にもお構ひ遊ばして下さるな……。』

右手をちよいと上げて制するやうにすれば、薫子孃は、稍々顏赧らめ、

『いゝえ、何にもお構ひは致しません、唯一寸、お屠蘇を召し上つて下さい。……ナニ頂きません？

「まあ、そんな事を被仰らずに……。」
と、屠蘇杯を薦めますると、止むことなく、春子孃は杯を取つて、差し出しながら、
「それぢや、ほんの眞似をなすつて……。」
と、云ふ。
薫子孃は銚子を臺に置いて、
「春子さん、何にもございませんけれど、どうか召し上つて下さいまし、お正月は何所へ行つてもオホヽ、皆同じやうなものばかりですけれど……
やがて、二人は、學校のこと、友達のこと、問ひつ、問はれつ、元より酒興などではありませんが共に笑話の人となつてゐましたが、折柄、下婢が襖徐かに明けて顏ばかり出し、
「お孃樣お葉書が參りました。」
と、云つて、二三枚の年始状を置いて去りました。
薫子孃は是れを手に取りて見ますると、何れも彩色美しき繪葉書、春子孃の手に渡して、
「竹村さんからよ。善い繪葉書！」
「えッ、竹村さんから？」
と、春子孃は葉書を見ながら、
「字が御上手ね。」
「あ、御上手ですよ。」
と、輕く。
すると、やがて
「この藤井照子さんは誰？」
と、春子孃が訝しげに尋ねますると、薫子孃はにつこりとして、
「知らなくつて？、春子さん。」
「ハイ、知りません。」
「知らないのでない、分らないのだわ。」
「どうして？」
「川越さんが……」
と、聲高に笑ふ。
「あら、川越さん？」
と、春子孃も亦笑ひつゝ、なほも、
「お片付きになつて？。」

「お、さうなのよ。」
「左様ですか、私、ちつとも存じませんでした。何でも卒業なすつてから、京都とかへ行かれたことは、貴孃からお聞き申して居りましたけれど…。」
「え、京都から歸つて來られてから直ぐ川越三郎といふ會社員の所へお片付になつたの……」
「なんでも、貴孃のお友達で、照子さんと云ふのは藤井さんばかりと思つて居ましたのに、川越としてわりますから、一寸、私、不審に思ひましたのよ。オホヽヽヽ」
「お、そりや其樣でございませうよ。オヽホ…」
と、二人は又も打笑はれましたが、目出たき今日の日の笑聲は何につけ、彼につけ起るのでございました。
戸外には羽子の音、凧の聲

▲夕食と就寢

春子孃は薫子孃の所を日暮前に辭して歸られ、夕食を濟して後、又も、父君や御自分の年始狀認め、また雜誌などを見たり、また靜子孃と遊んだりして其夜は入浴して、早く枕に就かれましたが、連日の疲勞の出ましたのか、忽ちすや〳〵と眠り、極めて平和な夢の人となつたのでございます。(をはり)

刺繡

上村百世子

平糸及び撚糸縫ひ方

蕊

蕊、是は先づ花から縫ひ始めます、花の縫ひ方は前に平糸の練習の折に申ましたけれども、繰り返して申ます。第一圖に示したる如く、半分づヽ縱てに縫ひまして、能く五瓣共眞中の一點に集合する樣に縫ひます、瓣はなか〳〵先きの方が丸く縫へぬもので有ります。縫ひ樣が惡いとクチナシの花の樣に成りまして梅の花に見えぬもので御座いますから、一針ごとに注意して縫ふ樣に致します。蕾は小なるを第

二圖の如く横に丸く縫ひ、大なるは次に示したる如く横に縫ひ、次にはすに縫ひます、次に枝、是は紫が丶ッたねず色の糸で太き枝を致します。此の糸の撚り方は、出し合の中より三すが程取りまして其三すがの糸は撚らずに外の糸を右撚りに致しまして、前の三すがの糸と一所にして撚ります、是を片撚りと申ます、此糸を使ひまして枝の上の方から第四圖に示したる樣に縫ひ、次に五圖に有る如く前に縫ひました針目の所より糸を出し、さし縫ひに致します、細き枝は草色で割り合せか或は出し合せにして、まつり縫ひに致します。次に蕚を付けます、是は六圖に有る如く縫ひ、枝に附け、にほひ、、、を入れます、次には枝にさびを附けます（是はサカラを縫ひます）次に鳥の縫の方で御座います、先づ鳥の形を書き、是を切り取り、枝の上にのりで付けます。第一に羽からいたします。糸は草色のかま糸を割り合せ（細そ口なれば出し合せ）にしたるものにて、七圖に示したる如くはすにまつり縫ひに致します、次を八圖に有る如く縫ひます。是は前のよりも針目を長くして成る可く勢のつく樣に縫ひ、次に腹を白かまで横に下引き、菱掛を致します、足を縫ひますにはねずみのかま糸を三すが合せに致しまして、文鳥を縫ひし通りにまつり縫ひに致しまして、九圖に示したる如く黒の二すが合せの糸で引掛ます。次に尾を割縫に、羽の糸と同じきもので縫ひ、白かま糸を二すが合せにしたるものにて毛掛を致します。能く嘴の所に集る樣になびきのまがらぬ樣に注意して縫ひます次に脊から頭を縫ひます。是も矢張り草色のかま糸で下引き、菱掛をいたしまして、縫ひます。糸は羽を縫ひました糸よりもすこし淡き色で二すが合せにして毛掛をいたします。第十一圖に示したる如くで御座います。次に嘴をねずみのかま糸割り合せで圖の如く縫ひ、次に目を入れます。是は黒かまにて縫ひ、其外側に金糸を綴じ附け、次に黒かまの二すが合せで斑を縫ひ、次に肩を二すが合せの草色でまつり縫ひに致します。花の色は白でも鴇色でもよし。


第一
第二
第三
第四
第五
第六
第七
第八
第九
第十尾ノ縫ヒ方
第十一


御用 諸學校
體操器械
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No.5 Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
S.A.
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、八八〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
謹賀新年
東京神田裏神保町五
S.A.安藤商店
体育用品
電本484
御用 體操器械
ピンポン改良室内テニス（旅行用）
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、二三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル上等一臺拾参圓 並等一臺九圓半
號大人用
テニス用ラケット一組
一號大人用 一三、〇〇〇
二號同 一一、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同 五、七〇〇
七號同（小學用） 四、七〇〇
婦人用（一號） 六圓
同二號 七圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾参圓参拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
テニス組一張一、七五〇ヨリ二、九五〇迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

新奇發明 增酒資料（さけふやすもと）

壹斗の清酒は即座に倍增し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり
（附錄）腐敗酒直し法、味淋酒醬油參倍增法、

速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案內……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に腰せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……（當館は去廿壹年の創立也）

發明元祖 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艷美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やく下し 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症） 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事（電話下谷五四六番）

以上貳藥專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**



日本女子大學校御用
共立女子職業學校御用
各女學校御用

謹賀新年

造花材料
造花器械
造花用繪具各種
摘ミ細工原料
花簪原料
根掛原料
刺繡原材料
和洋りポン各種

天野卯兵衛商店

電話浪花一六四三番
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地

恭賀新年

●英國倫敦市バーゴイン會社特製品

日本東京顯微鏡院長遠山醫學博士證明

ゾータル消毒劑

本品は石炭酸に比し十倍
以上の効力を有す

本品は歐米藥學界に於て無上の稱讚を博せる嶄新大發明有効卓絕の殺菌劑にして試驗の成績に依れば抵抗力最强盛なる脾脫疽菌芽胞に對し石炭酸五％(廿倍)溶液は十二時間にして尙ほ其効を奏せざるも本品の同溶液即ち二十倍のものは一時間にして殺菌の効を奏せり而して本品は幾多消毒劑の如く皮膚粘膜に刺戟を與へず且疽腐蝕性を帶びざるが故に昇汞又石炭酸其他の如く衣類器具金屬類に損傷を生ずることなく使用上不快を覺へず清潔にして價格低廉なり要するに本品は衣類寢具を初め便所、下水芥溜、床下、勝手其他不潔に陷り易き場所及痰壺灰吹は勿論病院、避病院、傳染病患者用具一切幷に汽車、汽船、養蠶室、牛馬牧舍其他總ての消毒用として使用せば傳染病の憂ひなし

高尚優美歲暮年玉用

ゾータル石鹼

本品はゾータル殺菌劑に馥郁たる芳香料を配合して精製したる化粧藥用衞生的石鹼にしてきめを細に色を白くし一切の皮膚病を根治し且傳染病を豫防する一擧兩得無類の石鹼なり市內は勿論各地有名なる小間物化粧品藥店にて販賣す

●米國紐育市プレザーバリン會社特製品

ハイゴース髮洗粉

本品は米國貴女界に於て非常に珍重せらるゝ洗粉にて頭髮の艶をよくし衣類其他一切の油垢染を除去することゝ實に驚くの外なし尙本品を使用する時はふけを起さず常に精神爽快を覺ゆるなりゾータル石鹼同樣各小賣店にて販賣せり▲尙特約大販賣希望者は御申込あれ

發賣元 東京市日本橋區本石町四丁目 甲斐商店藥品部

飲食物の話（一）

磯部武者五郎

今家庭日用の飲食物の重なるものにつき、ざつと話を致すべし、先づ酒より始めん、

（一）酒の種類

大別して日本製の酒、外國製の酒とす、（此の分類は科學的にあらず、只便宜の爲め、土地を以て區別せるのみ、）

日本製の酒には

清酒、濁酒、桑酒、養老酒、保命酒、梅酒、紫蘇酒、味淋酒、泡盛、燒酎、白酒、

外國製の酒には

麥酒、葡萄酒（白又は赤）ポルト酒、セリ酒、三鞭酒、コンニヤクラム酒、ジン酒、ウイスキー、リキユール、其他の火酒、果實製の各酒

以上の種類なり、此の中にて日本製の各酒は大概日常家庭に使用する者故其製法の概略、成分、産地の重なる名、及製出の時代等を略記すべく、外國製の酒は現今本邦に重に輸入し來るものに付き其の製地成分等を略記すべし、

日本製の酒

清酒製法は白米を用ひ、麹種を加へ適當の温度を以て醗酵せしめ、アルコールを生ぜしめ、水を加へて後大釜にて温め、バクテリアの類を殺滅して精酒となす、之を樽に入れて貯へ置く、大抵秋より翌年の夏にかけて作るなり、

成分は水分十分の八以上『アルコール』は十分の二位にして西洋酒に比すれば『アルコール』少き方なり、

産地は攝津の灘、西宮の産を以て最良とす、是れ恐くは醗酵に關する氣候と、水質の良好なるに由るべし、其の他尾張の知多郡邊、和泉の堺邊にて造るを佳味とす、尚京都、越後、上總、甲斐、信濃、常陸等にて造るあり、又其地方のみにて使用するだけの量は各地にて釀造せり、

我邦にて酒のありしは神代の昔素戔嗚尊が八岐大蛇を退治せられし時酒を槽に湛へて大蛇の來るを侍ち給ひしこと見えければ其の古きこと知るべし、上古酒を「カミ」といへり、米を口にて嚙碎きて之を吐き出して醗酵せしに因れり、又「カミ」を約めて單に「キ」ともいひ、更に之を貴びて「ミキ」(御酒)といへり、而して今の淸酒の釀造は文祿慶長の頃に始り、攝津の池田伊丹邊にて始めて製出したるものなるべし、

濁酒、多くは農家にて自家使用に造りたるが、今では下等の社會の飲料として製造するなり、其の製法は淸酒と異ならず、只粗造にして澄淸せず、固形分多く交り居るなり、

成分は淸酒の如く良好ならず一種「フーセル」油といふを含むこと多ければ多量に飲用すれば腦を病ましむるなり、但淸酒には「フーゼル」油無し、

桑酒　製法は糯米麹燒酎に桑根を交ぜて造るなり、成分は「アルコール」量先づ少き方にて糖分を含有せり、丹波國の名產なり、

養老酒　製法は桑酒と大差なかるべく、其の成分はやはり「アルコール」少く、而して糖分は多量に含有せり、美濃國の產なり、

保命酒梅酒紫蘇酒　製法は多くは糯米燒酎を本として甘味を附け、又梅、紫蘇等を加へなどしたるものなり、故に成文は「アルコール」量稍多く、糖分は多量なり、各地に於て釀造す、重に中國邊の產が良しとす、

味淋酒　製法は白米糯米を用ゐ麹を調和し燒酎を加へて製す、成分は「アルコール」量稍多く糖分最も多し、產地は下總流山を以て最佳とす、其の他下總各地、利根川の沿岸大阪地方、尾張、越前等にて釀造するものなり、

製出の沿革は元祿頃より始りたるが如し、

泡盛　白米又は粟にて作りたる酒を更に蒸溜したるものなり、其の成分は「アルコール」多量を含有せり琉球の名產なり、

燒酎　清酒を蒸溜したるものなり、「アルコール」最多量なり、本邦各地にて製造す、

白酒　糯米を蒸して之に味淋を加へたるものにて頗る糖分に富み、又澱粉をも含有す「アルコール」の量は少し、到る處製造し三月に至れば各自の家にても造る人あり、

外國製の酒

ビール　ビールは麥酒とかく如く大麥を水に漬けて麥芽を作り、之を醱酵せしめて造るなり、成分に水糊精「アルコール」炭酸等を含み「アルコール」酒類の中にて最も少量のものとす、重に獨逸にて製造し、其の他英國、米國、澳太利、白耳義、佛蘭西等にて製出す、日本にても近來追々製造して今や佳良のビールを得るに至れり、其の重なるものは「エビスビール」「朝日ビール」「麒麟ビール」「大黒ビール」「淺田ビール」「札幌ビール」等なり、

ワイン　これは葡萄酒のことをいへり、葡萄酒は葡萄の搾り汁を醱酵して製造するなり、赤白の二種なり、赤葡萄酒は果皮と核とを取り去らずに醱酵せしめ、白葡萄酒は之を去りて醱酵せしむることなり、成分は水、アルコール、糖分、鑛物質、酸類にして、アルコールは稍多き方なり、重に佛蘭西にて釀造し其の他伊太利、西班牙、澳太利、土耳古、希臘等にて製造す、日本にては山梨にて重に製造す、

ボルト酒　葡萄の液汁にて製す、成分は葡萄酒に異ならず、葡萄牙にて製造す、

セリ酒　果實に「アルコール」を混じたるものなるべし、成分は「アルコール」量稍少し、西班牙にて製造す、

三鞭酒　菓實葡萄を醱酵しそれに炭酸瓦斯を加へたるものなり、アルコール量は少く、炭酸、酸類、糖分を含有し、清涼甘味にして人の口に適す、重に佛蘭西にて製造し、獨逸、英國にても造る、

コンニヤク　葡萄酒を更に蒸溜して製す、成分は「アルコール」尤も多く、少許の糖類、鑛物質を含有す、佛蘭西のコンニヤク市にて造るを以て此の名な

り、其他獨逸伊太利墺太利等にても造る、此の酒は火酒(ブランデー)の重なるものなり、

火酒の種類にはウヰスキー、(大麥より製す)リキユー等の火酒及び「ラム」酒(甘蔗汁より製す熱帶地方の産)

ジン酒(松の一種なる樹の實より製す、英國獨逸にて製す、)又馬鈴薯、櫻實より製したる火酒等あり、何れも「アルコール」多量なり、

此の外に梨子林檎、苺子等の果實を用ひて製したる酒あり、之を果酒といふ、其の成分は「アルコール」は少量にして糖分、酸類を含有せり、

酒の種類は大畧以上の如し、良否の鑑別と、其の効能、害毒とは次に述ふべし、



四季の臺所(六)

中川雪枝

▲一月

祝膳

豐太閤は支那の大國をも鵜呑にせられんとしたる英雄に似もやらず、凡そおもしろきは小鍋立といはれしとかや、されば後には雪のふる朝をあしらひて、端唄の材料ともしたりき、まことに臺所のことは、心を用うれば趣味のあるものにて、殊に年のはじめの膳の上、一しほ心も引立つなるべし。

一月は松の内の祝膳に、元旦の其材料は去年求めたるものゝみなるをかし、

『酒』まづ屠蘇を參らするなり、

『下物』數の子、小殿原、煮豆、

『吸物』たら昆布、

『雜煮』燒餅、里芋、小菜、六角大根、昆布、花ぶし等、

『膾』大根、人参、牝蠣、鯛、
『汁』つみいれ、青菜、
『平』鯛、竹輪、長芋、慈姑、青菜、
『燒物』鯛、

祝膳の魚はすべてめで鯛を用うる方めでたし伯爵柳澤家にては、この祝膳に、『おかん雜煮』といふ献立あり、材料は、湯餅、衣かつぎ、五分切牛蒡輪切大根なり、其所因は、その昔、一月元旦、同家の祖先出仕の際、時間切迫せし爲、定例の雜煮間に合はず、其際召仕のおかんといへるもの、氣轉にて芋大根の皮をむかず、これらを有合せの味噌汁に入れ、餅を加へ、眞の雜煮をこしらへてすゝめたるに、其の際立身せられたるを以て、爾來例となり、今に至るも必ず祝膳の數に加ふるに至り、おかん雜煮と呼ばしむるよし、めでたき話ならずや、



東京にて多く雜煮といふは、眞汁に燒餅、それに青きもの、念の入りたる所にて半平位入るゝもの通例にて、就中菜の味噌汁に餅を入れるなどありて、以上雜煮の名にそぐはぬやうなり、

當世風の家にて、元旦は鷄肉雜煮、二日は牛肉、三日は豚肉、それに一趣向するもあり、この方がまことに御馳走のやうに覺ゆ、

雑煮は三ケ日祝ふもあり、七ケ日に續くるもあり、十一日を帳祝ひとし、これに十五、十六兩日を繼足すもあり、

七日には七草雜煮と稱し、春の食草七種を撰び、それを材料として餅を加ふるが本式のやうに覺え、其前夜取揃へたる七種を俎板にのせて、庖丁の背にてそのあたりをたゝき『唐土の鳥が、日本の鳥が、飛び渡らぬうちに、なんな七種、芹かち〳〵』など歌ひ興ずるに至つては、尤も趣味ふかく感せらるるなり、東京にては、此の日多く粥雜煮を祝ふやうなり、

十一日は小豆雜煮が通例なるべし、

献立の一例

『本膳汁』車海老のつぶ切、調布、芹、大根、或は赤味噌にて大根に獨活などもよし、

『同　鱠』燒きじ、白魚、早蕨、栗、せり、生姜或は鯽、木くらげ、獨活のあへなま酢、

『同　壺』中みそにて鮑やへなり、木くらげ、或は鯛のうす身、鯨、慈姑、牛蒡、

『刺身』白魚、鯏、からし或はいり酒にて比目魚に、、くらげ、

『燒物』海苔卷蒲鉾、氷りじほ、

『平』魚類の摺身、氷豆腐、芹の柚子煮、

『茶碗盛』花がつを、しんじよ、青菜、人参、大根等、

『大猪口』奈良漬、瓜の辛し和、

板の上

『大根』前號の外の料理を少しばかり、

△乾瓢卷　大根の皮を剝ぎて、湖く輪切にして酢と味淋と調和したるものへ漬け、山葵のおろしたるものを少し卷込み、そを乾瓢にて結び、再び前の二杯に漬け、よき程を見はからひて、其まゝにてもよく輪切にして皿に盛るもよし、昆布卷の如くにて、一月の馳走には殊によし、

△酢あへ　皮を取りて千六本におろし、少しく酢と醬油を加へ、半煮の時胡麻の煎りたるものを加へて

掻交せ、そを更に煮上ぐるなり、
△刺身のつま　大根を縦に幾枚にも切り、そを並べて、同じく縦に糸の如くに刻み、水にしたす、成るべく細くして、まんべんなきが手際なり、
△汁の實　千六本に切るが通例にて、大根を縦に二つ切り、銀杏の如くに切り回はし、小口より薄く切りて體裁をつくるも妙なり、梅の花、櫻の花、そは隨意なれど、味噌汁は眞汁の如く手際もさほどの甲斐なきものなり、
△酢いり　大根の皮を剝き、小口を隨意の花形などにして薄く切り、薄鍋に酢へ醬油味淋を少許加へたるものを煮立たせたる中に入れ、手早く掻き回はして煮上ぐるなり、これは頗る加減ものにて、手際よければ、頗る氣の利きたる料理となるなり、
『蕪』　これは大根に似たるものにて、刺身のつまにも、澤庵漬にもならねど、大に大根に優るものあり
△ふろふき　すべて大根の仕方と同じ、たゞ一種の風味ある爲に、味噌の代りに鳥の肉を切り込みたる煎卵などかけたらんには、頗る上等の料理となるなり、
△よせ煮　これは大根と異り、其葉茎ともにやはらかなれば、茎また葉とゝもに刻みて、ザッと湯煮し油揚を加へて、味汁醬油にて煮揚ぐ、稲荷祭に因みて、これ宇賀煮と呼ぶよし、
『胡蘿蔔』　たゞ煮しめては、あまり好味の食品ならねど、其色のよきと、また一種變りたる風味ありて献立にはまた缺かされぬ品なり、
△白あひ　のことは前號に記したればいはず
△酢漬　皮を剝ぎ、花形に切目をつけて、小口より切り、酢と味淋に浸し置きて食す、大根を加ふれば色どりもよく、風味もよし、
△刺身のつま　大根の如くにし、大根と色わけにすれば殊によし、
『牛蒡』　胡蘿蔔を女とも見れば、これは男ともいふべきか、いさゝか其の調理法を、
△たゝき　牛蒡を鍋に這入るほどに切り、糠を加へ

て柔かくなるまで湯煮し、よく洗ひてそを俎板の上にて鍋の蓋などにて押つぶし、適宜に切りて、例の如く味をつけて煮るなり、

△酢漬　右の如くたゝきつぶしたるを、酢の中に入れ、それに煎胡麻などかけて食す、

△副味　前記つぶし牛蒡は、蒟蒻をあしらひて鳥肉と〻もに煮、刻み牛蒡は小魚と〻もに、又この月は小殿原と〻もに煮、そ〻がし牛蒡は鱒汁、鱒鍋、鯨汁、鳥鍋などに加へて妙なり、

『この期に材料多きもの』生鮭、伊勢海老、生鱈、野菜にては葱、大根、蕪、胡蘿蔔、牛蒡、芹、

對膳の注意

この月には改まりて御馳走になるべき時多かるべければ、いさゝかその作法に就て心づけるものを記さん、云はれて氣付くをかしさもあるべし、

◎うけ吸　汁、吸物などを給仕より受取りたる時は一たび椀を膳に置き、更に取直して口にすべきを、受取るや否や、そのまゝ口をつけるをうけ吸といひはなはだ見にくきものなり、

◎膳ごし　膳を隔てゝ向ふに置けるものに箸をつけんとする時は、まづ手許によせ、しかして賞翫すべきを、膳ごしに手を伸して引物などを荒す、殊に婦人がたには、

◎置のみ　汁また湯茶を吸ふには、一度右の手にとり左の掌に移し、右の手を添へてすべきを、高き膳などにある場合、直に口をつけて置飲にするものあり、實に見ぐるし、男などの、酒杯を椀の上に置き口をつけて飲むごとき、間々見受くることなるが、あまり褒めた話にあらず、

◎口の音　孔子は食する時言はずといひ、成るべく靜かに食事するやうさとされしが、柳澤伯の食事中おもしろき談話をなし食物と〻もに消化させるはよき事なりと言はれしも、また味ふべきことなり、されど物を音させて食するは甚だ見ぐるし、

◎鵜呑み　いつまでも膳の前にぐず〳〵してあらんは、見よきものにあらねど、いそぎ食せんとして、

鵜の如く、物をまる呑にするは甚だ不體裁なるものなり、消化も随つてあしゝ、

◎餌拾ひ　膳に向へば落付きて、まづ箸をおろすべき順序を定むべきに、恰も雀の餌を啄むごとく、箸もて、彼方此方の下物、汁などをつゝきまはす、甚だいやし、

◎倒れ喰　婦人がたにはあまり存じもよらぬことなれど、まんざらなき話にもあらず、兩肱を膝につき身をのめらして膳の上の物を食す、お座のさめた沙汰なり、

◎嘲笑ひ　食事をしながら、同席の人と笑語するを云ふ、場合によりては、口中のものを吹出さんとも限らず、これは婦人がたに多く見受く、つゝしむべきことなり、

◎のら狗　飼主なき犬の、たま〳〵魚の骨を見つけたる時の如く、食物の出る、いかに待兼たる如く、あはてゝ箸をとり、又度を過ぎて、食荒すなどはよろしからず、

◎蛙のみ　蝦蟆の大きやかなる口を開きて、虫などを一吸に吸ふごとく、膳に向ひてあたりを見廻はし、大口をあけて、食物を投込むごとくに食するは、甚だ格構のあしきものなり、

○福引（其の三）

(23) 宮城野信夫、鏡臺。（姉妹）

(24) 斯の精神、克己。（國旗）

(25) 馬一頭、獨樂。（駒）

(26) 常陸の名山、突く羽根。（筑波嶺）

(27) 大八洲、臺に本。（大日本）

(28) 謙譲、剃刀。（卑下する）



人類學の大意

理學博士　坪井正五郎氏演説

人類は人類と離れて生活すること能はず、人類の生存狀態は過去と現在とはいふまでもなく遠き將來に至ると雖も、人類と人類との關係なることは爭ふべからざる事實なるを以て、人類研究の必要は是に於てか起る、然らば此の人類なるものは如何にして之を研究し如何にして之れを知ることを得るか、是れ人類學者が主として講じつゝある科學なり、而して其の人類學とは如何なるものなるかといふに、人類學とは、人類とは何ぞやの問、及び人類は如何にして此の世に現はれ出でしか、人種の別なるものは如何にして存在するやなどの問に答ふることを研究する學問にて、之れを人類の本質論、人類の現狀論、人類の由來論なる三部に分ち、逐次に研究するの適切なるを信ずるなり。

而して、其の人類の本質を知らんが爲めには、如何なるものを人といふか、人とは何ぞや、人と動物との異同如何、人は一種と見るべきものか、將た多くの種別あるものと見るべきやの四問に答へ、次に人類の現狀を詳かにせんには、人は如何なる有樣にて世界に分布されつゝあるや、人は如何樣に分類されつゝありや、言語、體格、風習等は如何なる狀態に分れつゝあるや、人は其の分布上如何に相異なれる狀態を有せりやの四問に答へ、終りに人類の由來を知らんとするには、人類古來の變遷は如何、人は何程古くより存在したるか、極めて古代の人類は如何なる狀態なりしか、極めて古代の人類は如何にして此の世界に現はれたるか、の四問に答へざるべからず、以下各問について之が解說を與へんに。

如何なるものを人といふか、此の問題につきては世上解說を試むるもの少なからず、現に教育家、宗教家などの中には、德なきものは人にあらず、常識を欠ぐものは人にあらずなど、人にして人にあらずといへる議論をなすもの、比々皆之れなるが、吾々の研究しつゝある人類學上より見る時は、聖人にても盜賊にても同じく人にして、其の間に區別を見るにあらず、頭部、胴部、兩手、兩足が各々劃然たる限界を以て區別され、足は他の各部を支へて直立し、頭に於ける腦の部分は顏の部分よりも太く、手は左右合掌し得るも足に至りては之をなすこと能はざるもの、此の如き體格を有するものを吾々は人類學上總て人とは稱するなり、次に地球上に現存せるものを大別すれば、中に就て生活狀態を具へざるものは鑛物、生活機能を具へ單に伸長し得るだけの狀態に在るものは植物、生活機能を具へて伸長し、而して自由に運動するものは動物なり、今夫れ人類は其の孰れに似るやと見るに、鑛物とは其の狀態相距ること遠く、植物とは大小精粗の別こそあれ生活機能を具ふるは、互に等しきも、其の狀態を異にすること甚し、只だ獸畜其他の動物とは稍や近似し、殊に哺乳動物とは殆ど其の生活狀態を同じくしつゝあるなり、勿論、人類は心理、生

理共に他に勝れて發達し居るを以て、此の點に就ては、他の動物には比し得べきものなけれども、而も人類と動物との相違は鑛物と植物、植物と動物の如く甚しきにはあらず、次に人類と動物との異同如何にと見るに、前にもいへりし如く人類は動物に近く、而して人類と猿との間は動植物の相違の如く甚しからず特に人類と人類に尤も近き猿、即ちウラングウータン若くはゴリラの如き類人猿とを比較し來れば、其の相違の點は極めて少きものにて、猿は人類に比して、腦の部分が顔の部分より小さく、又足が手よりも短かき相違ある等なれども、人類も猿も、等しく哺乳類にして靈長類といへる一科目を形作るものと認められ居れり、次に、人類は一種と見るべきものか、將た多くの種別あるものと見るべきかといふに、地球の南部には黒人、其の北部には白人、其の東部には黄人あり、各々種別の存するものなりとは、昔時より學者の等しく信じて疑はざる所なるも、此の皮膚の色澤の如き、南部、北部、東部と限りて、其の間確たる區劃あるものにはあらず、黒白人の間には其の孰れともつかざる色澤を有するものあり、黒黄、白黄の間も之れと異ならず、又た頭蓋に大小の相違あれども、其の大なるものと小なるものとの間には、大ならず小ならざる中間のもの極めて多く、又た身長の如き、パタゴニヤ人の高きに比して、阿弗利加洲アッカ人のは極めて低きも、是れ亦其の中間に在るもの頗る多し、即ち其の何れの相違より見るも、極端と極端との間には、各々中間物の存在するものありて、之れを順次に排列し來る時は、決して確たる區劃のあるものにあらざるを知るべし、故に吾々人類學者の研究し得たる結果によれば、世界の人類は一種にして、特に之を類別するの必要だになきなり。

人類の本質は此の如し、然らば人類の現狀は如何、人類は如何なる狀態によりて分布されつゝあるや、世の所謂探險家なるもの、北極又は南端等陸地に遠き或る島々の中にて、無人島を發見したりといへば、其

の人類なしとの事實によりて珍らしく稀有なることゝして、常に談話の種ともなるべき程にて、人類は世界の極端より極端に至るまで、到る處に分布されつゝあり、同じく動物の中にて、獅子、虎の如き猛獸は播殖區域の廣きものなりと信じられ居るものなれども、其の棲息區域は亞細亞、亞弗利加の二州に限られ而も其の熱帶地方に在るのみなり、馴鹿の如きも亞米利加、歐羅巴の二州に渉りて棲息すとはいへ、只だ其の北方の寒帶地方にのみ限られ居るなり、要するに陸產哺乳類の動物は、何れも地理學的分布法によりて棲息するものなるが中にも、獨り人類のみは、熱帶地といはず、寒帶地といはず、其の他到る處、即ち世界の全體に洽ねく分布されつゝあるなり、次に、人類は如何に分類されつゝありやといふに、古來種々の學者によりて種々なる分類法行はれ、便宜分類あり、自然分類あり、色澤、言語、頭蓋等によりて之を分つは、便宜分類なるが、自然分類も亦た決して一樣ならず、其中に類聚的分類と系圖的分類とあり、而して今日に至りては、此の系圖的分類即ち血筋を調査して成立つべき分類法が、尤も人類研究の主旨に適したりと確信せらるゝに至りたり、依りて此の系圖的分類法によりて世界の人類を觀察するに、總ての人類は、多くの點に於て一致し、少なき點に於て其の異同を見るものなれば、其の一系圖より出でたるものなることは疑ふべくもあらず、而して其の人類と人類との間に異同を來したる如き觀ある所以のものは、例へば、一樹の幹より枝を生じ、其の枝より各々亦小枝を生じたるが如きものにて、其の枝の一つを亞細亞人、一つを歐羅巴人、一つを亞弗利加人、一つを亞米利加人、他の枝を海岸島嶼人とも見るべきなり、次に、言語、體格、風習の如きは如何なる狀態に分れつゝあるかといふに、此の狀態には先天的のものと後天的のものとあるが中にて、頭髮に就いて之を見れば、長く伸びたるもの、鈎形に短かきもの、硬くして縮れたるものなどあり、鼻に就いて之を見れば、眞直にして鋭なるもの、中凹にして圓なるもの、圓く

して反りたるものなどあり、住居に就いて之を見れば、圓を横斷したる如きもの、天幕を張りて三角形をなせるもの、材木石材などを組立てゝ之に草木土石を葺きて形狀の一樣ならざるものなどあり、又た衣服に就いて之を見るに、オースタラリヤ及び南米南島の土人の如く僅かに陰部の局處を蔽ふのみにて、殆ど裸體に準ずるもあれば、土耳古の如き寒帶地に在りては、全身を透間もなく悉く包み隱して僅かに眼ばかりを現はすもありて、其の異同特に著し、而して其の人類は分布上如何に相異なれる狀態を有せりやといふに、同じき容姿をもち、同じき住居に棲み、同じき衣服を用ふるもの、各處々々に團體をなし、前にも述べたる如く、亞細亞系となり、歐羅巴系となり、亞弗利加系となり、亞米利加系となり、將に海岸島嶼系とはなりつゝあるなり。

既に人類の本質を知り、又た人類の現狀を詳かにしたる以上は、其の由來を研究せざるべからず、而して其の由來を知らんには、先づ各人種古來の變遷を明らかにするの必要あり、抑も人類變遷の狀態は後天的に成るものなるが、之を服裝の點よりいへば、白き風呂敷やうのものを以て、身體を纏ひたる古代羅馬の服裝は、其の後幾多の年月を經るに從ひ、現今西洋各國人の纏ひつゝある胴衣、上衣、下袴より成る服裝とはなれり、畢竟羅馬人は西洋人の祖先なるに、其の祖先より傳へられたる服裝すら、一樣に固定することとなくして、かくは多くの變遷を來したり、然り、變遷は人類自然の趨向にして、獨り衣食住のみに止まらず、容姿性情に至るまで亦之が影響を蒙むるものなり、米國人の祖先は多く英國人にして、英國人は今より三百年前初めて亞米利加に移住したるものなり、然るに、其の三百年間の變遷は、彼等の體格の上に著しきものあるを示しつゝあり、即ち英人の顏色は赤味を帶ぶること多けれども、米人のは少なく、英人の頭髮は赤くしてウネリをもち強硬なれども、米人のは殆ど之に反し、英人の眼は其の凹むこと淺けれど

も米人のは深く、英人の腰部は大なれども、米人のは比較的小なるの差異を來せり、等しく同一の祖先を有する英米人が三百年間の變遷既に斯の如し、然らば則ち、元と同一の系圖より出でたる世界人類が、現今の如き異同の狀態を呈するに至りしは、果して幾許年を經過したるならんか、言葉を換れば、人は何程古くより存在したるかといふに、或る派の學者は、人類の發生は六千年前なるべしとの說をなしつゝあれども、之を前述の例に徵すれば、此の如き短かき年月の間に此の如き多大なる變遷を來すべき理由なし、若し此の說に從つて五千六千の年所によつて、かくの變遷を來したるものとすれば、前きに斷案を下したる人類一系統論を棄てざるべからず、勿論、初生の人類は之を喩ふるに嬰兒の如きものにて、思想などは殆ど皆無なれば、從つて其の思想を言ひ表はすべき言語も規則あるものにあらず、加ふるに其の言語を記すべき文字なければ、その歷史の存在すべき道理なきなり、故に人類發生の歷史は全く見ること能はざれども、之れを今日に於て研究せんには、之に適當したる材料の存在せざるにもあらず、即ち、それ等人類の足跡遺物は尤も恰好なる研究材料にして、之によりて其の證明も與へられ得べく、而して其の研究には少なからざる趣味の伴ふものあるを見る、歷史の敎ふる所によれば、ナイル河畔の埃及人は其の尤も古き時代に屬するものなれども、其の地質を研究する時は地理學上新らしき年代に屬するものにて、遡りて之れより更に古代に屬する地質の研究をなす時は、彼の亞弗利加なるサハラの大砂漠は元と海底たりしに、此の地層中人骨並に遺物を發見することあり、其の外佛國などにても、今より二十一萬年前の極めて古き時代に屬する地層中より人類の遺物を發掘したることあるなり、之に依て之を觀るに、人類の原始は今より二十萬年以上の太古に在りて、第三期なる猿の發生に亞ぐものと見て太過なかるべし、然らば其の極めて古代の人類は如何なる狀態なりしやといふに、此等の人類は學術上「原人」と稱しつゝあるものにて、其の

狀態を研究せんには、骨格上舊態再發の學理を應用すべし、舊態再發の學理の應用とは、異りたる點を有する動物をして、互に交接して混種兒を生ましむるに在り、假令ば、力の強き荷馬と、脚の健やかなる競馬用の馬とを交接せしめて之が混種兒を生ましめんに、其の生れたる馬は、力を失ひ速力を失ひ、一の能力なき野馬となるものにて、此の例は之を鳩其他の動物に見るも皆然り、乃ち此の法を應用する時は、各各其の特長を喪失して、其の原始の狀態に復するものなり、之によりて人類原始の狀態を研究するに、原人の頭部は額を後方に壓したるが如くにして、顏の面は中高く、頤は大に凹入し、總ての器具には石材を用ひたることを知り得べきなり、次に、此の原人は如何にして此の世界に現はれしかといふに、總ての生物は其源を同じくするものに相違なきも、是れ亦、一つの樹幹より多くの異なりたる枝を生ずると等しく、此の一個の原素によりて種々なる生物を生じたるなり、人類と猿とは前にもいへる如く、其の狀態に於て近似したるものなれども猿が人類に進化したりといふは、畢竟進化論を誤解したるものなり、由來同祖より出でたる生物中、智力の特に發達したるものは人となり、之に亞ぎたるものが猿となりしに外ならず、而して其の發生の狀態は何時とはなしに自然に發生したるものなりといふの外なし、彼の山出しの田舍者が東京に出で、追々年月を重ぬる中に、言語其他總ての態度が東京化して、遂に東京人と異る處なきに至るも、其のものが何月何日まで田舍者なりしか、何月何日を以て東京化したりしかといふに、劃然其の間に限界を立つること能はず、之と同じく、原人は何れの年代に於て現はれたるやといふも、確たる解答を與へんことは困難なり、又た、地圖を繙きて、原人は何れの地にて發生したりやといふも、前と同じき理由にて、研究の許すべき事柄にはあらず、要はたゞ、何時とはなしに、何處とはなしに、自然に發生したりと信じ得るの外はあらず。

以上、人類學に關係する大要を解說したり。

人類學は其の研究上材料を種々なる方面より採るを以て、或は解剖學と混ずるものあり、或は考古學と同一視するものあり、甚しきは人類學を以てよろづやの觀をなすものあれども、人類學は解剖學にあらず、考古學にあらず、又たよろづやにもあらず、人類學は解剖學者、考古學者等の提供材料によりて其の研究に資すること、恰も易牙氏が、靑物商より野菜を採り、賣魚者より魚類を採り、乾物屋より卵、鰹節を採り、之を調理鹽梅するが如く、夫々の材料によりて研究したる上、人類の本質、現狀、由來を明かにすることを得るなり、尤も茲に講演したるは、言はゞ人類學の輪廓とも見るべきものなれば、其中に如何なる趣味の含まれ居るやは、全く別個の問題に屬す。

（此篇は曾て大日本女學會にて博士の演ぜられし概要を摘錄したるものなるが、筆のそが眞一に及ばざるは、特に遺憾とする所なり、文字の責は一に記者に在り）

新年の辭

阿多廣介

多事多端なりし明治三十七年も殘りなく暮れて、吾々は讀者諸孃と共に、茲に更に希望多き年を迎ふることゝなりました。

一年の計は一月にあり、一月の計は元旦にありとの古語の如く、吾々は今年の初めに際して、如何にして此の希望多く光明ある年に處し、個人として國民として、社會の進步に伴ひ時勢に遲れず、十分に各自の責任義務を盡すことを得るかと云ふ計畫を立てねばなりませぬが、凡て人の行爲は知識と意志と趣味に基

づくもので、先づ明智を以て事の是非善惡、行ふべきか行ふべからざるか、爲すべきか爲すまじきかを判斷し、而して意志を以てそれを行爲にし、其人の趣味は又智識と意志とを左右する力を有つて居ります、故に聰明なる智識と强固なる意志高尚なる趣味とがなくては、己れを益し人を益し兼て品格を高うする如き立派なる行爲をなすことは出來ません。

斯くて智識を養ふには、第一博く學問し、第二廣く交際して、見聞を高め、新經驗を積むので、又意志を養ふには、常に不撓の精神を持し、艱難に耐へて進むのであります。

意志は困難に耐へ、それに打勝つて行くにつれて益々强固になり行くもので、例之ば、常に坦々たる道をのみ行きつけたものは、一山を越え一川を渉るのをも大層難義に思ひますが、反之して山河を跋渉しつけた者は、峻阪險路に驚くことのないのみならず、今迄出逢ふたことのないやうな困難に臨んでもなか〳〵意を屈するやうなことはせず、首尾よく目的を遂する如くで、世路に於ても平常困厄に遭遇したことがなく、逸樂に成長したるものは、なか〳〵風波多き世に處して一事を爲さんとするは愚か、少しの責務さへ盡すことは出來ませんから、常に不屈の精神を持し、如何なる困苦にも耐ふる覺悟で、朝は早く起き夜は遲く寢ね、櫛風沐雨の艱も厭はず、意志を鍛錬せなくてはなりませぬが、それには又身體の健康が大いに必要でありますから、一方には食物運動に注意して健康をはからなくてはなりません。

斯くの如くして撓まざれば、如何なる事を爲すことも出來ますが、然し單に是丈けでは未だ人として、不人たるものゝ修養として、完きものと云ふことは出來ません。何故なれば、人として趣味を解する能力がなければ、眞に憐むべきもので、多く犬馬と擇ぶ處がありませんから、一方に於ては趣味の養成が甚だ必要で、それには高尚優美なる文學美術、或は音樂等を味はつて趣味の涵養を計らなくてはなりません。

斯くすれば、困厄の中にも趣味を見出し、自ら慰藉を得て奮勵の助けともなり、意志は益〻強固を加へ、それを導くに明敏なる智慮を以てすれば、事として爲し得られざる事はなく、人として耻かしからぬ者でありますから、目的の如何に拘はらず此等の事の涵養發達は大いに必要なることであつて、已に修練の行途に在る者でも、如何程と程度を限るべき側のものではなく、從て餘りを生ずるやうな事はありませんから此の多望多端なる年に臨むには尙一層の覺悟を望みたいのであります、かの當レ理而後進、審レ勢而後動、有レ所レ不レ爲、爲無レ不レ成、是以英雄之士常無レ敵於二天下一との古人の語は、吾人の常に服膺すべきものではありませんか。

玆に新なる年の初めに當つて、敢て此の言を以て諸孃に見ゆる次第であります。



雜録

暦の話

倭翁

暦こゝに改りて明治三十八年てふ目出度歳を迎へました『元日や神代のことも思はるゝ』ゆら〳〵と輝き渡れる旭陽に向ひ新たなる顔を以て新なる年を迎へんに、身は恰も清淨なる新鮮なる世界に入つた心地がいたします、殊に今年と云ふ今年は我國振古未曾有の目出度新年であります、回顧すれば昨年の正月は日露の國交斷えざること縷の如く東亞の天は暗雲四塞、我國民上下不安のうちに迎へられたのでありましたが、我々の不安は遂に事實となつて紀元節の大祝日に當り宣戰の勅詔を拜し奉つたのであります、爾來皇師の向ふ所海に陸に連戰連勝で、今や我が　聖上陛下は事實的亞細亞の主權者とならせ給ふたのであります、見よ彼の強大無比を以て世界に誇つて居た露國でさへ、一旦日本を無視して邦土の呑噬を逞うせうとしたら、現當に於ける如き痛いめに會されて居るではありませんか、向後極東問題に對しては孰れの强國と雖も、我國との平和的關係に由らなければ、輕々しく自儘に解決することは出來ないと云ふことを認めたでありませう、若し他日彼の佐久間象山先生の申された如く、皇國遂に五洲の宗となる第一歩は、實に今回の征露であると思はれます、されば今年は亞細亞天皇元年として永く國民に紀念せらるゝ吉年でありませう。

東都の城南に碩學の某翁あり、或日のこといよ〳〵露西亞が屈服して東亞の平和が克復せられた後は、我が皇室はゆく〳〵世界平和の保障に立せ給ふ目出度ときのあるに違ひない、その時の紀念には今日使用せる不完全なる暦を改めなさるゝが宜しからうと

話されたことがあります、斯くて右の翁は多年研鑽の結果最も完全なる暦を發明せられたと云ふことでありました、何れ時機を見て發表せらるゝことであらう、それは兎も角、玆に先づ新年の話として現在世に行はれてゐる暦に就て聊か御話を試みました暦には種々あれども、もと何れも他の天體と我地球との運動に關して算出したものであつて、その重もなる暦は先づ太陽暦、太陰暦、回教暦であります、さて暦を説明する順序として、一應地球の運動から申しませう。

○○○○地球の運動　地球の運動に自轉と公轉との二樣あります、自轉とは地球が其軸によつて回轉する短期運動の事で（軸とは地球の中心を貫いて兩極に達する直線を指すので、恰も獨樂の心木の如きものである、併し事實心木の存するに非らず、説明の爲に假設したので兩極とは南極と北極との事であります）又公轉とは太陽の周圍を軌道によりて旋轉する長期運動を云ふのであります（軌道とは地球の太陽を周るときに通るべき道にして、其樣は獨樂が回りながら環の形をなすやうなものであります、軌道によつて圍まれたる平面を軌道面と云ふのであります

さてその運行の方向は、孰れも左廻で即ち時計の針とは反對であります、是れ天體運動の法則にして天上の衆星は、皆同じ方向に運動するのであります、

○○自轉は地球が其地軸によつて二十四時間に一回轉する運動にして、この運動によつて晝夜の別が出來て太陽の東天に昇りて、西方に入る如く見ゆるのであります。

○○公轉　地球が太陽を中心として、其周圍を一時間に平均凡そ六萬八千哩の大速力で、東より北及び西を經て南に進行し、八千七百六十六時と九分十一秒を以て一循環し終るのであります、此時間は地球眞正の一循環であつて恒星年と稱するのでありますされど地球が太陽及び他の恒星に對して外見から同一の位置に復るは、八千七百六十五時四十八分四十八秒即ち三百六十五日五時四十八分四十八秒であり

ますから、之を回歸年と稱して通常云ふ所の一年であります。

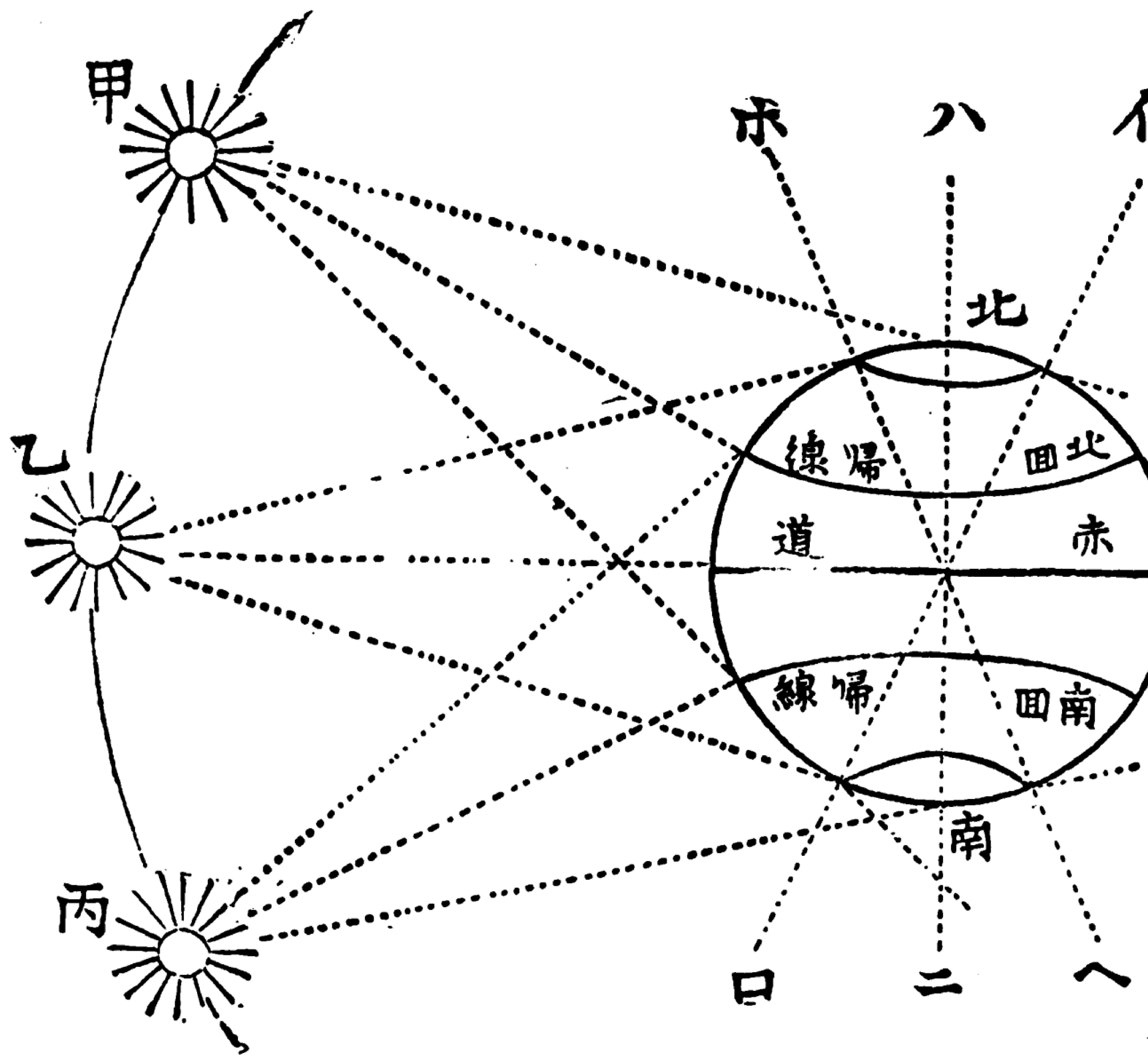
○○○○晝夜及四季　晝夜の更代及び四季の循環は地球の運動から生ずる現象であつて、地球の運動すると云ふことを證する動かすべからざる好き例であります晝及び夜は、前に記した自轉に基く現象にして、太陽に向ふた時の半面が白晝となり、太陽に背ける時の半面が暗夜となるのであります、又四季は地球の公轉に基づく現象であつて、太陽の光線及び熱の來り照らし方によつて寒、暑、中和の別が生ずるのであります。

然るに爰に晝夜に長短の別あり、又四季の變化を生ずる所の主要なる原因は何處にあるかと云はゞ、是れは全く地軸の傾斜にあるのです、地軸は軌道面に對して眞直でなく實に六十六度半の傾きを以て横つて居るのであります、而して軌道を回轉する際にあたつても、毫も其傾斜の位置を變へません、故に一年の中、太陽が重に北半球を照らすときと、又重に南半球を照らす時とありますから、自然四季の變化を生ずるやうになるのであります。

次の圖は四季の更代及び晝夜の長短を示したものであります、其解し易さ爲に假に太陽が地球を廻るものと看做して、四季にあつて太陽熱の來る方向を現しました、即ち圖中甲は夏至日(六月廿一日)の太陽に對した地球の位置であつて、此時にあつては太陽は北緯二十三度二十八分なる北回歸線上を直射するので、北半球は炎熱燃くが如き暑となるのである、而して此時晝夜の分界線がイとロとなるを以て、北半球の長日期にして、之に反して南半球の短日期であります、斯くて晝夜長短の差は赤道を離れて西極に至るに從ひ愈増し、終に北極は夜なく、南極は晝なきことゝなるのであります、此日我東京では午前四時四十五分の日出にして、午後七時十八分にならなければ日が暮れない、即ち晝間十四時三十二分にして、夜間は僅々九時二十八分間であります、又太陽が乙點から照らすときは、春分(三月二十日)

及び秋分（九月廿三日）にして、此時は太陽は赤道上を直射しますから、温帶各地は暑からず寒からずて、極好時節であります、而して此時晝夜分界線は八二でありますから、全地球上何處も晝夜長短の差なく、均しく十二時間づゝであります。

なほ又太陽が丙點にありて南回歸線上を直射する時は、冬至（十二月廿一日）となりて、全く甲點の時とは反對にして南半球の暑中、北半球の寒中であります、その晝夜分界線はホヘであるから、其長短も全く甲點



と反對にして北半球の短日で南半球の長日であります されば北極は夜にして南極は晝なり、此日我東京は午前七時七分にならねば太陽は上らず、而も午後四時四十九分となれば既に日沒であります、故に晝間は僅々九時四十二分間なれども、夜間は最長にして十四時十八分間となります。

四季の別は通常三、四、五月の三ヶ月を以て春季とし六、七、八月の三ヶ月を以て夏季とし、九、十、十一月を以て秋季とし、十二、一、二月を冬季と申しますが、暦の上では左の如く別

てあります、(平年)
春季　立春(二月四日)より、立夏(五月五日)に至る九十日十九時十分間、
夏季　立夏(五月五日)より、立秋(八月七日)に至る九十四日○時廿六分間、
秋季　立秋(八月七日)より、立冬(十一月七日)に至る九十一日十九時四十六分間、
冬季　立冬(十一月七日)より、立春(二月四日)に至る八十八日九時廿八分間、

播種期の八十八夜とか、農家の厄日貳百十日又は貳百廿日と云ふは、共に立春當日より起算するのであります、元來眞の年越と云はゞ二月四日即ち立春でなければならぬのであります、今日使用せる暦は甚だ不完全なるものであるが、たゞ從來の慣習上容易に改むることが出來ないのであります。

○○○

太陰暦　この暦は月が我地球を二十九日餘で一周するを單位として之を一ヶ月と定め、以て算出したものでありますから、其計算が精密でありません、

その餘剩のある爲に二十八ヶ月毎に殆んど隔年に閏月を置かねばなりません、此暦は支那に行はれて居りますが、我國も維新以前までは用ゐて居たので、今日もなほ舊暦と稱へて居るのは此暦のことであります。

○○○

太陽暦　この暦は我地球が太陽の周圍を旋轉するを基として、一公轉を以て一年と定めてあります、然るに爰に平年と閏年と出來るのは、もと一年は三百六十五日と定めてあるが、地球の一公轉は實に三百六十五自轉(日)五時四十八分四十八秒(回歸年)を要するから年々五時四十八分四十八秒の餘剩が生じて來ます、そこで此餘剩を四ヶ年積れば二十三時三十六分三十二秒即ち殆んど一日となる、故に四年毎に一閏年を置いて、二月の二十八日(平年)に一日を加へ二十九日としてあるのです、これをシユリアル暦といふ。

然るに爰に四年毎に廿三時卅六分卅二秒を以て一日(二十四時)と算入した所から、實際は毎四年二十三

分廿八秒の不足を生ずる理でありますから、紀元(西暦)後千五百八十二年に至り其數積り〳〵て十日の不足となりました所で、時の羅馬法王はグレゴリアン暦と稱する法に改め、四百年毎に三閏年を省いて其不足を補ふことゝいたしたのであります、是れこの暦が今日歐米各國の奉じて居る暦で先づ今日では一番正確な暦であります、我日本も之を用ゐて居るのであります、只だ露西亞と希臘とは舊のジユリアン暦を奉じて居るから、同じ太陽暦でも一般の暦とは常に十二日ばかり後れるやうになつたのであります。

○回敎暦○　この暦は回敎を奉じて居る國々に行はれて居る暦であります、前二暦に比してなほ不完全なるを免れません。

（をはり）



春の七草

林壽祐

春の日、野原へ行つて見ますと、今まで冬枯れでさびしかつたところへ、種々樣々の草が若葉を出して、將に天地の惠みで生育せんとして居ります。文學家は此初生の草を、艸と稱へ、また若草、初草、新草といひ、更に芳草、嫩草、細草、綠草などゝ呼びます。そうして之が未來には色々な花を咲かせるのです。

おそくとくおのかさまさま咲く花も
　ひとつ二葉の春の若草　藤原定家

春の草!!! 如何に淸く、そうして如何に陽かではありませんか。抑も美しき茅野姫が、麗はしき佐保姫に先んじて、我此地球の表面を飾りたてたるのでありませうか。で、此種々樣々なる春草の中には、嫩葉を取りて蔬菜に供すべきものが澤山あります。昔時の殿上人らは、春のうらゝかなる日、野邊へ出て、

運動旁食菜となるべき嫩葉を摘み取つたのです。所謂若菜摘み、或は雜菜摘といつて、讀者も既に御承知でムいませう。試に若菜摘の歌を擧げてみますれば

野べ見れは若菜つみけりむへしこそ
　かきねの草も春めきにけれ　　紀貫之

いつしかもあしたの畔に引連れて
　わさ菜つむ子ら春めきにけり　　藤原實定

あつさ弓をして春雨今日ふりぬ
　あすさへふらば若菜つみてん　　詠人不知

ゆきて見ぬ人もしのへと春の野の
　かたみにつめる若菜なりけり　　紀貫之

春日野の草はみどりになりにけり
　若菜つまんとたれかしめけん　　壬生忠見

あすからは若菜つまんと片岡の
　あしたの原は今日やゝくめる　　柿本人麿

若菜つむ袖とに見ゆる春日野の
　とぶひの野べの雪のむらきえ　　參議教長

春日野の飛火の野守今日とてや
　むかしかたみの若菜つむらん　　右大臣實朝

春日野は年の内には雪つみて
　春は若菜の生ふるなりけり　　僧西行

若菜つむ野べの霞そあはれなる
　昔を遠くへたつと思へは　　僧西行

若菜生ふる春の野守に我なりて
　憂世を人につみ知らせはや　　僧西行

澤に生ふる若菜ならねといたつらに
　年をつむにも袖はぬれけり　　藤原俊成

春とはいひながら一二月頃は、未だ風寒くて往々雪の降り積ることがあります、けれども春の若草は勢よくてズン／＼生育します。夫故若菜を摘うとする者も、雪を冒して採りに出ることがあるのです。

あすからは若菜つまんとしめし野に
　昨日も今日も雪はふりつゝ　山邊赤人

君が爲め春の野に出て若菜つむ
　わがころも手に雪はふりつゝ　光孝天皇

春日野の若菜つみにや白妙の
　袖ふりはへて人のゆくらん　紀貫之

いかでわれ野中の雪に跡わけて
　下もえわたる若菜つまゝし　平忠度

春日野の下もえわたる草の上に
　つれなく見ゆる春のあは雪　權中納言國信

うらやまし雪の下草かきわけて
　たれをとぶひの若菜なるらん　治部卿通俊

今日はたゞ思ひもよらで歸りなん
　雪つむ野邊の若菜なりけり　僧西行

若菜つむころも手ぬれて片岡の
　あしたの原はあは雪ぞふる

春日野の雪を若菜につみそへて
　けふさへ袖のしをれぬる哉　源實朝

白雪のまたふる里の春日野に
　いざうちはらひ若菜つみてん　源俊頼

人はみな野への小松をひきにゆく
　けさの若菜は雪やつむらん　伊勢大輔

春日野は雪のみつむとみしかども
　おひいづるものぞ若菜なりける　和泉式部

さて多くの摘草の中、特に七草を撰らんで粥の中へ混へ、七種の粥と稱へます。で一月七日は五節句の初めで、特に靈辰としてあるから、昔往は此日戸毎に七種の粥を製へ、之を食べたといふことです。傳ふる所によれば、人に七魂あり、天にあつては七曜と現はれ、地にあつては七草となる。そこで其七草の葉を摘取りて食べると、人々の魂の精力を增して、長壽をするといふことです。そうして七種の粥

のことは、遙か古から行はれ、歷史上には第五十九代宇多天皇の御世、上の子の日に、七種の粥を奉り、延喜十一年一月七日後院より七種の若菜を供すとしてあるそうです。一たい七種とは如何なるものであるやといふに、古歌に

芹、薺、御形、蘩蔞、佛座
菘、蘿蔔これや七種

とあります。けれども後世佛座の代りに卷耳又は田平子を加へ、そうして田平子は今の蘩蔞佛座は今の筆頭菜のこととなりともいひ、何うも古の植物の名は今とは大に違つて居るのがあるから詳かでないのです。故にやや信ずべき所をこれから順次述



べてみます。

○芹(水斳)は、水英、根白草、ツミマシグサとも稱し、繖形科に屬する水草で、冬になつても葉は枯れない、夏になると莖は一尺以上に成長して、數多の小花を複繖花序に開きます。芹は專ら水中或は水邊にあるから、川芹、田芹或は葉芹といひ、又莖の色が紅いから赤芹ともいひ水田に栽培して料理に用ゐます一種旱芹は、畠芹、陸芹、野芹或は根芹といひ、又莖の色が白いから白芹ともいひ、專ら陸上に生じ、矢張り栽培して食用に供します。

△薺菜(惠具)は、芹の異名なりともいひ、或は芹の一種なりと

もいひます。其名は往々歌にみえます。

君が爲め山田の澤に惠具つむと
　　雪げの水にもすそぬらしつ

うら若みつめどたまらぬ惠具の葉を
　　かたみにのみも負せつる哉
　　　　　　　　藤原實定

雪分けてゑぐの若菜も生にけり
　　今日の爲めとはいかで知りけん
　　　　　　　　平忠度

雪ぎえはゑぐの若菜もつむべきに
　　春さへはれぬみやまべの里
　　　　　　　　曾禰好忠

芹に近き類には蛇牀子、前胡、毒芹、大芹、三葉芹和蘭芹などがあります。前胡と三葉芹は食用となり、蛇牀子と和蘭芹は、食用の外藥種となり、毒芹と大芹には、激毒があります。

芹と同じく繖形科に屬するものは、ハマボウフウヤマボウフウ、胡蘿蔔、鹹草、石胡荽、茴香などであります。

○薺は、十字科に屬し、一に護生草と稱へ、秋冬より春まで生存してるが、夏みえないからナツナキと名け、更にナヅナと轉訛ッたといふ說があります。此草は到る所に產し、狀菜に似て葉は長三角形をなし、花小くて白く、實の莢は恰も三味線の撥の如くであるから、俗に三味線草或はペンペングサと呼びます。併し植物學上では、其實を短角と稱し、敎科書上では、よく果實の好例に引出されます。

○御形は今の鼠麴草(母子草)のことで、菊科に屬し古は又ヒキヨモギ或はモチヨモギといひ、到る所の園圃に產し、葉は細長くて眞白な毛が密生し、花は眞黃色で奇麗であります。昔は艾の如く餅に入れて搗いたといふことです。

○繁蔞は、又鵞兒腸菜或は滋草と稱し、古はハクベラともいッたさうです。此草はよく園畑や路傍などに繁茂し、白い小花を開きます。葉はいつも軟かであるから、鷄の雛を飼ふには、實に適してゐます

○佛座(臭菘)は二三の說あり、中にカハラケナ(土器菜)の古名なりといふものがあります。カハラケ

ナは初生の際、圓き葉が地上にくッついて叢生するから、恰も佛の蓮華座の如くに見える。で成くなると淡紫の小花を開きます。植物學上普通稱する元寶草(佛甲草)は、薄荷、紫蘇、續斷、風輪菜等と同じく、脣形科に屬してあります。

△鷄腸草(田平子)のことを、佛座といふ說もあります。此草は、紫草科に屬し、到る所の畑や道傍に生え、淡紫の小花を卷繖花序に開きます。

△卷耳を佛座の代りに加へて、七草とするものもあります。此草は矢張り畑、道傍或は屋根などに生じ、葉は小さくて小枝多く、植物學上岐繖花序として其名高く、細長い果實を結びます。

○菘は十字科に屬し、今の唐菜のことで、通例は單に菜と稱へますが、漬菜、白菜等の俗名があります此菜の葉は厚くて筋白く、漬物には最も適當です、就中有名なる產は、東京三河島であります。一體菜には種類多く、唐菜の外、京菜(一名ミヅナ)、伊勢菜、山東菜、紫菘、蕓薹(一名ナタネナ)、蘇鐵菜、冬菜、甘監(和蘭菜)、芥等があります。

○蘿蔔は、今の萊菔のことで、蕪菁、菜、薺、碎米薺、山葵菜などと共に十字科に屬し、其根頗る長大で、純白色であるから、淸白と名づけられたといふとです。種類多く櫻島大根、宮重大根、お多福大根紫大根、細根大根、鼠大根などあります。鼠大根は根の端極めて細長くて、鼠の尾に似たるにより名けられ、又味頗る辛いから、一にカラミダイコンといはれ專ら料理に用ゐます。

以上七種の外、薺蒿、磯菜なども、春の摘草として有名であります。薺蒿(莪芽子)は、鷄兒菜のことで、一つ蘋蒿といひ、菊科に屬し、秋になると、美しき花を開きます。

今日はまた雪間の薺蒿摘ませて
　野邊の若菜の數や增らん　　信實

いざや子ら春の日ぐらし袖垂れて
　向ひの野邊に薺蒿摘みてん　　實定

磯菜とは、海の磯邊に生えてる若菜のことであると

いふ說があります。しかも礒菜摘といふことが行はれたのであつたらしいです。

今とてや礒菜つむらんいせ島や
　いちしの浦の海士の乙女子　藤原俊成

春の初めに生える雜草は、何れもまだうら若き嫩葉であります。之が成長して、如何なる莖を出し、如何なる花を開き、如何なる果實を結ぶか、讀者！科學思想を養ッて、少しく硏究して御覽なさい必ず人知れぬ興味がありませう。

（完）

正月行事

雨來庵

正月儀式の事に就て、少しばかり書き立て丶見ませう、是は我國歷史の片端ばかりでなく、古來の風俗を知る上に於ても、多少の利益があろうと思ひます、猶家庭の祭事に對しても、是非共御婦人方の知らなくてはならぬ事で、一應其譯柄や由來を覺えて置くのも、極めて必要な事であろうと思はれます。

▲正月

先づ正月といふ事から說明致しませう、此月は元來睦月と稱へまして、知る人どちの互に行通ひて、親しみむつぶる故に、むつび月を略して、むつきと謂ふ樣になつたのであります、又、正月の正の字は、一に止まると云ふ字でありまして、此月は即ち一年の始め、一月の始め、一日の始め、一時の始めの月でありますから、夫れで正といふので御座います、正は又正しいと讀みまして、此月は最も正しくせねば、一年の禍が起ると申します、昔の人が、一年の計は元日に在りと、申されましたのも、實は此譯で御座ります、歲時記といふ本にも、夏は寅を以て正月とす、之を人正と云ふ、商は丑を以て正月とす、之を地正と云ふ、周は子を以て正月とす、之を天正と云ふ、として御座いますから、何んでも此月は、餘程正しきを貴とんだものと見えます、序に此月の

異名を記しませう。

○王春月　是は左傳の春王正月と云ふから出た所の名でありまして、周のお正月の事を指したのであります。

○陬月　潜確類書に正月を陬となす、寅の方位に當る月故に、之を孟陬といふ、とありますから、何んでも是から出た名に相違ありません、是等は皆支那で用ゐた名でありますが、日本では初空月、初春月霞初月、年端月、早緑月、暮新月など稱へまして、皆歌にも詠まれてあります。

▲元日

一月一日を元日、元朝、元旦、鷄旦など申しますが是等は皆括めて申しますれば、一番最初の日といふことで、改めて玆に說明する程の事はありません、三朝、元三などいふ事は、即ち三ヶ日の事をいふのでありまして、元は始めと訓み、朝は其日の最初の時でありますから、是は歳の始め、月の始め、日の始めと、解すれば好いのであります、履端、履新の慶などいふ事は、端を始に履み、正を中に擧げ、餘りを終りに歸すといふから、出ました熟字で、改まり行く年の端を履へて、賀するといふ心であります是れから儀式の事を述べませう。

▲蓬萊飾

三方臺に海老、熨斗、昆布、榧、橙、穗俵などいふ物を載せまして、先づ年賀の御客に出しまして互に新年を壽きますもので、是を蓬萊臺と稱へます、穗俵とは奈々里曾の事でありまして、一に莫鳴菜と書きます、和漢三才圖繪に、西海の海に在り、冬之を取乾し、藁稭を以て一握りばかりに折まげ、束ねて米俵の形に造り、正月蓬萊臺の飾とすとあります。

▲門飾

門松、飾松、飾竹、飾繩、飾藁、飾炭、飾海老など作りまして、門飾にすることは、昔よりの仕來りでありまして、皆其家の延喜を祝ふことであります、例へば松は千年を契り、竹は萬代を契るものでありますから、之を門飾に用ゐまして、目出度き正月の



門を清めるのであります、飾繩、飾藁などは、之を注連飾と稱へまして總て左繩に撚りて、繩の端を揃へぬのが儀式であります、之は左は清淨にして、端をそろへぬのは、柔順なる心を現はしたのだと申されます。

▲裏白

是は齒朶また穗長とも稱へまして、本草綱目には、鳳眉其根を貫衆といふとしてあります、葉は蕨及び狗脊に似て居りまして、裏の方が白いので、其れで俗に裏白と申します、是は常盤のもので四時枯れませぬから、やはり正月のお飾に用ゐるので御座います、一説には齒はよはひ朶は枝で長く延びて居るものでありますから、其處で齡の延ぶるといふ義を取りましたものだと見えます。

▲屠蘇

是は元來屠蘇と書くべきです、其故は昔冠の尸を忌みまして、上に一點を加へ、戶に改めましたのが即ち本朝の故實ださうに御座います、屠蘇とは邪氣を屠り、生氣に蘇がへるといふとで、白散、度嶂散といふ藥を用うるので御座います、正月之を飲ます由來と、其儀式の事に就きましては、後に申しませう。

▲太箸

今では杉の割箸を用ゐるやうですが、是は柳箸の太いのを用ゐるのが、事實に適ふて居るやうです、但し是は儀式ではありません、其昔將軍義勝公が御治世の時に、元朝儀式をなされし折、箸が折れました所が、其歲の秋遂に落馬の爲に、一命を失ひましたので、御舍弟義政公將軍に成り給ひて、いたく此事を氣にされて、其れからの儀式には、可成太い箸を用ゐたとの事であります、是が即ち今日太箸を用うる例となつたのであります、夫れで雜談抄などにも、箸の折るゝは落馬の相としてあります。

▲齒固

齒の字はよはひと訓む故に、之は齡を固むるといふ心であります、雜煮餅を食ふて、其れで齒固をする

など、野暮に考へられては、甚だ困ります、此儀式は鏡餅を神さまに供へまして、後ち一家打揃ふて其餅を食ひ、互に新年を祝するのであります。

▲雜　煮

雜煮祝ふといふことを、一にかんを祝ふと申しまして、かんとは則ち羹の事で御座います、之は餅に大根、芋、昆布、打鮑、いりこ、芹などを加へまして羹として食ひますので、種々のものを交せて煮る故に、之を雜煮と申します、そして昆布は、是非とも結昆布でなくてはなりませぬ、夫れは睦び歡ぶと云ふのと、訓方が似通つて居るからであります。

▲得　方　棚

元方又惠方などと書きますが、來年の支干に因りまして、其吉兆を占ひ、方向を見定めて歲德神を祀るのであります。

▲椒　柏　酒

椒は玉衡星の精だと唱へまして、柏は仙藥であるから、是を飲で邪氣を掃ふのだと申します、今の世にこんな不思議な理屈は、少しも信ぜられませんが、昔は兎に角儀式として、用ゐたに相違ありません、是は山椒の實や桂皮や、丁子などいふ漢藥を、酒に浸したものでありまして、只今藥種屋で、屠蘇として賣つて居るのは、乃ち之れであります。

▲年　玉

新年の賜といふ事の略語でありますから、御年玉など訓みますのは、大きな間違ひであります。

▲四　方　拜

是は宮中に於て行はせらるゝ儀式でありまして、元日寅の刻に　天皇清涼殿の東庭に出御まし〳〵て、天地四方を拜せらるゝのであります、臣下に於ても自分等の庭に出まして、天地の神々を拜し、聖壽の萬歲を祝ひ、國家の無事長久を祈るべきものであります。

▲供御藥

是は天子様が清涼殿に出御ましまして、御齒固の御膳を供じ、次に藥子の奉る屠蘇を供します、次に

白散、次に度嶂散を供じます、是は元日より毎朝なさるゝ、三ケ日の儀式であります。

▲若　水

井華水と申しまして、立春に新に汲みたる水を神に供へ、後ち其水を飲みて、年中の邪氣を攘ふといふ意で御座ります、此若水を汲むのを年男といひます

▲店　卸

是は商家の儀式でありまして、今では品物を棚から降し、之を改め又は掃除するといふ意味に、誤解して居るものがありますが、其れは大なる間違で、之は昨年の暮迄に賣買した、損益高を改めるといふ、儀式であることが事實であります。

▲七　草

芹、薺、鼠麹、繁縷、佛座、菘、蘿蔔を七種と稱へまして、正月七日之にて羹を作り、又は粥として食ふのであります、七草を打つことは、正月七日には鬼車鳥といふ鳥が、多く渡つて來ると云ふ所から、何れの家でも灯燭を消しまして、門を鎚ち戸を叩き其鳥の來ぬやうに追ひ返へすのであります、其時に唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきに、と歌ひ囃します、又薺や七草を俎に載せまして、摺小木で其板を叩く處もあります、鬼車鳥と申しまするのは、鵂の事ださうに御座ります。

▲食つみ

蓬萊臺を食積といふのは誤つたことで、昔し食つみと唱へましたのは、今の重詰の類ひでありまして、嵐雪の句に　食つみやぼつ〱あらす夫婦かな、柳居の句に、食つみや山居の味をおぼえ初、などとありまして、蓬萊臺でない證據には、芭蕉の句に、蓬萊にきかばや伊勢の初便、とこう別の事に詠であります。

▲節振舞

元日より晦日まで、親戚朋友が打ち寄りまして、互に酒肴で祝ふことでありまして、節とは乃ち節供の略したのであります。

▲上　元

正月十五日を上元といひ、七月十五日を中元といひ十月十五日を下元と申しまして、上元を又花燈の夕べと稱へます、是は唐の世より燈火を列ねまして、游観したといふ故事から出ましたもので、又正月十五日に、小豆粥を煮まして祝ひますことは、厄病除けださうに御座います。

正月の餅の由來

吉良麴堂

支那では、張天如の對類大全といふ書物の中に、餅の字に註釋を加へて。麥米を粉となし、狀を成す鏡の如く、爐の内に入れて烘熟す、蓋し戰國に始まる。と書いてある處から見れば、其國にての餅の起原は我國のそれとは異にして、最初は戰時の用に供せられたものゝ如くである、今我古代史に就きて之が記傳を案ずるに、酒の事は屢々記されたれども、餅の事に至りては其の記事殆ど皆無であつて、只だ豐後風土記に左の說のあるのみである。

大足彦天皇（景行）豐國直等の祖菟名手に詔して、豐國を治めしむ、往きて豐前國中津郡中臣村に到る、時に日晩れて僑居す、明日昧爽、忽ち白鳥あり、北より飛來り此村に翔集まる、菟名手即はち僕者を勒して其鳥を看せしむ、化して餅となり、片時の間にして芋草數十株に化す云々。

勿論此の說は頗る奇怪にして取るに足らずといへども、元明天皇の勅によりて編輯されたる風土記の中に載せられたる點より見る時は、斯の如き口碑が此の時代に傳はり居りて、それが眞事實のやうに信ぜられて居たのであらうか、兎に角、年始五節供其他吉凶の事ある每に、必らず餅を擣いて之を食するのは、我國では久しき慣習であることが知られる、然るに、中古以來、其の季節々々によりて種々の餅を製し、遂には今俗にいふ餅菓子など稱するもの、數百種を製造するやうになつたのです。

古今要覽といふ書物に記してある概要を摘めば、「もちひ」とは糯米を蒸して擣きたるものをすべいふ名

にて、略して「もち」といひ、又一名を「かちむ」ともいふ、此の餅を「かちむ」と異名するは、異本奇異雜談集に、應仁の頃、營中へ「かちんのほうし」をしたる女ども、餅を賣り歩きしより、しかいひ始めたるよし見えたるにて知らる、我國の餅は稱へこそ種種なれ、製法は右の如くであるが、漢土にはさまざまの製法もあり、はた文字も餈、餌、餅、糕、餻など書き別けたので、其說區々にして紛るゝやうになつたのである、按ずるに、彼の國にて餈といふものは、許愼の說文に、餈は稻の餅なり、米を炊ぎ爛らして乃ち之を擣く、粉となさゞるなり、と見えて居るから、是が正しく我國の餅に當るのであらう、次に餅といふは、其の製法餈とは別であつて、小麥の粉を合せて製るもので、今の世の砧卷、金鍔燒などの類であらうか、又說文によれば、餌は米を粉となして水にて揑ね蒸したるをいふとあるゆゑ、我國のシンコなるべく、糕も餻も一つものにて、我國の餅シンコを、彼の國にては、すべて糕といふものと思はる、かく樣々の製法もあつて、文字もまた異りたれば、よく思ひ分たねばならぬ、とあるから、此の古今要覽の說によつても、大略は知ることが出來るであらう、以下新年の餅について語つて見ませう。

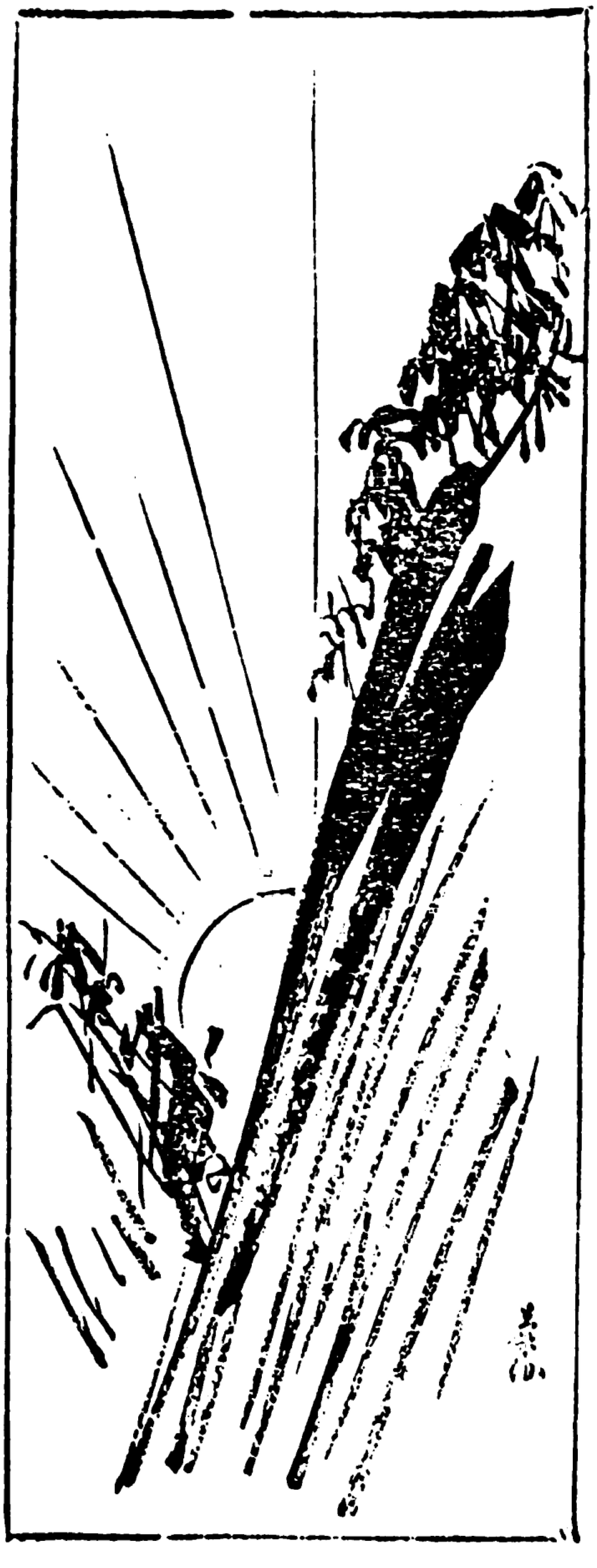
▲鏡餅　本朝食鑑には、本邦古へより餅を以て神明の供となす、而して大圓塊を作り以て鏡の形に擬す、故に餅を呼んで鏡と稱す、此を八咫鏡に擬する乎、正月朔旦、必らず鏡餅を以て諸神に供し、及び一家の長幼團欒して、同に鏡餅を薦め以て新歳を賀す、凡そ鏡餅を用ゐて賀儀を祝するには、二個相重なれるを以て一重と號す、此れ奇を諱みて偶を用うるもの乎、といひ、成形圖說卷十六には、歳首に餅を製つて鏡餅と稱することは、日の神磐戸にこもらせおはしましける時、其御象鏡に鑄奉りて祈り申しけるに、再び磐戸明給ひしといふ佳例にとりて、新玉の年立歸る春の初を、かの常暗より又しも現に開け明けぬる嘉慶になんたぐへつゝ、祝ひける、と見えて居る、年始の鏡餅については、此の外に確かなる說

はないが、前にも記したやうに、我國にては事ある毎に吉凶を擇ばず、必らず餅を搗くは古來の慣習なるが中に、年の始めの如きは、尤も祝すべき佳節のことなれば、之を賞翫するのも謂れのないことではない。

▲齒固　新年に際し、齒固と稱して「もちひかゞみ」に對ふのは、人は齒を以て命とする故、齒を「よはひ」とも訓む程なるから、齒固は「よはひ」を固むる心なりと傳へられてゐる、江家次第には、元日平旦天皇（清涼殿の）東廂に御す（中略）御厨子所御臺二本を供し、内膳右の青瑣門より御齒固の具を供すとあり、源氏物語初音の巻には、齒固してもちひ鏡をさへとりよせて千年の影にしるき、といひ、枕草紙には、讓り葉はよはひを延る齒固の供にもしてつかひためる、といふてある、要するに、此の齒固といへる事は、固より本邦に限れる慣習にはあれど、漢土にも亦た似通ひたる事のないでもない、華實年浪草といへる書に、荊楚歳時記中に元日膠牙餳を食するは膠固の義に取る餅は鏡形に製す、とあるを引きて、膠の字はニカワとも又たカタムとも訓ず、牙はキバなり、餳はアメなり、餳を食して牙を固むるの意にて、本朝の齒固と相似たり、と附記してある。

▲雜煮餅　同じく華實年浪草に、元日の朝良賤雜煮を食し、又た雜煮並に飯汁を小土器に盛り佛神に供し、又た竈並に井戸を祭る、凡そ今日、良賤の調味多く鰤魚、鯨魚、鰯魚、數子、熬海鼠、串石決明、並に牛蒡、大根等を用う云々、と記事の言葉を引證したやうに、雜煮は今も尚、餅に大根、芋、蹲鴟、昆布、打鮑　イリコなどを加へて、羹となして食ふものにて、多くのものを種々取交へて煮るゆゑに、雜煮とは唱へられて居るのであらうが、五臟を保つものは餅であるといふ處から、雜煮餅の事を足利時代以來保臟と稱し始めしよし、古き文にも見え、享保本由縁齋貞柳の狂歌集に、門弟のうちより年の暮に祝儀とて、餅に鳩を添へて一首よみ送られけるに「狂歌添へて贈りたまはる鳩の峯、豊藏（保臟）坊の

風をもちひて」とあるを見れば、其頃も雜煮をば專ら保臟と唱へしものと思はる、序でながら、雜煮餅は小餅とて小さき丸餅を炙らずして煮るのが古代の慣習であるが、新年には何れの品にても刄物を加へざるをよしとするので成るべく新年の餅には刄物をつけぬ、現に西京大阪近邊にては皆な丸餅を用ゐて居る、故に此の地方に、若しも炙りたる餅を用うる家などあらんには、無知なる土地のものどもは附會の妄談を唱へて、殊の外忌み嫌ふ習慣がいまだに殘つて居る相である、これは素より論ずるまでの價もなく、今東京にては、人も知る如く切つた角餅を用ゐて居るが、此の方が實地食料とするには、却つて便利なからであります。



▲鏡開　牛蒡を開き牛蒡、豆を開き豆と稱し、菜を刻むことをハヤムといふと同じ例にて、鏡餅には切るといふを忌みて開くといひ、燒く炙るなどいふを嫌ひてホコラカスといふ地方もある、此の鏡開は貝原益軒の說によれば、往古に正月の二十日に執行ひしものなるが、舊幕時代、德川三代將軍薨去の後、此日が恰かも同將軍の忌日に當ること丶なつた爲め承應元年の正月以來、年々十一日に此の式を行ふことになつたといふことである、紀事に曰く、凡そ鎧

に六具あり、具足の謂なり、其供する所の具足の餅は、特に刀を以て之を截るを忌む、故に手を以てし槌を以てして之を破り之を缺ぎ、而して之を賞す、是れを鏡開といふ、世の所謂缺餅の名は、又た此餅より起る、新年は截の字を忌む、故に鏡開と謂ふなりと。

▲粥柱　粥の中に入つてある餅は、古來粥柱と稱するのならひで、七種の粥、及び十五日の小豆粥などに入るゝ餅を、即ち其の粥の柱といふのである。要するに、正月の餅については、此の外にも語るべき事柄は少なくない、況して、單に餅のことについてといはゞ、決して限りある紙數のよくすべき所ではないのである、假りに五節供の餅のみについて語るも亦た一朝夕のことでない上、時は新年に際して居ることゆゑ、餘は悉く他日の機を待つてとゝいたします、尤も正月の餅についても、地方々々に於ける習慣、其の外、調製方など一々に記さんは、煩はしさを増すのみなれば、爰には省略致します。

東洋婦人會

△平和事業

東洋婦人會創立の趣旨は、東方善隣の諸州、同好の姉妹僚友に謀りて、廣く相交り、遠く相扶け、共に合同協力し、互に切磋講習し、之を内にしては東洋婦人天與の粹美を大成し、之を外にしては東洋婦人を代表して西洋婦人との交誼を謀り、以て世界女權の圓滿大成を希圖せんとするに在りといふ。

今や日本は、一方に於ては東洋平和のために戰爭をなしつゝあるに際し、他の一方に於ては文明の普及、人類友愛のため、豁然門戸を開き四洲共に遊ばんとする社交的會合の發生を見る、吾人は平和の一事業として、こゝに東洋婦人會の門出を祝せざることを得ざるなり。

△事業綱領

以上の趣旨を以て、同會は漸次に着手すべき事業を豫め議定し、左の十綱目を規定せり。

一　東洋諸國に廣く會員を募集する事
二　會館を設置して、各國會員の音信、交詢、來遊等に所有便宜を具備する事
三　會館には客室及圖書室を附し、四方來遊の會員に供し、又其共同智識に裨益する事
四　會報並に會の主旨に相應せる諸種の文書を出版する事
五　東洋婦人の福利と爲るべき諸種の研究を爲す事
六　東洋婦人の文化に裨補すべき學園及講話會を創開する事
七　留學生の爲めに諸種の便宜助力を與ふる事

八　會員以外と雖ども、東洋婦人の渡來する者の爲に、諸種の便宜を供する事
九　東洋婦人を代表して、西洋婦人との交誼を計り、世界女德の圓滿大成を希圖する事
十　以上九種の事業に類し、其主旨本會の目的に相應せるものは適宜着手すべき事

△沿革及職制

此等の趣旨、此等の事業豫定を以て、昨三十六年九月、華族會館に於て發起人諸氏相會し、同會創立發起相談會を開き、席上創立事務一切の全權を委任すべき委員十四名を選擧せり、本年五月侯爵夫人鍋島榮子を會長に、子爵夫人長岡知久子を副會長に推擧し、顧問、理事、主事、評議員、特別贊助員等の職制を定めて左の如く囑託せり。

職員

會長侯爵夫人　鍋島榮子　副會長子爵夫人　長岡知久子

顧問

子爵夫人　田中伊與子　棚橋絢子　山川二葉子
伯爵夫人　佐々木貞子　三輪田眞佐子　下田歌子
公爵母堂　毛利安子

理事

伊澤千世子　井口あぐり子　高木鏃子
山脇房子　安井哲子　子爵夫人松平久子
河本龜子　佐藤靜子　佐方鎭子
子爵夫人　三島彌子

主事

清藤秋子

評議員

伊集院繁子　波多野濱子　男爵夫人花房千鶴子
原禮子　伯爵夫人　戸田極子　岡山俊子
小具貞子　香川志保子　門野駿子
侯爵夫人　金子辰子　高橋品子　武田貫子
武田錦子　園芳子　相馬睦子
侯爵夫人　黒田清子　山本多穗子　伯爵世嗣夫人松方保子
松山鐙子　小林幸子　後閑菊野子
子爵夫人　五島善子　子爵夫人　秋元宗子　阿部優子
跡見花蹊　男爵夫人　清浦錸子　岸澄子
男爵夫人　三井苞子　三井捨子　宮岡慶子
進道子　隈郁子　男爵夫人千家俊子

特別贊助員

犬養毅　巖本善治　伯爵　大隈重信
子爵　岡部長職　男爵　渡邊千秋　辻新次
侯爵　鍋島直大　子爵　長岡護美

▲蒙古喀喇沁王福晉殿下

而して茲に同會の光榮として特筆すべきは、蒙古喀喇沁王妃殿下の御入會及び一時金の御下賜なり

▲事業擴張

かくて同會創立の事務も略緒に就きたれば、發會式を擧げんとの議起りしも、時局の際暫らく遠慮することゝし、本年六月華族會館に於て懇親會を開き發會式に代へたり、爾來會長始め役員諸氏は鋭意會務に鞅掌し、本年八月會長は清藤主事に横濱、神戸在留の淸國有志者遊説の事を囑託され、同主事は一ヶ月間右兩所に遊說したるに、淸國有志者は非常の熱心を以て歡迎し、響の聲に應ずる如くして忽ち多數の贊成を得、則ち直ちに會員及贊助員と爲りしもの百數十名、尙且つ同會擴張のため取敢ず寄附せるもの一千數百圓に及べり、現在に於ては會員の數百八十五名、內修身會員七名、贊助員の數百餘名內特別贊助員八名、創立日尙淺きに拘らず、其の成蹟見るべきもの此の如し、同會のために慶すべきなり。

▲孔聖生誕祭

本年十月六日、例により、横濱在留清國有志者の合同にて、孔聖生誕祭を擧ぐ、招に應じて筵に列する者京濱知名の諸士七百餘名と稱せらる。東洋婦人會の役員亦招に應ず、所謂山海の珍味を列れ、清國婦人其の間に周旋し、歡待變應到らざるなし、同會式場祭奠委員長譚伯笙氏の辭意に曰く、

日清兩國民の親交は其の由て來る處甚だ遠し、單に一衣帶水唇齒輔車の關係あるが爲のみにあらず、單に同文同種なるがためのみにあらず、文明の基底と國民の精神とに於て、其運の樞軸を一にするが故なり、樞軸とは何ぞや、孔夫子是なり、

と、東洋婦人會賛助員大谷嘉兵衛氏之に和して曰く、

孔聖二千五百數十年の辰誕を祝すると共に、余は茲に東洋婦人會の生誕を祝するを得るを喜ぶ、蓋し東洋婦人數居幽閉の陋習を破り、清國の淑女と東洋婦人會の貴婦人諸氏が、一堂の下に洋々として和樂す、是れ一種の奇觀、而して古今未曾有の會合なり、是豈に孔夫子の賜なるなからんや、

▲第一年會

同會第一年會は十一月二十日麴町永田町鍋島會長邸に開かれたり、來會者は清、韓、暹羅三國公使及同館員、横濱在留男女清國人、東京在留各省學生監督、遊歷官、清韓女子留學生、京濱の諸名士婦人、同會役員及會員二百八十餘名會長の簡明溫和なる開會の辭、特別賛助員巖本善治氏の報告、副會長評議員の再選、皇族を名譽會員に推戴するの議事等ありて大隈伯清國公使の演説、三輪田眞佐子、下田歌子の兩顧問は會員を代表して挨拶あり、横濱大同女學校教習潘雪巖女史は清國婦人を代表して挨拶あり、高折巖本兩氏のヴアイオリン、ピアノの合奏を以て式を閉ぢ、瀏朗たる樂隊の吹奏につれて一同庭園に出でゝ逍遙す、此の日秋晴、一天拭ふが如く、東洋各國の國旗は微風に飜り、園内には數個の茶店を設けて隨意休憩の便に供せり、又園の一方東京市街を一眸の下に見晴したる芝生には既に立食のしつらいあり、午後三時半よりこゝにて懇親會を開く食卓に列する者男女清韓人百有餘名、我紳士淑女其の間に周旋し、洋々として歡談和樂す、蓋し近時稀有の會合といふべきなり。

▲大隈伯演説大意

今や日本は最も慘憺たる同胞の血を流し、悲しむべき戰鬪をなしつゝある間に於て、他の一方に於ては世界同胞の主義に基き、東洋婦人會の如き平和的團体の發生を見る、吾人は人類將來の福祉のために其の誕生を祝せざるを得ざるなり。

蘇西運河開鑿せられ、西比利鐵道全通して以來、世界の潮流は浩蕩として東西相激し、今や東洋諸邦は其の渦中に卷き込れんとするの狀あり、晩近世界列國の國際關係及び優勝劣敗の狀を見るに春秋以來支那歷代盛衰興亡の跡と甚だ相似たるものあり、此の時に當り能く其の競爭に堪ゆるものは興り、之に反するものは亡ぶ、然ども天は一人に幸せず、また一國に私せず、唯善なる者は勝ち、不善なるものは敗る、古今成敗する處皆然らざるはなし。

然ども古來人類の認めて善となす處時代によりて一ならず、唐虞は無爲にして化し、夏殷は醇朴を以て治まり、周は文を尙ぶ、而して孔子に文質彬々の語あり、其の善俗美風の漸次發展せしの跡歷々として徵すべきにあらずや、蓋し治國平天下の本は修身整家にあり、修身整家の本は婦人に在り、之を要するに一國の善俗美風は一家より起りて天下に及ぶ、一國の治亂興亡民俗の榮枯消長其の由て來る處皆風俗にありと云ふべし、故に支那の聖人は詩を以て風俗を和したり、孔夫子が吾人に敎へ賜ひし人道の大本も、歐米各國が今日の隆盛を致せし所以も其の道や一なし、人情に古今東西の別あることなし、唯善なる者は興り、不善なる者は亡ぶ、生存競爭に處するの道、唯風俗を善美ならしむるに在り。

今世界の激烈なる生存競爭の中に立ちて東洋の運命を維持せんと

す、宜しく眼を世界に放ち世界各國固有の美を採りて我短を補ひ、東西文明の調和融合を圖らざるべからず、而して之を爲すの第一着は實に交際にあり、東洋婦人會は廣く東洋諸國を網羅し、進んでは西洋との交誼を開き、世界女德の大成を圖らんとするにあり、其の規模や宏大なりといふべし、思ふに曾て世界に誇りし東邦の文華と、西洋近世の文化とが同化融和して、文明の精華を發輝するの端緒が、此の東洋婦人會より開かれんことを希望せざるを得ず。

▲婦德完全、國際の親密

清國公使楊樞氏は、其の祝辭中東洋婦人を東亞同文會に比して曰く

自東亞同文會之設、士大夫聲息相通、情誼益以密切、惟限以男子、而婦人之會、尚屬闕如爲是之故、會長侯爵鍋島夫人榮子、因邀集同志創立東洋婦人會、

更に婦德完成より國際の親密に論及して曰く

其宗旨務在近相交、遠相扶、締結同域至誠之友誼、發揚東方婦人之美德、用意深厚者造端宏大、異同者、婦德元完全、國際之親密、胥於是收效果焉、非惟東亞婦女之幸福、亦東亞之幸福也、

▲大山屹立の基礎

藤本善治氏會務報告の後一言の希望を述べて曰く

抑も本會發起の主旨に顧みれば、當一年間の事業成績は猶ほ大山の一塵に過ぎざし、然ども大山屹立の基礎は茲に稍や其一を得たり、況んや、時季漸々好適、天下皆本會の發達を奬勵せらるゝに似たり願くは遼遠の途に於て大成を期し、四方同感同情の贊助を得て漸次着々豫定の事業を成就せんことを、

▲男子の隻影のみ

下田顧問の挨拶中に曰く東洋は古來燦然たる文物典章を有し、其の版圖の大を以てすれば遙かに西洋に讓らず、其の人々の衆多なるに於て、世界に誇る處、然るに今や却て文明富強遠く西洋諸國の後にあるものは思ふに種々の原因あるべしと雖も、人口の半數を占めたる女子が餘りに懶惰し、社會には男子の隻影のみを現ぜしめて何事も表面に立ちて男子の手傳を爲さず、女子の爲すべき事すらも男子にのみ負はしめ、終に社會をして片輪車の樣にならしめたるは、其の重なる原因なるべきか、

▲潘雲篋女子

は其の本國にあるや、夙に女學の振興に務むと雖ども國人の容るゝ處とならず、慨然日本に來りて其の宿志を遂げんとし、今や横濱大同女學校教習たり、蓋し清國婦人中の異彩なり、當日は大同學校女生徒十數名を伴ひ來會す、同日式場に於ける挨拶は簡なりと雖ども明に女史の志を見るを得べし、

吾清國女子の習慣は古より女子の本分を盡し、其の品性及び倫理を尊重し之を維持する事を知らず、是れわれ等が東洋婦人會員として、同會の趣旨を清國一般の婦人に紹介し、以て清國婦人の地位を高めんとする所以なり。

海外思潮

米人の觀察

在米　澁谷馬頭

一、男女共學説

◎前號の女鑑に、スタンホルド大學總長の男女共學を可とする説と、コーチル大學總長の之に反對して

女子には高等の教育を與ふる必要がないと云ふ說とを、大略御紹介申しました。スタンフォルド大學總長ジョルダン博士の男女共學說に就きましては、更に後回を期して、詳細に御報道申したいと存じますが

◎今回は紐育サイラキユスの學格委員博士エリ、フアン、ド、ワークル氏の男女共學教育の失敗と題する論文の大要を申上ます、此の論文は八月二日のハツパース雜誌に發表しましたので御座います。

◎ワークル博士曰く『男子と女子とを同じ學校の中に、同じ教育を施して養成しあげれば、卒業後女子も男子も同じ職業に從事して、同樣の成績を擧げ得られると考へたのは、全く誤解であつたのです』と。



◎ワークル博士は卒業後の社會に於ける成績は、暫らく問はずとして、實際に學校內で、完全なる共學教育と云ふ者を施行し得るや否やと云ふ點に就いて斷言して申されますには『共學教育は出來得ない方法である』と。

◎ワークル博士更に確說して申されますには、『男女

各異りて調和し難い特性がある、共學敎育は此特性をうまく發達成長せしめる者ではなくて、却つてどちら付かずの混血兒性の者となし女子は女子として男子は男子として、必要なる特性を失はしてしまひます』と。

◎コーチル大學總長の非男女共學說は、女子は年頃になりますれば、嫁に行かねばならぬから、長く男子と共に學校に置く事が出來ぬと云ふ、人身生理から來ました說で御座いましたが、ワークル博士の說は、心理的に根本から共學と云ふ事がいけない者と主張されましたので御座います。

◎併し米國現在の所では、男女共學敎育を可とする說を持つて居る人が多う御座いまして、實際に於きましても、最高程度まで、男女共學敎育を施して居る學校が、多いので御座います。

二、一種の男尊女卑說

◎之を男子の口から聞くとしますれば、三文の價ないと申さねばなりませぬ、又之を東洋の女子の思想を發表したものとしますれば、之れ又新に御紹介申す程の事ではございませぬ、女尊男卑の米國の眞中に、かやうな說を熱心に主張する貴婦人があらうとは我も人も珍らしく感ずる所でございます。

◎ローサンジエル市と申しますと、米國の眞中ではございませぬが、其處に婦人社會の牛耳を執つて居られるバーザ、バルッチ婦人と仰しやる方が御坐います、去る日同市プレスビテリアン敎會堂に於て、下の如き意見を述べられました。

◎バルッチ婦人曰く『現在の米國婦人は、其良人の厄介になつて美衣美食をして居ます　之は道理に合はぬ事柄で御座いまして、一家の主婦たるものは、寧ろ良人の衣食をも自ら働いてとゝのへる覺悟でなければならぬ者で御座います』

◎婦人が男子の厄介になつて過しますのが、何故に道理に合はぬかと申しますれば、婦人は曰く『男女同等の權利義務を脊負つてる者と致しますれば、婦人のみひとり安逸を貪つて居られませぬ、婦人を食

はせますのは、男子の義務ですとは申して居られませぬ』と。

◎バルッチ婦人は男女同權を固く信じて居られますそして其男女同權の實を現はす方法如何と申しますれば、婦人曰く『まづ女子をして男子の世話によつて生活して行かうと云ふ、薄弱な精神を改めさせなければなりませぬ』と。

三、日本女子の服裝と日本女子の運動

◎紐育サン新聞に、近頃日本から歸つて來ました、米國婦人の實見談を載せてあります。

◎曰く『日本女子は、戸外遊戲を、中々上手に好んでやります』

◎曰く『日本女子のテニスを遊ぶ時など、其日本風の服裝は、却つて我等米國婦人の服よりも、運動を自由にするに適する物と見えるのです』

◎曰く『日本女子が手を擧げ足を動かして、運動する時に、其色合ひ美しい絹の上着に、うら〻かな日光が相映じて、美觀云ふに云はれぬ趣があります』

◎曰く『日本女子が運動場に出て、テニスを遊ぶは之を形容しますれば、胡蝶の花間に舞ふなど申しましたら宜うございませう』

◎曰く『或る家庭では、奥さんが良人にも劣らず、快活に、運動をして居られました』

◎馬頭曰く米國に來て居る日本人が、日本服を着て居まするは私どもの目には甚だ不體裁に見えます、併し日本へ行つて歸つて來た、米國人は、日本女子の服裝の優美を賞めるものが多うございます。

●八日の旅（一）

松林歌子

發端

五月以來いと心わづらはす事のありて、一同いたく健康を損ひければ、心身の保養かた〴〵、暫出湯あるは旅行にてもと思ひ立けれど、父上は御つとめの御身の思ひにまかせられず、只日々語り暮すのみにてありしに、十月の十六日の夕刻、例のごと一日の事務を終へて歸り來まして、突然明日より暫し御暇を得てければとの給ふに、母君初め、己もあまり事の急なるに夢かとばかり打驚きて、何地へと伺ひ奉れば、父君にはほゝゑみ給ひつゝ、さて己れもいまだいづちと心定めしにはあられど、出湯にゆきて同じ所にさすらはむよりは内海のまだ見ぬ景色たゝへむも面白からずや、此期を失ひては又何時暇得ら

れむもはかられねば、兎に角明日は門司まで出でたち、先は滊船次第にて何れとも方向定めむとの給ふに、さらばとて俄かに母君に手傳ひ參らせて、急ぎ旅裝を整へ、明日の天氣を祈りつゝ十一時過ぐる頃ふしどに入りぬ。

十七日出立

明くれば十月十七日なり、さし上る日影うらゝかに門出を壽ほぐに似ていと嬉し。近きわたりの人々此催し傳へきゝて、音なふ人の數多く、何處をさしてといふ毎に、いまだ行先はわからねど、只旅致すなりと答ふるに、一同あな面白の御催しやと腹をかゝへて笑ひ合ふ。見送る人もゆく人も、はれやかなる笑ひ聲に別れをつけて、午後一時三十二分といふに直方發の滊車にて出で立つ。先づ石田旅館に至りて滊船を問合はせば、午後六時門司發大阪商船會社内海航路大田川丸と云ふが大阪に至る間内海所々に寄港するなりといふ。されば、要なき身の、遊びめぐるにはかゝる船こそと、まづ宮島迄の切符をあがなひ、太陽のまさに長門の山の端に沈まむとする頃、乘船するに、十疊位の部屋に連とも見ゆるお客二人、六時半頃甲板なる食堂にて巾三尺長さ六七尺余りの食卓をかこみて五人會食終へて甲板に出づれば時しも船は門司馬關をはなれて、田の浦の前面を進行せり。九月十六日ばかりの月は美はしくゆく手を照して我等を迎へ顔なり。

すみわたりたる十六夜の月
空や海海や空とも見えわかす

左に長府、右にへさきの回轉燈を見、追風をうけて銀波金波をくだきゆく面白さに、

海の面にさながらやどる月かげを
くだきてはしる船にもある哉

軈て小野田の岬はゆく手に長く横はり、浪は靜かに吹く風もいと心地よし、七時半室に入る。

(北村季晴氏作歌)

◎露營の夢

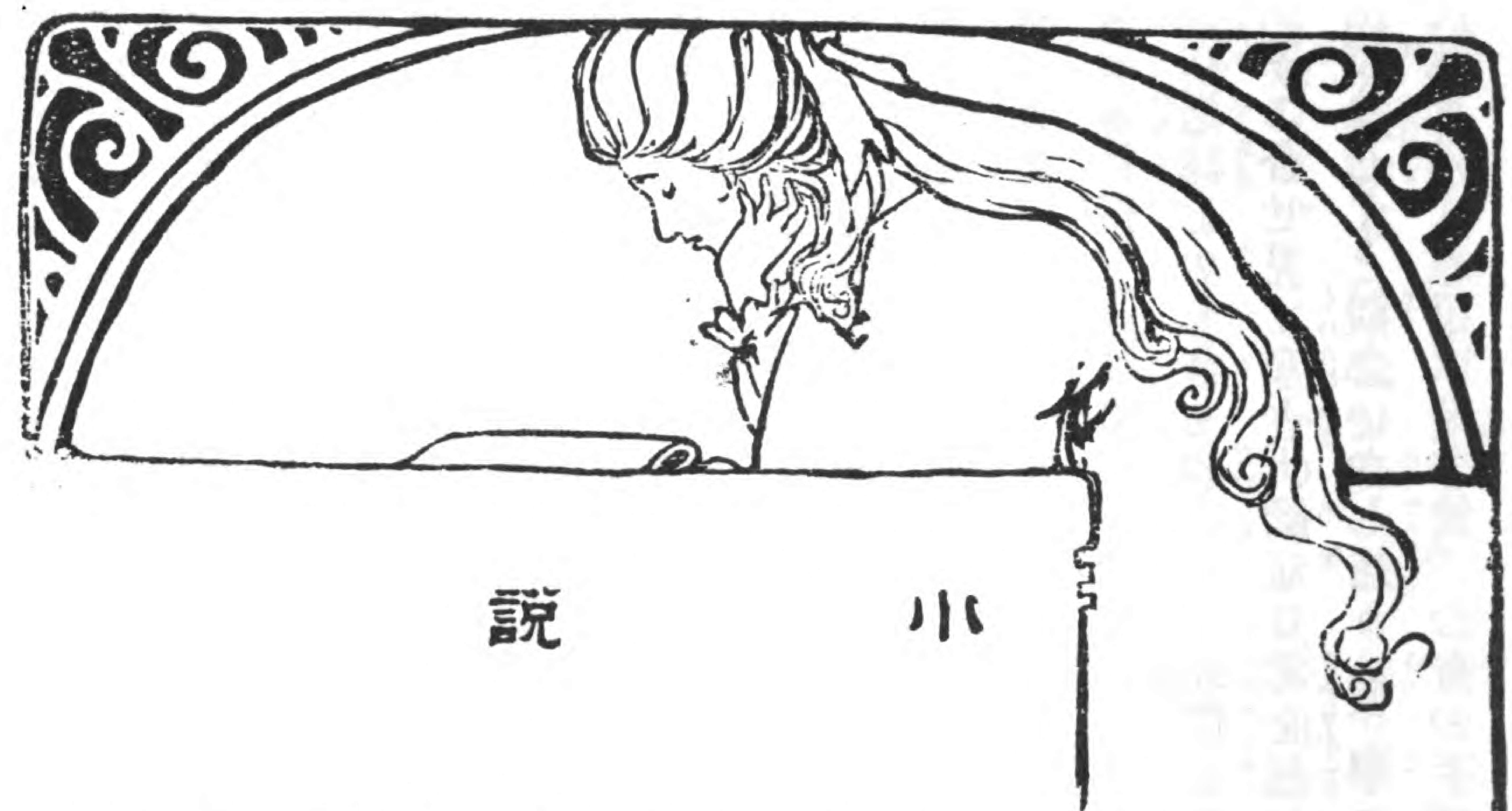
此曲はこれ我が外征の勇士が「火砲の轟き雄賊の聲、今はた止みて更け行く夜半、露營の篝火消えはてゝ、屍をわたる夜あらしの、血しほにむせぶ音すごく、流れては消ゆる星の影青し」なる落寞たる戰塲の夜半

「おどろが野邊の草まくら、戎衣かたしきつはものが、まろねものうき夜すがらの夢や故郷に迷ふらむ」

勇士日毎の激戰に疲れて眠れる間に、故郷を夢みる樣を叙し、かくて歌は止んで樂は騎馬行進の樣を彈じ漸次急調に入るや、辿り辿れる夢路は、「我が家」を見出しぬ。

「こはこれ我が家！……我が家！……げにこは我が家！！」

の叫びを發すると同時に、外征久しき間に愛する故山の荒廢せるに驚き、且つ光洩るゝ障子に咳嗽せる母の聲に驚喜するあたり宛として見るが如し



合奏（上）

田村松魚

此の前のお文も、此度のお音信も、いづれ嬉しからぬはなく候。いづれ悲しからぬはなく候。戀しさはいや増し、お懐かしさはいよ／＼募り申候。如何にせば戀しといふ思ひの斷ち切れ候やらんと思ふまでに、怪しく胸さわぎ申候。かくて幾度も／＼お文繰り返し讀み返し、一ト夜を遂にまどろまぬこと屢々に候。我等が今の慰藉と申し候は、お身のお音信の他に何物もなく、古人の文、今のさま／＼の新らしき書、それ等は見る目も五月蠅く、只管に御身が寄せたまひたる千束の文を、美しき草紙のやうに飾り綴ぢて、そを明け暮れ誦し居り候。我等が生命はおん身の文によりて繋がれたりと申してんや。此の前のお文に虫は鳴かずやとありしに、お答へせんとて忘れまをし候。鈴虫、松虫などのやう、秋虫の清き音は遂に一度も聽きまをさず候へども、さる夜ふけて市中を行き候折、とある軒下にてこほろぎと覺しき音を二タ聲ばかり聞き申し候。故園の情頓に起りたれば、猶耳澄して後を聞かんと其所に良々久しく

立ちとまり候へど、遂に一ト聲もきゝまをさず、露にうたれ、霜にいたみて、鳴く音も次第に細り行きたるかと、そゞろあはれを催して歸り申し候よ。

此度のお文には、此頃また琴に遊びたまふのよし、それは何より宜しく、憂き思ひの數々を忘れ候はんはこれに過ぎたるものあるまじく候、それにつけて昔を想ひ出で候。いつぞやの夜、妻戸の彼方に江の島を彈きてゐたまひしとき、夜深けたれど、我等の音なひたれば、ハタりと手を止め、我を迎へ出でたまひし折ふし十三夜ばかりの月なりけん、軒端に清くさし入りたるが、お身の面を照らし、氣高う美しう、女神にやなど疑ひしことの候ひき、其折我の斯くと云ひしを。人よろこばせをのたまふな、とて、お身、長き袖もてそのおもてを半ば掩へたまひし風情、今も目の底に殘りゐるやうにて、おん床しさの一入に御座候矢張り、ゆき、羽衣、など折々かなでたまふこととなるべし。殘月は手こみていと〳〵難かしと、折々喞ちなどしゐたまひしが、今は易しと云ふやうなりたまひしや。その何の何となうやさしければ、例の『磯部の松に葉隱れて、沖のかたへと入る月の』と口癖のやう、何をするにも小聲に歌ひ候へば、友などまた始まつたかとて、笑草の一つとなり居り候。君を忍びて自から斯くは、と友は知らず候。

我に音曲など弄ぶことありやとのおん尋ね、まことにお恥しながら、此頃にては昔と異ひて、手荒の業にのみ骨折り候事とて、百姓同然の有樣、中々さる風雅の業に心を費すことは殆んど無之候。されど好きな道はをかしきものにて、此間もさる方の奥樣より彼の箏曲集といへるを借り來りて、琴唄をピアノの調子に合せ見んなど大膽なる考を起し候こともありしが、中々骨節のみ鳴りて音樂らしき物の音などは出づまじくと觀念いたし居り候事に御座候。

尺八も殆んど手にせず候。お身の手づから縫ひてたまはりし笛袋、あれはおん身の帶の切にて造りて送り

たまひしなれば、大事に〳〵致して持ち居り、折々心の欝し候ときなど、君を忍びては『例の黒髪、』『ながしの枝』などいふ、お身は餘り好まずと、仰せられ候やうのを、たま〳〵弄ぶこともあれど、昔のやうに氣も乘らず、とても今の身には音曲沙汰ではなく、泥臭くばかりなり候。亞米利加へ參りたるなれば、大分大分男振りなど好くなりたるべしなど思し召さんが、どうして〳〵却つて眞ッ黒な顏丈うとなり、わたら業平を臺なしに致し候亞米利加のいと〳〵憎らしく候。

戲言はさて置きて、音曲の話しの出で候序なれば、此頃いと興ある物語りの、我が知れる人の身の上に起りたること、筆のまに〳〵お知らせ申さん。まことに詩とも小説ともなるやうのことにて、そゞろおもしろく思はれ候。殊に我が知れる人の上に起りたることなり、その人の尺八の名手なるが一層おもしろくまた此の話の女主人とも申すが琴の名人にて、其間に起りたる一つの美しき物語、事はつひ此のあひだの天長節の式場に起りたるにて、まだ生々しき新話に御座候。此地にて有名なる俳優ヘンリーミラーと申すがあり、それの出し物にてハーチストといふ演劇の中にも此の物語りと殆んど同じやうの出來事のありたるを過ぎし日一見したる我の、誠に目前の人の身の上に斯樣のことの正しくあるものにや、とそゞろ心驚き申候。お身と我とが相慕ふ心に比して、其人に寄する同情の人一倍深きにも候はんなれど、お身も定めし興ある物語なりとて讀みたまふなるべしとぞんじ候。さらば筆短かくその大略を物し見候はんか。

（下）

桑港の天長節式場は、毎年桑港第一の大公會場メカニックパビリオンと申すにて開かるゝにて候。此の時の光景は實に本國人に見せてやりたき程壯嚴にて、とても本國人の想像には及びもつかぬことと、始めて此の式場に臨みたる我等は心私かに驚き申候。

桑港は云ふも更なり、附近に住へる同胞は此の大會塲に推し寄せ候事とて、實に目覺ましく候。第一式には嚴かなる式のさま〴〵あること、本國の樣とさしてかはりたることなく候が、第二式と申してはさま〴〵の餘興あり、芝居、手踊り、茶番、手品のをかしきは云ふも更なり、角力擊劔やうの荒々しき事までも餘興の中に加へられ候事なるが、今年の天長節には何か高尚優美なる餘興の一つを加へたしと、有志家の發起にて、さてこそ茲に琴と尺八との合奏を第二式中、第一の餘興として加へたるにて候。物語りは此の合奏中に起りたる出來事なるは申すまでもなく候。

さて琴は近頃或る銀行の副頭取として日本より參られたる佐山學士の令閨にて、名をば妙子と申す方、琴には極めて堪能の婦人にて山瀨の門下の由、或は御承知の方にも候はん歟。秀才の名高かりし人と承はり候。されば是非とも此の君に琴の方をと、有志連より强つての望辭し難く、さらばと承諾はしたるもの丶名前を順序書に出すことは望ましからず、といふやうな譯にて相談纏り、一方の尺八の方は、當時サクラメント府と申す、桑港より八十哩ばかり離れたる田舍にて、チヤツプウードと申して日本の杣人のやうなる勞働者の取締りをなせる一靑年、これが笛の名人にて、雅童の高弟の由、我等とも淺からぬ交際ある男にて、學力と云ひ見識と云ひ、珍らしき人ながら、自ら斯る勞働に身を苦しめつ丶、獨り都離れし山中に引き籠りては、閑寂の天地に一管の愛笛を弄するを只此の世の樂しみとせるがあり候。名は自ら假りに澤木と申し居れど、故ありて實名は名乘ざるの由、斯樣の人物ゆゑ、無論公會の席上に出づるをよろこばざれども、此れも有志家の懇望もだし難くて引き受けたるにて候が、十一月三日の午後四時に、サクラメントを出發して大急ぎにて會塲に着したるは、恰かも其第二式の合奏の番に當れる處にて、取るものも取り敢へず、出塲致したるやうな次第に御座候。

聽衆はいづれも順序書に無名氏の合奏とのみあれば、如何なる人物にやあらん、美人か、好男子かなど想像を逞うして待ち搆へたる所へ、恰かも現はれしは二個の人物、一人は六尺にも近かるべき頑丈作りの男子、一人は風にもたふまじき若き婦人、先づ兩者の配合の餘りに意外なりしに公衆は思はず拍手したるやうな譯にて、現に我等も觀者の一人なりしが、其凛々たる面魂の好青年と、楚々たる容姿の佳人とが、一つは琴、一つは笛に、相對して座せる光景の立派さ、壇上には菊花を盛りたる大花瓶の飾られ、場の後景は日と星とをストライプにてつなぎたる幕を引きめぐらし、空に輝く電燈の光りの隈もなく此の大會場を照らしたる、壯嚴云はん方なき中に、此の男女が今夜の花と數千の聽衆に喝采を以て迎へられたる時は自づから心勇ましく思はれ申し候。されば我等は眼も放たず、耳を澄して此の兩個の人の如何に奏し出づらんを待ちかまへゐたるにて候。

いづれも大事の場合なれば、斜に聽衆の方に向ひ、良々暫しは心を靜めゐるやうの有樣に候ひしが、やがて笛の方にて例の盤渉調の澄み渡る音を吹き出すかとすれば、それにつれて琴は忽ち其の音を取りつ彈き出だされたるにて、曲は何かと申せば、互に名人のことゝて『四季のながめ』にて候ひき。さすがに佳きものを出したるよ、と此の道には我も少しは心得あるものとて、興あることに思ふ間もなく『梅のにほひに、柳もなびく春風に、桃の三月の花見てもどる、ゆら〳〵と夕がすみ』と彈きつ吹きつ進み行く聲調の有繋は斯道の妙手なる哉、と感嘆しながら聽きとれをり候うち、『まだき初音の山ほとゝぎす、ひと聲に』のあたりはます〳〵妙に進み候て『花の名殘りも忘られて、家づとにかたらばや』といふところまでは氣息もつかせず、滿場は咳の聲もせず、しつくりと呼吸よく合ひて終り候。

さて、此よりは例の大事の所にて、手事となりて、掛け合ひの食ひ合せといふ愈々秘曲を盡すべき晴の場

に候を、如何に致し候やらん。次第〳〵に兩者の調子亂れ合ひ、笛吹く方は竹持つ手先の狂ひに困じ果て候如く、琴彈く方は推手の指の亂れに惱み入りたる樣、程近きわたりに席を構へゐたる我の眼に、その樣いと〳〵佗しく見え候のみならず、聞く耳には愈々その調子の整はぬに不思議と思ひ候うち、惱み〳〵ながらも『草葉色づき野菊のさきて、秋ふかみ、野べの秋風露身にしみて』といふ節に至り、如何にやしけん、此の時一弦ハタリと斷れ、同時に妙子はガックリと身を琴の上に俯せ候。驚愕は我のみに候はず、アナヤと人々立ち上る折しも、笛の澤木が突と身を起して、妙子夫人を抱き起せし其刹那に、思はず我を忘れて發したる聲に候べし、程近くありて、殊に此の場の始終に注意せし我の耳には、慥かに妙さんと女の名を呼びたる聲に涙をふくみ、得堪へぬ感慨に打たれ候顏色、他所の目にもあはれを催し候が、不圖其聲耳に入りて我に返りたるに候や、夢の如く男の手に取りすがりたる其手を放ち、始めて四方に人あることを恐るゝが如く、顏をも上げ得ず耻をふくみて、言ふに言ふ能はず、泣くに泣くを得ぬ一場の悲劇、世話人も聽衆も一度に立ち上りたるが、互に顏を見合せたるばかりにて、唯混雜の外に致さん術もなきやうの次第に候ひき。

此の合奏は此の儘に終り候ひしが、此の澤木といふ男と、妙子といふ婦人との間に如何なる緣の絲のからまりゐたるやは、お身の想像に任せ申し候。若し幾年の後、お身と我との間に、此れに類せるやうの悲しき事の起り候はざらんを、我は只管に神に願ひ候。神の攝理に任せたるお身と我との間柄なれども、猶神の我等兩人に幸福多からしめたまはんことを祈るの外なく候。此の時の有樣は猶詳しく後便に申上ぐべく候へども、今は拙なき筆にて目前に見候まゝを申上候。琴絃の斷れしといふ字の心掛りに候へば、我れ男力に此の絃確と張り直し候ひてんや。

去年の一月

小川直子

かけまくもかしこけれど、常宮周宮の御ふた所、こたび寒さをよき給はむためにとて、豆州三島の里なる、小松の宮のなり所にいでましありけり、萬にものたらひたる御身ながらも、御旅寢の習ひつれ〴〵にものし玉ふらんと、御氣色給はりがてらものし侍りにけり、素より汽車の事にしあれば、またゝくひまの往來にて、都にやう替りたる、氣色どもいとをかし、此日は降りつゞきたる春雨も名殘なう晴わたり、道すがらも海霞棚引渡り、遠く見渡す廣野には、梅の林ありて、老木若木の立枝とも並たてるか、雪ともあやまたるゝばかり、いと白く咲つゞきて、薫を送る春風の氣いと面白し、爰を通れば、はる〴〵と果もなき大海原の見ゆるに、

大ふねのけぶりもそれとわかぬ迄
うなばら遠くかすむ春かな

はるかなる沖にけぶりを殘し置て
安房のみさきをすぐる大ふね

など思ひつゞけつゝゆく程に、函根のトンネルにかゝりければ、いぶせさいはむ方なくて目をふたきて打過ぬ、しばしが程にて、一きは晴渡りたる天つみ空にそひえたる富士の根の雪をいたゝけるが見ゆるは、例のたとしへなううるはしうこそ、

見るまゝに心の雲もはれわたる
み空にたかき空のふしの根

晴わたるふしの裾野に打むれて
うなゐをとめか若葉つむ見ゆ

など口すさびつゝ見渡す程に、佐野の停車場につきぬ、いと嬉しうて水うまやにしばし息ひけり、夫より小車はしらせて、宮の御館へ至り着、まうのほりて見れば、おもとたちの語らるゝに、只今なむ、

ふた宮いとかしこくも、小川はいまだのぼらぬにかと問はせ給へる所なりとあるにぞ、急ぎ御前にまゐりて、打ちかしこめば、御ふた所、小川よ侍ち遠かりし、はやとのたまはすれば、例の涙さへこぼれぬ、御住居の御ありさまは、素よりなり所の事にしあれば、萬事(よろづごと)そぎ給へど、いとも〳〵みやびて何處のおましも御茶席のやうにしつらひたり、御庭はすべておのづからなる岩山をもて造りなしたれば、御池は廣らかにて、一面に岩間より湧きいづる水いと清く澄たるがいひしらずうるはしきに、鯉どもの數多つどへれば、緋なるあり、また錦色にてまだらなるなどとり〳〵らうたけにて、所得顔(ところえがほ)にひれふりつゝ遊へるは、實に君子もこれを樂しむにかと問ひけむ古言(ふるごと)さへ思ひぞそへられけり、少しへだてゝ、かなたの汀には、鵞鳥あるは、家鴨のつやゝかなるがむれつゝ遊ぶも、又いと面白し、こゝなる中島には蘆鶴(あしたづ)の聲ものどかに、萬代うたひて雲井をこひしと思ふ氣色もなく池水に千代の姿をうつしなどしてたてるも氣高(けだか)う見ゆ、又の日は伏見宮の禎子女王なむわたらせ給はむとのみせうそこありければ、ふた宮の喜ばせ給ふとなゝめならず、かくて晝過る頃わたらせ給ひぬ、謁見場(えつけんば)にて御對面あり、禎子女王よりくさぐさのものども奉らせ給へば、ふた宮よりもうるはしき物あまた參らせ給ふ、しばし御物がたりありて、諸共の御庭にいでさせ給ひければ、おのれも御供のつこうまつる、御ふた所の宮はいまだ幼なくおはしませば、たゞ愛きやうありて、らうたくのみわたらせ給ふ、禎子女王はやゝおとなび給ひて、なよやかにわたらせ給ふが、あでに氣高う、世に類なきみありさまのわかぬ所なくて見奉るだにも、命ものぶる心ちせらる、さればいにしへの衣通姫も、いかでかほどにはと思ふばかりなるに、

御心さまさへ情深く、いみしう世の人をいつくしみたまふ御さがなれば、ふた所の宮との御中らひなども、かたみに御むつびあひ、なつかしみたまふこと、大方ならずおはしませば、御手をとり給ひつゝ、御池のほとり、こゝかしこせうようせさせ給ふに、漸々萠え初る若菜など、我劣らじと摘みとり給ひつゝ、匧にいれ給ふに、御心の御嬉しさもこぼれて、見ゆる御氣色ども、いとめでたし、夫よりもとの御ましに歸らせ給へば、御くたもの何くれとすゝめ給ふ程に、供奉の人々御歸りをそゝのかし奉れば、いざとて御いとま聞給ふ、御名殘をしげに御手をとりかはしつゝ、またく\もと契らせ給ふを見奉るも、かなしき心ちせらる、此日もはやう黄昏となりぬれば、おのれは其又の日まかりまをして、家路にといそぎ歸りけるに、長閑なる春の日影のさし出る程、ステーションに至りつきけるを、此日は滊車のおくれていたうおそうなりければ、

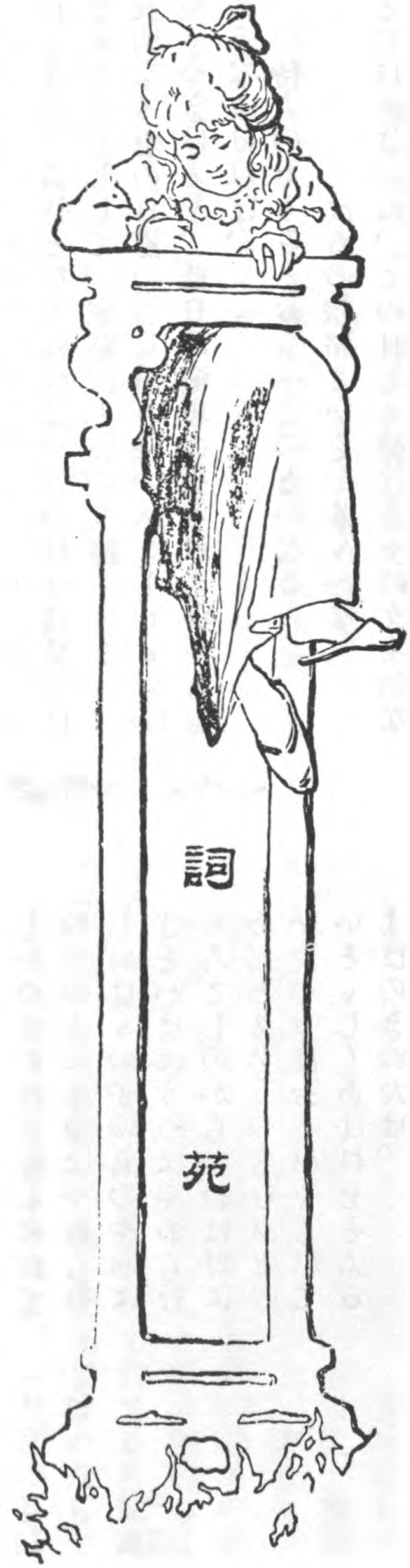
待人のありそとおもへはのとかなる
　はるの旅路もいそかるゝかな

とぞ口すさびぬ、この日しも甥なる土岐文次郎なむおのれの歸るを迎へむとて、我庵までふりはへものして待てりと告げおこせたるを、老の心には嬉しと思ふなりけり。

擣衣

下田春興

くにのためきみのためには
なつかしきおやもなにせむ
いとほしきつまもなにせむ
みいくさにしたがふわれそ
しきたへのそでなひきそと
をゝしくもたゝしゝひとの
しかつまの夜さむしのびて
ねやのとにうつにやあらむ
しがはゝの手ゆゑのやみに
さとがはにうつにやあらむ
もろこしのからのおほ野に
あだともをうつらむひとの
いたつきはおもひやられて
いとゞしくあはれをそふる
よはのきぬたは。



従二位子爵 黒田清綱先生撰

（代撰菊地武則先生）

艦上新年

天 麻布區霞町六番地 青木光子

軍人みはたかゝけてあら玉の
としをむかへしふねのうへかな

地 東京牛込區北山吹町 後藤喜代子

年たちてわしたのとけき艦の上に
かゝやきわたるひの御はたかな

人 東京赤坂區青山北町 岩谷梓子

のとかなる年の初日は勝いくさ
いはふ御ふねのうへにゝほへり

甲

あら玉の年のはしめは軍ふれつゝのおとさへのとけかりけり　松山 上原のぶ子

初日かけにほへるうみの舟のうへに涙のとかなる年をむかへて　大和 栗山多加子

いくさふれ勝しめなはに年立てのとかにみえしにしのうなはら　東京 上田徳子

年立てはくにのひかりも高砂のしまの名におふいくさふれかな　福井 今村田鶴子

かちつゝくますら夫いかに祝ふらんみいくさ艦に年をむかへて　熊本 日高かず子

大阪　船越小仙子

あた浪はしつまりはてゝ舟の上ににほひそめたるはつ日かけ哉

陸前　前田河千年

あた浪もけさしつまりて新しきとしをむかへしふれのうへかな

靜岡　竹内みつ子

ひのみはたみいくさ船に立なへて年あたらしくいはふますらを

乙

三河　永井さい子

日のみ旗高くかゝけていくさ舟としとともにもかへるうれしさ

東京　岩谷淺子

かちときの聲もろともに新玉のとしなみよするふれのうちかな

茨城　飯田古宇子

うら／＼とのほる初日のみ旗をはみいくさふれに仰くけふかも

長野　市川かめ子

新玉の年をむかへて艦のうへによろつ世かたうますら雄のこゑ

長野　山本直枝子

四方のうみ浪を靜めてあら玉のとしをむかふるいくさふれかな

肥後　佐々小琴子

軍艦こきつらなへてあら玉のとしたつけさはにきはひにけり

愛媛　高橋茂子

浪風もをさまるみ代のいくさふれのとけき年をむかへけるかな

秋田　古瀬りく子

萬よとうたひあはせてあらたまのとしを朝日のふれにほくかな

本郷　野口しま子

御艦より上るけふりそかすむなるくれのみなとにとしやたつらん

秩父　澤田房子

年立ちてのぼるあさ日のふれの上に君が代祝ふますらをのこゑ

埼玉　横田音羽子

天津日の旗風なびくふれのうへに年たつなみものとけかりけり

千葉　大谷ちか子

外國のおほうな原のふれのうへにとふきまつるとしのはしめを

（以下到着順）

陸前　前田河みさを

あらたまるとしと共にそ海はらにあたなす舟のなきそうれしき

埼玉　横田秋子

艦のうへにとしのはつ風ふきそめて千代のなみたつ横須賀の海

埼玉　横田やな子

くにまもる吉野龍田のいくさ艦御はたひらめきとしやたつらん

武藏　波雲子

かちどきの聲なみたかき艦上にあかきこゝろのはつひことふく

栃木　惠子

あたのふれしつめてけふの初春をむかふ兵士のこゝろこそしれ

三河　山田經子

大君の八千代をいはふこゑのしてみなとの海にとしたちにけり

岩代　菅野和子

波まよりはつひのほりて艦ことにきみかよ祝ふおほつゝのおと

福井　齋藤杜子

ともにかゝく我か軍艦旗にはつひかけ輝きにほひ年はきにけり

松山　田村多豆子

旅順の海みいくさ船による波のなみならぬ世のとしはたちけり

秋田　古瀬惟子

ふしのねにのぼる初ひをわたつみの艦にもあふく年たちにけり

下野　佐藤翠子

君か代のとしのはしめをいはひつゝ恩賜の御酒にうたふ艦上

下野　佐藤喜代子

ますら夫か年のはしめをことほきつ君か代歌ふふれのうへかな

岐阜　松岡章子

仇なみのよせてもくつる艦の上にとしたちかへるけさの嬉しさ
薩摩　松原みれ子

勇ましや仇をこらしていくさふれかちときあけつ年をむかへし
福井　岩橋花子

あた海にいかりおろして軍ふれ年たつけふをいはひけるかな
下野　みどり子

新玉のとしをむかふる艦のうへにつるも千とせをいはふ今日哉
愛媛　さゆり

あたなみをしつめてうかふ軍艦こゝろのとけきとしむかふらん
廣島　宮本野枝子

ふれことに御旗をしたてうらうらと寿ひいはふ今日のあらたま
上總　高名とよ子

かちつゝくみ軍ふれにたくひなき年のはしめをいはふますら夫
肥後　徳永萬壽子

四方の海なみもしつけき船の上にみよのとかなる年はきにけり
肥後　佐々有鄰子

新玉の年のはしめのおほふれにわかまつたてていはふめてたさ
肥後　徳永旋子

うらゝかにのほる初日も波まよりいてていくさの艦にかゝやく
肥後　徳永而有子

御代なれやうなはら遠く船の上にとよ年いはふやまとますらを
本郷　西岡古代子

大君のましますかたゆ初日いてゝ艦をかこみてなみのはなさく
長野　小泉米子

浪風のあらきなかなるいくさふれのとけくむかふあら玉のとし
長野　山本民年子

あた浪のよせてかへすは大ふれにかゝやきわたる初日子のかけ
長野　山本基子

いくさふれ西なる海にうかへともひかしより迎ふあらたまの年
長野　小泉徳子

新玉のとしにはあれといくさふれおこたりそなき西のうなはら
長野　小泉たつ子

わたの原いかりおろせるいくさ艦み旗のもとにとしたちにけり
長野　小泉みつじ子

初日かけ御軍ふれにかゝやきていかにのとけきとしむかふらん
東京　渡邊初子

いくさふれ仇のみなとに乗いりてけふむかへぬる年やほくらん
東京　渡邊名加子

あたらしき年と勝とをことほきてみいくさふれにうたふ君かよ
本郷　青木たま子

初日かけみいくさふれにかゝやきて君かみいつを祝ふますらを
京都　森本秀子

松かさりせぬとも清きものゝふのこゝろそ海にてりかゝやきつ
本所　三坂きやう子

ますらをか守る御ふれのほはしらにかゝやき渡る初日かけかな
麹町　石川薫子

初日のてなみしつまりてみいくさのみふれにひゝく奏かくの音
麻布　林艶子

仇のふれもくつとなしてにひ年をほく筒の音のいさましきかな
麻布　林環子

あたらしきとしをむかふる軍艦ゆきかふうみ路あたなみもなし
茨城　久保田健子

ときのまもしつこゝろなき艦なから年立けさはのとけかりけり
山梨　標武子

とつ國の海のおたりにとし立ちて君か代いはふ間もやすからし
神奈川　森田はな子

海原もてりこそわたれ初日にほふみふれの上のみはたうるはし

打さわく去年の仇なみたちかへりみいくさ船によろこよのこゑ　名古屋　不破きみ子

あだの船しづめつくしてのとかなる年むかふらん艦のますらを　東京　松永徳子

いくさ船大つゝこつゝひゞかせて年たちけりといはふけふかな　兵庫　原田秀子

軍艦あだのみなとをせめおとしかちときあくるとしのはつこゑ　日本橋　牛山紫子

楫まくらゆめのなかにも戦のかちときあくるとしは来にけり　神田　山田ふみ子

ほばしらの上になびける日のみ旗まへ輝やきてとしたちにけり　長野・岡田千穂子

みはた立いねいさましうら〳〵に國をかためてむかふふ〔ゆ〕哉　大和　栗山俊子

荒浪をうちしづめつゝいくさ舟朝日にほへるとしはきにけり　播摩　本多宜子

もろこしの海の涯さへしつけくてみいくさふねに春はきにけり　東京　山本茂子

ふねか上にそらあふきつゝいくさ人祝ふもたかし君かよのはる　群馬　林廣子

たくひなきほまれの艦に打のりて年をむかふることのうれしさ　前橋　竹のふし

軍艦としをむかへてうつゝつもあたをわすれぬひゝきなりけり　山口　村上操子

にごりなき波の面かすみいさましくうかふ凱旋にみよ祝ふかな　東京　田中拾紫子

甲板のうへに並びて待ちしときはつ日のひかり見たろうれしさ　埼玉　日向章子

本郷　清水春美子

とさしてし仇の港に大御舟はた風たかくとしのあけゆく　下谷　椎野秀子

仇をうつてたても年ともろともに尙あらたまる艦のうへかな　埼玉　澤田伸子

はつ日の出あふくみふれの甲板に御代のさかえを祝すますらを　埼玉　町田勝子

あだ波はよしさわくともいくさ艦けふはしつけき年をむかへて　日本橋　鑑田その子

もろこしのおきつ島ねに艦よせて君か代いはふとしはきにけり　本郷　田部井信子

みふれいくさ今しとたえてほの〳〵と海つらあくるはつ春の空　茨城　飯田ますた

波を蹴てすゝむみふれのほばしらにかゝやきわたる初日かげかな　能登　高森いち子

軍ふれに初日のいでてなながみつゝ祝ふみこゑのいさましきかな　奈良　天野照子

かちほころいくさのふれにおほ君のみいつあふきて年を迎へつ　三重　神田みよし子

日のみ旗あらたにたてゝいくさふれわたの外にも年むかふらん　大阪　山本伊勢子

いくさふれあたのうらなみなと絶てはつひ祝ふや萬代のこゑ　神戸　清水かほる子

艦上はかはすおほつゝのおとたえぬ敵もみかたもけふいはふらし　神戸　太田竹子

沈みにし敵のますとはほのみえてあらたまる年をとるぞ嬉しき　埼玉　松野みさを子

あたの艦旅順の港にとぢこめてはつの日の出をふれの上かな　羽後　鈴木きさ子

ものゝふはひゞかちほころ艦にまびけささきし年を祝ふなりけり

みはたかさす御軍ふねも見ゆる哉けさ新しきとしなみの上に　牛込　齋藤壽美子

旅順へと勇み入りこむわかふねのかんはんとほく春かせそふく　東京　黑崎えつ子

艦ことにいはひのはた手うちなひきとしをむかふる御代のこゑ　埼玉　戸田折香

み國もろみ艦のうへにますら雄か年のことほき云ひかはすらん　神戸　今西みさを

水仙

天

しろかねの色なる花のさかりにて富たるにはのあるしとも見ゆ　埼玉縣川越町　横田秋子

地

若草もまたもえいてぬにはの面にひらき初めたるすゐせんのはな　東京市麻布區霞町　上田德子

人

おく露にいろをきそひてさくみれはきくにおとらぬ水仙のはな　三河國寶飯郡下地町　永井さい子

甲

まし水のきよきかなかに根さしゝてましろにさける水仙のはな　東京　林　[illegible]子

菊をのみ霜にほころとおもひしはこの花あるをしらぬなりけり　大阪　山中益子

乙

ふりつもる雪にすかたはみえれともかをりゆかしき水仙のはな　肥後　德永而青子

八千草に霜枯はてしにはの面にあはれににほふすゐせんのはな　麻布　青木光子

しろかれの玉もとみえてさき匂ふ花はこかれのいろにてにけり　赤阪　岩谷淺子

（以下到着順）

しもゆきにあせぬ色をはたれみよと淸くもさける水せんのはな　陸前　三浦ゑん子

水仙の花のすかたをみるたひにあらたまりぬるおのかこゝろそ　陸前　前田河みさを子

しろかねにこかれかされて世の冬を知らぬ顔なる花のいろかな　大阪　船越小仙子

土かひしゝろしも見て庭もせにこかれをちらすすゐせんの花　千葉　大谷ちか子

かめおそふ池のみきはの水仙のはつひゆかしくにほひそめける　東京　田中拾紫子

あわ雪のまつまのあゆみふくかせににほふもうれし水仙のはな　板橋　波[illegible]子

あたゝかきにはの垣根にさきいてゝしもに老せぬしろかれの花　埼玉　横田音羽子

栃木　[illegible]子

水仙のはなはやさしくにほひけりめでにし人はよにあらなくに
三河　山内經子

雪しもをいとはて咲けるすゐせんは梅の花よりゆかしかりけり
岩代　菅野和子

しろかれのうてなに咲て賤かやのあろしゆかしきすゐせんの花
本郷　野口しま子

庭きよきみつにすむてふやまひとの心くみてもにほふはなかな
秩父　澤田房子

わか庭にふか雪わけて香も高くさきいてにけりすゐせんのはな
埼玉　澤田伸子

積りきし白雪になとをとらしと咲くもいさましにはのすゐせん
熊本　日高かす子

霜かれの垣根をしめてさくはなのいろかや冬のいろかなるらん
松山　上原のふ子

白雪のいろににほひてうめにのみまかきの春はゆつらさりけり
山口　村上操子

雪つもる冬をわか世の春にしてまかきににほふはなもありけり
松山　田村多豆子

菊たにもたへしとしほむ霜のうちにおのれかほにも匂ふ花かな
秋田　古瀨進子

にしきての鉢に置ろゝ水せんはひとのなさけもしらてさくらん
下野　佐藤喜代子

世の塵をうつめしみゆき押わけてさく水仙のはなそゆゝしき
岐阜　松岡章子

霜ゆきに野山のくさきかれぬるにひとりにほへる冬くさのはな
薩摩　松原みれ子

ゆきの中にさきいてゝ匂ふ水仙のかをりは梅にゆつらさりけり
愛媛　薫子

ありしよにめてにし君かをくつきにひともとさけり水仙のはな

しも深きにはのおち葉をかきわけてひとりにほへる水仙のはな
上總　高石とよ子

水仙の花のさかりにたちよれはにほひゆかしきすかたなりけり
肥後　佐々小夢子

雪のうちににほひゆかしくさきいてゝよにめてらるゝ水仙の花
肥後　佐々有鄰子

八千草もかれにし庭の面の中に笑かほなつかしすゐせんのはな
肥後　德永廣子

花かめにうつしていけし水仙のゆきにおらそふいろもめつらし
肥後　德永萬壽子

留守すなる主のこゝろもしのはるゝとこの間かさる水仙のはな
本郷　西岡古代子

夕日さすかけあたゝかきまとの下にゆかしくさけろ水せんの花
長野　小泉たつ子

賤か家の軒にふき來るさむかせをいとはすさけるすゐせんの花
長野　山本民年子

ふゆそらもしらぬ樣にそ咲にける賤かふせ家のすゐせんのはな
長野　小泉米子

冬の日の影いとひくきのきのもとにさく水仙のかくはしきかな
長野　山本基子

いとひくき軒端にさけとすゐせんの花の香りのたかくもあるかな
長野　山本直枝子

我やとののき端にうゑし水仙はさむさいとはてはなさきにけり
長野　小泉德子

文机のあたりしつかにうつくしくさきそにほへるすゐせんの花
長野　市川かめ子

朝夕にこゝろつくしのかひありてきさそにほへる軒のすゐせん
長野　小泉みつし子

京橋　渡邊初子

霜にたへゆきにしのひて咲いてしまかきのもとのすゐせんの花
京橋　渡邊名加子

冬かれのさひしきにはに我のみとひとりにほへるすゐせんの花
京都　森本秀子

雪霜にとさゝれなからも香をはなつこの花こそは君子なれ
信濃　田島みよ子

白かれにこかれさかせて冬かれのまかきにかさる花のいろかな
本所　三坂きやう子

こそのゆきまたむらきえのやまかけにひとりほゝゑむ水仙の花
麹町　石川薫子

このはちりしもは庭もにふかけれとふゆかれしらぬ水仙のはな
麻布　林琛子

にこりなきしろきをおのか心にてしみつに根さす水せんのはな
茨城　田飯古宇

みいくさにいてにし庭の霜枯にぬしまちかほのすゐせんのはな
茨城　久保田俊子

みいくさに出しおろしにあやかりてさく水仙のいろそゆかしき
名古屋　不破きみ子

幾千代のにひとしいはふ蓬らいのまつに色そふすゐせんのはな
芝　松永德子

おきわたす霜をしのひしをもかけのみえてけたかき水仙のはな
兵庫　原田秀子

きのふまてつほみとすきし水仙の初日とともにゑみそめにけり
神田　山田嬉美子

ならはしのものにもあるか冬なから水のなかにも花そさきける
福井　今村たつ子

室咲きのうめの小鉢にならひつゝ冬のよそなるすゐせんのはな
長野　岡田千穂子

梅のさくかきれのもとに水仙のはなはゆかしくかほりけるかな
大和　栗山高子

かほりさへいとゝ寒けきこゝちせり雪そにほひてさけるこの花
大和　栗山俊子

春めきし色はみえれと雪の内にさきにしはなの香をそゆかしき
播磨　本多宜子

雪しもにたえてにほへるこの花は妹かゝきれにはるやまつらん
赤坂　岩谷梓子

なにそこのくさとはみれとめつらしき根さしなりけり銀のたま
群馬　林成子

かんはしき梅かゝをくるそのもとにいともやさしくさける水仙
靜岡　竹内みつ子

朝霜をよくるわらやにすゐせんの色かくはしくさきいてにけり
本郷　清水春美子

こそのまゝうちすておきし水仙の雪のなかにもさきいてにけり
大阪　山中とみ子

白かれに黄金かされてふゆかれのまかきもとめる花のいろかな
大阪　岡ます子

菊におくれ梅にさきたちさきにほふ花のいろかのたゝならぬ哉
埼玉　町田静子

まじりなき色そ氣高し水仙花おとめのしなもかくありたけれ
兵庫　高橋まち子

亡き母をおもひ出してはいもうとゝともに手向けん水仙のはな
牛込　石井貞子

ひむけよき土堤に寒さをよそにしてかほりゆかしき水仙のはな
埼玉　日向章子

日たまりの軒端に置きし水仙のひらきしその香きよくあるなり
埼玉　戸田折香

清けくもけ高きこゝろをその色にうつして咲けるすゐせんの花
神戸　太田竹子

あれはてし賤かふせやのにはすみにかなりゆかしき水仙のさく
神戸　宇野なつゑ

何となくゆかしく見ゆるやまてらに垣根のなかのすゐせんの花
磐城　三森須磨子

霜よけの上にましろのむつの花ときをえかほに水仙のさく
三重　神田みよし子

しもゆきの寒さにたえてさく梅に匂ひあらそふはなそこのはな

華族女學校教授 井上賴圀先生撰

松の內の事を記す

天

下谷區御徒町三ノ三 岡田柳子

年立ち返りたるあしたばかりのどけきはあらじ、常に目なれたる、松の緑りも、變らぬ御代の姿と見え、初日の影の、軒端の旗に輝き渡るは、自らなる戰勝國の新年と、げに勇まし、己れ幸ありて、斯る目出度き年を迎へ、まいて祖父君は、喜のみ齡ひをさへ重ね給ひし嬉しさえもいひしらず、祖母君と並びまして、いよゝ御健に、やがては米の御壽祝ひ奉らまほしなど、打喜びつゝ、とそくみかはせば、嬉しさ盃に溢れて、齡ひものぶらん心地してなん。げに目出度樂しきは、年の始めにこそ。

街は、松竹もて埋められ、宮城に參賀ましますやんごとなき御方は、いかめしく車馬軋りゆき給ふ。男の子乙女子は、喜びの笑をたゝへて、凧よ羽子よと、遊びくるふを見れば、己れも幼な子にかへりたらん心地して、羽根のゆくへ打守るもをかし。夜に入れば、打集ひて、歌留多會催ほす、源平に別れ、一度勝ちて喜べば、今度は敗をとり、爰暫は座中に日露戰爭開かれ、いと喧びすし。勝敗とり〴〵にて、何れを日本何れを露西亞と、定めんよしもなかりしが、最期の決戰は、見事吾方の勝利を得て、戰ひ終り、話頭はいつしか戰爭談に移りぬ。哀れ遠征軍の新年、そも如何ならむ。

地

兵庫縣播磨國揖保郡龍野町 原田秀子

先日、天津日影うらうらと匂ひ出たる空、雲なく風なく、いとよう晴れて、何處よりともなく新しき年は

來にけり。去年は須磨の浦はに立ちかへる年波を迎へ、今年は白川の水に阿蘇がね昇る初日の影を汲む。こゝかしことかはれ共、かはりなき家の内には、千里も同じ春風の通ひ來て、とりどり悦びつゝ、若水の心も清く、屠蘇くみかはし、例の祝事をなしをへぬ。學のやに子等を出立せ、公の拜賀に登り給ふ兄君を送り奉る。兄君今日位階一階を進められ給へるいと目出度かたじけなし。打よりて祝の盃かさぬるに、父君訪はせ給ふ。げに目出度年の始よと、祝ひ暮しぬ。川崎、玉川の君、外に二三の友どちの君より年の悦び云ひをこせ給へる、いと嬉しかりし。

二日、初鷄の聲に驚き起出れば、曉より降出たる雪に、四方のけしき白たへに、松の常盤も笑ひそめにけり。日出頃、出入商人の初賣の物祝ひくるもめでたし。何事も今日より初りて、家毎に子等の讀み初めの聲、ものゝ音も聞えくるぞなつかしき。雪ふれば訪ふ人稀なり、よごとおくれんも恥かしければ、舊師の君に新年の祝詞聞えんと筆とりぬ。

三日、昨日の雪あとなくはれて、朝日長閑にさし出づ。今日はまろ人多く、初春の壽のもてなしに暇なし夕つ方女鑑來りぬ。嬉しさに取る手おそしと聞き見れば、表紙も改り、見るにつけ、讀むにつけ、初春の松のみどりの千代に八千代にかはり無く、御祝ひ事のみ。おまさかるひなに居て雲の上のきこしめす御世共見奉るも偏に御代の惠みとふしおがまれてなむ。またなき友をえて燈火の下に讀みふける。

人

東京麹町區三番町　石川薫子

蒼き空には一點の曇もあらう、風靜かに庭の早梅の香を送り、旭光は輝々として靄々たる瑞雲を彩り出づるの景、門毎になびく國旗の影見渡すかぎり千門萬戶の松飾り綠深うして、子の日の遊びもせまほしくなむ。街走る車輪の響き、嘻々として戯れ遊ぶ乙女の笑顔、何れ幸あるにひ年の光輝現はさゞるはなし。我等も

今朝とく打より新年の嘉辰の壽献じ祝ひ。屠蘇に頰赤うし、雑煮の餅の數多きをほこり樂しき御代をほぎまつりぬ。賀禮の客はつぎ／＼と漸茂くなり「御目出度！」萬歳の聲は彼方此方に聞え、聖代の露に濕ふ萬民の祝氣は長閑なる空に充ち渡りぬ。數々の杯に顔紅う歩み覺束なう千鳥足の人あれば、見知らぬ人の、ある程の家に名刺差出し賀禮くだ管敷も繰り返しのべ出すなど反て他愛もなうおかしく、晝過る頃よりの客は何れも白紅黒の綾ある顔のみにて、敗ばくの程思はれていとおかし。我も向方の松村夫人など誘ひ出だし、追羽子にせなたゝかれ、大人げなくも昔の乙女に返りて飛び廻り、暮れては加留多双六に無心となりて戰ひつ、斯して松竹梅の三日を樂しく長閑に送りぬ。

大阪　松田靜枝子

この春の松の内の日記繰返して今も尚目に浮ぶおかしきふし／＼いざ書きしるし見む。

◎三日の朝なりし、今朝第一の年賀の客は誰なるらむ中てゝ見んかと妹はいふ、今年十二の弟は目をむき出して「僕は、天野の叔父さんだらう」といふ。その言葉も終らざるに戸口を開いて天野の叔父の兀頭ぬッと見えたり。弟は手を叩いてホーラ萬歳、僕が勝つたといふ。叔父は兀頭をツルリと撫でゝ、アッハ／＼先づ新年おめでたう！

（その叔父さんは今滿洲軍の軍醫部にあり）

◎四日の夕なりし。晝過ぎよりの小雨に手飼のペス（犬）座敷に閉込められて苦悶おく能はざるの態さながら籠の鳥よと姉上は宣ふ。否、配所の流人だらうと兄上の見立は例の如く奇警にして加之も頗る詩的なり。ペス夕飯には籠城の功勞にとて牛肉の御馳走に預かる。（そのペスはこの十月老いて身まかりぬ）

◎五日の夜は靜子、ちか子、いし子、さい子の君達を招いて新年會を催しぬ。こは年の始に各自の希望を語りあふの會合なり。會了りて後、靜子の君例の心やすげに、今年は誰が御嫁にならるゝやら、去年の新年會には艶子の君見えしに今年は早や丸髷の奥樣、けふの會にも御不參なり、來年こ

の會には誰の御顔が見えぬやらと。(その言葉のぬしの靜子の君は、この十一月さる文學博士と華燭の典を擧げたまひぬ。來ん年の新年會には御顔の見える事やら覺束なし。)

竹のふし

前橋

一年の計は元日に有りとか、今年こそ己が期望を殘りなく果さばやと心に誓ひ臥床を出ぬ。未だほの暗けれど若水に口を濯ぎ、體を正し、天を仰ぎて未來を祈り、地に伏して已往を謝し、希望多き明治卅八年の元旦、正義の戰に寡をもて衆に當りさながら木の葉を吹散す如き我皇威の隆なる中に暮て迎へし新年を腑に銘じ、さて屠蘇の祝となるに、日頃快活の弟の、改まれる祝詞述ぶるが面はゆくて、盃手にせる儘暫時ためらひ、漸く口早に云ひ出る中々に興わり、やがて團欒の祝終へぬれば、初日仰ぎつゝ、弟の萬歲に和して、君が代、年の始の唱歌など壽ぎ、父君妹弟の登校後は、只管客の應接に勉め、其夜は甚く勞れたれど、例の名刺讀み上げを手傳ひ、寢に就ば前後も知らず、未だ富士の夢さへ結ばぬを、お櫻お櫻の聲に驚き起出ぬ。今日は書初なさんとて、皆々机押並べ、奉書短冊を思ひ〳〵に、妹等は白紙とて裁板を据え、襷掛けての身構に、何れも上出來と誇顔なるを、己が僻目か妾のゝみ拙く見ゆるぞ是非もなき此日市中は賣初とやらにて、甚く賑へど、街隔る我家には、只羽子の音と、遙に、凧のうなりを聞のみ。年始の客は昨日とさしたる相違はなけれ共、酒の饗應は却て多かりし、是父君在宅の故か。夜は骨牌取初とて、一同打寄り、數回激戰の後、時來ぬればと床に就けり。三日よりは漸く暇を得て追羽子等なす。夜は彼處に、此處に、はた我家に骨牌持切、去を何れも申合せし如く茶菓の饗應のみにてやみしは時節柄嬉しかりし。かゝる中に惜き松の内も夢とすぎぬ。あはれ過ては果敢無き物よ、待内こそ樂しけれ。

信濃　田島みよ子

新玉の年立ちかへりぬれば、雲の色もおのづから心ことにて、夜のほど霞も立ちかへりて、紫に淡くたなびく樣にて、日の氣色うらゝかに光さやけく、軒端に囀づる雀の聲さへ千代ときこゆるぞお

かし。しめゆふ門の松かざりは朝日子の影にうつろひて、緑の色いよいよ深く、家ごとに立てならべたる日の御旗は、吹く春風に飜りていや榮え行く御代の御稜威もあらはれいとかしこし。世に有りと有る人は貴き賤きとなく男女のけじめなく姿心ことに粧ひて、年のよごとをのべかはし、晝はひねもす羽にまりにあくがれありきて、日の暮るるも知らず、夜はよもすがら骨牌よ双六よとよどみかはして、うつし心なき樣など、年の始の長閑けさも見えていとたのしけれ。

大阪　船越小仙子

けふは早や正月五日となりぬ。老人なき我等二人の家庭にては、力めて朝早く起出づべし、和女も然か心得よと、つねづね言ひ聞かされながら、昨夜の歌留多會の疲れの爲、いつもより一時間も遲れて目覺めしは午前六時半なりき。やよ、一年の計は新年にありといふものを、これでは今年中朝起は出來まいと、戲れに叱られて、いと、つらかりし。

朝餉やうやう濟みしころ、藤澤樣見ゆ、例の衣は絣、袖は腕といふ扮裝。去年十一月には會計檢査局へ御奉職なされしものを、奥樣おありなさらぬにしても、あんまりなと思ふ。

座敷にては藤澤樣、例の口調にて、君、聞いてくれ給へ、同僚の奴等が近縣旅行といふ廣告に世間を欺き、花が物言ふ廓のうちに連日の籠城、これを年末年始の缺禮とは以ての外だ、僕は癪に障つて堪らぬから、奴等へ面當に、御附合により近縣旅行、と同じやうな廣告をして、御見かけ通り十年相も變らぬ褞袍といふ風で、片つぱしから年禮に廻つてゐるのは、いさゝか奴等を警醒して無明の夢をさまさせてやりたいのだ、と肥え太つて山のやうなる肩をユサユサさせながらの大氣焔。良人は例の如く、ハツ、ハツ、ハツ、ハツと押しつけたやうな笑ひ聲、天下泰平なり。

門口には遣羽子を突損じてか、コトコトと屋根を傳ふて、玄關前の敷石にカチリと落ちし羽子一つ。

千葉　大谷ちか子

さし昇る初日の光りきのふにかわりて、なにとなう華やかなる心

地するに、門毎にひらめく御旗たて渡したる松竹の翠の色にゝほひ、君が代うたふ幼子の聲は、千代と轉づる鳥の音に和して、榮え行く御代の元旦の景色こそ、いひしらずめでたけれ。春風も長閑に吹きそよげば、年賀の客はいづれも、山櫻の如き面もちにて大路も所せばげなるばかりに行かひ、夜に入りてはかるた雙六よりトランプ、さては福引などして、思ひがけなきえものに面赤むる乙女もあれば、こゝをせん度の大決戰にも、見事皇軍に敗られて逆襲などゝ立ちさわぐなの子なぞありて、其樂しさいはんかたなし。

かくて一と日、ふた日とかさぬる中、はや七草もめぐり來て、明ぬる日よりは、學びの庭にいそしむ事なるに、いまだ遊びにあきたらぬ心地のせらるゝぞおかしけれ。いで今年よりは勤め勵みて、ほまれあるいさほしもがなと心にれがひ先はしるしぬ。

松山　田村多豆子

何事もいそぎにいそぎし昨日にひきかへて、のどかにうれしきものはあら玉の年の始の心なりけり、あけぬと告る、鷄のや聲も身にしみわたり、朝日のかげ、山の端にゑみのほりて、もちひのかゞみかゞやかしげに、門松のちとせの色をそへて、ゆづるはの風になびける、見るものきくものとして、おかしからざるはなし、はやくも衣服あらためて、したしきも疎きも、或は車にのり、或はかちにて、よこと申すとて、おとなへる、世はひとゝせながらかくもかなと思へるなり、號外とよびてなげいれたる、紙のひとひら取あげ見れば、某山の米製をうち退けたるのみならず、敵が屯營にうちいりて、多くの砲銃を得たりと記したる、また家の内はあるじもまらう人も、諸手うちあげて、萬歳の聲わくがごとし、されば我天皇の大御稜威は、あら玉の年の光と共に、萬國にかゞやきわたるな、仰ぎ奉るもまたうれしさにうれしさのそはることゝして、筆の始になむ。

能登　高森いち子

松の内の姿が日記（昨年）な、くりかへし記さむに、
一日、若水を使ひ、神社に參詣す。本日は靜かに家に居る。
二日、地方の知人に年賀狀出す、初買に、翫弄物の小猫を求め、幼き弟に與ふ。福引に小判當てる。猫に小判、げに目出たし。
三日、友人や裁縫の師の許に年禮に行く、女鑑著す。續く。
四日、夕方より我二階にて、歌がるた會催す。愉快。
五日、昨晩の遊びに、夜を更かしゝためか、少々頭痛す、新年早早くやし、されど早くなりてうれし。
六日、午後三時頃より、春子の君の許に、かるたとりに行く、八時過迎の者と共にかへる。我顔に墨のあとありとて母上笑ひ給ふ。
七日、親類より招かれまゐる。夕方早くかへる。
八日、より十五日、譜見、歌合、氣まゝに樂しく遊びしも、いつしか向側の銀行の門松の影もきえぬ。
あゝ我は、かく己がまゝに、樂しく遊びしも、ひとへに父母の恩なりと思ひ感謝なしゝと同時に、能學能遊とやらの、意をさとり日頃は我わざな怠らず勤めばやと、堅く心にちかひしぞ、我ながらいとも賴母し。

備後　片山松子

新玉の年立ちかへりぬれば、人々の心もみ空と共に晴れ渡り、あづまの空にさしのぼる初日の光り美はしく、一夜の内に巷まで新まりぬるは年のはじめなればにや、朝日になびく日のみはたもひときはかゞやく心地して、勇ましき事限なく、軒端に歌ふ小鳥さへ

千代〳〵とさえづるや聞えぬ、されど都も鄙もおしなべて、目出度が中にも、いさましさの見ゆるは軍國の故にや。無邪氣のうない子等までラッパ吹きつゝ旗もちて戰ひ遊びをなし、少女等のてまりの歌もいつしかあでやかなるみいくさ歌とぞ變りける。かくて老も若きもひたすらにみいくさの戰捷を祈りつゝ、明らかに治まる御代のあめつちと共にきはみなういや榮え行かん事を祝しける。

岩代　菅野　和子

一日。逸速く初日拜まんものと寢し夢は鷄の一番聲に覺めぬ。起出でゝ盥嗽なし終へ、僕の如き若水吸み、神前に御燈火捧げなどしける頃、母上も起き給ひつれば、巳れ少し小高き所に日の出待たむと鎭守の森さしていで行きたり。

白みかゝりし東の空えもいはれず心すが〳〵しく、遠方に犬の吠ゆる聲樂しく聞えてうれし。

先づ新年の祝言いひかはせしは隣の爺翁にぞある。次ぎに友垣の君の御兄上、伯母の家の下男、それより知る人知らぬ人打集ひ罵り合ひしも同じ心に待つめり。

鷄なきて夜は全く明けぬれば、家々軒頭旭旗風に飜り、折しも朝暾燦々として閭里を照す。實に其様の雄しさよ。共に御光を浴びつゝ國運を祈りてぞ別れ歸りぬ。



暇りくれば、弟さへ起出でゝ、笑ましげに、元旦祝の團欒に待ち設けつゝあり。膳に向へば、屠蘇の匂ひ高く、母上がみ心つくしの雜煮、甘き事いはむ方なく、たら腹食べぬ。

學びの庭に通ふ子の。勇ましく語合ふに心付き、八時といふに出校の時刻も迫りぬれば、仕度整へ、一寸鏡みやれば、恥かしや、紅の顔色、俄かに醉ひし心地してよろめける、我からおかし。

やがて目出度新年祝賀もをへぬれば、親戚知音ゝ御年玉もちめぐり片田舍住にもふさはしからず忙はし。代新年初刊の雜誌届きしかば心勇みて讀み更かす。

二日。敎子達訪ひ來り終日双六、歌留多とりして遊び暮す、心へだてず、蜜柑林檎など喰ひ散らす樣愛らしとも愛らし。

肥後　徳永　廣子

新玉の年立かへる今朝は、都もひなもおしなべて、いとにぎ〳〵しく神の御前にあたらしき御酒さゝげて、君が代の千代八千代しづか身の目出度かれとれがひもほく今日こそ、おのづから人の心ものびやかにあらたまりぬるままに門に立てたる松が枝の葉こしに仰ぐ九重の山に、かがやくはつ日の光、げに一きは皇國の威光なににたとへんすへもなく、かしこくたのし。かゝる豐けき大御代に

生れつればこそ、老もわかきも身をわすれ、若かへりて共に心のうき立つも、みな天皇の御惠にかゝる新しき今日いま戰爭もなかばなるに、海原遠くへだてたるうらゝの山に立なびく朝日の御旗かゞやかば、いかなる波もしづまりぬべく、かく今日のしづけさはゆたけき御代のしるしぞと祝ひまつるもいとたのし。

三河　左右木　増惠子

昔躬行法師、年立つ朝の景色を述べ、空の景色昨日に變りたりとは見えねど、引かへ珍しき心地ぞするとこそ、實に年の始の朝こそ又なくいひ知らぬ物なれ。此日かしこき雲の上にては、四方拜の式行はれ、各家々にては打集ひ屠蘇雑煮など祝はる。都も、鄙も、一つに、千代に八千代とうたふなり。大路の様を見渡せば、門毎に日の御旗高う打ち靡き、あるは松竹華やかに立て飾られぬ。又、年賀述べんとての人々、あなたこなたに行き通ひて、いと賑はしく、中には目のふち赤う色どれるも見ゆるは屠蘇などしひられてにや、又少き子等は、紙鳶上げ、獨樂まはし、あるは羽子つき、毬つきとここかしこに打むれて遊ぶべく、二日三日となりぬれば互に招き招かれて、老若男女打交り、歌留多遊びに夜の更るも知らで打過すめり。かく成すわざはくる年毎に變られど、變りゆくは人の身なり。世の人多くは年の暮に至り業成らざりしをかこち又老て後若きを忍び、一生成す事無かりしを悔ゆ、これ自らかゝる悔を招きしといふも過言にはあらざるべし。もし年の始に於てかたく目的を立て、其道に進みなば、年と共に己が志す道もすゝみ行くべし。さればいはん、いとゞ祝ふべきも松の内ぞ、いとゞ遊ぶべきも松の内ぞ、又人生の幸福を得るも松の内にありとこそ

長野　小泉　みつじ子

豐榮のぼる初日影、うら〳〵と明そめて、こゝに目出度三十八年は迎はれぬ。御代萬代のしるしと立てらるゝ松竹は、門毎にときはの色をあらはし、朝日にかゞやく日の御旗は、豐き春風に打ちなびき、軒の梅も咲きそめて、よろこびの香に匂へり。いづれかめでたきためしならざるべき。されば人の心もなにとなく改りて老も若きも新しき衣きよそひて、年の賀を申さぬはなし。かゝる目出度き御代にあひて、たらちねはらからとまとゐして屠蘇のさけくみかはし、いや榮行く君が御代をことほきまつるぞうれしくもまたたのしきゝはみなり。されば此のたのしき日を始となし、今よりは一そう其の業にいそしみはげみ、大君の深き御惠みにむくへ、かつは、御國のためにつくし奉るべく心かけなむと、若水に墨すりながし拙なき筆もてかくなむ。

福井　今村田鶴子

嬉しき事ともいと多かるうちに、あけぼのの春たつ空のけしきばかりこそ、いとおかしけれ。戸毎〳〵の軒に、日の丸のひら〳〵と靡き、門松も、千歳の翠を添へて緑ます〳〵深く、おのづから人のこゝろも、のどかに見ゆるぞかし。鶯はまだ谷を出でねど、泉水の邊の梅やう〳〵莟もつこそうれしけれ。よろづものとして新まらぬはなく、所として、春たたぬはなし。遠近には乙女等の美々しく着かざりしが、今を遊びのさかりと、追羽根つき、男の子の打寄りて、紙鳶を上げるなど、いとうれしげに見ゆるぞかしわれ等も親しき友垣うちつどひて、歌かるたよ、双六と、取り出しつ、源平なんと二手に別れ、色にこそ出されね、かたみにまけじおとらじとにらみあひ、必死となりて戰ふも面白し。味方の敗れかゝりし時の口惜さ、いはんかたなく、やがて勝敗の決せしときあらそひて敗れしものに、やさしき、白きものぬるもおかし。あゝわれ、嬉しく樂しき松の内のけしきにこそ。かゝる樂しき新年をあゝ……山を踰え、海河を渡りて、深く〳〵、敵地に進み入り、彈丸雨ととび、寒氣はげしき滿洲の荒野に、艱難辛苦一としてなめずといふことなき遠征の軍に從ひ給ふ軍人の、さぞや今頃はと思ひおこせば、かく氣樂に松の内とても過ごされんやと、樂しき中にも

か丶る思ひのおこるこそせんなけれ。あはれ數知られぬ軍人よ。さそや戰しげき中にも、故郷こひしく、なつかしの妻子を夢みつ丶松の内を過ごし給ふらんと、ああ……、

稲井　松本濱子

鶏の曉を告げて、ほの〴〵と明けぬ。さし昇る初日影麗らかに、み空に舞ふ田鶴は、千代を謡ひ、軒に揭ぐる日章旗は、朝日に輝きて、初風に靡き、門松は千歳の色を湛へて吳竹の色を霑さ、梅の笑み初たるもめで度人を迎ふるになん。げに身も心も新まる心地ぞする。其より八時頃になれば吾等友垣はさきに〴〵と競ひて學び屋に參り、おごそかなる式に連なりて、師の君と共に生徒一同新年を祝ひて、いとたのし。市内にては商家人の、そここ丶と行き來するにて、いと賑やかし。又親友打集ひて、歌留多の遊なすにこよなき樂みなり。幾夜かかくしてあだに暮し、後にて悔ゆとも甲斐なき事になん又少女の羽子つく様、はた童のたこ上ぐる叫びは、愛らしさえも言はれず、かく樂しくおかし暮らしてはや七日の日とそなりぬ。あすは學びの屋に通ふべき日よ、

短文

梅の花

備後　片山松子

新玉の春とし云へど名のみにて、未だ吹きくる風も身にしみ渡る頃、八重なす霞の奥に咲き匂ひ、風の便に人を招きつる梅の花なん、げに氣高くも尊けれ。冬籠せる鶯も谷の戸出で丶遙々と香しき枝に一音洩せば、寂たる野山も俄に春めき渡り、人の心も自らすが〴〵しうぞ覺ゆる。そも此花の多くの人よりめで賞せらる丶は、積れる雪を凌ぎ霜に堪へて節操を保つ故にこそ。人も同じ艱難に堪へ、辛苦を忍びし後こそ人にも尊ひ慕はる丶なれ。あ丶世に花てふ花は多けれど、よろづの徳を備へつる梅の如きはあらじかし。是ぞをみなの鑑としも云ふべき花ならめ。

女鑑愛讀者の一人に參らす

愛媛　高橋茂子

君と我、程近かきすまひながら、などてかく友とも行かず、合見る事のかなはずや。思へばうたてき世にもあるかな。さればとて君も心よりのへだてはよもおき候はじ、明暮姉上と慕ひ友と親しまばと、切に願へる此思ひ、打あけなば必ず心よくき丶届けも候はるべきに。心のみは丶やるも細々合語るよすがのなきはそも何たる因果ぞ。之れも片田舍の、未だ昔のま丶の惡風か。ともすればよからぬうはさ立てられ、それをのみおそるとにあらねど、さし出かましく我身よりは云ひ出でかね

只世をうらみ思ひにふけるのみ。さてはまゝならぬ浮世にはてなく我はたゝよはんか、げにかなしともうらめし。君いかに、我思ひをいさゝかのべて君の意をとふ。

女鑑に謝す　前橋　竹のふし

思廻せば去年の暮、父が四方山の物語の折、暇なしとて文讀まねば彌退くのみ、何ぞよき雜誌がな見ずやとの事に、彼よ之よと新紙あさり、漸く定めしは此女鑑にこそ。さて元日發行の壹號より配達されぬれば、師とも仰ぎ友とも親しみ、暇だにあれば繙きて、諸先生の有益なる記事に、はた諸姉君の優しき美文に、受けしめぐみや幾何ぞ。さるをいぬる頃ふと感ずる儘を物して、いとをこがましけれど、當つて碎くる例もあれば、沒書となるをもと投じけるを、あな嬉し、記者の君にはいと懇に添削を施して其列に加へ給ひき。それよりは拙きをも顧みず、生れ變りて、のりくるを樂みに、かくはつゞけ侍りぬ。あはれ妾が爲め師の君よ。女子の鑑の此文よ。幾千代迄も榮えませ。

白菊を見て亡き妹を想ふ　失名

嗚呼なづかしきわが妹！、戀しきわが妹！、薔薇にも似たるあの愛らしき口もて、「姉樣待つてゝよ、早くかへつて頂戴な」とさゝやきしその一言……けにはからざりき、かの折こそ、かれと此世にての別れならんとは……あはれかの花の如きやさしき姿は、いまいづこの空をさまよひ居れるか、かれがめでにし白菊は去年にかわらず咲きいでしを。思へばこその此頃古里にて、かの月清き清洞寺海邊に、親しきわが妹と手を取りて遊びし夜を……あはれ、われの今かれを思ふ如く、かれもまたわれを思ひ居れるならむか。此の文机にやさしく匂ふ白菊を見るにつけても、あゝ此花！、かれが心の友としていつくしみし白菊！せめてものかたみにとはさみし此の一もとにこそ、かれが月の如く清く、神の如くやさしき魂は、宿りたるべけれ。あゝ花よ、可憐なるわが妹の友よ、白菊よ、ねがはくば、なれがその清き香と共に、われの今かく思へるさまを傳へてよ。いとしきわが妹のもとに。

なごり　千葉　大谷ちか子

猶豫なく、發車時間の迫つたので、見送の方々に別れの言葉をかはして、汽車にのりしに、尙も送りの方々は、つきぬ名殘りを惜まんと、車窓近く來られて、別れを惜しんで居ると、正田樣の秀ちやんが、母君の膝より、此方へ來ると云ふて泣出しいくらさとしてもいつしよに行くと云ふて、やまばこそ、今迄こらへにこらへて居つた涙も、一時にあふれ出て、外見も殆ど忘れてしまひました。いよいよ發車時間に成つて、初めて面を上げ、たゞ失禮とのみあとは言葉が出ません、諸君よりは、御機嫌ようとの聲で、跡は車輪の轟々たるのみ、窓より見れば、たゞ赤白のハンカチーフの遠くに／＼なりゆくのみ。

あゝ如何に、つきせぬ名殘りであつたろうか。

大みそか

群馬　林　廣　子

まちにまちし新春も、いよ〳〵あすとせまり來て、わが門邊にも來りつらんか。とくより、用意はなしおきしものゝ、さながらに近づきぬれば、いとうれしきやら何やらにて心まどふもおかし。姉上とも〳〵姉弟等が明日きるへき品々とり揃へ、まろふどとりなすべき三ツさかな、習ひ得し割烹等もなし終へぬれば、あすのさはりにもなんとて、やう〳〵臥床に入りぬ。いつしか目は皿の如くにさえ行きて、こん年の事等思ひつゞくる内、里に歸るならむ村人が、節おかしうも歌ひゆく鄙歌、あとには只客間の柱時計のセコンドをきざむ音のみチヤキチヤキ〳〵此の年こしに里人はそも如何なる夢をや結ぶらん。あゝ今宵の年こし。姿も知らぬ間に白河夜船とぞなりにける。

あはれなる婦人

茨城　ま　す　子

或るもの淋びしき夕、我れ編物に餘念なき折しも、襖一重隔たりたる隣座敷にて「親に仕ふるにも弟妹に對しても一として至らぬ所のなかつた中尉なれば、彼の婦人と愛子に接しても優しかつたのは、廿七歳の今日まで獨身にし居りし事によつても明らかである。さるに、親や世間の人は最愛なる婦人と愛子のあることを知らずに、彼の家の娘を嫁に娶りては如何になどと強ひられつゝありし時の中尉の心はどんなに煩しかつたであらう。近頃人の噂によれば、彼の婦人は中尉の此度戰死せしことを聞くや、直ちに黑髮を根元より切り落し、今年七歳なる中尉に生き寫しの男の子と即ち母子二人にて亡き中尉の跡を吊ひて、今や某町の裏長屋に賃仕事をなしつゝ細き煙を立てつゝあるとか」と母と姉のかたみに語るを聞きて、我れは涙に咽びて、若しこれが公然たる妻子なりしならば、貞操高き未亡人よ、名譽なる中尉の遺子よとたゝへらるるものを、親の許さぬ夫を持ちしが身の過り、親には放逐せられ杖とも柱とも頼みて定めし人は逝きて無し、今や岩にはなれし蠣つたのそれにも似て、便り少なき憂世を送る彼の婦人の心の中思ひやられて暫時言葉は出でざりき。

秋夜彈琴をきく

群馬　林　廣　子

月圓かなる秋の夜に、そゞろ心もあこがれて、足の運びもいと輕く、草葉に宿る露の玉、てりそふ月に輝きて、恰も、ダイヤモンドかルビーかの如く、秋は、月見と世の人の云ひ傳へしもむべなれや。庭の細道、ゆきゆけば、ゆかしなつかし、吹き來る風のつれ〳〵に、いよ〳〵妙なる琴のしらべ、耳傾くれば、こは小督の一曲、誰のすさびかわかれども、遠く幽に聞ゆる音。思ひ起せば早や一年、哀の曲を名殘にかなで、友に別れし其折も、今宵の如き星月夜なりしが、友は今や賑ふ都の何處にて此日を見給ふか、思へば友懐かしき夕かな。

刈穗のしとね

下野　井　上　滋　子

麗らかな秋の日は暖き光もて、刈穗の上に夢平らかに眠れる幼子の顏を照して居る。年は二つか、色は淺黑いが丸顏で、福々しい頰を藤色メリンスの配合よき涎掛の中にうづめて、安々と眠つて居る。無心の寢顏に時々笑くぼをよするのは、嬉しい夢をみるのであらふか。羽ばたき勇しく小雀がいづこからか飛び來りて、幼子の傍の刈穗の上にとまつた。何か神の命をさゝやき傳ふるやうに。紅葉の如き手に持ちたる風車はそよふく風にくる〳〵と廻つて居る。稻刈る農婦の歌が聞える。幼子は尙も安々と眠て居る。

途上の傍觀

愛媛　和　氣　か　つ　子

隣村に教鞭をとり居る友人の許へ遊びに行きし歸りがけの事なりしゴフジロと云ふ河原に、十才内外の兒童、日露兩國の國旗を立て、

ラッパを吹き、木劍を打揮り、木銃を打つ等、今や兩軍入り亂れて戰鬪眞最中、程なく勝敗は決せしと見え、帝國大勝利、日本軍萬歲の聲はあたりに響き渡りぬ。其の附近の大松の下には赤十字旗が立ち居りて、捕虜二人、そを愛らしき少女看護し居けり、物好きに其の名を問へば露と答へて笑を含めるもおかし。

一夜

下野　井上倚子

小さき胸を張裂くばかりの我がこの悲、死す時ならでいつか癒ゆべき。今年の春母は病に襲はれて病む事僅に一時余、人事不省の末、我をふりすてゝ遂にゆきましぬ。五千萬同胞とは云へど、我は世に孤子となりて、心に賴む一人の同胞とてなく、何によるべなき侘き身よ。癒きせぬ恨を長くゑがきし線香の煙にむせび、涙にむせび、ほのくらき佛燈の下に、夜すがら袖しぼり、手向の花の涙のつゆに打しほれし其の様を、哀とや見る目の前に、情深き母君の姿ありく\と見ゆるを如何せん。

秋夜彈琴を聞く

前橋　竹のふし

卯月に誘はれて行としも無く裏の細道辿りぬ。琴の音するに心付き、此處や何處と佇めば、隔ぬ友垣の門の邊にこそ來にけらし。彼の丸木橋はいつ渡りけん夢心地なりし。あゝ此彈琴の主こそ榮し館に人と成給ひしを、世浮の風にさいなまれ、今は柴戸に詫住居し給ふ御身なるを、日頃好みます彼小琴は母君の厚き情に取留て、そを何よりの樂みに、去を何れの曲も沈み勝なるぞうたてき、あゝ秋の月は年々圓に照せ共君と樂しく眺めし折の忍ばれて、想は昔にかけぬかな駒の足搔の定無く何處を指て行ぞかし、御音に鳴響虫、哀れ小琴に通ふらん。

無情をだまき

實に世はうき世といひしはことはりにて、昨夜まで物いひ語りし祖母の君、一度無常の風にさそはれて、魂なきしゝのみ、今はたゞせまき棺に入れられて、前にはともし火明かに、香の烟の立ち上るかたへに、花を手向けつゝ、數多の人に拜せられ、なげかるゝも音もなし、やがて、遠路を送られて、火の中に投ぜられ、燒かるゝとも、木や炭の如く、悲みなげく人をもかへり見ず、たゞ木と共に燃えはてゝ、遂に一片の白骨とかはり、小箱の内に納めらるゝ、あはれといふも、おろかなり。

我が庵の菊

愛媛　和氣勝子

兄さんが召集になる前にさしておいた菊が、今や、悉く滿開したけれど、主人のみえぬに、何となく物たらぬ風姿が見えるから、諸菊の花瓣をつみとつて、手紙といつしよに、このあひだ戰地へ送つた。兄さんかまた戰死していなかつたら菊に接吻したであらふ。

菊を觀る感

京都　千代子

白菊に水打ちそゝぎて、時ならぬ雨の名殘の露をおかせ、おしまづきにおけば、電氣にきらめきて麗はしう、まいて、高潔なる理想を香にこめたるさまの、いえしらず心にくきに、思はず居なをりて、襟などかき合せられつ。懷古すれば十有二年の昔、夕日うすれて、白露をおもげにおのかさまく\染めなしたる菊をいたくもめでし父と、籬の邊に佇みたりしに、其父ゆきましてより八年たつけふ、只夢心地して、哭のかたみに殘るぞわひしかりける。あはれ、晩節を守る隱逸の花、あゝ!!!我も心の菊を養成して、父母君の靈前に、手向けまつらんとぞ思ふなるに今幾日ありてか其時にあふを得べけんや。

千曲川に月を見るの記

長野　田島みよ子

いつはあれど、照る月の秋の半ばいづこはあれど、ゆく水の千曲の川に、月みんとてみやびの友どちこゝろつられて、いはなみのおりたちつつ、夕風のすゞしきほどにのり、大河つらを、みなのぼるに、こよひ天の海に、たゝるさ霧もあらず、月の御舟にさはらふ雲もなく、たゞ上つせの橋のみぞとほしろきくまにぞ有りけろ、時のうつろにつれて、いよいよ明らけく、根岸の松の葉さへ數へつべく、水の光りは、空や水とわかれば、御空ゆく心地なんしける、人々心ゆくまゝに、大和なる、唐なる歌ども、天とぶ鴈のごとくにつられで、歌ひ出づるに、調べそへたる物の、音はいと淸くすみわたりて、雲井をひゞかし、水の底にも耳たてぬべく思ひて、あわれに面白く、千々の心すさびも、これにしくもの無くもゝの秋の夜も、こよひによりて、長かれとおぼゆるまゝ

秋のよをなほ長かれとおぼゆるは
月の都の人やとゞむる

秋季運動會

肥後 秋吉輝尾子

十月も末となりゆきて、いとひしあつさもはや名殘なく、ふきくる風もこゝちよくて、昇校もたやすかりき。今日は師の君の御心より校外運動として東南の方二里半ばかりなる、河尻町の大慈禪寺にあそびぬ。そも此の寺は町家をはなれてより二三町もあり、いと大なる寺院なり。寺の東南にあたり、加勢川緑川の二川あり。寺院の前には、振袖池と名づくる池ありて、太鼓橋をかけわたし、いとゆかし。そも此寺は河尻左衛門佐源泰明といふ人の妹、素明尼の請にまかせ、後鳥羽天皇の皇子、寒巖義尹和尚の開基にて、龜山天皇の弘安元年に大慈禪寺を建られ、自作の釋迦の像を本尊とせられ、紫衣を許可されたりしとぞ承る。午後は門前の河原にあそび、前後をわすれて興に入りぬ。歸さは今日の遊びに足もはかどらず、種々の笑語くりかへし、暮れかかるころ家につきぬ。

肥後 德永廣子

今日しも運動會のもよほしあり、學の庭にては、午前七時そろひにて、八時といふに立ち出でぬ。ほど遠からぬ野べとありければ、いづこにかあるらんといぶかりつつ行くほどに、一里も道は來つらんと覺えし時、一の廣野にいたりつきぬ。ころは九時なりき。山かけの事とて芝生の上はことに露ふかく、むかひの森の木末はみな錦きていはん方なくうるはし。故菅原大神のぬさもとりあへずと詠みたまひしもうべなりなど師の君の仰せに、數子もほめたたへぬ。かくて競走のあそびさきざまあり、草むらのなかには野菊の花の人まちかほに口ほへる自然のさまは、朝夕手をふれし砌の花にもまさりて一しほなつかし。かたへの細流は水きよく、きしの紅葉の散りて流るゝもいとをかし。秋の日影も午後三時をすぎしかば、いさかへらんと、野菊二枝三枝手をりて今日の紀念に持ちかへりぬ。

肥後 千知波橘子

光陰矢のごとしとかや。春季にもよほされしは、昨日今日とたどるまに、三伏の夏日もいつしかすぎさりて、はや秋季運動會の日とはなりぬ。今日は一天晴わたりて、いとよき天氣になんありけろ。高等科の生徒は早朝よりうちつれ、程ちかき菊池神社の城内にと行きつきぬ。師の君たちははやく會場をしつらひて、まちゐたまひしはいと嬉し。よものけしきをみわたせば、並木の櫻紅葉して、野べは千草の花さきみだれ、いとうるはしきながめなり。正午時となれば、晝飯をへて、再度の運動は、旗拾、戴嚢、提灯、母衣曳、などの種類あり。をりから秋の日影は西山のはにかたふきぬ。師の君もろともに家路をさしてかへりつきぬ。

あゝ机、汝は必らず宇内の覇王たるべき運命を有すと信ず、夫れ吾が親愛なる机、興起せよ、奮勵せよ。

稿終りて粛々然たる時、神風吹き來りて書籍を開く、これ何の徴ぞ。

今様

涙
愛媛　高橋茂子

たふるゝまでと勇み出し　君にしあればかねてより
今日あるべしとごしながら　とゞめもあへぬ涙かな

讀書
をだまき

一日のわざをなし了へて　月影清き窓の下
虫のなく音を聞きつゝも　ふみ讀む心の靜けさよ

菊
松原みね子

尾花の袖もうつろひて　虫の音よわき賤が家の
あれし垣根に咲きいでゝ　色香妙なる菊の花

月
東京　山崎女苑

鎌月さむくかたぶきて　海軍廠の淡烟に
たゞよふ見れば小川にて　光みがくにさも似たり

あなうれし
同

鳳天城の敵落つと　喈天にこゑありて
旭の御旗かゞやけり　歌につくらむよき夢よ

豊年
前橋　竹のふし

風のそよぎに稲のほの　みつほの國にあるからは
さゝやきあへるをそときけは　この秋いかでみのらでと

白菊
同　同

なき母君のめでましゝ　この奥津城に生ひいでぬ
庭のしら菊いつしかに　手向の度のしげゝれは

妹か墓
京都　竹下季子

もみぢ散りしく夕まぐれ　かたみの籠に柿をもり
供ふる妹がはかのうへ　泣かしとすれど嗚呼されど

靜
福井　岩橋花子

戀しきかけをとゞめれは　よしのゝ山にいりにける
いとゞ涙のますかゞみ　人のゆくゑはしらゆきや

秋夜
板橋　田中拾紫

落葉さひしき秋の夜の　今しのほりし月影に

虫の音しげき金井窪
たゝみなし子の身をなきぬ

新體詩

小菊

板橋 田中拾紫

四方はもみぢの秋深く
人の小路にたをられず
匂ゆかしき菊の花
木かげに咲ける氣高さよ

折にふれて

京都 竹下季子

霜がれはてし秋の〻に
孤子とてもいたつらに
殘の菊はかをれるを
泣きてのみ世を過こさんや

漁人の妻

京都 竹下季子

夕日は落ちぬ海のはて、
はなやかなりし夕ばえの、
泣くな我が子よ愛らしの、
海の表を眺めずや。
彼方に舞ひり五羽七羽、
歸りきまさん此の岸に。
思へば樂しき我身かな、
三年あまりをこの里に。
清き流れに衣すすぎ、
潤酒かゝへて夫をまつ。
濱まの巖かもめ鳥、
都の花は知られども、
四季の眺めは變らぬに、
平和の風に抱かるゝ、
波にこがれを浮べたる、
色さへ今はうすらぎぬ、
まなこみ開き暮れて行く、
汝が友なるかもめらは、
やがては汝が父上も、
塵のちまたを避けしより
朝はしげれるあし陰の、
夕は一里の眞砂路を、
磯の松かぜ波のおと、
皆わが友よ永久の。
春は此處にも櫻さき、
親子三人まどひして、
我が家はいつも春なれや。
あれあの沖の漁船は、
みよ近づきぬへさきには、
雨手をあげて呼べよかし、
好みの鮮魚あたへんに。
汝が父上のいます船、
笑顔の父のおはさずや。
燈つけてまどひして、

思ひいづるまゝ

吳 和住千鶴子

天ぎる星は輝ぎて、
征衣の袖をひるがへし、
むなしき宿にたゞひとり、
たゞ打ながめ人しれず、
せめてかたみの稚子あらば、
なりなんものをそれさへも、
今日も吹きしく木がらしに、
月日のうさはいかならん。
曉さむき朝かぜに、
あゝ我夫はいで立ちぬ。
床にかゝげしうつしゑを、
涙は落ちぬいくそ度。
君を忍ばんよすがにも、
なき身はいとも悲しきや。
あはれこの頃艦上の、
いづこの港たどるらん。

物思ひ

前橋 ひろ子

杖とも頼む愛し子は、
いくさの首途勇しく、
後に殘るは母と妻、
妻は夫を母は子の、
すぐるさ月の末つ方、
戰のちまたに向ひけり。
むつびあひつゝいそしみて、
無事なれかしといのるらん。

○兼題以外諸種の投稿机上に堆をなし居れど紙面の都合に依り悉く載するを得ず、次號よりは順を逐ひ强めて掲載する考なれば御諒察あらんことを祈る、又兼題と同題の文を短文として寄せらるゝ方尠からねど餘りおもしろき事にあらねば今後は可成異りたる題にてものせられたし。　（記者）

○御盛徳

畏くも　天皇陛下、斯の軍國の御事しげき御間にも下民の情を憐み玉ひ征戰の事を思召され、人の道を勸め玉ふ等の御製を拜し奉るたびに臣民の感激を一層深うし奉る所なり今又去る方の敬唱せらるゝ所を謹でひそかに記し奉る

御製

寄國祝

くにたみは
一つ心に
守りけり
とほつみおやの
神の教を



擧國一致を斯く覽そなはせらるゝ、國民たるものゝ先年降し玉へる教育に關する勅語と併せて奉唱し奮勵せざるべからず又御製

述懷

世の中は
高きいやしき
ほと〳〵に
身をつくすこそ
つとめなりけり

職分に殉するに上下なし各々献身的に盡瘁すべし是れ今日に方り內に在る國民も外征の人々も齊しく服膺すべき所なり猶ほ

植物苑
わかそのに
しけりあひけり
外國の
草木の苗も
おほしたつれは

一視同仁の　叡慮は事に物に顯はれ玉ふ海外の人仰ぎ來り又、我國同化力の盛んなる偶爾ならざるなり

○皇后宮の御仁慈

皇后陛下には豫て傷病兵の事に就き深く御軫念あらせられ過日も親しく東京豫備病院に行啓ありて患者の病床に就き一々御慰問を賜はりたれば患者も職員も皆流涕して陛下の大御心の有がたきを感銘し奉りたるが此頃は又普ねく戰地を巡視して歸朝したる小池野戰衛生長官を宮中に召して種々御下問あらせられたるに付き同長官よりは野戰及び兵站の衛生作業綳帶所、野戰病院・定立病院、兵站病院等に收容しある傷病兵の狀况、衛生作業困難の實况、各員皆寢食を忘れて職務に熱中し隊附衛生部員の如きは敵彈を冒して救急處置に從事し死傷したるもの尠からざる趣き奏上に及びしに御聽取の間にも時々御質問ありて將卒の健康に軫念を垂れさせらるゝ餘り難有御諚をも賜はりしにぞ同長官は唯々感涙に咽びつゝ御前を罷り出でしとなん

○大島將軍　名古屋市新出來町松浦定四郎の長女にりやうと云へる者あり目下尋常小學四年生として日日學校に昇り放課後は家に歸りて燐寸の小函を張りて若干の賃金を得て开を貯へて恤兵部、尚武會へ寄附し又夏季休暇には妹と共に數百本の小旗を造りて笹島停車場に出征軍人を迎ふるなど優しき心懸け普通ならず斯て沙河大會戰の捷報を傳へ聞くや嬉しさ

の餘り運ばぬ筆に聊か祝意を罩めて遙に大島中將の許に寄せたるに將軍は其香ばしき心ばえを嘉せられ此程軍艦旗に錨を現したる繪はがきに左の文を記したる返り事を同女の許に送られたりと云ふおりやうたる者將軍の言を服膺し益〻勉勵して天晴の賢女となれよかし

御親切の御手紙有難く存候戰爭は常に勝利に候間一心に勉强なされ後日に賢女良妻たらん事を祈居候

天長節戰地にて　大島義昌

○日本女子大學校報告會

日本女子大學校にては這回森村豐明會より金五萬五千圓の寄附あり且創業委員諸氏よりも數千圓の寄附金ありて新に教育學部を設置すると同時に全く創立委員の手を離れて財團法人として獨立の組織を見るに至りたれば去月十五日其の報告を兼ねて朝野の紳士淑女及び新聞雜誌記者を招待したり當日は雪後の游泥車輪を沒する計りなりしに拘はらず久保田文部大臣、米國公使夫妻、英國公使夫人等を始め大隈伯、三井男、澁澤伯、廣岡あさ子等の創立委員及び其他の來賓は續々來校しさしもに廣き大講堂も殆んど寸隙なきに至れり午前十時開會を報ずると共に成瀬校長は一場の報告演說をなせり今其の大意を掲げんに森村市左衞門氏は、過般帝國大學に於て文部大臣に賜りたる勅語に感激し其組織せる森村豐明會に積める資財を國家有要の道に費さんとて之を余に謀れり余は之に對し我教育界に於ける宿弊に對し之を刷新する意見書を送れり其意見書を送れる後一日森村氏は左の如き書翰を致せり

森村豐明會員なる下名等は豫て貴校の教育事業に同情し曩に多少の資を致して贊助の意を表し候處刻下我邦前古未曾有の時局に際し深く國運の將來を慮かり候時は我等國民が講究經營すべき幾多の事業前途に橫はり候得共就中國民教育の基礎たるべき女子教育の今一層有効切實ならんことを望むものに有之且つ過くる日帝國大學に於て文部大臣に賜はりたる御沙汰を拜して轉た感激の至りに不堪此際聊か國民の本分を盡し度思考罷在候折柄貴校に於て教育學部開設の計畫あり其主義方針とせらるゝ所に關し下名等に示されたる貴下の意見書は大に下名等の感を同うする所に有之國家百年の大計に裨補あるべきを信じ茲に別紙目錄の通り（金五萬五千圓）貴校に寄附し教育學部の發途に供し度幸に貴校計畫實施の

一助と相成候はゝ下名等の深く滿足する所に御座候右得貴意度如斯御座候敬具(明治三十七年十一月廿八日)

而して森村氏は五十年刻苦蓄積したる財產の中より五萬五千圓の大金を割いて之を女子大學に寄せたる也此は單なる金に非ず精神也赤誠也森村氏は曰ふ余の財を積むもの一に國家有要の道に致さんとするにあり余軍人にあらず政治家に非ず將た敎育家に非ず自ら國家有要の事に與かること能はず今は戰時に際し朝野軍事に赴くに急なるの時動もすれば等閑ならんとする敎育殊に國民敎育家庭敎育の上に多少の貢獻をなすを得ば望み聊か足ると女子大學は之に感奮して大隈、西園寺、澁澤、三非、廣岡、其他の創立委員諸氏に語りしに諸氏森村氏の篤志に感ずること深く速日基本金六萬餘圓を寄集し、以て女子大學を財團法人たらしむるの議成たり以來週日ならずして此報告會を開くの幸を得たり而して森村氏が前回寄附したる金參萬圓を合すれば總計八萬圓の多額に上れるは我國の現狀より推すときは米國の富家が幾百萬の資を投じて大學に寄附するに比して決して讓るところなかるべし云々とて熱心面にあらはれて覺へず人をして感動せしめたり次に大隈伯は德孤ならず必ず隣ありとて森村氏の德を稱し次に米國公使グリスカム氏は女子敎育の功果を說けり次に澁澤男の演說久保田文相の祝詞ありて洋々たる彈琴唱歌の中に式を了へ生徒の手料理に成れりといふ和洋料理立食の饗ありて散會したるは午後二時過なりき

○禮法講習會の恤兵　麴町區有樂町なる同會にては左の趣旨を以て廣く有志婦人の加入を求め傷病者用の綿入頭巾等を調製して戰地に送るといふ

內地に於ても漸く寒冷相覺え候折柄滿洲一帶の冱寒さこそと存ぜられ候既に過日の遼陽戰には凍傷患者も出來候とか旁出征勇士達の身の上に同情禁じ難く候若又負傷諸勇士が野戰病院に收容せらるゝや如何にその設備の完全を勸むるも戰地殊には遼遠の地には不自由艱難は決して免れ申すまじく況して諸勇士達とても戰鬪中とは違ひ幾許か氣も心もゆるみ申すべくこれが本國なりせばなど時には思ひ出らるゝ事もこれあるを心弱き婦人の身に引きくらべ推せられ候斯く諸勇士の艱難苦勞せらるゝも唯々御國の御爲めの外なく候若しこの諸勇士なくば我等姊妹は纖弱なる女の身なれば別して安からざる事いふもさらなりされば茲に我等は聊恤兵の意を以て同志の姊妹と相計り卷軸繃帶貳千個を赤十字社に托して寄贈致し候所今回更に傷病者用として木綿綿入及頭巾を調製して戰地へ相送り傷病諸勇士の苦勞の萬一に酬ひ申し度就ては大方の紳

士淑女左の條項御熟覽の上續々加入せられて我等が感謝の微意を贊助せられむことを祈る所に候

明治三十七年十月廿九日

首唱者

麴町區一番町　岩佐ちか子

四谷區荒木町　松村こと子

麴町區下二番町　肝付むつ子

一病衣及頭巾寄贈加入の方は料金を添へて申込まるれは本會に於て材料を買入れ裁縫調製して寄贈の手續を了すべき事

一病衣一枚の元料代金壹圓貳拾五錢兜頭巾一箇の元料代金拾二錢五厘但兩品の内一種御指定隨意のこと

一病衣及頭巾調製の上は寄贈者の住所姓名を病衣及頭巾の裏に記するこ

一寄贈申込所は首唱者の私宅若くは禮法講習會へ申込れ度き事

○孝子と忠僕　徳島縣板野郡大津村の増金孫太郎と云へるは村内屈指の財産家なるが其の長男に伊三郎と云ふあり今時の金持の息子に似合はず自ら耕耡の業に從事し村内一般の賞め者なりしが其の母ナカ(五十)が今年七月脹𤸎に罹りて病床に就くや伊三郎の心痛一方ならず身に代へて母の病を癒さんものと日頃信仰せる御嶽神社に願を籠め毎夜丑滿つ頃をはかりて井戸端に出で水垢離を取るもの百ケ日只の一夜を怠りなく又脹𤸎の名醫名藥と云へば十里二十里の遠きを厭はず必らず自身出かけて只管孝養をつくせしに眞情神に通じてや母は此頃病ひ怠り起居も自由なるに至りしにぞ伊三郎は之れ全く神佛の加護によるものなりとて尙も信心怠りなき由▲鹿兒島縣鹿兒島郡の谿山高等小學校に上原清次(十六)と呼べる生徒あり病氣の外未だ一日も缺席したる事なく能く敎師の命に從ひ校規を守りて學業優等なりしかば屢〻賞典賞與の沙汰に與りしが淸次元と家貧しくして生計裕ならず加ふるに其の母盲目にして家事不如意なるにぞ朝夕の薪を伐り竹の皮を拾ひ市に鬻いで母が藥餌の代となし之を看護する事至情つくさざるなかりしが事早くも官の聞く處となり去月四日郡長より賞狀に添へて賞金の下賜ありし由。

○日丸扇ムスク石鹼　今回日本橋區橘町丸善商店にて發賣したる同石鹼は品質純良にして皮膚を白うし且つ芳香馥郁として精神を爽快ならしむるをもて貴婦人等の求めらる向き多しといふ

(以上十二月廿日〆切)

河原操子女史へ贈品の件に付廣告

胡沙漠々朔風塵を揚げて晝猶昏き內蒙古の地に入りて半開蒙昧の民を導くに文明の敎育を以てせんとする吾が河原操子女史の如きは其の壯圖洵に欽すべく其の義心寔に感ずべし之を雄壯なる日本女子の摸範とし又海國婦人雄飛の先導者といふも決して過褒にあらずと信ず然りと雖も顧みて之を思へば繊弱なる女流の身を以て獨り風烟索寞の間に立ち日暮唯だ胡笳塞曲を聽く縦ひ遷謫浮虜の人たらざるも豈又斷腸の思なきを得んや是に於てか吾が同胞姉妹たるもの女史に對して感謝の辭を致し慰藉の情を寄するの至當なるは何人も恐らく異論なきところなるべし依て弊局茲に首唱者となり女鑑購讀者は勿論廣く有志婦人に向ひ寄贈を乞ひ其の集金額に依り藥籠其他の物品を購求し之を女史に贈りて感謝の意を表し且つ其の孤懷を慰藉するの料に供せんとす聞く蒙古の地醫藥甚だ乏しくして疾に罹るも治癒するの道を知らず是を以て一味の藥水、一粒の藥丸も至大の珍寶に値ひすと故に今贈るに藥籠を以てするは啻に女史身上の補益たるに止まらず又以て蠻民開導の一助とするに足るべきを以てなり切に望む有志婦人幸に弊局の微衷を諒せられ多少を論ぜず寄贈せられむことを

一寄贈金は一口拾錢以上とす
一寄贈金〆切期限は二月十五日とす
一寄贈金宛名は東京市京橋區築地二丁目國光社內女鑑編輯局と認めらるべし
一寄贈者の姓名及び寄贈金額は女鑑誌上に掲載すべきにより別に領收證を送付せず
一〆切期限後集金高に應じ直に藥籠及び其他の物品を購求し確實なる方法を以て速に送達の手續を爲すべし

明治卅八年一月一日

女鑑編輯局

◎投稿規定

一女子は何人にても投稿する事を得

一用紙は文章及新體詩は半紙、和歌今様は半紙半截又は端書を用ふべし

一題異なるものは必ず用紙を別にし、二葉に渉るものは必ず紙捻にて綴り置くべし

一題目の下には必ず住所姓名を明記すべし

一文字は必ず楷書にて句讀點を施し鮮明に認むべし、字體亂雜のものは沒書とす

一文章は一行十五字詰にて兼題ものは四十行以内、短文は廿行以内に限る、新體詩も亦廿句以内の事

一兼題文章及短歌今様新體詩等總て一人一篇づゝに限る

一兼題和歌は一題に付一人一首、短歌は一人二首に限る、但上下句中二音の漢字三字を入れ他は平假名にて認むべし、

一投稿宛名は國光社女鑑編輯局とすべし

一原稿〆切期日は雜誌發行の廿日前即毎回前月十日迄とす

一〆切期日に後れたる兼題は總て其撰に入れず但短文短歌今様新體詩等は次號に掲載することあるべし

一右の規定に違ひたるものは總て採用せず

兼題當撰者には文は天一圓、地五十錢、人三十錢、歌は其半數に當る計算を以て代價相當の書籍を呈す

投稿募集

	歌	文
二月	水邊梅 水雷艇	初午詣での記
三月	澤若草 馬上春風	雛祭り
四月	蓋草 電車	戰死せる軍人の未亡人に贈る

題随意　短文、短歌、今様、新體詩、

定價

一冊	前金貳拾錢
三冊三ヶ月分	前金五拾七錢
六冊半年分	前金壹圓拾錢
拾貳冊一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁三十二行	金八圓
一頁六拾四行	金拾貳圓
表紙一頁	金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵劵代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地貳丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便受取所へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治三十七年十二月卅一日印刷
明治三十八年一月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊　寀一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社　國光社
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

附錄

初よろこび

（上）

幸田露伴

定まるものならば今年の内に定めてといふところより、毎歳霜月師走は嫁入聟取の世間に多き習なるが、これ一つは、一歳も齢の若きを花とする人情の、今更ながら月日疾く流れて笊籬の目を水の漏るゝにも似たるを驚き、鼻の前に逼れる年の關の、これを超ゆれば既幾歳となるといふに、親も狼狽え氣味になれば、當人も心の角取れて、年々に價耗の立つ生物を、然樣〳〵蓄藏つて置いたところで末になりて必定好い願客に遇ふとも限らずと、思ひきりて程々のところに札を落すより、妻を娶らばまさに花の如くなるべしと吟じて居たりし男も、花は花ながら頰の色だけが菫々菜のやうに紫立つた女を迎へ、夫を有たば美なること玉の如き人と私に念じ居たりし女も、玉は玉なれど何首烏芋魁のやうなる鬚髯武者を殿御にして、高砂の謠の聲の裏に萬端埒明きて仕舞ふもをかし。これも數には洩れぬ娘を持ちし家の十一月初めの内輪話し五十ばかりの品格好き細君は六十近き夫に對ひて言葉を續ぎ、といふ譯ですから妾は此の縁邊は厭におもひますよ、何もお榮が然樣に年を老るといふのでもありません、來年になつたところで漸と二十三になるばかりですもの、當生二十三や四で娘で居るのは毫も希らしくはありません、其りやあ妾も女親の事ぢやあ有りますし貴卿が仰やら無くつても、一日でも早く彼の兒の身の定まることを願つては居るのですが、何も吾家の奉公人を所天に持たせて一生其の下に付かせて御遣りなさらなくてもの事だと思ひます、

成程定吉は仰やる通り種が士族だけに氣性に好いところもございましやうし、兒童の時から吾家で育つたものですから商買の方も悉皆通曉つてをりましやうし、彼を跡に直したら何かに付けて都合も宜しうございましやうが、併し家の小僧上りの手代を彼女の所天にとは何だか彼女に氣の毒なやうな氣が仕ます、それも、お榮が人並より醜貌ですとか、馬鹿で物が出來ませんとかならば、忍耐も爲ましやうが、親の慾目ばかりぢや有りません、誰が見てもまア褒める位の顏立ぢやア有り、物だつて人樣の後には從かない位に出來ますのですもの、何んな家から立派な聟でも貰つて貰へないことは無いと思ひます、妾が然樣申しました今の緣談は人物が貴下の御氣に入ら無いで御厭ならお厭で宜うございますから、其の方はぴつたりと斷つて仕舞ひましやうが、貴下の仰やる定吉をとの御話もまア御休止になすつて下さいましな、妾は何だかも少し身分の宜い實家の確固としたから來る聟を貰つて遣りたいやうな氣が仕ますから、と云へば、煙草喫み〳〵聞き居たりし老主人は、煙管をポンとはたきて不滿足氣に、何樣も然樣汝のやうに棟木の高い家から聟を貰へば娘の肩身でも廣いかとおもひ、又、吾家で使つて居るものを引上げて聟にすれば娘の威が一段下げられるやうにでも思ふのは、基礎からして考慮の立てどころが違ふ、併し斯樣いふことは乃公の一存で無理壓制にもならぬから、不承知なら不承知でも今日のところは濟まさうが、汝だつて別に定吉を惡いところがあると思つて居るのでも無からうが、と靜に諭したり。諭すが如くにはあれど其の中おのづから詰る氣味さへあるに、中々負けては居ぬ古女房の口捷く、斯樣いへば彼を聟にしたがらない餘りに人の讒訴までするかと御おもひのが辛いので默つては居ましたが、左樣仰あれば云ひます、惡いところがあります、何も若いもの丶事ですから穴ぐり立て丶責めるのでは有りませんが、吾家を明けます、勿論彼一人の事ぢやア無し、誰しも爲る事で、貴下が商買の步合なんぞを御與りになるものですから、各自自分の懷

中が有ります、それで遊ぶのではありますが、定吉だつて矢張遊びに出まして、しかも面白い行先が有りますか仕て一番彼が繁々出ます、それを御存じの無い貴下ではございますまい、と云ひ返せば、主人はいよ〳〵苦き顔して、成程其は乃公も知らんでは無い、商買に身を入れて貰はうともおもひ、帳面の上に筆尖で手づまを使つても貰ひたく無いところから、他家よりは進んで居るつもりで公然と歩合を與るやうにしたのは十年も前からの事、それで七人居る手代共が皆相應の金錢を取つて商買に骨折つて呉れる其は宜いが、一利一害で何様も困つたものなのは、彼等が濟まし返つて惡所へなんぞ行く事だ、與つた上は何様いふことを仕て使へばとて其に立入ることの出來る道理は無し、また店の用事の濟んだ後は自由を與へるといふ規定を仕た上は何處へ行つて遊んで來ても咎めやうが無い、そこで何時となく店の者等の品行が惡くなつて大つぺらで惡所へ行く、是には乃公も大きに困つて居るが、併し腹を大きくして考へれば、稼ぐのも遊ばうが爲、樂を仕度いと思へばこそ苦もするのだから、遊興を面白いと思ふ中は若いものゝ遊ぶのも仕方が無いやうなもの、店の用さへ缺いて呉れず、不正の事さへ仕て呉れなけりやあ先あ何様でも宜いと大目に見て居るが、成程聟にといふ段になつて人物を觀ることになれば、惡所へ繁々行くやうなものは斥けねばならぬ、可矣、可矣、聟取りは今年に限つた事といふのでも無いし、お榮は此の歳晩も處女で暮させれば其で濟むこと、然様して置かう、然様して置かう、と談話は止みぬ。

人に使はるればとて自己は自己なり、おのれが得たる金錢もて自己が娯樂を買ふを他人に兎や角云はるべき理は無し、と云へば理屈は成程其様なものながら、然る事だに爲さでありしならば何十萬の財產の讓られて人となりて、生絲買込商に美濃屋といへば誰知らぬもの無き家の聟となり、花の如きお榮にかしづかれて一生を送るべき定吉も、些細のところより主人の心折に可惜よき運を取り失りぬ。惜しや娘さへ、年

はとりても蓮葉ならぬ性とて、上りかねたる戀の山路の初花櫻、花もの言はぬ底の心には、若し父母の聟撰み仕たまはゞ同じくば彼の人を撰みて給はりたきものをと思ひたりしものを。

（下）

霜月末より十二月、しかも其の中旬に至り末に至りては、普通の商家は皆取り與り返し濟しに忙しけれど美濃屋などは商買柄とて左のみにはあらず、まして年改まりて一月となりては、商買は靜なり、心は長閑なり、年末に主人より貰へる金員の少からねば、さらぬだに浮れたき屠蘇機嫌の勢に乘れる、店員いづれも皆衣服を飾り頭を光らせ、其處に飲み、彼處に騒ぎて、果は路の邊の花に眠り墻の柳に戯れ、心あるものの眉を顰ましける。定吉二十五の厄年は無難に濟ませて今年二十六の男盛り、働きあれば懐中も人には増して饒なるに、生れついて才氣鋭く冴々しき氣性のおのづと至るところに愛せらるれば、浮世は今を春の日と面白さの頂上に舞ひ躍つて、人先に立つて浮れけるが、如何に仕けん松の除られし頃より少しも外に出でずなりて、夜は興行物などを見に行きて歸るかと思へば左無き時は殊勝にも燈下に新刊物など讀み翫して時を費し、今までとは打て變つたる身の持方まじめに、たま〳〵同じ茶屋酒の飲仲間、餘所の商店の幅利などの誘ひ出しにかゝりても、語を左右に託して更にまた紅燈緑酒の間に立入らねば、仲間外れの一人出來たるに他の者はおもしろからず、中にも新次といふ理屈好の輕薄著、定吉君、君は何樣したのだ、急に聖人ぶるでは無いか、品行方正で褒められたところで餘計儲かるでは無いし、久米の平内さんほど堅くなつたところで冷い身體ぢやあ有るまいし、待つてゐるものが有るのだから是非交際ひたまへ、さあ出かけたまへ、出かけたまへな、と嘲り笑つて五月蠅く勸めたり。いやもう少し思ひ知つた事があつたので彼樣いふところへ行く氣にはなれなくなつたのだから免して呉れたまへ、と詫びるやうにして斷らずとも

の事ながら手を摺るほどにして歎けば、其は君交際を知らないといふものだ、思ひ知つた事が有るか無いか此方は知らないけれども、今更野暮になる君でも無けりやお又野暮になりきれる君でも無いなあ知れきつて居るでは無いか、是非君を連れて來るやうにと賴まれて居るのだから、や、これほど云つても頭を振るのか、これは甚い、では聞こう、君は一體何を思ひ知つた事があつて、急に左樣聖人か賢人か偏人になつて仕舞つたのだ、ハヽア解つた、大それた非望を思ひついたのだナ、よしたまへ吾家の何にならうなんぞと思つても無益な事だ、小糠三合の譬喩もあるぢやあ無いか、それに主婦さんが自分の親類内の彼家から候補者を出して居るといふことだもの、とても無益な話だ、何、左樣では無い、なんでも無い邪推だといふのか、そんなら何を思ひ知つたのだ、さあ其を聞かせたまへ、と惡く意地に搦みて付纏はられて定吉は苦み、それなら話すから笑ひたまふな、斯樣いふことなのだ、それ過般の五日の眞夜中の彼の強い地震彼の地震の時君は何處に居たか知らんが、僕は例に依つて例のところに醉つて臥て居つたのだ、するとぐら〳〵ぐら〳〵といふ彼の大地震で、如何はしい煉瓦積の高樓に居たことゝて逃げるには逃げられず、彼女は恐れ驚いて僕に縋りつく、突放すことも出來ないで、止むを得んから潰ぶされたら其までと覺悟して瘦我慢を仕たが、其の瞬間の苦みといつたら實に何とも云へなかつた、今こゝで天命逃れず死んで仕舞ふならば、死ぬのは壽命沙汰で是非が無いとも思はうが、此樣な下劣な場處で同じくば死にたくない、まして僅少の錢金で色を賣るやうな此樣な淺ましい醜業婦づれと共に一緒に此の煉瓦の下に埋められて、死骸の上に人の嘲り笑ひを受けるとおもへば實に殘念な、嗚呼情無いところに居合せた、愚なところに居て愚な事を仕て居た、とつく〴〵身に染みて思つて安い心も無かつた、幸ひに地震は然樣甚くもならず其限りで濟んだから、無事で斯樣やつては居るもの丶、思へば〳〵二度と、必らず行くところで無いと、それから遊

びに行きたいやうな氣も更に起らないのだ、勧めるでは無いが同じくば君も行きたまふな、と眞顔になりて云へば、聞いてもおどろかず馬の耳に風と流して、フン然樣地震が始終有りはすまいし、氣にしたものでは無い、死んで仕舞へば何樣なつたつて其前途は知らない事では無いか、ハヽヽ、と新次は笑ひ嘲りぬ。一念の善、一念の惡、善惡響の應ずるがごとし。物蔭にありて定吉の地震にあひて恐れ苦しめる物語を聞きたる主人の、扨こそ見どころのある若者と思ひたりしにたがはず誰諌めねど自ら非を悟りて、過失を再びせざらんとする心掛、中々に頼母し、教へ勵まして善い方に進ましめんには進みて到るべき男なり、地震にあひて惡所に居たるを愧ぢしといふは聞きどころなり、とて其より幾日もあらぬに定吉が親許への談合も濟み、花は盛りの四月にも至らば三國一の聟と囃さんと内々は既決り、嫁、聟それ〳〵の支度とり〳〵人には云はねど窃にいだく初の大よろこびに、何となく誰しもの顔に春の色あり。聞きたきはお榮定吉、今年二日の初夢に何を見て此の樣の事になりしやら。

每月一回廿五日發行

圖案

定價三十錢 郵税一錢

大日本圖案協會編纂

第四卷第三十二號目次 （十二月二十五日發行）

發兌元　東京築地　國光社

◎最新刊行廣告

農商務省御編纂　清國染織刺繡

意匠圖按

國光社發行

大和綴美本　竪一尺　幅七寸三分

定價金五圓

遞送及荷造費　東京市内無料、内國各地廿五錢、臺灣四十五錢

紋樣色彩とも實物に違はざる樣鮮明美麗に描寫したる石版刷圖畵四十九枚挿入、其種別左の如し
●摹本緞(繻子)八種●縐(縮緬)六種●夏紗(紗)二種●鑲邊(縁)三十七種●織物圖按三種●丘紗(紗)二種●洋緞(外國製)三種●綢一種●藍地東(藍地白拔模樣綿布)六種●白地金門標(白地藍模樣金巾)三種●白地會安及測陽(白地藍模樣麻布)三種●巾(白地藍模樣麻布及綿布手拭)三種●刺繡六種

本書發行の趣意は曩に豫約募集の際廣告したるが如く將來支那地方に於ける斯業發展上當業者の參考に供せんが爲めにして材料の豐富完備せること本書を措て他に良書なきは豫約募集以來僅々一ヶ月ならざるに其申込部數の貸かに豫期に超過したるを以ても證するに足るべし
今や戰局愈々開展して　皇威外に揚り結局東洋の平和は我が邦に依りて確保せらるゝに至るべく隨て戰後經濟界に於ける平和の戰爭は實業家の双肩に懸り戰勝の光榮を永久に發輝持續するは一に實業家の興奮に待たざるべからず然らば則ち實業家たるもの宜しく今日より日清貿易の計畫を立てずんば恐らくは事に臨み空しく人後に落つるの悔あらん願くは斯業の人士本書を基礎とし着々考按畫策を定め清國に向て大に雄飛を試みられんことを

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社　國光社

發行所

文部省檢定濟教科書類及參考書類

著者	書名	冊數	定價
內堀維文校閱 國光社編輯所編纂	◉中等漢文讀本	全五冊	定價金一圓五十錢 小包料金十五錢
慶應義塾大學部講師 宮森麻太郎著	◉イージー、レッスンズアンド、コンポジション	全	定價金五十五錢 郵稅金六錢
宮森麻太郎著	◉モーア、レッスンズ、イン、グランマー アンド、コンポジション	全二冊	定價金一圓十五錢 郵稅金十二錢
小林萬吾著	◉中等習畫帖 色鉛筆若井水彩色	全八冊	定價金一圓九十二錢 郵稅金十錢
小林萬吾著	◉中等習畫帖 鉛筆畫	全八冊	定價金一圓三十五錢 郵稅金十錢
高橋正熊 松本敬共著	◉法制經濟教科書 法制之部 經濟之部	全二冊	定價金各六十錢 郵稅各六錢
大宮兵馬著	◉中等日本文典	全	定價金五十五錢 郵稅金八錢
國光社編輯所編纂	◉中等國語讀本	全十冊	定價金二圓二十錢 郵稅金卅錢
大宮兵馬著	◉國語漢文假字遣法	全	定價金十八錢 郵稅金二錢
大林弘一郎著	◉中等國文學史	全	定價金六十錢 郵稅金八錢
矢島喜源次著	◉中等生理衛生新教科書	全	(檢定出願中)
國定教科書共著者 內大臣秘書官 日高秩父書	◉中等習字帖	全	(檢定出願中)
川村理助著	◉高等女學校用 動物學新教科書	全	定價金五十錢 郵稅金六錢

著者	書名	冊數	定價・郵稅
川村理助著	高等女學校用 植物學新教科書	全	定價金五十錢 郵稅金六錢
川村理助著	高等女學校用 生理衛生新教科書	全	定價金五十錢 郵稅金六錢
東京府第一高等女學校教諭 市川源三著	高等女學校用 教育學教科書	全	定價金五十錢 郵稅金六錢
市川源三著	高等女學校用 國史教科書	全二冊	定價金各五十錢 郵稅金各六錢
阿多廣介 園田竹熊 共著	女子補習讀本	全二冊	定價一卷廿五錢 二卷卅錢 郵稅各六錢
阿多廣介 原田長松 共著	小學 理科教授書	全四冊	定價金二圓二十錢 郵稅金十五錢
同著	小學 理科摘要	全四冊	定價金各十錢 郵稅金各二錢
平野秀吉著	國語聲音學	全	定價金六十錢 郵稅金八錢
文學士遠藤隆吉著	公民心得	全	定價金卅五錢 郵稅金六錢
鈴木龜壽著	實驗理科教授法	全	定價金五十五錢 郵稅金八錢
石田鐵郎著	水產製造論	全	定價金一圓廿錢 郵稅金十錢
	討露戰史	第一編 第二編	定價金卅錢 郵稅金六錢 定價金四十錢 郵稅金八錢
西主一 野木衛佐美 合著	海軍遊戲法	全	定價金二十錢 郵稅金四錢
岡部時次郎 森田廣吉 共編	教育適用 舞踏遊戲法	全	定價金廿三錢 郵稅金四錢

東京高等師範學校附屬小學校編纂 ◎學校生活 全 定價金廿錢 郵税金四錢

樋口勘次郎著 ◎教育者と國家社會主義 全 定價金八十錢 郵税金八錢

雜書類

登張竹風著 ◎讀書と修養 全 定價金三十錢 郵税金四錢

幸田露伴編 ◎四季物語 全 定價金五十錢 郵税金四錢

佐藤天風著 ◎クレオパトラ 全 定價金廿五錢 郵税金四錢

醫學博士森鷗外著 ◎長曾我部信親 全 定價金十錢 郵税金二錢

安部正人編 ◎泥舟遺稿 全 定價金四十五錢 郵税金六錢

伯爵副島種臣題辭 從二位尾崎忠治題辭 鹿川宮內默藏著 ◎王學指掌 全 定價金一圓 郵税金十錢

從六位內藤耻叟序 故正三位文學博士栗田寬著 ◎天朝正學 全 定價金卅五錢 郵税金四錢

文學士吉丸一昌編 ◎名家修養談叢 全 定價金卅六錢 郵税金八錢

榎本虎彥著 ◎櫻痴居士と市川團十郎 全 定價金卅錢 郵税金四錢

小畠幾次郎著 ◎腦力增進論 全 定價金卅五錢 郵税金四錢

▶國光社出版圖書目錄◀

- 清藤正輔謹編 ● 皇后陛下御略記 坤德 上製 並製 定價 金卅五錢 金廿五錢 郵稅各四錢
- 株式會社國光社編纂 ● 明如上人遺芳錄 全 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 清藤正輔編 ● 西鄉從道 全 定價金廿五錢 郵稅金四錢
- 清藤正輔編 ● 聖德太子傳 全 定價金十錢 郵稅金二錢
- 福本日南著 ● 筑前誌 全 定價金一圓廿錢 郵稅金十錢
- 第五回內國勸業博覽會事務局御編輯 ● 第五回內國勸業博覽會出品審査概況 全 定價金十五錢 郵稅金四錢
- 宮崎滔天著 ● 卅三年之夢 全 定價金卅三錢 郵稅金八錢
- 宮崎滔天著 ● 狂人譚 全 定價金二十錢 郵稅金四錢
- 澁澤男爵題字 高瀨魁介編纂 ● 澁澤男爵最近實業談 全 定價 上製金七十錢 並製金六十錢 郵稅各金十錢
- 北海道廳拓殖課御編纂 ● 北海道殖民圖解 全 定價金八錢 郵稅金二錢
- 富田鐵之助題字 須田毎六著 ● 銀行利用法 全 定價金四十錢 郵稅金六錢
- 故品川彌次郎 平田東助 共著 ● 信用組合法提要 全 定價金五錢 郵稅金二錢
- 獨乙大博士ウヰル、ヘルム、ロッシエル氏著 平田東助、平塚湯次郎、湯川寛吉共譯 ● 商工經濟論 全二冊 定價金一圓八十錢 郵稅金十五錢
- 濱口吉右衛門著 ● 財政と國力 全 定價金廿三錢 郵稅金四錢

塚原澁柿著 ◉小牧合戰 全 定價金五十五錢 郵稅金十錢

工藤武重謹著 ◉孝明天皇御遺德 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

山崎忠和著 ◉文久物語（一名寺田屋騷動） 全 定價金二十八錢 郵稅金六錢

少年傳記類

文學士大町桂月著 ◉少年武士道史傳第一編 藤田東湖 定價金十九錢 郵稅金四錢

法學士工藤景文著 ◉少年武士道史傳第二編 山中鹿之助 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士三好物外著 ◉少年武士道史傳第三編 上杉謙信 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士笹川臨風著 ◉少年武士道史傳第四編 本多平八 定價金十九錢 郵稅金四錢

田岡嶺雲著 ◉少年武士道史傳第五編 小早川隆景 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士白河鯉洋著 ◉少年武士道史傳第六編 立花宗茂 定價金十九錢 郵稅金四錢

法學士太田蒼溟著 ◉少年武士道史傳第七編 木村重成 定價金十九錢 郵稅金四錢

文學士中内蝶二著 ◉少年武士道史傳第八編 大石良雄 定價金十九錢 郵稅金四錢

内國通運株式會社編纂 ◉新式大日本里程地圖 洋裝帙入 定價（各參圓五拾錢） 送料荷造費廿五錢 同卅五錢 臺灣帙五十錢 洋四十錢

農商務省御編纂 ◉濟國[illegible]織刺編に關する意匠圖按 大和綴 正價金五圓 送料及荷造費廿五錢 臺灣四十五錢

女學及家庭書類

島田佳矣・野口駿尾共著 ● 女子技藝 編物模様圖案 全五冊 定價 松ノ巻四十錢 櫻ノ巻五十錢 藤ノ巻五十錢 菊ノ巻五十五錢 梅ノ巻五十五錢 郵税各二錢

棚橋絢子著 ● 女道叢話 全 定價金三十錢 郵税金四錢

三輪田眞佐子著 ● 女子之本分 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

三輪田眞佐子著 ● 女子處世論 全 定價金二十錢 郵税金四錢

磯部武者五郎著 ● 家計簿記法 全 定價金十五錢 郵税金二錢

藤野天城著 ● 女子小觀 全 定價金二十錢 郵税金四錢

堀内新泉著 ● 女樂師 全 定價金卅五錢 郵税金六錢

松川霓州著 ● 結婚と家庭 全 定價金十五錢 郵税金四錢

堀内新泉著 ● 家庭の鑑 全 定價金十八錢 郵税金四錢

女鑑編輯局編 ● 女鑑編輯所編 ひめかゝみ 全 定價金二十五錢 郵税金四錢

◀國光社出版圖書目錄▶

梅澤清一著 ◎ 清少納言と紫式部 全 定價金卅五錢 郵稅金六錢

澁谷愛著 ◎ 萬國女子風俗 全 定價金二十五錢 郵稅金四錢

堀內新泉著 ◎ 少女讀本 全三冊 定價各金十八錢 郵稅各金四錢

大町桂月著 ◎ 常盤御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

小林雨搭著 ◎ 勾當の內侍 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

濱田廉著 ◎ 袈裟御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

國府犀東著 ◎ 靜御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

長田偶得著 ◎ 顏世御前 全 定價金十三錢 郵稅金二錢

杉谷正隆著 ◎ 家道訓歌 修身百首 全 定價金二十錢 郵稅金四錢

高瀬眞卿著 ◎ 學校家庭 修身一夕話 全 定價 特六十錢 並三十八錢 郵稅八錢 六錢

指原乙子著 ◎ 女子文章軌範 全 定價金三十錢 郵稅金四錢

第五回内國勸業博覽會

賞牌并に襃狀受領

壽美禮おしろい

登録商標

五二會品評會功勞賞牌

THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

壽美禮おしろい

ねり製（定價 大壜二十錢 小壜十二錢）

水製（定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）



錫栓附乳白硝子御入



ヴワイオレツト水
スミレ水白粉

すみれ白粉は歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉』は常に用て御顔肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せず御肌へを清々しく天然の白色きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衛生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして其意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

皮膚艶白劑

壽美禮あらい粉

綠、藍、紅彩紙貼ひボックス入三錢

罐詰六錢五厘

袋入壹錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞讃する香料を弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のればりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

○ご使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.

壽美禮あらひ粉



恭賀新年

製造本舖 東京東兩國（兩國橋際元町）

伊勢吉壽美禮堂謹製

賣販所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

女鑑

明治三十八年一月一日發行　毎月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾五年第壹號　第三種郵便物認可